

松江市文化財調査報告書 第210集

松江市東津田町工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書

櫛岡古墳群・南外古墳群 奥宇田瀬遺跡・岩井手谷遺跡

令和5（2023）年3月

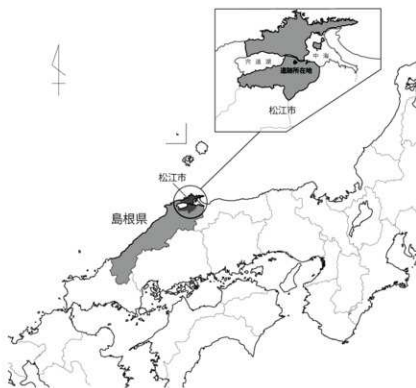
島根県松江市

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

松江市文化財調査報告書 第210集

松江市東津田町工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書

はぜ おか なん げ
櫛岡古墳群・南外古墳群
おく う た せ いわ い で だ に
奥宇田瀬遺跡・岩井手谷遺跡



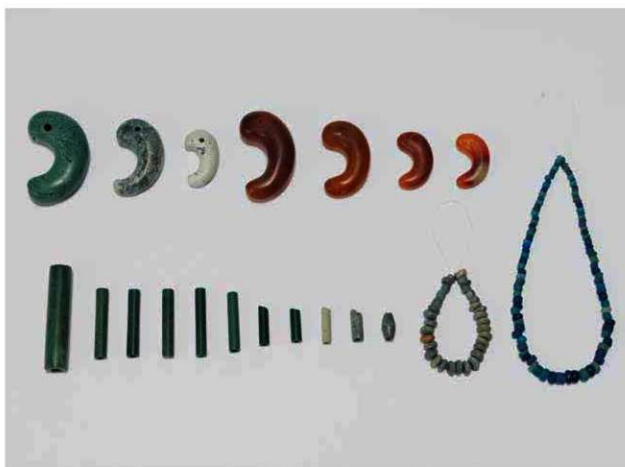
令和5(2023)年3月

島根県松江市

公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

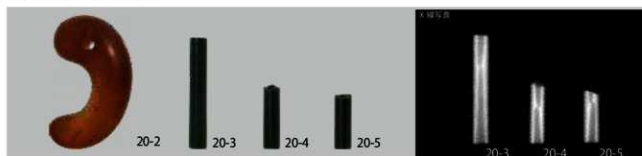


樋岡古墳群 調査後全景 (北側上空から)

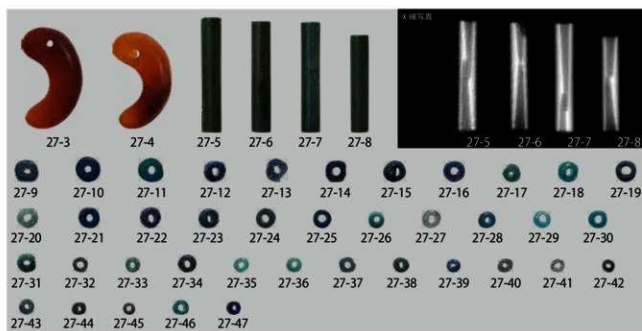


樋岡古墳群 出土遺物玉類 (1・3・6号墳)

卷頭図版2 樋岡古墳群



樋岡古墳群 1号墳出土遺物



樋岡古墳群 3号墳出土遺物



樋岡古墳群 6号墳出土遺物



南外古墳群 調査後全景 (西側上空から)



南外古墳群 3号墳調査後全景 (西から)



南外古墳群 4号墳調査後全景(東から)



南外古墳群 5号墳調査後全景(北から)



南外古墳群 5号墳主体部(西から)



南外古墳群 5号墳土層断面 A-A' 北東側と土塊積み(東から)

巻頭図版6 南外古墳群



南外古墳群 5号墳土層断面 A-A' 土塊積み (東から)



南外古墳群 5号墳出土旧石器



奥宇田瀬遺跡 調査後全景（南側上空から）



奥宇田瀬遺跡 調査後全景（東から）



奥宇田瀬遺跡 遺構完掘状況 (東から)



奥宇田瀬遺跡 SI06-1 出土遺物

例 言

1. 本書は、平成 30 年度～令和 2 年度に実施したグリーンテラス東津田町工業団地造成事業に伴う
樋岡古墳群、南外古墳群、奥宇田瀬遺跡、岩井手谷遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、株式会社ひらぎのから松江市教育委員会（～平成 31 年 3 月）・松江市
（平成 31 年 4 月～）が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
3. 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

名称	所在地	
樋岡古墳群 ひがおか こぶねぐみ	松江市東津田町字樋岡 2022 番 ひがしつだちようあづみわい せ だに	
	松江市山代町字岩井手谷 929 番 2 やましろちようあづみわい せ だに	
	松江市山代町字井手平 917 番 1 やましろちようあづみわい せ だに	
南外古墳群 なんげ こぶねぐみ	3 号墳	松江市東津田町字南外 2296-5 ひがしつだちようあづみわい げ
	4 号墳	松江市東津田町字南外 2296-5 ひがしつだちようあづみわい げ
		松江市東津田町字南外 2296-56 ひがしつだちようあづみわい げ
	5 号墳	松江市東津田町字南外 2296-5 ひがしつだちようあづみわい げ
		松江市矢田町字奥宇田瀬 508 番 1 やだちようあづみわい せ だに
奥宇田瀬遺跡 おくうたせ いせき	松江市矢田町字奥宇田瀬 508 番 1 やだちようあづみわい せ だに	
	松江市矢田町字宇田瀬 270 やだちようあづみわい せ だに	
	松江市矢田町字宇田瀬 270 番 1 やだちようあづみわい せ だに	
	松江市矢田町字宇田瀬 271 やだちようあづみわい せ だに	
岩井手谷遺跡 いわい せ だに い せき	松江市山代町字岩井手谷 929 番 5 やましろちようあづみわい せ だに	

4. 現地調査および報告書作成期間

現地調査	南外古墳群：平成 30 年 12 月 3 日～令和元年 8 月 30 日
	樋岡古墳群：令和 2 年 4 月 1 日～令和 2 年 10 月 27 日
	奥宇田瀬遺跡：令和元年 9 月 2 日～令和 2 年 4 月 20 日
	岩井手谷遺跡：平成 31 年 4 月 8 日～令和元年 8 月 30 日
報告書作成	令和 2 年 11 月 2 日～令和 3 年 7 月 31 日
	令和 4 年 4 月 1 日～令和 5 年 3 月 31 日

5. 開発面積および調査面積

開発面積	196,200㎡
調査面積	樋岡古墳群：1,157㎡ 南外古墳群：1,492㎡ 奥宇田瀬遺跡：1,487㎡ 岩井手谷遺跡：493㎡

6. 調査組織

依 頼 者 株式会社ひらぎの

主 体 者	松江市教育委員会 (～平成 31 年 3 月)	教 育 長	清水 伸夫
	松江市 (平成 31 年 4 月～)	市 長	松浦 正敬 (～令和 3 年 4 月 23 日)
	〃	市 長	上定 昭仁 (令和 3 年 4 月 24 日～)

【平成 30 年度】 発掘調査業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	藤原 亮彦
	〃	次 長	永田 明夫
	〃 まちづくり文化財課	課 長	飯塚 康行
	〃 〃 埋蔵文化財調査室	室 長	宮本 英樹
	〃 〃 〃 調査係	係 長	川上 昭一
	〃 〃 〃 〃	主 幹	川西 学
	〃 〃 〃 〃	主 任	徳永 隆
	〃 〃 〃 〃	学 芸 員	三宅 和子
	〃 〃 〃 〃	嘱 託	門脇 誠也

実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長	清水 伸夫 (～5 月 27 日)
	〃	〃	星野 芳伸 (5 月 28 日～)
	埋蔵文化財課	課 長	赤澤 秀則
	〃 調査係	主 任	江川 幸子 (担当者)
	〃 〃	調 査 員	廣濱 貴子
	〃 〃	調査補助員	北島 和子
	〃 〃	調査補助員	門脇 祐介

【平成 31 (令和元) 年度】 発掘調査業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	須山 敏之
	〃	次 長	比田 誠
	〃	〃	稲田 信
	〃 まちづくり文化財課	課 長	飯塚 康行
	〃 〃 埋蔵文化財調査室	室 長	宮本 英樹
	〃 〃 〃 調査係	係 長	川上 昭一
	〃 〃 〃 〃	主 幹	川西 学
	〃 〃 〃 〃	主 任	徳永 隆
	〃 〃 〃 〃	学 芸 員	三宅 和子
	〃 〃 〃 〃	嘱 託	門脇 誠也

実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長	星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課 長	赤澤 秀則

〃	調査係	主 任	江川 幸子(担当者)
〃	〃	調 査 員	廣濱 貴子
〃	〃	調 査 員	徳永 桃代
〃	〃	調査補助員	北島 和子
〃	〃	調査補助員	門脇 祐介(～7月31日)
〃	〃	調査補助員	福光 龍治(8月1日～)
〃	〃	調査補助員	木村 由希江

【令和2年度】発掘調査業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	須山 敏之
〃	〃	次 長	松尾 純一
〃	〃	〃	稲田 信
〃	まちづくり文化財課	課 長	飯塚 康行
〃	〃 埋蔵文化財調査室	室 長	尾添 和人
〃	〃 文化財総合コーディネーター		丹羽野 裕
〃	〃 〃 調査係	係 長	川上 昭一
〃	〃 〃 〃	主 幹	川西 学
〃	〃 〃 〃	主 任	徳永 隆
〃	〃 〃 〃	学 芸 員	三宅 和子
〃	〃 〃 〃	嘱 託	門脇 誠也
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長	星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課 長	宮本 英樹
	〃 調査係	係 長	小山 泰生
	〃 〃	調 査 員	廣濱 貴子(担当者)
	〃 〃	調査補助員	福光 龍治(～8月31日)
	〃 〃	〃	建神 結香子(9月1日～)

【令和2年度】報告書作成業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長	須山 敏之
〃	〃	次 長	松尾 純一
〃	〃	〃	稲田 信
〃	まちづくり文化財課	課 長	飯塚 康行
〃	〃 埋蔵文化財調査室	室 長	尾添 和人
〃	〃 文化財総合コーディネーター		丹羽野 裕
〃	〃 〃 調査係	係 長	川上 昭一
〃	〃 〃 〃	主 幹	川西 学
〃	〃 〃 〃	主 任	徳永 隆

	学芸員	三宅 和子
	嘱託	門脇 誠也
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長 星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課 長 宮本 英樹
	〃 調査係	係 長 小山 泰生
	〃 〃	調 査 員 廣演 貴子(担当者)
	〃 〃	調査補助員 建神 結香子

【令和3年度】 報告書作成業務

事 務 局	松江市歴史まちづくり部	部 長 須山 敏之(～5月31日)
	〃	〃 松尾 純一(6月1日～)
	〃	次 長 松尾 純一(～5月31日)
	〃	〃 井上 雅雄(6月1日～)
	〃 まちづくり文化財課	課 長 尾添 和人
	〃 〃 埋蔵文化財調査室	室 長 川上 昭一
	〃 〃 文化財総合コーディネーター	丹羽野 裕
	〃 〃 〃 調査係	係 長 川西 学
	〃 〃 〃 〃	主 幹 古藤 博昭
	〃 〃 〃 〃	学芸員 三宅 和子
	〃 〃 〃 〃	嘱託 門脇 誠也
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長 星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課 長 宮本 英樹
	〃 調査係	係 長 小山 泰生
	〃 〃	調 査 員 廣演 貴子(担当者)
	〃 〃	調査補助員 木村 由希江

【令和4年度】 報告書作成業務

事 務 局	松江市文化スポーツ部	部 長 松尾 純一
	〃 埋蔵文化財調査課	課 長 川上 昭一
	〃 〃 文化財総合コーディネーター	丹羽野 裕
	〃 〃 発掘調査係	係 長 徳永 隆
	〃 〃 〃	学芸員 永野 智朗
実 施 者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長 星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課 長 宮本 英樹
	〃 調査係	係 長 小山 泰生
	〃 〃	調 査 員 廣演 貴子(担当者)
	〃 〃	調査補助員 木村 由希江

7. 発掘調査および報告書作成にあたっては、次の方々から多大なご指導・ご教授・ご協力を頂いた。

記して謝意を表する。(敬称略・五十音順、役職名は当時または現在)

池淵 俊一(鳥根県教育庁文化財課調整監)

井谷 朋子(元鳥根県古代文化センター特任研究員)

稲田 陽介(鳥根県教育庁文化財課文化財保護主任)

岩本 崇(国立大学法人鳥根大学法文学部准教授)

大谷 晃二(鳥根県立三刀屋高等学校教諭)

大橋 泰夫(国立大学法人鳥根大学法文学部教授)

勝部 智明(鳥根県教育庁文化財課主幹)

澤田 正明(鳥根県立古代出雲歴史博物館学芸員)

田村 朋美(独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員)

仁木 聡(鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター調査第1係長)

野口 淳(特定非営利活動法人 南アジア文化遺産センター理事・事務局長)

花谷 浩(出雲弥生の森博物館館長)

林 健亮(鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター調査第1課長)

深田 浩(鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター管理課長)

松山 智弘(鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センター調査員)

米田 克彦(岡山県古代吉備文化財センター総括副参事)

8. 南外5号墳から出土した旧石器は特定非営利活動法人 南アジア文化遺産センター・野口 淳氏に委託し、レーザースキャナーによる3D計測を行って頂いた。

9. 8の計測結果をもとに松江市埋蔵文化財調査課 文化財総合コーディネーター・丹羽野 裕氏にご協力頂き図面作成等を行い、第4章と第7章で報告、検討頂いた。

10. 南外5号墳から出土した旧石器の実測図トレースは井谷 朋子氏にご協力を頂いた。

11. 樋岡3号墳から出土したガラス小玉の分析は、奈良文化財研究所・田村 朋美氏に委託し、その成果を第3章に記載した。

12. 本書に掲載した金属製品のX線写真撮影および奥宇田瀬遺跡から出土した石材(円錐形剥片)のマイクロデジタルスコープ計測は、鳥根県立古代出雲歴史博物館・澤田 正明氏にご協力を頂いた。

13. 本調査に係る空撮および南外5号墳の墳丘3D測量は株式会社共立エンジニアにご協力を頂いた。

14. 本書の執筆は次のとおりである。(敬称略)

第1章 松江市埋蔵文化財調査課 徳永 隆

第3章(第11節) 奈良文化財研究所 田村 朋美

第4章(第4節第7項)・第7章(第1節1.旧石器時代) 松江市埋蔵文化財調査課 丹羽野 裕
他第2～7章は廣濱が執筆した。編集は松江市埋蔵文化財調査課の協力を得て廣濱が行った。

15. 付属 DVD に収録されている内容は次のとおりである。

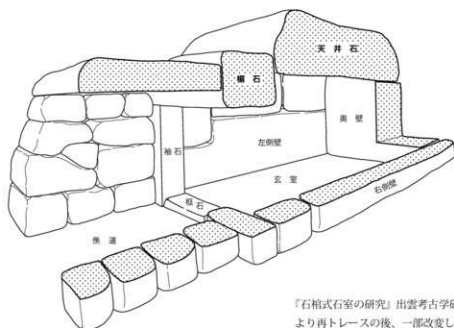
南外 5 号墳 3D 測量データ (TREND-POINT) 株式会社共立エンジニア作成

南外 5 号墳 3D 旧石器データ (3D オブジェクト) 野口 淳氏作成

16. 挿図番号・挿表番号・図版番号は第 1 章から第 7 章まで通し番号で記載し、遺物番号は挿図番号に伴うものとする。遺構番号は各遺跡で種別ごとに連番で付けるが、南外古墳群については遺構の種別の後に古墳の番号を付して 3 桁で表示する。(例：南外 3 号墳では SP は SP301、南外 4 号墳では SP401、南外 5 号墳では SP501 のように記載する。)

17. 本書に掲載した測量データ・遺物および実測図・写真等の資料は、松江市にて保管している。

18. 本書の編集にあたっては、DTP 方式を採用した。



『石棺式石室の研究』出雲考古学会 1987 年
より再トレースの後、一部改変して使用。

横穴式石室各部の名称

凡 例

1. 本書で使用した遺構略記号は以下のとおりである。
SA: 柵 SB: 掘立柱建物 SD: 溝 SI: 竪穴建物 SK: 土坑 SP: 柱穴・ピット
ST: 墓域・埋葬施設 SX: 性格不明遺構 NR: 自然流路 st: 試掘トレンチ
2. 本書で示す方位は平面直角座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した平面直角座標系第Ⅲ系の値にもとづく。
3. 本書で示す標高値はメートル表記である。標高値は東京湾平均海面 (T.P.) 値を使用した。
4. 本書に掲載する土層は『新版 標準土色帖』(農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修) にしたがって記載した。
5. 本書で用いた土器の編年と器種名については以下の論文・報告書に依拠している。これら以外の遺物については、出土土器検討会等で指導を受けた年代を記載している場合もある。

〔弥生土器〕

松本岩雄・正岡晴夫 1992 『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』木耳社
(本文中では、松本編年は松本〇様式と記載する。)

〔土師器〕

松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌 第8集』島根考古学会
松山智弘 2021 「地域報告(島根県)」『中期古墳研究の現状と課題Ⅴ～古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって～発表要旨集・資料集成』第24回研究集会実行委員会・中国四国前方後円墳研究会
(本文中では、松山編年は松山〇期と記載する。)
島根県教育委員会 2013 『史跡出雲国府跡 ー9 総括編ー』
(本文中では、出雲国府編年は国府第〇型式と記載する。)

〔須恵器〕

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』島根考古学会
(本文中では、大谷編年は出雲〇期と記載する。)
島根県古代文化センター 2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』
松山智弘 2021 「地域報告(島根県)」『中期古墳研究の現状と課題Ⅴ～古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって～発表要旨集・資料集成』第24回研究集会実行委員会・中国四国前方後円墳研究会
島根県教育委員会 2013 『史跡出雲国府跡 ー9 総括編ー』
(本文中では、出雲国府編年は国府第〇型式と記載する。)

6. 註は各章ごとに連番を振り、章末に配置した。引用・参考文献は文末に記載した。
7. 本書の遺構番号は調査時に設定したものを報告書作成にあたり、種別の番号に振り直して掲載した。なお、本文の説明上、遺構番号は主要なものについて連番で記載している。
8. 本書に掲載した遺構図は、各図に縮尺とスケールを配置した。遺物実測図の縮尺は、縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器は1/3、金属製品・石製品は1/2を原則としているが、これに従えないものはその都度縮尺を明記するようにした。断面の表現は須恵器を黒塗り、弥生土器・土師器を白ヌキ、金属製品・石製品を網掛けで示した。

9. 本書に掲載した弥生土器・土師器・須恵器については、出雲地域における土器編年および畿内との併行関係を捉えるために、以下の各編年で設けられている時期区分を年代の指標とした。

時代		松本編年	草田編年	松山編年 (土師器) 松山 2021	大谷編年 (須恵器) 大谷 1994、大谷 1997、 大谷 2001、大谷 2003 ※出雲 1 期の区分は松山 2021 を参照	出雲国府編年	畿内編年
弥生時代	前期	I-1 様式					
		I-2 様式					
		I-3 様式					
		I-4 様式					
	中期	II-1 様式					
		III-1 様式					
		III-2 様式					
		IV-1 様式					
	後期	IV-2 様式					
		V-1 様式	草田 1 期				
古墳時代	前期	V-2 様式	草田 2 期				
		V-3 様式	草田 3 期				
		V-4 様式	草田 4 期				
			草田 5 期				
	中期		草田 6 期	I 期	小谷 1 式		布留 0 式
			草田 7 期		小谷 2 式		布留 1 式
					小谷 3 式		布留 2 式
					小谷 4 式		布留 3 式
	後期			II 期	大東 1		布留 4 式・TK73 ～ TK216
					大東 2		
				III 期	大東 3	古相 中相	TK208・TK23・TK47
				IV 期	大東 4	新相	MT15
	終末期			V 期	大東 5	出雲 2 期	TK10・MT85
						出雲 3 期	TK43
						出雲 4 期	TK209・飛鳥 I 古
						出雲 5 期	飛鳥 I 新
古代					出雲 6 a・b・c 期		飛鳥 II
					出雲 6 d 期	国府第 1 型式	飛鳥 III ～ IV
					出雲 7・8 期	国府第 2 型式	飛鳥 V・平城 I ～ II
						国府第 3 型式	平城 III
						国府第 4 型式	平城 IV ～ V
						国府第 5 型式	平城 VI・平安 I 中～新
中世						国府第 6 型式	平安 II 古～中
							平安 II 新
						国府第 7 型式	平安 III 古～中
						国府第 8 型式	平安 III
						国府第 9 型式	
						国府第 10 型式	

大谷 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第 11 集 島根考古学会

大谷 1997 「出雲地方の須恵器編年表」『第 7 回 山陰横穴墓調査検討会 出雲の横穴墓・その型式・変遷・地域性』山陰横穴墓研究会

大谷 2001 「上石堂平古墳と出雲西部の横穴式石室」『上石堂平古墳群』平田市教育委員会

大谷 2003 「古墳群と古墳の時期」『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター

出雲地域における弥生土器・土師器・須恵器編年および畿内編年併行関係対照表

目次

巻頭図版

例言

凡例

第1章	調査に至る経緯	1
第2章	位置と歴史的環境	3
	第1節 地理的環境	3
	第2節 歴史的環境	3
第3章	樋岡古墳群	7
	第1節 遺跡の位置と調査の経過	7
	第1項 遺跡の位置	7
	第2項 試掘調査の概要と経過	7
	第3項 本調査の方法と経過	9
	第2節 墳丘の築造と土層	11
	第3節 樋岡1号墳	14
	第1項 墳丘の規模・形態	14
	第2項 墳丘の築造	14
	第3項 周溝	14
	第4項 主体部	20
	第4節 樋岡2号墳	22
	第1項 墳丘の規模・形態	22
	第2項 墳丘の築造	22
	第3項 周溝	23
	第4項 主体部	23
	第5節 樋岡3号墳	25
	第1項 墳丘の規模・形態	25
	第2項 墳丘の築造	26
	第3項 周溝	26
	第4項 主体部	26
	第6節 樋岡4号墳	29
	第1項 墳丘の規模・形態	29
	第2項 墳丘の築造	29
	第3項 周溝	29
	第4項 主体部	30
	第7節 樋岡5号墳	32
	第1項 墳丘の規模・形態	32
	第2項 墳丘の築造	32
	第3項 周溝	32
	第4項 主体部	32
	第8節 樋岡6号墳	35
	第1項 墳丘の規模・形態	35
	第2項 墳丘の築造	36
	第3項 周溝	36
	第4項 主体部	37

第9節	その他の遺構	39
第1項	SK01	39
第2項	ST01	39
第3項	ビット	40
第4項	遺構外出土遺物	40
第10節	小結	42
第1項	古墳の様相	42
第2項	各古墳の新旧関係と被葬者	43
第3項	主体部	43
第4項	出土遺物	44
第5項	樋岡古墳群の年代観	45
第6項	結語	46
第11節	樋岡3号墳出土ガラス小玉の分析	47
	(田村 朋美)	
	遺物観察表	60

第4章 南外古墳群 63

第1節	遺跡の位置と調査の経過	63
第1項	遺跡の位置	63
第2項	南外古墳群の配置と概要	63
第3項	本調査の方法	64
第2節	南外3号墳	65
第1項	試掘トレンチ	66
第2項	墳丘の規模・形態	66
第3項	墳丘の築造	69
第4項	周溝	69
第5項	その他の遺構と出土遺物	73
第3節	南外4号墳	77
第1項	試掘トレンチ	78
第2項	墳丘の規模・形態	78
第3項	墳丘の築造	80
第4項	墳丘面及び盛土出土遺物	82
第5項	周溝	85
第6項	主体部	89
第7項	その他の遺構と出土遺物	91
第4節	南外5号墳	93
第1項	試掘トレンチ	94
第2項	墳丘の規模・形態	94
第3項	墳丘・石室の築造	95
第4項	周溝	96
第5項	主体部	101
第6項	その他の遺構と出土遺物	107
第7項	南外古墳群出土の石器(玉髓)について	112
第5節	小結	124
第1項	南外古墳群の遺構について	124
第2項	南外古墳群の副葬品について	127
第3項	南外古墳群の時期	129

第4項	南外5号墳と林43号墳の出土遺物について	130
第5項	南外5号墳の系譜	131
第6項	結語	131
	遺物観察表	134
第5章	奥宇田瀬遺跡	137
第1節	遺跡の位置と調査の経過	137
第1項	遺跡の位置	137
第2項	試掘調査の概要と経過	137
第3項	本調査の方法と経過	140
第2節	本調査の成果	142
第1項	本調査の概要	142
第2項	基本層序	142
第3項	遺構と遺物	145
第4項	その他の出土遺物	202
第3節	小結	205
第1項	遺跡の様相	205
第2項	竪穴建物跡・掘立柱建物跡の様相	206
第3項	玉作工房跡(SI06-1)について	207
第4項	結語	208
	遺物観察表	210
第6章	岩井手谷遺跡	217
第1節	遺跡の位置と調査の経過	217
第1項	遺跡の位置	217
第2項	試掘調査の概要と経過	217
第3項	本調査の方法と経過	218
第2節	本調査の成果	220
第1項	本調査の概要	220
第2項	基本層序	220
第3項	第1遺構面-1	222
第4項	第1遺構面-2	236
第5項	第1遺構面-1・2 遺構外出土遺物	239
第6項	第2遺構面	243
第7項	第2遺構面 遺構外出土遺物	247
第3節	小結	248
第1項	岩井手谷遺跡の遺構の変遷と様相	248
第2項	出土遺物の様相	251
第3項	結語	251
	遺物観察表	253
第7章	総括	257
第1節	遺構と出土遺物の様相	257
第2節	結語	265

插图目次

第 1 図	調査地位置図	58	図 58	南外 3 号墳清溝出土遺物実測図	72
第 2 図	縄岡古墳群・南外古墳群・奥宇田瀬遺跡 ・若井手道跡の位置図	59	図 59	南外 3 号墳 SX301・SD301・柱穴配置図	73
第 3 図	縄岡古墳群・南外古墳群・奥宇田瀬遺跡 ・若井手道跡周辺の道跡分布図	60	図 60	南外 3 号墳土層断面図 C-C'・D-D'	74
		61	図 61	南外 3 号墳 SX301 実測図	74
		62	図 62	南外 3 号墳 SD301 実測図	75
		63	図 63	南外 3 号墳柱穴実測図 1	75
		64	図 64	南外 3 号墳柱穴実測図 2	76
縄岡古墳群		65	図 65	南外 3 号墳遺構外出土遺物実測図	76
第 4 図	縄岡古墳群周辺の道跡分布図	66	図 66	南外 4 号墳調査前地形測量図	77
第 5 図	縄岡古墳群位置図	67	図 67	南外 4 号墳試掘トレンチ (st01) 実測図	78
第 6 図	試掘トレンチ (st01) 実測図	68	図 68	南外 4 号墳遺構配置図	78
第 7 図	試掘トレンチ (st02) 実測図	69	図 69	南外 4 号墳土層断面図	81
第 8 図	試掘トレンチ (st03) 実測図	70	図 70	南外 4 号墳旧表土検出面測量図	82
第 9 図	縄岡古墳群調査前地形測量図	71	図 71	南外 4 号墳墳丘面及び盛土遺物出土状況図	83
第 10 図	縄岡古墳群調査後地形測量図	72	図 72	南外 4 号墳盛土出土遺物断面図	83
第 11 図	縄岡古墳群墳丘土層断面図 A-A'	73	図 73	南外 4 号墳墳丘面(一部盛土)出土遺物実測図	84
第 12 図	縄岡古墳群墳丘土層断面図 B-B'・C-C'	74	図 74	南外 4 号墳旧溝遺物出土状況図	86
第 13 図	縄岡古墳群田表土検出面測量図	75	図 75	南外 4 号墳北西側旧溝遺物出土状況図	87
第 14 図	縄岡 1 号墳墳丘実測図	76	図 76	南外 4 号墳清溝出土遺物実測図	88
第 15 図	縄岡 1 号墳清溝遺物出土状況図	77	図 77	南外 4 号墳主体部実測図	89
第 16 図	縄岡 1 号墳清溝土器出土状況図	78	図 78	南外 4 号墳主体部実測図	90
第 17 図	縄岡 1 号墳清溝出土遺物実測図 1	79	図 79	南外 4 号墳主体部出土遺物実測図	91
第 18 図	縄岡 1 号墳清溝出土遺物実測図 2	80	図 80	南外 4 号墳 SX401 実測図	91
第 19 図	縄岡 1 号墳主体部実測図	81	図 81	南外 4 号墳 SP401 ~ 404 実測図	92
第 20 図	縄岡 1 号墳主体部出土遺物実測図	82	図 82	南外 4 号墳遺構外出土遺物実測図	92
第 21 図	縄岡 2 号墳墳丘実測図	83	図 83	南外 5 号墳調査前地形測量図	93
第 22 図	縄岡 2 号墳主体部実測図	84	図 84	南外 5 号墳試掘トレンチ (st501) 実測図	94
第 23 図	縄岡 2 号墳出土遺物実測図	85	図 85	南外 5 号墳遺構配置図	95
第 24 図	縄岡 3 号墳墳丘実測図	86	図 86	南外 5 号墳土層断面図	97
第 25 図	縄岡 3 号墳主体部実測図	87	図 87	南外 5 号墳旧表土検出面測量図	98
第 26 図	縄岡 3 号墳主体部玉類出土状況図	88	図 88	南外 5 号墳旧溝遺物出土状況図	100
第 27 図	縄岡 3 号墳出土遺物実測図	89	図 89	南外 5 号墳清溝出土遺物実測図	100
第 28 図	縄岡 4 号墳墳丘実測図	90	図 90	南外 5 号墳横穴式石室実測図	103-104
第 29 図	縄岡 4 号墳主体部実測図	91	図 91	南外 5 号墳石室遺物出土状況図	105
第 30 図	縄岡 4 号墳主体部出土遺物実測図	92	図 92	南外 5 号墳石室及び裏込め土出土遺物実測図	106
第 31 図	縄岡 5 号墳墳丘実測図	93	図 93	南外 5 号墳 SX501 実測図	107
第 32 図	縄岡 5 号墳主体部実測図	94	図 94	南外 5 号墳 SX501 出土遺物実測図	107
第 33 図	縄岡 5 号墳出土遺物実測図	95	図 95	南外 5 号墳加工段 501 実測図	108
第 34 図	縄岡 6 号墳墳丘実測図	96	図 96	南外 5 号墳加工段 501 出土遺物実測図	108
第 35 図	縄岡 6 号墳主体部実測図	97	図 97	南外 5 号墳加工段 502 実測図	108
第 36 図	縄岡 6 号墳玉類出土状況図	98	図 98	南外 5 号墳加工段 502 出土遺物実測図	109
第 37 図	縄岡 6 号墳出土遺物実測図	99	図 99	南外 5 号墳加工段 503 実測図	109
第 38 図	SK01 実測図	100	図 100	南外 5 号墳 SX501 実測図	109
第 39 図	ST01 実測図	101	図 101	南外 5 号墳 SX502・503 実測図	110
第 40 図	ST01 出土遺物実測図	102	図 102	南外 5 号墳 SX503 出土遺物実測図	111
第 41 図	ビット実測図	103	図 103	南外 5 号墳遺構外出土遺物実測図	111
第 42 図	遺構外出土遺物実測図	104	図 104	南外 5 号墳石器出土位置図	112
第 43 図	縄岡 3 号墳出土ガラス小玉の顕微鏡写真	105	図 105	南外 5 号墳出土の石器(玉璽)実測図(1)	114
第 44 図	カリガラス・ソーダガラスの判別	106	図 106	南外 5 号墳出土の石器(玉璽)実測図(2)	115
第 45 図	カリガラスの細分	107	図 107	南外 5 号墳出土の石器(玉璽)実測図(3)	116
第 46 図	ソーダガラスの細分	108	図 108	南外 5 号下層及び周辺出土の石器実測図(4)	117-118
第 47 図	着色剤の特徴 1	109	図 109	南外 5 号墳石器接合資料の接合状況	119
第 48 図	着色剤の特徴 2	110	図 110	南外 5 号墳区旧表土下 1 層および周辺出土 の石器実測図(5)	121-122
南外古墳群		111	図 111	南外 4 号墳築造過程模式図	126
第 49 図	南外古墳群周辺の道跡分布図	63	図 112	南外 5 号墳築造過程模式図	128
第 50 図	南外古墳群配置図	64	図 113	南外 5 号墳と林 43 号墳の環濠実測図	130
第 51 図	南外 3 号墳調査前地形測量図	65			
第 52 図	南外 3 号墳試掘トレンチ (st301) 実測図	66			
第 53 図	南外 3 号墳遺構配置図	67			
第 54 図	南外 3 号墳土層断面図 A-A'・B-B'	68			
第 55 図	南外 3 号墳旧表土検出面測量図	69			
第 56 図	南外 3 号墳旧溝遺物出土状況図	70			
第 57 図	南外 3 号墳北西側旧溝遺物出土状況図	71			
			奥宇田瀬遺跡		
			第 114 図	奥宇田瀬遺跡周辺の道跡分布図	137
			第 115 図	奥宇田瀬遺跡位置図	137
			第 116 図	奥宇田瀬遺跡試掘トレンチ実測図	139

挿表目次

樋岡古墳群

表 1	試掘トレンチ一覧	8
表 2	樋岡古墳群の古墳間新旧関係	43
表 3	樋岡古墳群古墳一覧	43
表 4	樋岡古墳群玉類集計表	45
表 5	ガラス玉計測表 1	56 ~ 57
表 6	ガラス玉計測表 2	58 ~ 59

南外古墳群

表 7	試掘トレンチ (st301)	66
表 8	試掘トレンチ (st401)	78
表 9	試掘トレンチ (st501)	94
表 10	南外 5 号墳出土石器 (玉髓) 一覧表	123
表 11	南外古墳群一覧表	124
表 12	南外古墳群時期一覧	130

奥宇田瀬遺跡

表 13	試掘トレンチ (st01・02・03)	138
表 14	SI06-1 石材別重量集計表	165
表 15	SI06-1 石材重量比	167
表 16	SI06-1 ~ 3 水晶・滑石計測表	176 ~ 178
表 17	SK01 ~ 24 計測表	201
表 18	竪穴建物跡一覧表	205
表 19	掘立柱建物跡一覧表	206

岩井手谷遺跡

表 19	試掘トレンチ (st01)	218
表 20	岩井手谷遺跡主な遺構・出土遺物一覧	248

総括

表 21	各遺跡の遺構と遺物	257
表 22	出土剥片類長幅比	258
表 23	出土剥片類長厚比	258

図版目次

本文中写真

写真1 1956年の奥宇田瀬遺跡一帯の空中写真…………… 138

巻頭図版

- 巻頭1 樋岡古墳群 調査後全景(北側上空から)
 樋岡古墳群 出土遺物玉類(1・3・6号墳)
 巻頭2 樋岡古墳群 1号墳出土遺物
 樋岡古墳群 3号墳出土遺物
 樋岡古墳群 6号墳出土遺物
 巻頭3 南外古墳群 調査後全景(西側上空から)
 南外古墳群 3号墳調査後全景(西から)
 南外古墳群 4号墳調査後全景(東から)
 南外古墳群 5号墳調査後全景(北から)
 巻頭5 南外古墳群 5号墳主体部(西から)
 南外古墳群 5号墳土層断面A-A'北東側と土塊積み(東から)
 巻頭6 南外古墳群 5号墳土層断面A-A'土塊積み(東から)
 南外古墳群 5号墳出土石器
 巻頭7 奥宇田瀬遺跡 調査後全景(南側上空から)
 奥宇田瀬遺跡 調査後全景(東から)
 奥宇田瀬遺跡 遺構完掘状況(東から)
 奥宇田瀬遺跡 SIOG-1出土遺物

樋岡古墳群

- 図版1 樋岡古墳群 調査前近景(北から)
 樋岡古墳群 調査後全景(北東側上空から)
 図版2 樋岡古墳群 調査後全景(北東から)
 周溝検出状況(北東から)
 図版3 土層断面A-A' 3号墳西側(南西から)
 土層断面A-A' 3号墳東側(南東から)
 土層断面A-A' 2号墳東側(南西から)
 土層断面B-B' 3号墳南側(北東から)
 土層断面B-B' 3号墳北側(北東から)
 土層断面B-B' 1号墳北側①(南東から)
 土層断面B-B' 1号墳北側②(北東から)
 土層断面C-C' 2号墳西側(南西から)
 図版4 1号墳 全景(北東から)
 1号墳 主体部完掘状況(南東から)
 図版5 1号墳 周溝遺物出土状況①(土師器・甕 第17図-6)
 1号墳 周溝遺物出土状況②(土師器・甕 第17図-2)
 1号墳 周溝遺物出土状況③(土師器・甕 第18図-1・2)
 2号墳 全景(北西から)
 図版6 2号墳 主体部完掘状況(南東から)
 2号墳 主体部縦断土層断面(南西から)
 2号墳 主体部縦断土層断面南東側延長部分(南から)
 2号墳 主体部横断土層断面(南東から)
 2号墳 主体部遺物出土状況(土師器・甕 第23図-2)
 図版7 3号墳 全景(南西から)
 3号墳 主体部完掘状況(西から)
 3号墳 主体部玉類出土状況①
 3号墳 主体部玉類出土状況②
 図版8 3号墳 主体部縦断土層断面(南西から)
 3号墳 主体部横断土層断面(西から)
 3号墳 主体部土層断面C-C'(南東から)
 3号墳 主体部棺底白砂検出状況(南西から)
 4号墳 全景(北東から)

- 図版9 4号墳 主体部完掘状況(東から)
 4号墳 主体部縦断土層断面(南から)
 4号墳 主体部横断土層断面(東から)
 5号墳 全景(南東から)
 図版10 5号墳 主体部完掘状況(北西から)
 5号墳 主体部縦断土層断面(南西から)
 5号墳 主体部横断土層断面(南東から)
 5号墳 主体部遺物出土状況
 図版11 6号墳 全景(東から)
 6号墳 主体部完掘状況(西から)
 6号墳 主体部縦断土層断面(南東から)
 6号墳 主体部横断土層断面(東から)
 図版12 6号墳 主体部玉類遺物出土状況①
 6号墳 主体部玉類遺物出土状況②
 旧表土検出状況(北東から)
 SK01 完掘状況(南東から)
 SK01 土層断面(南東から)
 図版13 ST01 完掘状況(北西から)
 ST01 遺物出土状況(北東から)
 ST01 縦断土層断面(北東から)
 ST01 横断土層断面(北西から)
 ビット群完掘状況(北東から)

図版14～17 出土遺物

南外古墳群

- 図版18 南外3号墳 調査前近景(西から)
 南外3号墳 調査後全景(南東から)
 図版19 周溝検出状況(南東から)
 周溝完掘状況(南東から)
 図版20 周溝北西側土層断面(西から)
 周溝南東側土層断面(南西から)
 周溝南西側土層断面(南東から)
 周溝北西側土層断面(東から)
 周溝南西側遺物出土状況①(南から)
 図版21 周溝南西側遺物出土状況②(第58図-1・2)
 北西側周溝遺物出土状況(第58図-3・5・10)
 図版22 墳丘盛土土層断面A-A'(南西から)
 墳丘盛土土層断面B-B'(南東から)
 図版23 北西側緩斜面検出状況(東から)
 SX301 完掘状況(北東から)
 図版24 完掘状況(南東から)
 作業風景(南東から)
 図版25 南外4号墳 調査前近景(南西から)
 南外4号墳 調査後全景(南東から)
 図版26 周溝南東側検出状況(南から)
 周溝完掘状況(南東から)
 図版27 周溝西側遺物出土状況(第76図-6)
 周溝北西側遺物出土状況(第76図-1～5・7・8)
 図版28 主体部完掘状況①(南西から)
 主体部完掘状況②(真上から)
 図版29 主体部土層断面(南西から)
 主体部遺物出土状況(北から)
 墳頂部トレンチ土層断面C-C'(南から)
 墳頂部トレンチ土層断面D-D'(西から)

- 図版 30 墳丘面土層断面 A-A' (北東から)
 墳丘面土層断面 B-B' (南東から)
 図版 31 旧表土検出状況 (南東から)
 完掘状況 (南東から)
 図版 32 SX401 完掘状況 (南東から)
 調査区南西側ビット完掘状況 (南西から)
 図版 33 南外 5 号墳 調査前近景 (北東から)
 南外 5 号墳 調査後全景 (北から)
 図版 34 土層断面北西側 B-B' (東から)
 周溝北東側遺物出土状況 (南東から)
 図版 35 横穴式石室土層断面 A-A' (南東から)
 横穴式石室土層断面 B-B' (北から)
 玄室内遺物出土状況 (第 92 図-7 頭)
 図版 36 横穴式石室完掘状況 (南東から)
 玄室腰石検出状況 (北西から)
 図版 37 右側壁腰石検出状況 (北東から)
 左側壁腰石検出状況 (南から)
 図版 38 左袖石半截状況 (北西から)
 右袖石抜取り痕半截状況 (西から)
 玄室腰石掘り方完掘状況 (北西から)
 図版 39 墳丘南東側断ち割り土層断面 (南東から)
 墳丘北東側断ち割り土層断面 (北東から)
 図版 40 旧表土検出状況 (北から)
 完掘状況 (北から)
 図版 41 SI501 完掘状況 (北から)
 SX501 完掘状況 (北東から)
 SX502・503 完掘状況 (北東から)
 加工段 501 完掘状況 (北東から)
 加工段 502・503 完掘状況 (北東から)
 図版 42 ~ 51 出土遺物

奥宇田瀬遺跡

- 図版 52 奥宇田瀬遺跡 調査前近景 (南東から)
 奥宇田瀬遺跡 調査後 SI02 ~ SI09 (東から)
 図版 53 土層断面 A-A' (北西から)
 土層断面 B-B' (南西から)
 図版 54 SI01-1・2 完掘状況 (東から)
 SI02・SI03-1・2 完掘状況 (東から)
 図版 55 SI02 土層断面 A-A' (南から)
 SI02 土層断面 B-B' (東から)
 図版 56 SI04-1・2 完掘状況 (東から)
 SI04-1 土層断面 A-A' (北東から)
 図版 57 SI05-1・2 完掘状況 (東から)
 SI05-1 土層断面 A-A' (南から)
 SI05-1 土層断面 B-B' (東から)
 図版 58 SI06-1・2・3 完掘状況 (東から)
 SI06-1 土層断面 A-A' (南西から)
 図版 59 SI06-1 土層断面 B-B' (東から)
 SI06-1 須恵器 (坏身第 141 図-7)・土師器 (裏片)
 ・水晶 (第 145 図-5) 出土状況
 図版 60 SI07 完掘状況 (東から)
 SI07 白色粘土・遺物検出状況 (南から)
 図版 61 SI08 完掘状況 (東から)
 SI08 土層断面 A-A' (南東から)
 図版 62 SI08 土層断面 B-B' (東から)
 SI08 遺物出土状況
 図版 63 SI09-1・2 完掘状況 (南東から)
 SI09-1 土層断面 A-A' (南から)

- 図版 64 SI09-1 土層断面 B-B' (東から)
 SI10 完掘状況 (南東から)
 図版 65 SI11 完掘状況 (南東から)
 加工段 01 土層断面 A-A' (南から)
 図版 66 SB01・SB02 完掘状況 (東から)
 SB03・SA01 完掘状況 (東から)
 図版 67 SB04 完掘状況 (南東から)
 砂跡完掘状況 (南東から)
 図版 68 SK04 (北東から)
 SK11 (北東から)
 SK13 (東から)
 SK15 (東から)
 SK16 (東から)
 SK20 (南東から)
 SK21 (北東から)
 SK22 (北東から)
 図版 69 ~ 84 出土遺物

岩井手谷遺跡

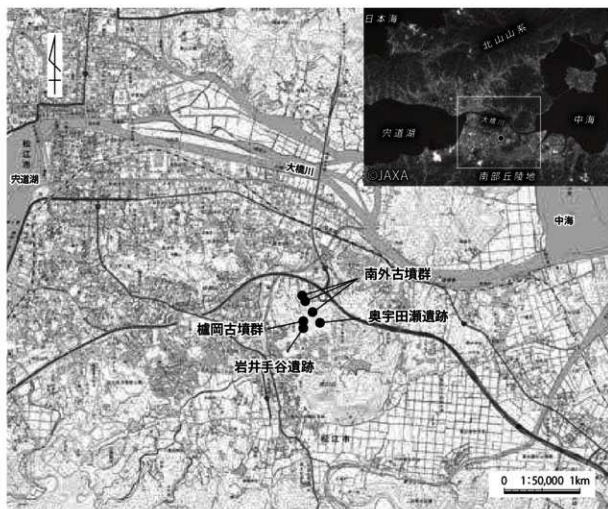
- 図版 85 岩井手谷遺跡 調査前近景 (北東から)
 岩井手谷遺跡 調査後全景 (南から)
 図版 86 土層断面 A-A' (南東から)
 土層断面 B-B' (南東から)
 図版 87 土層断面 B-B' 東側 (NR02) (南東から)
 土層断面 C-C' (南東から)
 図版 88 第 1 遺構面-1 完掘状況 (南から)
 第 1 遺構面-1 完掘状況 (北東から)
 図版 89 SB01-1・SB01-2・SA01 完掘状況 (南東から)
 調査区中央西側斜面 (SB02・03) 完掘状況
 (南東から)
 図版 90 第 1 遺構面-1 南側完掘状況 (北東から)
 SB04・SD01 完掘状況 (東から)
 図版 91 砂跡完掘状況 (北から)
 SB01-1 (SP01) 遺物出土状況 (南から)
 SB04 遺物出土状況 (東から)
 SD01 遺物出土状況 (東から)
 SK01 土層断面 (東から)
 SK01 完掘状況 (南東から)
 堆積土遺物出土状況 (第 219 図-16)
 NR02 遺物出土状況 (第 217 図-9)
 図版 92 NR01・NR02 完掘状況 (北東から)
 NR02 完掘状況 (南から)
 図版 93 第 2 遺構面完掘状況 (南西から)
 第 2 遺構面遺構・遺物検出状況 (南から)
 図版 94 第 2 遺構面遺物出土状況① (北東から)
 第 2 遺構面遺物出土状況② (北東から)
 図版 95 ~ 104 出土遺物

第1章 調査に至る経緯

平成29(2017)年12月、松江市に山代町・東津田町・矢田町にまたがる約20haの広大な宅地造成計画に伴う埋蔵文化財の有無にかかる調査依頼書が民間事業者から提出された。当該計画地には、既に周知の「上谷遺跡」、「南外古墳群(3・4号墳)」、「来美東遺跡(古墳群、A区域、B区域、E区域)」の計3遺跡が周知されており、また、この範囲以外についても遺跡が広がる可能性が高いことから、平成30(2018)年5月～8月にかけて断続的に遺跡の範囲と内容を把握するための試掘調査を実施した。その結果、前述の遺跡の他、新たに古墳群や遺物散布地を確認することとなり、遺跡の発見通知や範囲変更手続きを行うところとなった。ただし、「来美東遺跡」については区域が散在し、古墳群も内包するなど煩雑な状況にあり、ここに新たな遺跡を加えることは混乱が生じると判断されたことから、事業用地周辺を含めて、平成30年11月に下記のとおり整理し、遺跡の発見通知と名称および範囲変更の手続きを行った(第2図)。

【発見遺跡】

榎岡古墳群・岩井手谷遺跡・奥宇田瀬遺跡



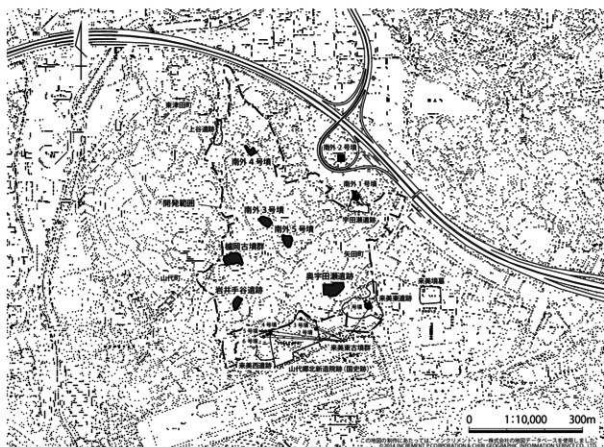
第1図 調査地位置図

【遺跡の名称変更】

(旧)	(新)
来美東遺跡 (A、B区)	→ 来美東遺跡※ A区、B区を結合
来美東遺跡 (E区)	→ 奥宇田瀬遺跡
来美東遺跡 (1、3～5号墳、未発見古墳2基)	→ 来美古墳群 (1～6号墳) ※事業用地外
来美東遺跡 (山代郷北新造院西側)	→ 来美西遺跡※事業用地外
来美東遺跡 (2号墳)	→ 南外古墳群 (5号墳)

その後、平成30年11月に事業者から当該範囲の事業計画と発掘の届出が提出されたことから、この内容について鳥根県教育委員会に進達・協議したところ、切土もしくは3m以上の盛土がなされる「南外古墳群 (3～5号墳)」・「奥宇田瀬遺跡」・「榎岡古墳群」・「岩井手谷遺跡」については、発掘調査の指示を受けることとなった。以上の経緯から上記の4遺跡について、平成30年12月から順次、本発掘調査を実施するに至ったものである。

なお、事業用地内ではあるが、「上谷遺跡」・「奥宇田瀬遺跡」・「来美東古墳群 (1号墳)」は緑地帯として、現地保存され、また、「来美東遺跡」も大半は緑地帯で、一部盛土がなされるものの厚さが3m未満であることから、現地保存されることとなった。



第2図 榎岡古墳群・南外古墳群・奥宇田瀬遺跡・岩井手谷遺跡の位置図

第2章 位置と歴史的環境

第1節 地理的環境(第3図)

当該事業に伴い発掘調査を行った南外古墳群・櫛岡古墳群・奥宇田瀬遺跡・岩井手谷遺跡は、松江市の東部の東津田町・矢田町・山代町に所在し、丘陵や谷部の斜面に立地している。北側には松江市を東西に流れる大橋川があり、北側には大橋川に流入する馬橋川の沖積地が広がっている。調査地を南に下ると『出雲国風土記』に「神名嶺野」と称される茶白山(標高171.5m)が眺望でき、茶白山の南側から東側には松江市有数の穀倉地帯である意宇平野が広がっている。意宇平野は、松江市八雲町熊野の山間部から中海へと注ぐ意宇川が形成した沖積平野である。意宇平野から大橋川南岸には松江地域を代表する首長墓の他、多くの古墳が集中しているところである。また、茶白山の南側や意宇平野には古代に出雲国府・出雲国分寺などが置かれ、古代出雲の政治の中心地として栄えたところでもある。

遺跡が所在する当地は、大橋川と意宇平野の中間に位置する地域であり、周辺に多くの遺跡が存在している。以下では大橋川北岸から意宇平野周辺の主な遺跡を時代ごとに取り上げ、概観してみたい。

第2節 歴史的環境(第3図)

旧石器時代

旧石器時代の良好な遺跡は知られていないが、下黒田遺跡(57)で玉髄製石核と剥片の接合資料、山代郷北新造院跡(米美庵寺跡)(7)で玉髄製ナイフ形石器の出土が確認されている。

縄文時代

縄文時代の遺跡には石台遺跡(73)・勝負遺跡(17)・保地遺跡(76)がある。石台遺跡では集石遺構や晩期の炭化米が出土した土坑が検出され、後期～晩期の土器や石器が多く出土している。勝負遺跡では後期の竪穴住居跡や土坑が検出され、保地遺跡では後期の土器や石鏃などが採集されている。他に才塚遺跡(78)・間内遺跡(129)・さっぺい遺跡(126)・法華寺前遺跡(128)・長元遺跡(77)から土器が出土している。

弥生時代

弥生時代の遺跡は布田遺跡(32)で弥生時代前期から中期にかけての住居跡・溝状遺構・土坑が検出され、銅鐸形土製品などが出土している。石台遺跡・勝負遺跡では弥生時代の遺構も確認されている。石台遺跡では弥生時代中期から後期にかけての集落跡が発見され、弥生土器など多くの遺物が出土している。また、勝負遺跡からも弥生時代後期から古墳時代中期にかけての住居跡を確認している。弥生時代後期の水田跡は向小紋遺跡(37)・上小紋遺跡(36)・夫敷遺跡(127)で検出されている。玉作り関係の遺跡では弥生時代中期中葉から後葉の緑色凝灰岩を用いた玉作関係遺物が布田遺跡の遺物包含層から出土している。また、平所遺跡(12)では弥生時代後期後葉の玉作工房跡が検出されており、そのなかの一棟は出土した石材から水晶を主体とする工房跡と考えられている。弥生時代の四隅突型墳丘墓は茶白山の南側裾で間内越墳墓群(14)や米美庵墳丘墓(9)が確認されている。

古墳時代

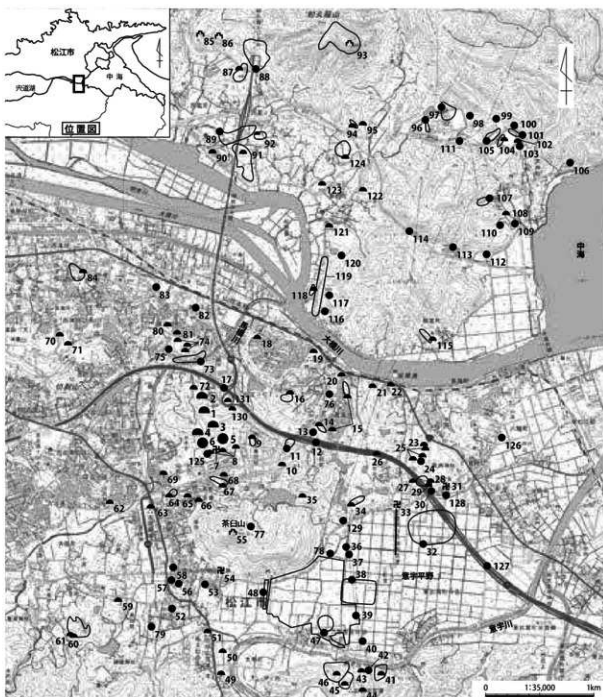
古墳時代の遺跡は、茶臼山周辺や大橋川周辺の丘陵部で多くの古墳が確認されている。前期には、前方後円墳である廻田1号墳(35)のほか、小型の方墳を持つ社日1号墳(28)・井ノ奥2号墳(15)が知られている。廻田1号墳は全長58mの前方後円墳で後円部・前方部とも2段築成で葦石は存在しない。出土した埴輪は出雲でも最古のものである。

中期になると、大橋川の南北両岸において廟所古墳(92)・観音山1号墳(91)・石屋古墳(19)・竹矢岩舟古墳(22)・井ノ奥4号墳(15)等の多くの大型古墳が築造される。石屋古墳は造出をもつ大型の方墳で形象埴輪や須恵器が出土している。井ノ奥4号墳では埴輪全体に葦石がみられ、円筒埴輪や朝顔形埴輪・鶴型埴輪が出土している。中期後半になると、意宇平野南側の丘陵に西百塚山古墳群(46)・東百塚山古墳群(45)・荒神谷・後谷古墳群(60)のほか、大橋川南岸の丘陵に小規模な古墳からなる米坂古墳群(87)が確認されている。集落遺跡として寺山小田遺跡(11)や矢田平所遺跡(13)で竪穴建物と掘立柱建物が検出され、寺山小田遺跡では出土した遺物の状況から手工業生産遺跡の可能性が指摘されている。後期には、今回調査を行った南外3～5号墳の北東側に位置する南外2号墳(131)がある。南外2号墳は古墳時代後期前半に造られた一辺12.5mの小規模な方墳である。埋葬施設は細長い土壇で、主体部から須恵器の蓋が出土している。南外2号墳の南に位置する南外1号墳(130)は、墳長20mの前方後円墳である。埋葬施設の構造が不明であることや出土物がないことから築造時期は不明であるが、埴輪形態の特徴や立地から中期から後期初頭頃の古墳と推測されている。

後期の古墳では埴輪規模が前方後方墳としては県内最大の山代二子塚古墳(64)が築かれるほか、横穴式石室をもつ岡田山1号墳(51)・御崎山古墳(49)・手間古墳(21)がある。また、埋葬施設は調査されていないが魚見塚古墳(118)も大橋川北岸における後期を代表する前方後円墳で全長63mを測る。一方で、石棺式石室をもつ古天神古墳(43)・岩屋後古墳(50)・山代方墳(65)・山代原古墳(永久宅後古墳)(66)・朝酌岩屋古墳(121)・朝酌上神社跡古墳群(122)・廻原古墳群(124)などの古墳が多く造られている。それとほぼ時期を同じくして、丘陵斜面には遅倉横穴墓群(94)・安部谷横穴群(41)・十王免横穴群(10)・狐谷横穴群(67)の横穴墓が築かれ、なかには石棺式石室を模したものが多くみられる。中海西岸の丘陵をみると6世紀末から7世紀前半にかけて小規模な古墳に横穴式石室をもつイガラ古墳群(104)や池ノ奥古墳群(102)が確認される。

奈良時代・平安時代

奈良時代の遺跡は、意宇平野南側に律令政治下で政治を行った出雲国府跡(39)がある。天平5(733)年に編纂された『出雲国風土記』によれば意宇平野周辺部は意宇郡に属し、意宇郡家、黒田驛、意宇軍団、正倉の公的施設が置かれている。交通路では正西道(山陰道)や枉北道(隠岐への官道)が交わる十字街が確認される。近年、この枉北道の一部が大橋川北側に位置する魚見塚遺跡(119)で確認され注目された。寺院関係では茶臼山の南北麓に新造院が建立されている。山代郷北新造院跡(来美庵寺跡)(7)は調査により金堂と講堂が確認されている。山代郷南新造院跡(四王寺跡)(54)は近年行われた松江市の調査において、新たに溝や柱穴が発見されている。これらの寺院に瓦を供給し



1 南外3号墳	20 筑神地古墳	40 大屋敷遺跡	59 平古墳群	78 才家遺跡	98 勝田谷集落	118 魚見塚古墳
2 南外4号墳	21 手塚古墳	41 安部谷横穴	60 筑神谷・後谷古墳群	79 出雲国造館跡	99 明曾集落	119 魚見塚遺跡
3 南外5号墳	22 竹天町古墳	42 天馬古墳	61 筑神谷・後谷横穴	80 佐山山古墳群	100 池ノ島A遺跡	120 キコロン遺跡
4 横田古墳群	23 中竹天後1号墳	43 古天神古墳	62 向山古墳群	81 赤杉山集落	101 池ノ島B集落	121 朝野新上神社古墳
5 南手田集落跡	24 才ノ林遺跡	44 大草山古墳	63 大草山集落	82 黒日神社跡	102 池ノ島古墳群	122 朝野新上神社古墳群
6 岩井手古墳	25 武内神社東山古墳群	45 東古山山古墳群	64 山代二子塚	83 はせ岡遺跡	103 池ノ島C遺跡	123 旧朝野小学校跡古墳
7 山代郷北新道跡跡 (東栗原古墳)	26 才ノ林古墳群	46 西古山山古墳群	65 山代方遺跡	84 東城ノ前遺跡	104 イガラヒ古墳群	124 旧原古墳群
8 東栗原古墳群	28 春日古墳群	48 大坪遺跡	66 山代原古墳	85 稲葉集落	105 勝田谷集落	125 東栗原集落
9 新栗原集落	29 中竹天後2号墳	49 朝野山古墳	67 松谷横穴	86 二保山成跡	106 山津集落	126 さつべい遺跡
10 十五角横穴群	30 出雲郡分寺瓦窯跡	50 岩屋集落	68 長谷古墳	87 米坂古墳群	107 寺尾集落	127 大草山遺跡
11 寺山小田遺跡	31 出雲郡分寺寺跡	51 岡田山古墳群	69 丹比山古墳群	88 米坂遺跡	108 山津古墳群	128 大草山前遺跡
12 平所遺跡	32 布田遺跡	52 萬田山古墳群	70 岡田古墳群	89 山津遺跡	109 九日田遺跡	129 内田遺跡
13 矢田平所遺跡	33 出雲郡分寺寺跡	53 山代郷南新道瓦窯跡	71 岡田横穴群	90 南栗原集落	110 勝田谷集落	130 南外1号墳
14 岡内遺跡集落群	34 上竹矢古墳	54 山代郷南新道跡跡 (西土寺跡)	72 土古墳群	91 新原山古墳群	111 勝田谷集落	131 南外2号墳
15 才ノ島古墳群	35 朝野古墳群	55 朝野山成跡	73 石古墳群	92 松久山山成跡	112 パリタケ集落	
16 保地古墳群	36 上小松遺跡	56 朝野山成跡	74 朝野古墳群	93 渡島横穴集落	113 朝野集落	
17 勝島集落	37 朝野小松遺跡	57 朝野山成跡	75 向津田遺跡	94 九日宮古墳群	114 朝野神社古墳	
18 東光台古墳	38 神田玉作跡	57 下栗田遺跡	76 保地遺跡	95 九日宮古墳群	115 朝野神社古墳	
19 石塚古墳	39 出雲郡跡	58 出雲郡山代郷正遺跡	77 長元遺跡	96 南沢A遺跡	116 朝野神社古墳	
				97 別所遺跡	117 勝田谷遺跡	

第3図 植岡古墳群・南外古墳群・奥宇田河遺跡・岩井手古墳群周辺の遺跡分布図

た窯跡には出雲国分寺瓦窯跡(30)や山代郷南新造院瓦窯跡(53)がある。

天平13(741)年には聖武天皇による国分寺建立の詔により、意宇平野北東側に^{みことのみや}出雲国分寺跡(33)や出雲国分尼寺跡(31)の官寺が建立された。

一方、大橋川北岸のキコロジ遺跡(120)からは墨書土器・漆容器・緑釉陶器・土馬が出土しており、祭祀行為や手工業生産の存在が窺われている。また、中海東側の大井町周辺には、古墳時代後期から奈良時代にかけ須恵器の窯跡群である^{やまづ}山津窯跡(106)・^{いわた}寺尾窯跡(107)・^{いわし}岩汐窯跡(113)などの大井窯跡群が存在する。

中世

中世の遺跡では、^{いづもこくぜうかん}石台遺跡・^{てんまに}出雲国造館跡(79)・^{なからくや}天満谷遺跡(42)・^{お郡やしき}中竹矢遺跡(29)・大屋敷遺跡(40)などが確認され、出雲中世府中関連遺跡の可能性が考えられている。また、山城には15～16世紀に機能した^{いなほ}茶臼山城跡(55)や^{わくらやま}稲葉城跡(85)・和久羅山城跡(93)がある。

参考文献

- 出雲考古学研究会 1987 『石棺式石室の研究』
 建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会 1989 『布田遺跡』
 鳥根県教育委員会 1986 『石台遺跡』・1989 『石台遺跡』・1993 『石台遺跡』
 鳥根県教育委員会 1977 『平所遺跡』『国道9号バイパス建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ-Ⅰ』
 鳥根県教育委員会 2001 『鳥根県教育庁 埋蔵文化財調査センター年報Ⅸ』
 鳥根県教育委員会 2007 『南外2号墳・勝負遺跡』
 鳥根県古代文化センター 2014 『解説出雲風土記』
 松江市教育委員会 1985 『史跡石屋古墳』
 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 1999 『西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2011 『農林振興総合整備事業穴道湖中海沿岸(長善寺ため池)に伴うキコロジ遺跡発掘調査報告書』
 松江市市史編纂委員会 2012 『松江市史 史料編2 考古資料』

第3章 櫛岡古墳群

第1節 遺跡の位置と調査の経過

第1項 遺跡の位置(第4図)

櫛岡古墳群は松江市東津田町と山代町の境に所在する。北西から南東に派生する丘陵尾根の先端付近に位置し、北西側は尾根の鞍部であり、北東側や南側は谷地形を呈している。南側の谷斜面の下方に岩井手谷遺跡が、北側の谷を挟んだ丘陵に南外古墳群が所在する。遺跡の標高は約64mを測り、南側に『出雲国風土記』に「神名槿野」と称されている茶臼山(標高171.5m)を望むことができる。

第2項 試掘調査の概要と経過(第5図・表1)

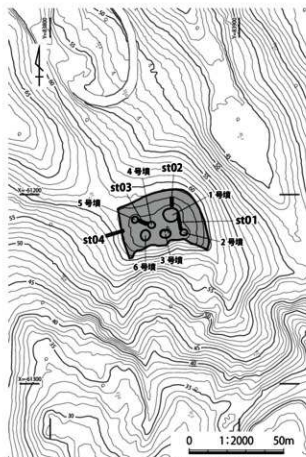
当地は山林であり、分布調査で古墳と推測されるマウンドが2基以上確認されたことから4箇所のトレンチ(st01～04)を設定して試掘調査を行った。試掘トレンチの詳細は表1に示したが、st04では遺構を検出していないため、以下ではst01～st03の調査の概要を述べる。

1. 試掘トレンチ(st01)(第6図)

丘陵頂部南東側にある古墳推定地の裾部に設定した長さ6.5m、幅1.0mのトレンチである。調査の結果、地表面下0.4mの深さで東西方向の溝を検出した。溝の規模は、幅約2.3m、深さ0.4mを測



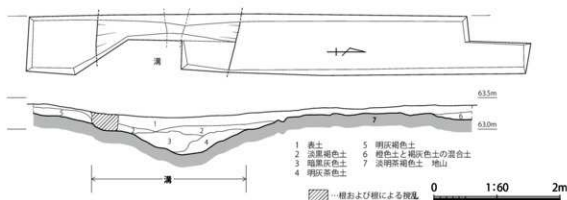
第4図 櫛岡古墳群周辺の遺跡分布図



第5図 櫛岡古墳群位置図

表1 試掘トレンチ一覧

トレンチ	トレンチ設定方向	設定範囲 (長軸×短軸)	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
st01	南—北	6.5m × 1.0m	6.5㎡	0.4m	古墳の区画溝	—
st02	南—北	5.0m × 1.0m	5.0㎡	0.8m	盛土及び墳端	—
st03	北西—南東	5.0m × 1.0m	5.0㎡	0.3m	古墳の区画溝	—
st04	北東—南西	9.0m × 1.0m	9.0㎡	0.3m	—	—

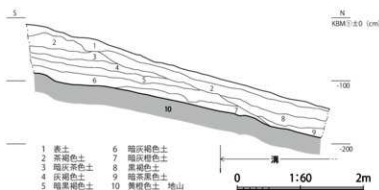


第6図 試掘トレンチ (st01) 実測図

る。遺物は出土していない。

2. 試掘トレンチ(st02)(第7図)

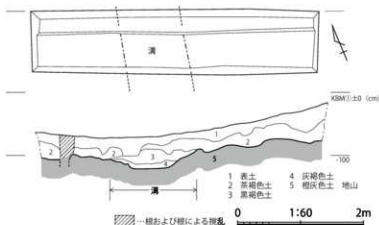
st01 で古墳の周溝と推測される遺構を検出したため、北側にも古墳の存在が窺われた。そのため st01 の北側に墳丘及び墳端の確認のためのトレンチを設定して調査を行った。トレンチは長さ 5.0m、幅 1.0m で、調査の結果、古墳の盛土及び墳端が検出された。遺物は出土していない。



第7図 試掘トレンチ (st02) 実測図

3. 試掘トレンチ(st03)(第8図)

丘陵頂部の北西側でわずかな起伏がみられたため、古墳の存在を確認するために設定した長さ 5.0m、幅 1.0m のトレンチである。調査の結果、調査区中央付近で北東から南西方向の溝を検出し、古墳を区画する溝と判断された。



第8図 試掘トレンチ (st03) 実測図

溝の規模は幅 1.2m、深さ 0.3m を測り、遺物は出土していない。試掘調査の結果と現地形から規模が 10m 程度 of 古墳が複数存在すると判断された。

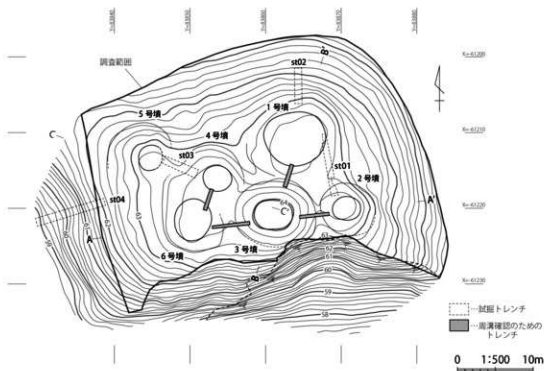
第3項 本調査の方法と経過(第9・10図)

松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査を行った結果、周溝が検出され、複数の古墳が存在することが事実となったことから「榎岡古墳群」として保護法上の手続きを実施した。立木の伐採後に調査前測量を実施したのち本調査を開始し、調査面積は試掘調査成果に基づき丘陵上から丘陵斜面を含む 1,157m² を対象とした。

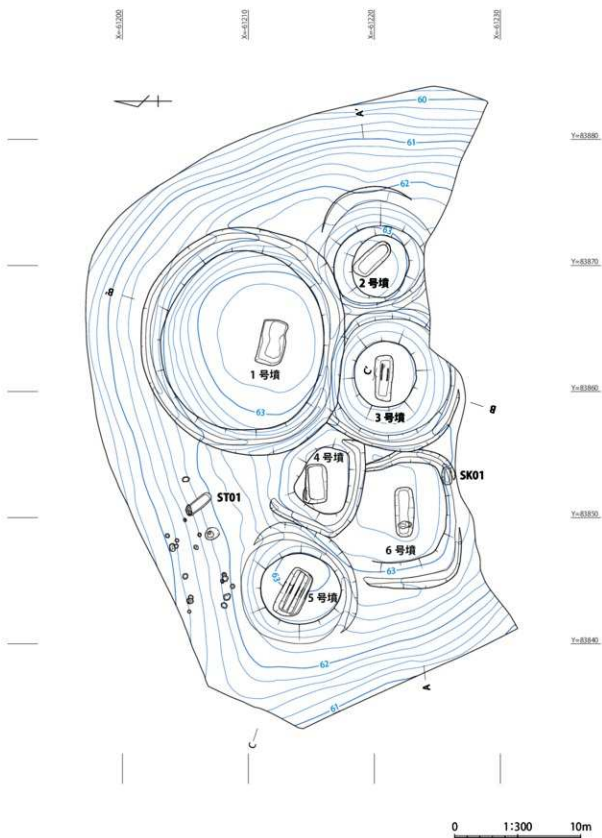
調査は古墳の規模と数を明確にするために周溝推定地のトレンチ調査から始めた。その結果、径 10～15m 程度の小規模な古墳が 6 基確認され、古墳のなかには丘陵南側斜面が崩落しているため墳端の原形を留めていないものがみられた。古墳の番号は、分布調査で確認した北側の一番大きな古墳を 1 号墳、その隣接を 2 号墳・3 号墳とし、その後の本調査で明らかになったものを 4 号墳・5 号墳・6 号墳としており、新旧に関係なく任意でつけている。

次に畦を設定して土層観察を行い、人力による表土掘削と遺構の検出を行った。その結果、方墳 2 基(4・6 号墳)、円墳 4 基(1・2・3・5 号墳)が切り合う状態で築造されていることが判明し、他に北側斜面からピットと古代の墓壇、また 6 号墳周溝から土坑 1 基が検出された。

墳丘や遺構の平面実測はトータルステーションを用い、そのデータと遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。また、遺物の取上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。遺構の記録写真は、デジタル一眼レフカメラによる撮影を行っている。



第9図 榎岡古墳群調査前地形測量図



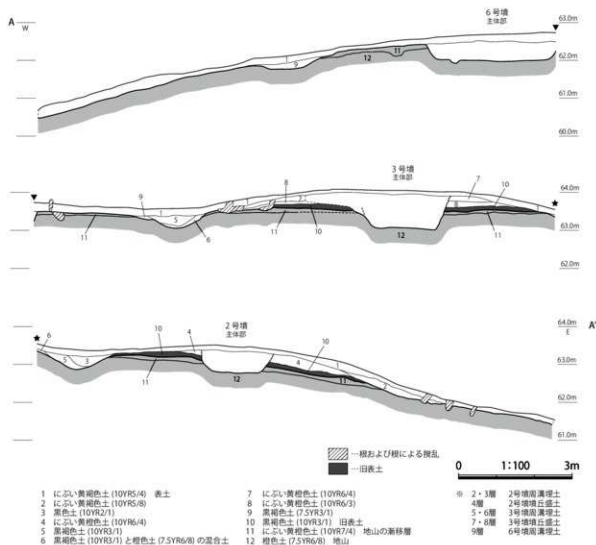
第10図 橿岡古墳群調査後地形測量図

第2節 墳丘の築造と土層(第11~13図)

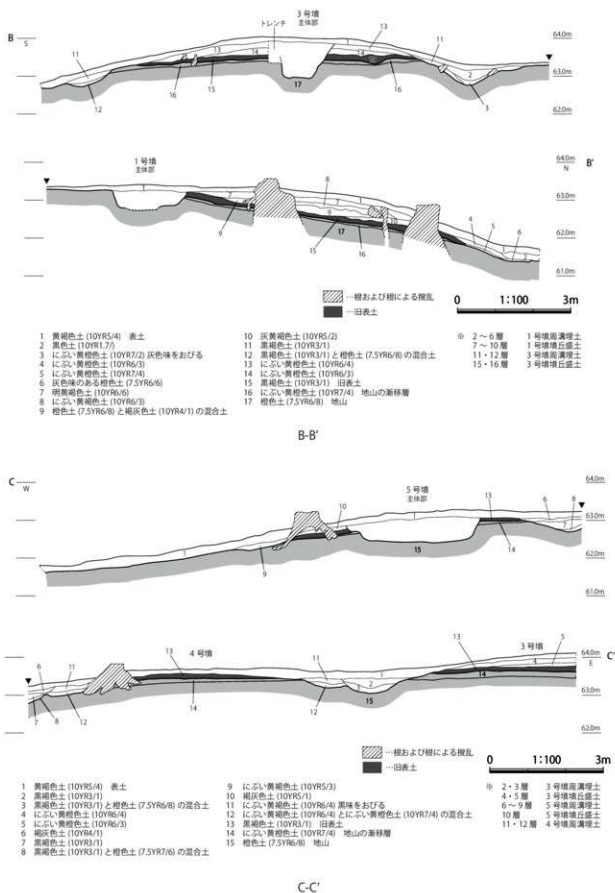
6基の古墳は、丘陵の東西尾根上に3基の古墳(2・3・6号墳)が縦列する形で並んでいる。東側から西側に向かって2・3・6号墳と並び、3号墳が尾根の最高所に位置している。2・3号墳の北側には本古墳群のなかで最大の規模をもつ1号墳が、4号墳の北西側には5号墳が、南側には6号墳が隣接している。土層観察用の畦を2・3・6号墳の墳頂部を通るように東西方向(A-A)に、1号墳から3号墳の墳頂部にかけて南北方向(B-B)に、また、3号墳から5号墳の墳頂部にかけて北西から南東方向(C-C)に設定して調査を実施した。各古墳の土層については後述することとし、本項では概要を述べる。

土層観察によって、墳丘の層序は上位から表土、墳丘の盛土、旧表土、地山に分かれる。地山の上位には漸移層がみられ、本報告では漸移層も地山としている。また、旧表土については腐葉土と表土の見分けがつかなかったため旧表土としている。

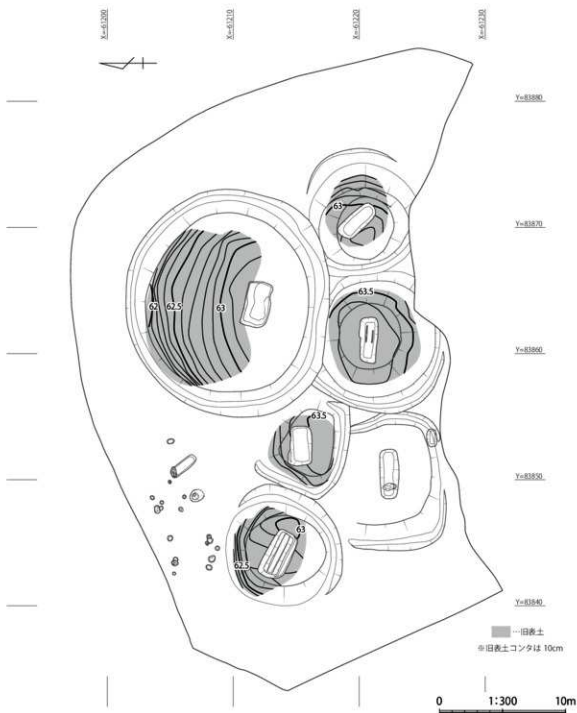
いずれの古墳も表土を 10 ～ 20cm 掘り下げると墳丘が検出された。1 号墳は墳丘の形態や主体部の深さから墳丘上方は削平されていると考えられるが、土層断面 B-B' の北側で旧表土上に盛土 (7 ～



第 11 图 楠田古墳群墳丘土層断面図 A-A'



第12図 植岡古墳群墳丘土層断面図 B-B'・C-C'



第13図 樋岡古墳群旧表土検出面測量図

10層)が確認される。また、2・3号墳も同じように旧表土上に盛土を施して墳丘を造っている。4・5号墳は、盛土を墳頂部の一部でしか確認していないが1～3号墳と同じ方法で墳丘を構築していると思われる。6号墳は表土を除去するとすぐに地山となり旧表土や盛土は確認されなかった。墳頂部平坦面から1基の主体部が検出され、この主体部の深さが浅いことから墳丘は削平されているものと判断される。

旧表土の検出状況を見ると調査地の旧地形は、3号墳を最高所として尾根が東西側と北側に向かって傾斜していることがわかり、旧地形の形状を利用して古墳を構築している。

第3節 樋岡1号墳

第1項 墳丘の規模・形態(第14図)

1号墳は調査区北東側に位置する円墳である。調査前から墳丘の径に対して高さが低い、いわゆる座布団状を呈していた。

墳丘規模は、墳端で南北 14.1m、東西 15.0m、墳頂部標高は 63.3m を測る。墳頂部平坦面は径が 13m あり、墳丘上端と墳裾の径の差は少ない。また、墳丘の高さは北側で 1.8m、南側で 0.5m を測り、北側から見ると墳丘はある程度の高さをもつようにみえるが、墳丘断面では主体部がなければフラットな面にしか見えない。このような状況や主体部の深さが 25cm と浅いことからすると、墳丘上方は明らかに削平されていると思われる。

第2項 墳丘の築造(第14図)

前述したように墳丘上方は削平されているが、北西側から北東側にかけて盛土や旧表土が確認された。第 14 図 A-A' の土層観察から、墳丘はまず斜面下方部分の地山を削り出して整え、墳裾を周溝掘削により造っている。その後、旧表土上に盛土を施して完成したと考えられ、旧表土の墳丘外縁に 10 層を盛土してフラットな面を造り、その上に 7～9 層をさらに水平になるように盛土を施している。盛土の厚さは北側で最大 0.5m を測り、主体部の深さが 0.25m と浅い点を考慮すれば、本来はある程度の盛土があったと判断される。遺物は盛土から縄文土器 1 点が出土しており、墳丘築造の際に混入したものである。この土器は遺構外出土遺物として、第 42 図 (42-1) に掲載している。

第3項 周溝(第14図)

規模・形態

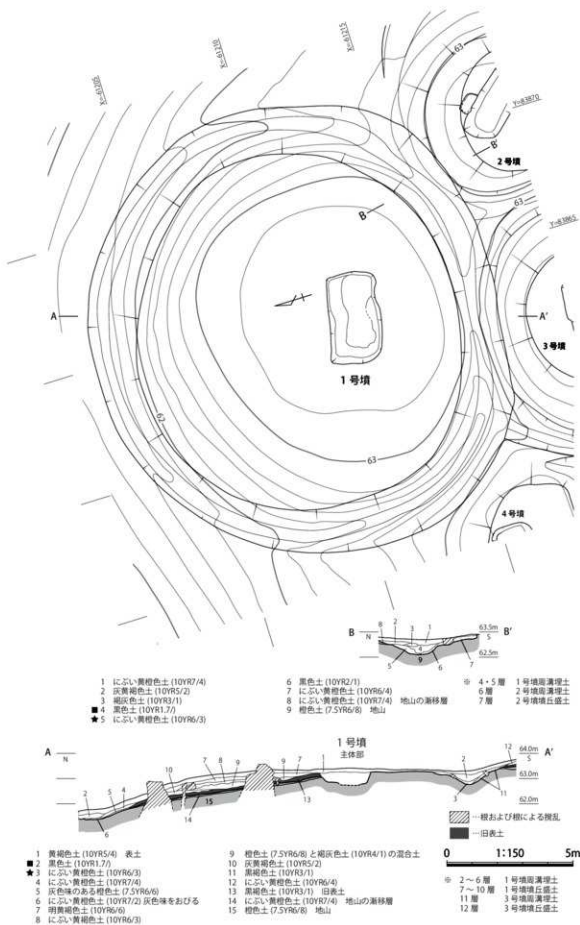
墳丘を全周するように周溝が廻っている。墳丘北側では地山削り出しにより周溝を造り出し、墳丘南側では隣接する古墳の周溝埋土を切り周溝を造っている。周溝の規模は、上端で幅 1.3～2.3m、深さ 20～50cm を測り、断面形は緩い U 字状を呈する。

埋土

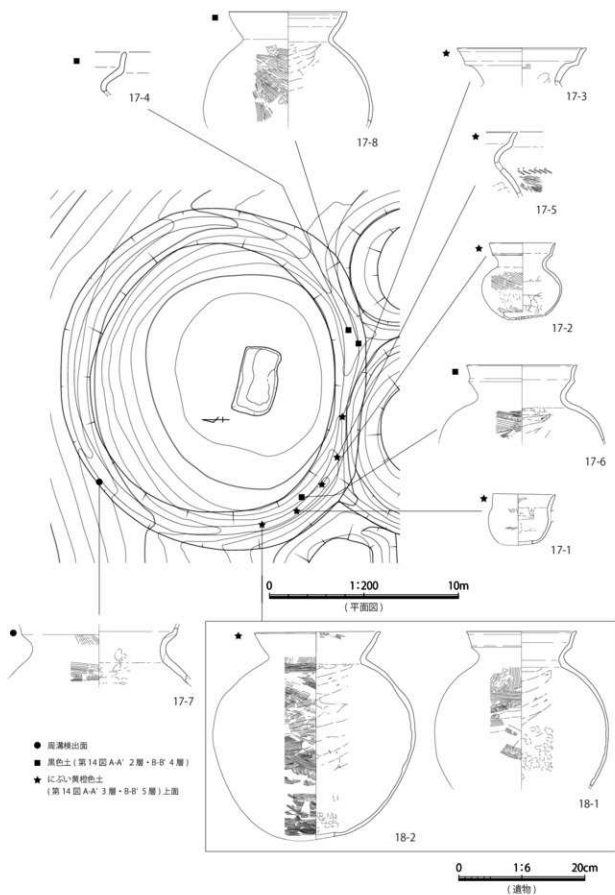
周溝には黒色土やにぶい黄橙色土、橙色土が堆積しており、周溝の検出状況や土層断面から周溝の切り合い関係が確認された。第 14 図土層断面 B-B' の 6 層は 2 号墳墳丘斜面側から堆積した土層で 2 号墳の周溝埋土と考えられる。その土層を切るように 1 号墳の周溝が掘られ、4・5 層は 1 号墳の周溝埋土と考えられる。また、A-A' では 3 号墳の北側で 3 号墳上方から流れ込んだ 11 層を切るように 1 号墳周溝埋土 2・3 層が堆積していることから、1 号墳は 2、3 号墳より新しいと考えられる。4 号墳との新旧関係は周溝の土層断面で確認することはできなかったが、4 号墳墳丘が僅かに 1 号墳の周溝によって削られているようにみられることから 1 号墳は 4 号墳より新しいと判断された。

遺物出土状況(第14・15・16図)

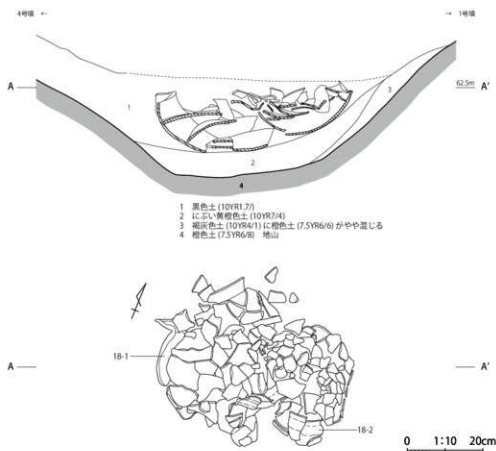
周溝の南東側から北西側にかけて土師器の壺や甕が出土している。これらの土器は出土位置から、周溝検出面(第 15 図●印)、周溝埋土の大半を占める黒色土(第 14 図 A-A' 2 層、第 14 図 B-B' 4 層：



第14图 植岡1号墳墳丘実測図



第15図 橿岡1号墳周溝遺物出土状況図

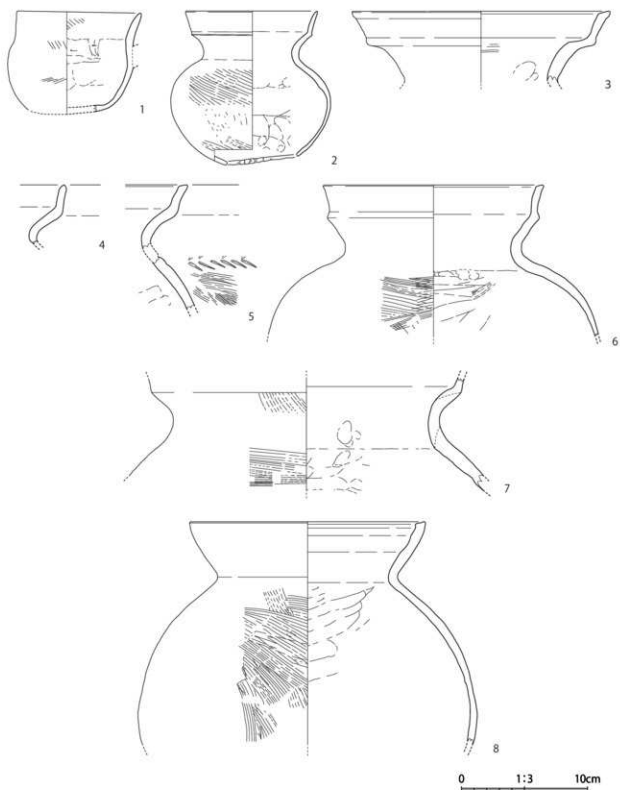


第16図 植岡1号墳周溝土器(第18図・1・2)出土状況図

第15図■印)、周溝底面に堆積したにぶい黄橙色土(第14図A-A'3層、第14図B-B'5層:第15図★印)上面に分けられる。検出面から出土した北西側の土師器の甕片(17-7)は散在しており、原位置を留めていない。黒色土の土器(■印)はいずれも土層の中段で検出され、完形のものはなく破片であった。にぶい黄橙色土上面から出土した土器(★印)は、周溝の南側から南西側で検出され、壺・甕が出土している。そのなかの18-1・2の甕は2個体の甕がつぶれたような状態(第16図参照)で出土している。いずれも横倒しの状態で、18-1は口縁部を北側に向けて、18-2は口縁部を南側に向けて検出された。埋納坑は確認できず、口縁部が反対方向に向いていることからすると意図的に置かれた可能性が考えられる。2個体の甕の南西側からは小型の壺や複合口縁の壺や甕が出土している。これらの遺物は出土位置から初葬ではなく追善供養に伴うもの、または埋葬が周溝掘削直後ではなくある程度の時間の経過後に行われ、その際の祭祀に伴い置かれた可能性が考えられる。

周溝出土遺物(第17・18図)

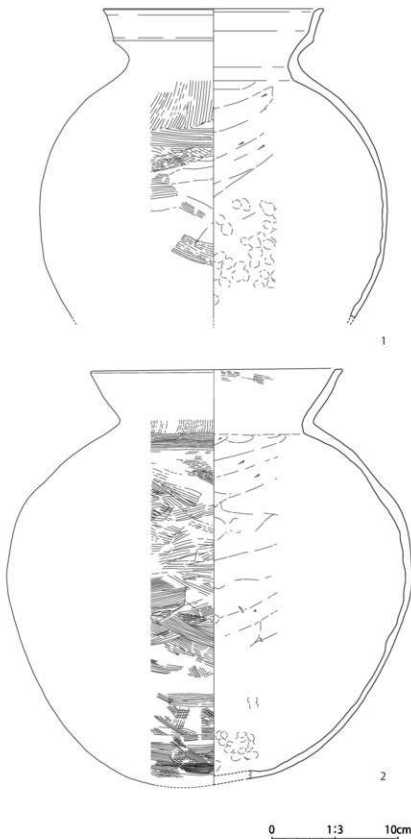
第17～18図は周溝出土遺物である。すべて土師器で、17-1・2は小型の壺、17-3～8と18-1・2は壺と甕である。17-1は手握ねの小型の壺で、底部を欠いているが平底と思われる。口縁部は短く外反し、胴部外面に粘土の剥離痕がみられることから把手が付く可能性がある。外面と口縁部内面に斜め方向のハケメがわずかにみられ、胴部外面下半に手持ちのヘラケズリを施している。胴部内面の上半はヘラケズリ後ナデ、下半に指頭圧痕が認められる。17-2は口径10.4cm、器高12.2cmを測る小



第17図 樋岡1号墳周溝出土遺物実測図1

型の壺である。外傾する口縁外面に稜があり、底部に穿孔が認められる。器壁は薄く、全体的に丁寧に仕上げられている。外面は胴部に斜め方向の粗いハケメを施し、底部はハケ後ナデている。内面は肩部から胴部上半にかけてヘラケズリ後ナデを施し、下半に指頭圧痕が認められる。17-3は口縁端部に内傾する平坦面をもつ二重口縁の壺で、口径 20.4cm、残存高 7.7cmを測る。調整は外面にヨコナ

デを、内面は口縁部にヨコナデ、頸部に横方向のハケメを施した後ナデしている。他に指頭圧痕が認められる。17-4は複合口縁の甕で、口縁部がやや直立気味に立ち上がる。外面にヨコナデを施し、内面は風化により不明である。17-5は複合口縁の甕の口縁部と胴部の破片である。接合はできなかったが、同じ場所から出土していることや胎土や色調から同一個体として図化した。口縁部外面の稜は鈍く、口縁端部に平坦面をもつ。胴部外面に斜め方向のハケメを行い、肩部に羽状紋を施紋している。胴部内面はヘラケズリである。17-6は口径17.5cm、残存高12.0cmを測る複合口縁の甕である。口縁部がやや外傾して立ちあがり、端部に内傾する平坦面をもつ。調整は口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面に横方向や斜め方向のハケメを、内面にヘラケズリを施している。17-7は複合口縁の甕で口縁部を欠いている。頸部径21.2cmを測り、大きめの甕と思われる。調整は、外面は頸部に斜め方向のハケメ後ナデ、頸部直下にヨコハケ



第18図 植岡1号墳周溝出土遺物実測図2

を施している。内面は、頸部は指で押さえた後にナデを行い、頸部直下にヘラケズリや指頭圧痕が認められる。17-8は口径19.0cm、残存高17.8cmを測る、布留式の単純口縁の甕である。口縁部は内湾

して立ち上がり、端部に内傾する平坦面をもち、中央は強いナデによりやや凹んでいる。調整は、口縁部内外面にヨコナデ、胴部外面に斜め方のハケメ、内面にヘラケズリを施している。

18-1は口径17.9cm、残存高24.6cmを測る複合口縁の甕である。口縁端部はやや外傾し、端部は外側に肥厚している。口縁部の調整は内外面ヨコナデである。胴部外面に細かい縦方向のハケメ後横方向のハケメを、内面は肩部から胴部上半にかけてヘラケズリを施し、指頭圧痕が底部から胴部中位まで認められる。18-2は布留式の単純口縁の甕である。口縁は内傾しながら立ち上がり、やや外方に肥厚している。端部に平坦面をもつ強いナデのためやや凹んでいる。口縁部の調整は、外面はヨコナデ、内面は横方向のハケメ後ナデである。外面の頸部から肩部にかけて粗いハケメを、胴部に細かい斜め方向のハケメを施す。内面は底面に指頭圧痕が認められ、胴部から肩部にかけてヘラケズリを施している。胴部最大径は中位よりやや上にあり、底部は丸底である。量法は口径20.0cm、器高32.8cm、胴部最大径32.2cmを測る。

周溝から出土した土器のなかで、黒色土から出土した17-8とにぶい黄橙色土上面から出土した17-2、18-1・2は形態や調整からほかの土器よりやや古い様相を呈し、古墳時代前期末から中期初頭と思われる。ただ、ほかの土器との時期差はあまりなく、古墳時代中期初頭から中葉の範疇に収まるものと思われる。

第4項 主体部(第19図)

規模・形態

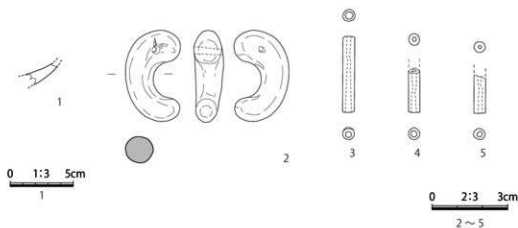
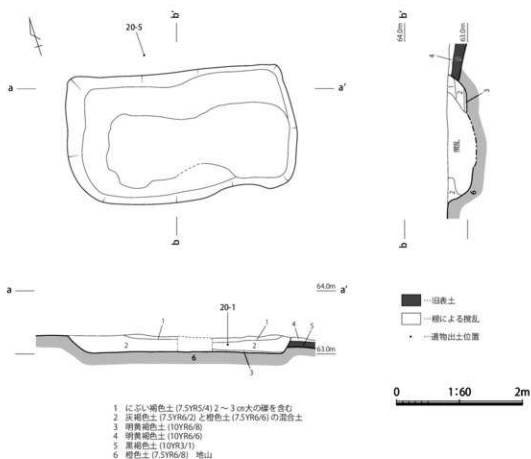
墳頂平坦面のやや南寄りで主体部1基が検出された。墳丘は削平されているため墓壇は浅く、また、大きく根により攪乱を受けているため床面の3分の2は壊されていた。墓壇の規模は長辺3.64m、短辺2.05m、深さ0.25mを測り、平面形は長方形を呈している。主軸方位はN-73°-Wである。墓壇内にはにぶい褐色土や黄褐色土が確認されるが大半が攪乱されており、土層断面から棺痕跡は確認されなかった。頭位方向は墓壇床面標高がやや東側が高いことから東側頭位と推測される。

遺物出土状況

主体部内及び周辺から管玉3点、勾玉1点と土師器片が出土している。管玉1点(20-5)は主体部検出時に主体部の北側から検出され、管玉2点(20-3・4)と勾玉(20-2)は埋土をふるいにかけて際に検出したものである。いずれも主体部検出面や床面より上方から出土していることから、攪乱により原位置を留めていないと考えられる。また、主体部内から数点の土師器片が出土している。色調や胎土が似ていることから同一個体と思われるが、接合できないため器種は判然としない。ただ、破片の断面がやや弧状を呈することから高環の坏部片として実測を行い図化している。

主体部出土遺物(第20図)

20-1は高環として図化した破片である。20-2は瑪瑙製の勾玉である。最大高36mm、最大厚11mm、孔径2.8mmを測り、穿孔は片面穿孔である。20-3～5は碧玉製の管玉ですべて濃緑色を呈する。4・5は半分程度が欠損したもので接合はできなかったため別個体と思われる。20-3は最大高30mm、最大径5mm、孔径2～3mmを測る。管玉の穿孔法は両面穿孔である。



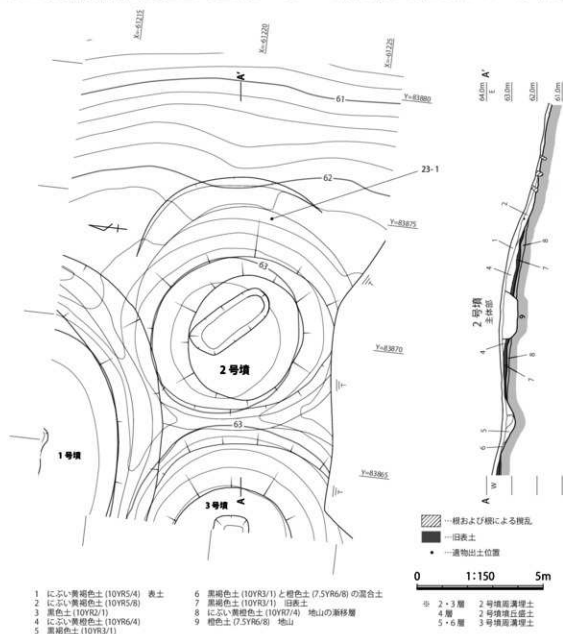
第4節 橿岡2号墳

第1項 墳丘の規模・形態(第21図)

本遺跡の東西尾根の東端、1号墳の南東側に位置する小型の円墳である。規模は東西の周溝墳裾での径は8.5m、墳頂の標高は63.4mを測る。墳丘南側の墳裾や周溝は丘陵斜面の崩落により失われている。周溝は東側で浅い弧状の溝が確認され、北側の墳裾は1号墳の周溝に切られている。また、西側は3号墳周溝埋土を切って掘られている。墳丘の高さは、西側周溝底面から約60cm、東側墳裾から1.2mを測る。

第2項 墳丘の築造(第21図)

墳丘は、周溝掘削後、旧表土上に盛土(第21図A-A'層)を施して墳丘を造っている。旧表土は



第21図 橿岡2号墳墳丘実測図

西側から東側に向かって傾斜しており、斜面下方の東側の盛土を厚くすることにより墳頂部を水平にしている。盛土の厚さは西側で10cm、東側で25cmを測る。

第3項 周溝(第21図)

規模・形態

周溝は墳丘の東側と西側で確認している。規模は上端で幅0.9～1.5m、底面の深さは10～30cmを測り、断面は東側が弧状、西側は緩いU字状を呈している。

埋土

周溝埋土は、にぶい黄褐色土や黒色土である。西側では土層観察から周溝埋土に切り合い関係が確認される。第21図A-A'・6層は3号墳周溝埋土で、この土層を切るように2号墳の周溝が掘られ、その後3層が堆積していることから2号墳は3号墳より新しいと判断される。

遺物出土状況

遺物は、周溝南東側の周溝検出面から土師器の甕片(23-1)がまとまって出土しており、周溝に置かれたものが壊れたと思われる。周溝出土遺物は、第23図に主体部出土遺物と一緒に掲載している。

周溝出土遺物(第23図)

23-1は周溝検出面から出土した土師器の甕片である。甕の頸部と胴部の破片で、胎土や色調から同一個体として図化している。胴部片は表面が摩滅しており文様の原体がはっきりしないが斜め方向に羽状紋のような文様がみられる。

第4項 主体部(第22図)

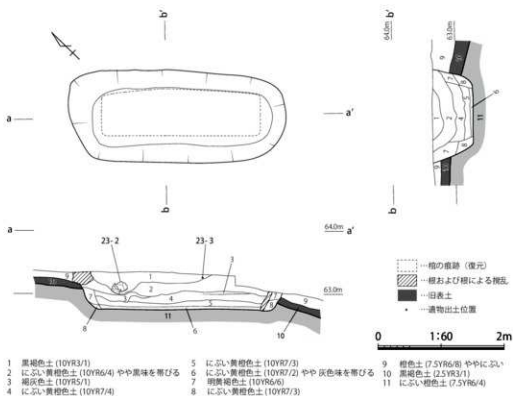
規模・形態

墳頂平坦面のやや北西寄りで主体部を検出している。主体部は素掘りの墓壇で盛土から掘り込まれ地山まで達している。規模は長辺3.4m、短辺1.5m、深さ64cmを測る。平面形は隅丸長方形を呈し、主軸方位はN-55°-Wである。

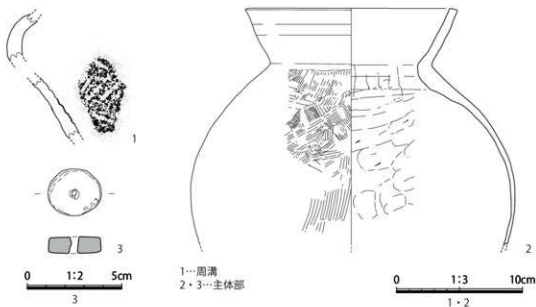
土層断面の観察から棺痕跡は確認できなかったが、やや内側に傾斜する裏込め土(第22図a-a'、b-b'・8層)が分層された。土圧により棺外の土が内側に押し込まれたと考えられ、裏込め土と棺内埋土の境が直線的であることから埋葬施設は箱形の木棺と考えられる。3～5層は棺内埋土、6層は灰色味を帯びたにぶい黄褐色土で棺底に均一にみられるため整地土と考えられる。棺底の規模は長辺2.6m、短辺78cmを測り、頭位については若干南東側の棺底が高いことから南東位の可能性が考えられる。

遺物出土状況

遺物は、第22図土層断面1層から石製品と土師器の壺が出土している。土師器の直口壺(23-2)は棺蓋の北西側に先に腐朽したことによりその上に置かれていた壺が落ち込んだと思われ、この壺の下層の3層は棺蓋に相当する土層の可能性も考えられる。石製品(23-3)は墓壇の中央付近からやや北東側で検出され、壺と同様に埋葬施設の上に置かれていたものと思われる。



第22図 植岡2号墳主体部実測図



第23図 植岡2号墳出土遺物実測図

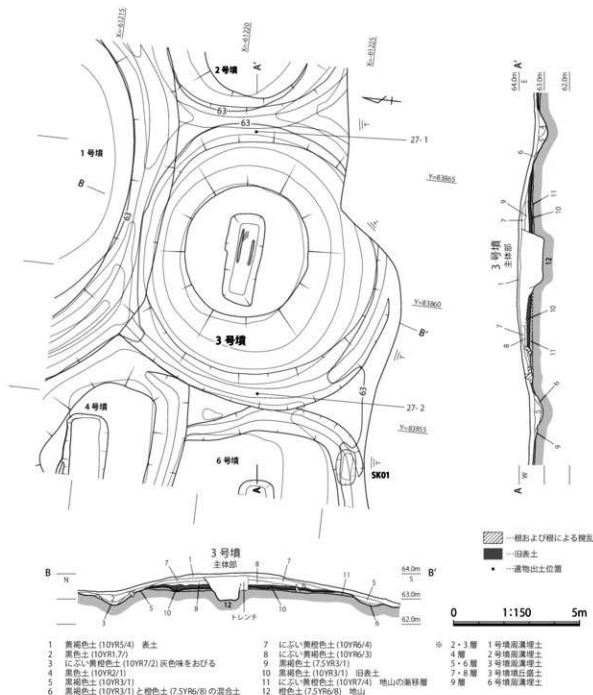
主体部出土遺物(第23図)

23-2は直口壺で、口径16.8cm、残存高18.8cmを測る。口縁部はやや内湾して立ち上がり端部に外傾する平坦面をもつ。調整は口縁部は内外面にヨコナデ、胴部内面はヘラケズリを施し頸部に指頭圧痕や絞り痕が認められる。外面は肩部から胴部上半にかけて細かなハケメを縦方向や斜め方向に施し、胴部下半にはやや粗いハケメをしている。中期初頭と思われる。23-3は直径2.8cm、厚さ0.9cmを測る円形の石製品で、中央に0.5cmの孔がみられる。

第5節 樋岡3号墳

第1項 墳丘の規模・形態(第24図)

3号墳は本遺跡の東西尾根筋の最高所、標高64mに位置する円墳である。南側正面には茶臼山が眺望される。南側墳裾と周溝の一部は斜面の崩落により失われている。墳丘北側斜面から墳裾は1号墳周溝に切れ、東側の周溝は2号墳に切られている。3号墳は隣接する古墳により墳裾や周溝は切られているものの、地形やコンタ測量図をみると整美な円墳である。墳丘の規模は、南東と北西の周溝下端で計測して径は10.8mを測り、墳丘高は西側で0.8m、東側で1.0mである。



第24図 樋岡3号墳墳丘実測図

第2項 墳丘の築造(第24図)

墳丘は、周溝掘削後、旧表土上に盛土(第24図 A-A'・B-B'7～9層)を施して墳丘を造っている。盛土の厚さは20～30cmを測る。

第3項 周溝(第24図)

規模・形態

墳丘の東側、西側で周溝を検出している。上端の幅は0.9～1.5m、深さは30～50cmを測る。土層断面 A-A'をみると、西側では3号墳周溝が6号墳周溝埋土(9層)を切り、東側では3号墳周溝埋土(5・6層)を2号墳周溝が切っている。土層断面 B-B'では3号墳周溝埋土を1号墳周溝が切っているのがわかる。このような状況や前述した1・2号墳の新旧関係から、3号墳に隣接する古墳との新旧関係は古い方から4・6号墳→3号墳→2号墳→1号墳と考えられる。

遺物出土状況

遺物は、東側と西側の周溝覆土から土師器の壺と甕の口縁部が1点ずつ出土している。いずれも周溝検出面から10cm程度下の浅い場所から出土しており、初葬ではなく追善供養に伴うものと考えられる。周溝出土遺物は、第27図に主体部出土遺物と一緒に掲載している。

周溝出土遺物(第27図)

27-1は布留式の単純口縁の甕である。口縁部は外傾しながら立ち上がり、端部が内側に肥厚している。調整は口縁部外面にヨコナデを、内面にヨコハケ後ナデを施す。頸部直下の胴部内面にヘラケズリが認められる。口径は16.4cmを測る。27-2は口径17.6cmを測る複合口縁の壺で、全体的に風化して丸くなっている。口縁部は短く、直立気味に立ち上がる。内外面の一部にヨコナデの痕跡が認められる。これらの土器は古墳時代前期末から中期前半と考えられる。

第4項 主体部(第25図)

規模・形態

墳頂部平坦面から主体部1基を検出している。主体部検出時において、主体部北東側から長さ30cm、幅22cm、高さ20cmの自然石(写真図版15右下)が検出され、この石は標石の可能性が考えられる。

墳丘面で主軸方位を南北からやや西にとる長方形のプランが検出された。土層観察用の畦を十字に設定し、トレンチによる土層観察後掘り下げを行い旧表土上面まで掘り下げると、主体部の主軸方位が検出時と異なることが判明した。そのため、あらためて旧表土面で主体部の検出を行い、畦の再設定を行った後調査を続けた。

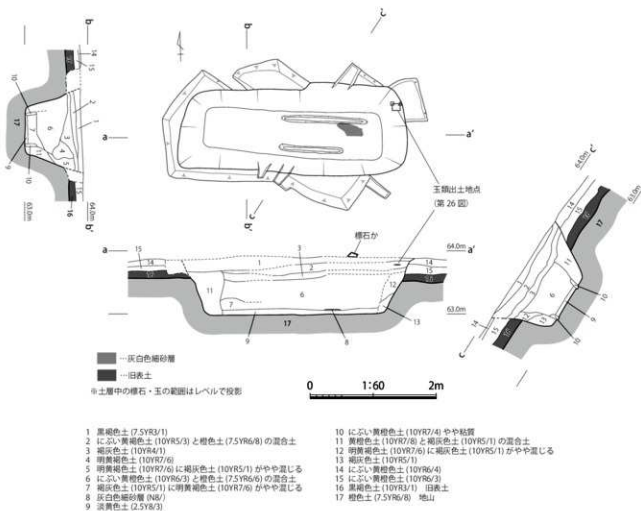
主体部は素掘りの墓壇で、規模は長辺3.6m、短辺1.45m、深さ87cmを測り、主軸方位はN-88°-Wでほぼ尾根筋に並行している。主体部の土層断面は縦断面(a-a')と横断面(b-b')、そして斜め方向ではあるが棺痕跡がわかることから最初に検出した主体部プランの横断面(c-c')を図示している。土層断面1～3層は主体部埋土、6・7層は棺内埋土、11～13層は裏込め土である。10層は裏込め土の内側にみられる土層で側板の痕跡と考えられ、10層の下面の墓壇底面には側板を据えたと思

われる幅 10cm、深さ 3cmの浅い溝が確認された。土層断面の縦断面では小口板の痕跡はみられないが、裏込め土の分層ができたことから小口側にも板が存在していたと思われる。また、裏込め土と棺内埋土の境が土圧によりやや内側に傾斜や湾曲している所もあるが概ね直線的であるため、埋葬施設は箱式の木棺と考えられる。底板の痕跡は確認できていないが、9層はしまりのある土層で棺底の整地土と考えられる。また、9層上面にみられる8層の灰白色細砂層は主体部東側の一部のみで検出された土層で、意図的に置かれたものと思われるが性格は不明である。

棺底の規模は土層断面から長辺 2.53m、短辺 43cmで、棺の深さは土層断面から 60cm以上あったものと推測される。頭位方向は、棺底の高さが西側より東側が若干高いことから東側頭位を推定している。

遺物出土状況(第25・26図)

出土遺物は、主体部北東端の棺外から玉類が出土している。玉類は勾玉 2 個、管玉 4 個、ガラス小玉 122 個で、小玉のなかには主体部埋土をふるいにかけた際に見つかったものが含まれる。これらの玉類は土層断面 2 層から出土したもので埋葬後に供献されたものと考えられ、小玉がやや散在しているものの南北 10cm、東西 8cm、高さ 5cmの範囲からまとまって出土している。また、管玉や

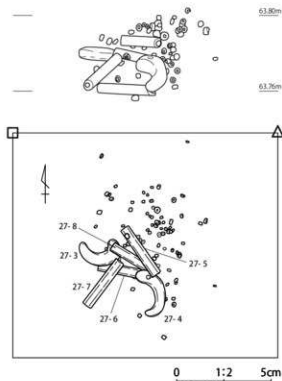


第25図 榎岡3号墳主体部実測図

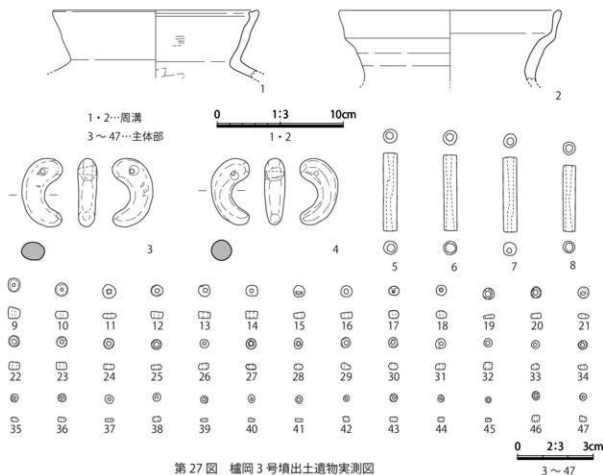
勾玉は一箇所に重なったような状態で、ひとつの首飾りとしてまとめて置かれていたものと想定される。

主体部出土遺物(第27図)

27-3～47は主体部の棺外から出土した玉類である。27-3・4は勾玉、5～8は管玉、9～47は小玉である。27-3・4は瑪瑙製勾玉である。3は赤褐色を呈し、断面は楕円形で、最大高27mm、最大厚7.4mmを測る。孔は片面穿孔によるもので、終孔部の端面がわずかに欠けている。孔径は2mm×4mmである。4は赤褐色を呈し、断面は円形で、最大高26mm、最大厚8.1mmを測る。孔径は2mm×4mmで、穿孔法は片面穿孔である。25-5～8は碧玉製の管玉である。最大高26～31mm、最大幅5mm、孔径は2mm～4mmを測る。孔の穿孔法はすべて両面穿孔である。27-9～47はガラス製



第26図 橿岡3号墳主体部玉類出土状況図



第27図 橿岡3号墳出土遺物実測図

の小玉で、出土したものの一部を図化している。出土したガラス小玉すべての大きさは、直径2～5mm、厚さ2～6mm、孔径1～2mmを測り、色は濃青色81個、淡緑色41個である。

樋岡3号墳から出土したガラス小玉122点のうち残りが良かった102点については田村朋美氏に分析して頂いた。その分析結果の詳細は第11節に譲るが、その一部をここで述べると、樋岡3号墳から出土したガラス小玉はカリガラスとソーダガラス、そして異なる素材のガラスが混合されたものであることがわかった。これらのガラス小玉は引き伸ばし法、鋳型法、加熱貫入法で製作されていた。この分析結果からガラス小玉の時期は古墳時代中期後半まで降らないといえるもので、周溝出土の土器とも整合的である。

第6節 樋岡4号墳

第1項 墳丘の規模・形態(第28図)

1号墳の南西側、3号墳の北西側に位置する。調査前の段階で6号墳と同じような平坦面をなしており、明瞭な墳丘状の高まりはみられなかった。北東側から東側の墳裾や周溝は、1号墳と3号墳の周溝に切られているため不整形な方墳を呈している。墳丘の南東側から西側には周溝がめぐり、北側については周溝がみられないが墳丘斜面の傾斜が緩やかになる標高63m付近が墳裾と思われる。墳丘の規模は、墳裾や傾斜変換点からみて南北約6.9m、東西7.1m、墳丘の高さは5号墳側周溝底面から計測して60cmを測る。

第2項 墳丘の築造(第28・29図)

4号墳は、表土の掘削を行うとすぐに旧表土と地山が検出され、盛土は墳丘の西側から北西側の一部で厚さ10cm前後の盛土(第29図a-a'14層にふい黄褐色土)が確認されたのみであった。現状で盛土は一部にしかみられなかったが、1～3号墳の状況からすると同じように周溝掘削後に旧表土上に盛土を施して墳丘を築造したと推測され、盛土は流失していると思われる。

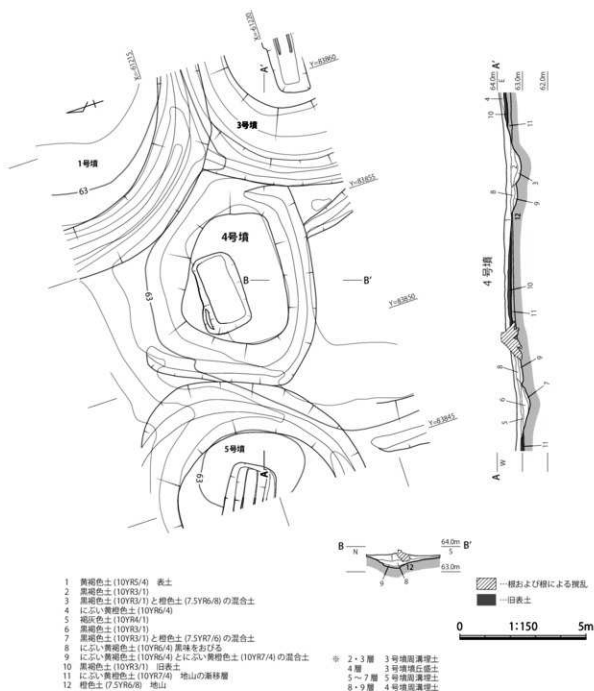
第3項 周溝(第28図)

規模・形態

周溝は墳丘南東側から北西側にかけて認められる。北東側は1号墳の周溝に切れ、北側は流失しており、L字状に残存している。規模は上端幅0.4～1.3m、深さは30～50cmを測り、断面は緩いU字状である。

埋土

周溝埋土はにふい黄褐色土である。第28図の墳丘南側土層断面B-B'で、埋土に切り合いはみられず、また南側で6号墳周溝を検出していないことから、4号墳の周溝掘削の際に6号墳周溝を掘り直したと思われる。また、3号墳と5号墳の周溝が4号墳周溝埋土(土層断面A-A'8・9層)を切っていることから新旧関係は古い方から6号墳→4号墳→3・5号墳と考えられる。周溝から遺物は出土していない。

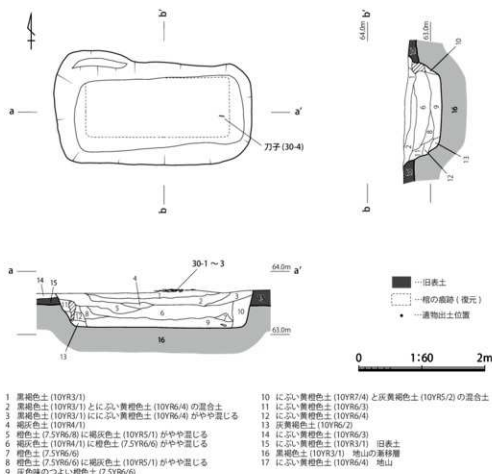


第28図 橿岡4号墳墳丘実測図

第4項 主体部(第29図)

規模・形態

主体部は素掘りの墓場で、墳頂部平坦面の北側に位置する。規模は長辺3.1m、幅1.78m、深さ58cmを測り、主軸方向は $N-87^{\circ}-W$ である。1～5層は主体部埋土、6～9層は棺内埋土と考えられる。土層観察から痕跡に対応する土層は確認できなかったが、やや内側に傾斜するような裏込め土(10～13層)が分層され、木棺の腐朽に伴い土圧のためやや内側に傾斜したと思われる。裏込め土と棺内埋土の境と棺底が直線的であることから、埋葬施設は箱式の木棺と考えられる。棺底の



第29図 槨岡4号墳主体部実測図

規模は長辺 2.30m、幅 96cmを測り、土層断面から棺底を推定すると棺は北寄りに置かれていたようである。

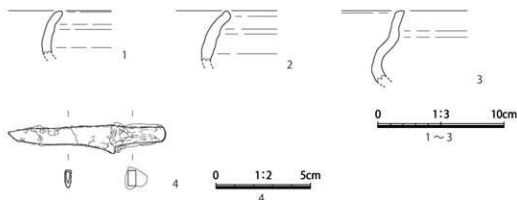
遺物出土状況

遺物は、主体部中央付近の検出面から多数の土師器片が出土している。土師器片は一箇所に集中しており、風化が著しく復元できなかったが口縁部の違いから3個体が認められる。また、棺底の東側で刀子が出土している。墓底面が若干東側が高いことや刀子の出土位置から頭位方向は東側頭位と考えられる。

主体部出土遺物(第30図)

30-1～3は主体部検出面から出土した土師器の甕である。30-1・2は単純口縁の甕の口縁部である。いずれも口縁部が外反し、外面にナデによる凹みがややみられる。30-3は口縁部が短く、複合口縁が退化した形態の甕である。器壁は厚手で外面にヨコナデを施す。内面の調整は風化により不明である。いずれも古墳時代中期前半頃の土器と思われるが、30-3はやや新しく、大東式に比定される。

30-4は主体部から出土した刀子である。全長 8.3cm、刃部長 5.6cm、茎部長 2.7cmを測る。茎部に木質が付着しており、柄が装着されていたと思われる。X線撮影により刃間は確認されるが棟間は無いものと思われる。古墳時代前半期におさまるものである。



第30図 樋岡4号墳主体部出土遺物実測図

第7節 樋岡5号墳

第1項 墳丘の規模・形態(第31図)

本古墳群内の西端に位置する円墳で、墳頂部標高は63.0mを測る。墳丘の北東から南西側で周溝が認められ、西側から北側については周溝がみられないが墳丘斜面が緩やかになる標高62.2m付近が墳裾と思われる。墳丘の規模は墳裾部分で南北8.1m、東西8.5m、墳丘の高さは周溝底面から北側で80cm、南側で30cmである。

第2項 墳丘の築造(第31図)

墳丘は、周溝掘削後、旧表土上に盛土(第31図A-A'6層褐色灰色土)を施して墳丘を造っている。墳頂部平坦面の西側から北側の旧表土上面で厚さ0.1m程度の盛土が確認され、レベルの低い方にのみ盛土を施した可能性は考えられるが、ほかの古墳の築造方法からすると本来は墳頂部全体に盛土をしていた可能性は高い。ただ、後述する主体部が深いことからすると盛土はわずかなものであったと思われる。

遺物は、墳丘の断ち切りの際に盛土から弥生土器と思われる底部(42-2)と磨製石斧(42-9)が出土している。

第3項 周溝(第31図)

規模・形態

墳丘の北東から南西側で周溝を確認している。周溝は弧状を呈し、上端幅0.8～1.3m、深さ20cmを測る。南側で6号墳周溝は検出されず、5号墳周溝掘削の際に掘られた可能性が考えられる。

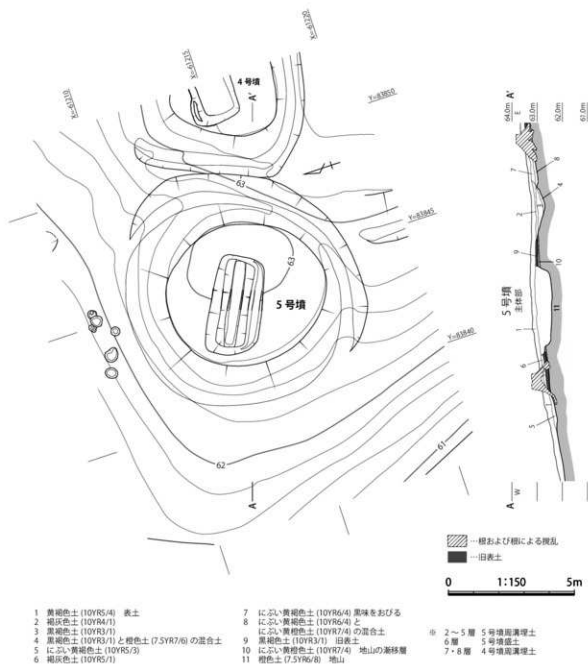
埋土

周溝埋土はにぶい黄褐色土である。東側では4号墳周溝埋土を切って周溝を掘削していることから、4号墳より新しいと考えられる。遺物は出土していない。

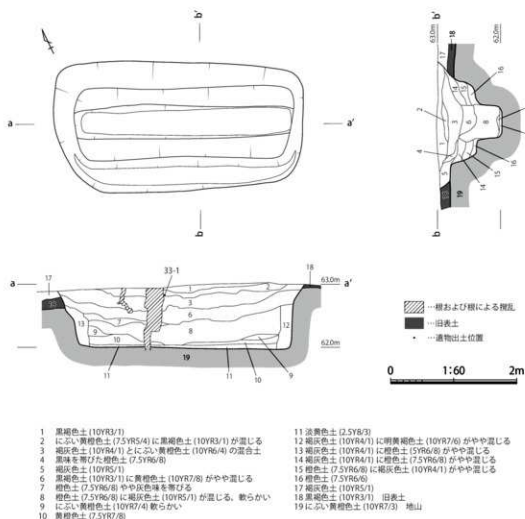
第4項 主体部(第32図)

規模・形態

主体部は墳頂部平坦面のやや西寄りに位置し、本古墳群のなかで最大の規模である。2段掘りの墓壇で、土層断面で棺痕跡に相当する土層は確認されなかったが、裏込め土の分層(12～16層)ができたことやそのラインが直線的であることから埋葬施設は箱式の本棺と考えられる。平面形は長方形を呈し、墓壇2段目のテラスは両側板側に30cm程度の幅をとり、小口側は段を造っていない。墓壇の規模は長辺3.95m、幅2.1m、深さは1.02mを測り、主軸方位はN-64°-Wである。下段の



第31図 植岡5号墳墳丘実測図



第32図 植岡5号墳主体部実測図

墳までの深さ 60cm、下段の墳は長辺 3.5m、幅 50cm、深さ 40cmでほぼ垂直に掘られている。横断 (b-b') をみると、棺身の高さが2段目のテラスより 25cm程度上まで確認され、埋葬時に棺の棺身上部は2段目テラスより上にでていたと推察される。11層 (淡黄色土) は棺底の整地土と思われる。棺底の規模は土層観察より長辺 3.2m、幅 50cm、棺深 65cmである。頭位方向は棺底の高さが若干南東側が高いことから、南東側と考えられる。

遺物出土状況(第32図)

遺物は主体部北側の検出面より 10cm下から鉄鍬が出土している。

主体部出土遺物(第33図)

33-1 は主体部から出土した短茎三角形式鍬である。全長 7.2cm、最大幅 4cm、短茎部長 0.7cmを測り、刃肩部中央付近に直径 0.5cmの孔がある。鍬肩部に深い腸袂をもち、腸袂端部に屈曲はみられない。同様の鉄鍬が安来市黒井田町に所在する毘売塚古墳から出土している。毘売塚古墳では共伴遺物から、TK216 型式以前、古墳時代中期中葉に相当すると考えられている。⁽¹⁾

第33図 植岡5号墳
出土遺物実測図

第2項 墳丘の築造(第34図)

6号墳は、厚さ約20cm前後の表土を掘削するとすぐに地山が露出し、盛土は認められなかった。後述する主体部の深さが浅いことからすると墳丘は現状より高いと想定され、旧表土や盛土が施されていた可能性が高い。

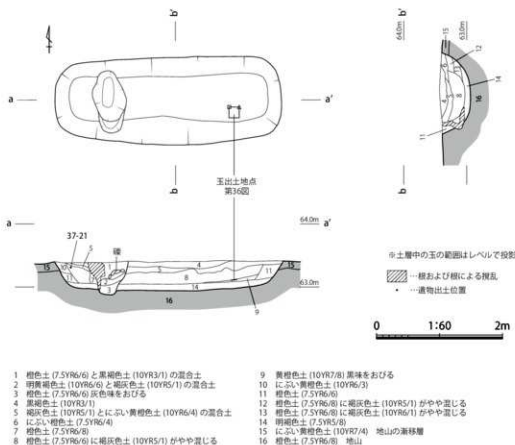
第3項 周溝(第34図)

規模・形態

周溝は墳丘の北側以外で検出している。南側は根の攪乱により一部外側の上端がはっきりしていないが、東側から西側にかけてコの字状に認められる。規模上端幅0.9～1.8m、深さ20～30cmを測り、断面は緩いU字状を呈する。

埋土

埋土は黒褐色土である。土層断面A-A'をみると6号墳周溝埋土は3号墳周溝に切られている。また、前述したように4、5号墳側については6号墳周溝の痕跡は確認できず、4・5号墳の周溝掘削の際に掘り直されたと思われる。このような周溝土層の切り合い関係から6号墳が本古墳群のなかで最も古い古墳と考えられる。



第35図 植岡6号墳主体部実測図

第4項 主体部(第34・35図)

規模・形態

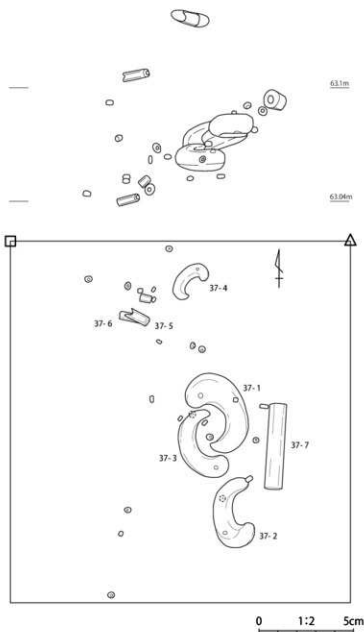
墳頂部平坦面の中央付近で尾根に並行する主体部1基を検出している。主体部に十字の畦を設定して東西畦(a-a')沿いにトレンチを入ると墓域西側で墓域底面より下まで掘られた落ち込みが確認された。当初、主体部に伴うものかと思われたが、土層観察を行った結果、主体部埋土上面から掘られていることがわかり、主体部に伴うものではないと判断された。この落ち込みから遺物は出土していない。

主体部は素掘りの墓域で、平面形は東西に長い隅丸の長方形を呈している。長軸を尾根筋に沿わせており、主軸方位はN-88°-Wである。規模は上端で長軸3.6m、短軸1.4m、深さ46cmを測る。墓域の深さからすると墳丘は流失または削平していると考えられる。

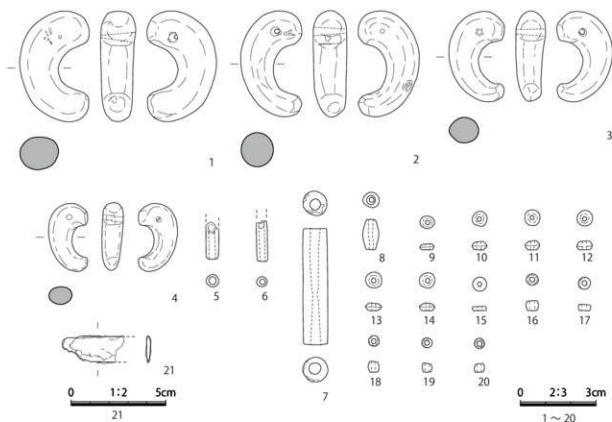
土層断面(a-a'・b-b')の4~6層は墓域内埋土、7~9層は棺内埋土である。9層は上面から玉類が出土していることから棺底板の痕跡の可能性が考えられる。10・11層は裏込め土、14層は棺材を置くための整地土である。土層断面a-a'・b-b'の断面から埋葬施設は割字形の木棺と推察され、棺の規模は、長軸2.8m、短軸80cmである。

遺物出土状況(第35・36図)

主体部から勾玉4点、管玉5点、環玉1点、白玉33点と刀子片、土師器片(図版のみ 図版16下)が出土している。玉類は土層断面9層上面からまとまって出土しており、出土位置から棺内に副葬されたものと考えられる。玉類は南北10cm、東西5cm、深さ10cmの範囲に確認され、白玉は散在しているものの勾玉3点と管玉1点はまとまっている。出土状況を見る限り勾玉3点、管玉1点については比較的奥位置に近いと思われる。頭位方向は、



第36図 植岡6号墳玉類出土状況図



第37図 槲岡6号墳出土遺物実測図

玉類の出土地点や棺底が若干西側より東側が高いことから東側頭位と推定した。土師器片や刀子片は主体部西端から出土している。

6号墳出土遺物(第37図)

土師器片(図版のみ掲載 図版16下)は薄手で外面に細かなハケメがみられるため襷片と思われる。37-1~20は玉製品である。37-1~4は勾玉である。37-1は碧玉製、37-2は瑪瑙製で、いずれも最大高40mm以上、最大厚13mmを測る。37-3・4の勾玉の色調は、3が暗灰色のまだら模様、4は灰白色を呈しており、いずれも石材は滑石と思われる⁽²⁾。穿孔方法は1~3が片面穿孔、4は両面穿孔をしている。37-5~7は管玉である。37-5は滑石製、37-6は緑色凝灰岩製である。37-7は碧玉製で最大高46mm、最大径10mmを測り、両面穿孔している。碧玉製の玉類には筋状や波状の文様がみられ、産地は花仙山産と考えられる。37-8は滑石製の霰玉で、最大厚12mm、最大径6.2mmを測る。穿孔法は両面穿孔である。37-9~20は滑石製の白玉や小玉で、いずれも暗灰色を呈している。白玉は外面に稜があるものと無いものがみられる。37-21は主体部から出土した鉄製品で、刀子の刃身部と思われる。

出土した勾玉は丸くて大きく、管玉は太くて長い。また、白玉や小玉には滑石を使用している。このように玉類の様相をみると明らかに3号墳と異なり、6号墳出土の玉類は古墳時代前期末の様相を呈している⁽³⁾。また、土師器片は破片であり、明確な判断はできないが、本古墳群内の他の古墳の土師器片に比べると器壁が薄く、古い様相を呈していると思われ、出土遺物からみても本古墳群のなかで最初に築造された古墳と考えられる。

第9節 その他の遺構

第1項 SK01(第38図)

墳丘の南東側で小型の土坑を検出している。この土坑は6号墳南東側周溝底面から検出され、古墳と同時期または古いと考えられる。規模は南北0.8m、東西1.4m、深さ0.12mを測る。土坑内から遺物が出土していないため時期は不明である。

第2項 ST01(第39図)

規模・形態

ST01は、調査区北側の緩斜面で検出した墓墳である。墓墳は地山面で検出され、平面は南北に長い長方形を呈している。墓墳の長辺は緩斜面に平行し、規模は長辺2.2m、短辺70cm、深さは北側で40cm、南側で10cmを測り、斜面下方の南側は削平されている。主軸方位は $N-40^{\circ}-W$ である。

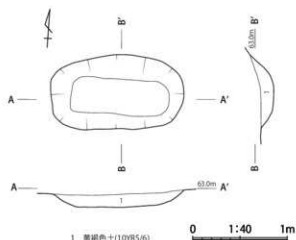
遺物出土状況

遺物は主に墓墳南端の底面よりやや浮いたところから出土している。須恵器の蓋や環、自然石が墓墳底に対して斜めや垂直の状態出土しており落ち込んだような状況である。墓墳内の埋土は黒色系の土層である。土層断面から棺痕跡が確認されなかったことや遺物の出土状況から、墓墳上に蓋板のみを置きその上に置かれていた須恵器や石が一度に墓墳内に落ち込んだものと思われる。

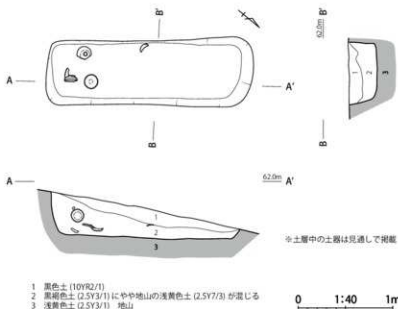
ST01出土遺物(第40図)

40-1～3は須恵器である。

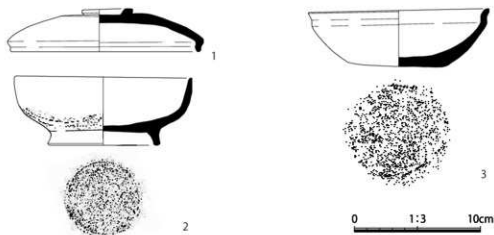
40-1は輪状つまみの蓋で、口径14.9cm、器高3.4cmを測る。調整は外面に回転ヘラケズリと回転ナデ、内面にヨコナデを施している。40-2は口径14.2cm、底径8.6cmを測る高台付環である。体部は丸みを持ち、高台は直立する。底部の切り離しは回転糸切



第38図 SK01実測図



第39図 ST01実測図



第40図 ST01 出土遺物実測図

りでその後ナデている。調整は外面に回転ナデ、内面に回転ナデと静止ナデを施し、外面に弧状のヘラ描きが認められる。40-3は無高台の杯で、口径14.2cm、底径8.0cmを測る。底径の割に口径が大きく、口縁端部は短く屈曲している。底部の切り離しは回転糸切りで、外面に回転ナデ、内面に回転ナデと静止ナデをしている。これらの土器は国府第2型式、7世紀末～8世紀第1四半期に相当し、ST01は当該期の遺構と考えられる。

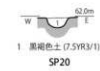
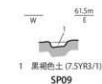
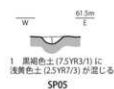
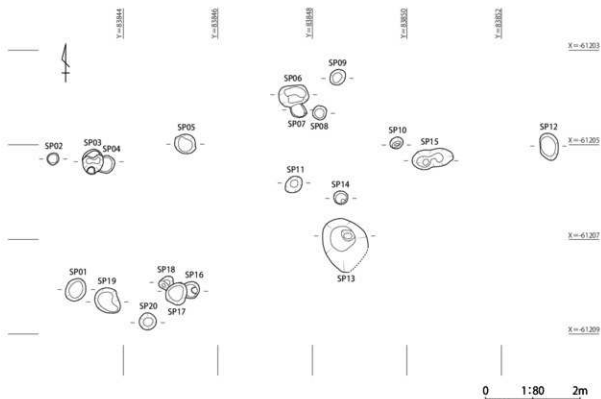
第3項 ビット(第41図)

調査区北西側で20個のビットが検出された。規模は直径21～68cm、深さ3～45cmを測る。ビットの埋土は黒褐色土や黒褐色土に淡黄色土が混じる土層で、柱痕はみられなかった。大きさや深さに規則性はなく、建物は復元されなかった。遺物は出土していない。

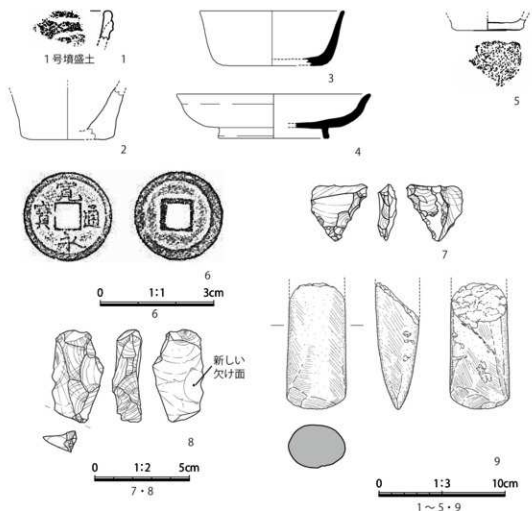
古墳の斜面からビットが検出された調査例としては、松江市鹿島町に所在する奥才古墳群の7号墳がある。古墳の南側斜面で竅穴住居状遺構が検出され、この遺構については遺物がないため、時期については不明であるが、古墳群での埋葬に関わる儀式を行った場である可能性が考慮されていることから、本遺跡のビットについても同様な性格が考えられる。

第4項 遺構外出土遺物(第42図)

第42図は表土や盛土から出土した遺物である。42-1は1号墳盛土から、それ以外は表土から出土している。42-1は縄文土器である。外面に磨消縄文が施され、縄文時代後期の土器と思われる。42-2は壺・甕類の底部で平底で、弥生土器と思われる。42-3・4は須恵器である。42-3は口径11.3cm、底径8.0cmを測る無高台の杯である。底部から口縁にかけて直線的で、底部外面に回転糸切り痕がみられる。42-4は高台付の皿である。口径15.4cm、底径8.6cmを測り、底部外面に回転糸切り痕が確認される。42-3・4の時期は、国府第2型式8世紀第3四半期～第4四半期に相当する。42-5は土師器の底部で、外面に回転糸切り痕が認められる。底径は5.6cmと小さく、中世土器の可能性もある。42-6は寛永通寶、42-7～9は石製品である。42-7・8は黒曜石の剥片で、7は二次加工の痕跡がみられる。42-9は磨製石斧である。蛤刃石斧で基部は欠損している。刃部に使用痕が認められる。



第41図 ビット実測図



第42図 遺構外出土遺物実測図

第10節 小結

植岡古墳群は松江市東津田町と山代町に所在する丘陵尾根に位置する古墳群である。小規模な方墳2基と円墳4基からなり、6基の古墳は古墳時代前期末から中期前半に造営されたと考えられる。以下、本節では調査に基づき、古墳群の様相についてまとめてみたい。

第1項 古墳の様相(表3)

今回の調査で確認した6基の古墳は、比較的狭い丘陵尾根上にそれぞれが近接するような形で検出された。東西尾根上に縦列する形で3基の古墳が並び、その北側に3基の古墳が存在する。古墳の径、長辺はいずれも約7～15mの小型の古墳で、墳頂部標高は63～64mを測る。

墳丘の築造については本文中でも述べたが、1～5号墳では、墳丘はまず墳頂部の旧表土を残して墳裾に周溝を掘削している。その後、旧表土上に盛土を施して墳丘を完成させている。主体部は盛土から掘られ地山まで達している。6号墳では盛土や旧表土は確認されなかったが、主体部の深さからすると他の古墳と同様に盛土を施して墳丘を築成していた可能性は高いと考えられる。

第2項 各古墳の新旧関係と被葬者(表2・3)

各古墳の新旧関係は、周溝の検出状況や周溝土層断面の切り合い関係から築造順を知ることができた。ここで古墳築造順を整理すると、1号墳より2・3・4号墳が先行する。また、3号墳は2号墳に、4・6号墳は3号墳に、4号墳は5号墳に、6号墳は4・5号墳に先行すると考えられる。この古墳間の新旧関係を表2に示している。

この新旧関係から、本古墳群の造墓は6号墳から始まっている。6号墳は方墳であり、埋葬主体部は本古墳群で唯一削り抜き木棺を採用している。次に、北側に方墳の4号墳を築き、その後3号墳を造っており、方墳の系譜を引く形で円墳が造られている。これは古墳時代前期末から中期初頭における古墳の動向と同じ様相を呈しているようである。

3号墳は本古墳群中の最高所に築かれた円墳で、径は10.5mを測り、規模では1号墳に劣るが、墳頂部からは『出雲国風土記』に「神名樋野」と称されている茶臼山が南側正面に眺望できる良好な場所に位置している。3号墳の規模や出土遺物、埋葬施設が本古墳群内のほかの古墳と比べて格差があるとは考えられないが、位置的な状況からすると本古墳群の盟主墳は3号墳と考えられる。ただし、古墳の規模や出土遺物からすると在地の有力家長クラスの被葬者の墓と推察される。

第3項 主体部

埋葬施設は、各古墳から主体部1基を検出している。2～5号墳は箱式木棺、6号墳は削り抜き木棺である。

1号墳の主体部は墳丘の削平や根の攪乱により底面の一部のみが残存している状況で埋葬施設は不明である。2～4号墳は、素掘りの墓壇に箱式木棺を埋葬施設とする主体部である。そのうち3号墳は長辺2.5m、短辺40cmの箱式木棺で、主体部北東側の棺外から勾玉や管玉が多く出土しており、これらの玉類は埋葬後に

表2 樋岡古墳群の古墳間新旧関係

※ 矢印は切り合い関係を示す

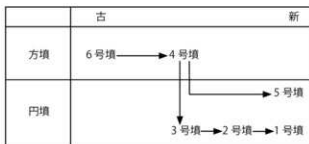


表3 樋岡古墳群古墳一覧

名称	墳丘 形状	墳丘 規模 (m)	主体部					構造	出土遺物			備考
			南北×東西	長辺	短辺	高さ	主軸	地内法 (m)	主体部	周溝	その他	
1号墳	63.3	円	14.1 × 15.0	3.64	2.05	0.25	N-73°-W	—	土師器：甕・甕・高坪 勾玉・管玉	土師器：甕・甕	縄文土器片	
2号墳	63.4	円	8.0 × 8.5	3.40	1.50	0.64	N-55°-W	2.60	箱式木棺	土師器：甕 石製品	—	
3号墳	64.0	円	10.5 × 10.8	3.60	1.45	0.87	N-88°-W	2.53	箱式木棺	勾玉・管玉・小玉	土師器：甕・甕	—
4号墳	63.4	方	6.9 × 7.1	3.10	1.78	0.58	N-87°-W	2.30	箱式木棺	土師器：甕 刀子	—	—
5号墳	63.0	円	8.1 × 8.5	3.95	2.10	1.02	N-64°-W	3.20	箱式木棺	鉄器	—	菅原氏の 墓部
6号墳	63.4	方	6.9 × 9.9	3.60	1.40	0.46	N-88°-W	2.80	削り抜き木棺	土師器片 刀子 勾玉・管玉・白玉	—	—

棺外に置かれたものと判断している。同じように棺外から玉類が出土している古墳には、松江市乃木福富町に所在する二名留古墳群の2号墳がある。二名留2号墳は古墳時代中期後葉の小型の方墳である。埋葬施設は箱式石棺で、主体部の埋め戻しの段階で子持勾玉と538個の白玉を使った祭祀をしている。植岡3号墳の時期は、出土遺物から古墳時代前期末から中期前半と考えられることから、二名留2号墳より時期はやや古いと埋葬後に祭祀を行っている点は類似している。また、二名留2号墳の礎床の上には白砂が敷かれていたことが確認されており、植岡3号墳においても棺底の一部に灰白色細砂層が認められ、埋葬に共通点があるという点で注目される。

5号墳は2段掘りの墓壇である。墓壇の長辺側にテラス部分が付加されており、深さ及び平面形が当古墳群のなかで最大の規模をもつ。墓壇の規模は、長辺約4m、短辺2m、深さ1mを測り、埋葬施設は箱式木棺である。木棺は長辺3.2m、幅50cm、深さ約70cm以上あったと考えられ、深い墓壇に細長い木棺をおさめていることから、二段掘りは作業面確保のために施された可能性がある。

6号墳は当古墳群のなかで唯一削り抜き木棺を埋葬施設とする。当古墳群は6号墳から造墓が始まり、次に築造された4号墳から箱式木棺が採用され、6号墳以外は共通している。埋葬施設(主体部)に変化はみられるが頭位方向をみると概ね東側頭位を示すという点で共通している。このことから、本古墳群内で被葬者の頭位に意図があったことが窺われる。

第4項 出土遺物

古墳に伴う出土遺物は、土師器の壺・甕類、鉄製品、玉類が出土している。土師器の壺・甕は古墳時代前期末から中期前半、須恵器出現以前の所産であると考えられる。1号墳周溝埋土のにぶい黄褐色土上面から出土した土器は、古墳時代前期末から中期初頭頃のものが多いが中期前半のものも含まれ、黒色土から出土した土器についても同じような状況がみて取れる。3号墳周溝の土器は前期末から中期初頭、2号墳主体部出土土器は中期初頭である。4号墳主体部検出面出土の土器は、中期前半の範疇におさまるものであるが、そのなかの1点(第30図・3)は大東式に比定され新しいと思われる。この1点の遺物の時期だけをもって新旧関係をみると、前述した新旧関係とは異なることとなり矛盾が生じてしまう。この土器をどう捉えるかは今後検討すべき点ではあるが、土器型式だけで古墳の新旧は計れないように思われる。

鉄製品は4・5・6号墳から出土している。4号墳の刀子は古墳時代中期前半頃のものである。5号墳からは短茎三角式の鉄鏃が出土している。先に述べたように毘売塚古墳出土の鉄鏃と類似していることからTK216以前と捉えておきたい。

玉類は、1・3・6号墳で出土している。玉類についてここで再度述べると、1号墳からは瑠璃製の勾玉や碧玉製の管玉が出土している。管玉は完形のもので最大高30mm、最大径5mmを測り、細身で両面穿孔をしている。勾玉は小さいものである。

3号墳からは瑠璃製の勾玉や碧玉製の管玉、ガラス製の小玉が出土している。勾玉は小さく、管玉は最大高26～31mm、最大厚5mmを測り、1号墳と同様に細身で両面穿孔をしている。このような様相から、3号墳の玉類は古墳時代中期の様相を呈しており、1号墳の玉類についても同時期と考えら

れる。古墳時代中期の玉作り工房跡には、松江市乃木福富町に所在する大角山遺跡や東出雲町に所在する勝負遺跡と四ツ廻Ⅱ遺跡がある。このなかで大角山遺跡では古墳時代中期前葉とみられる玉作り工房跡が5棟検出されている。瑪瑙の勾玉や碧玉の管玉が作られており、また、出土した土師器をみると本遺跡と同時期と考えられることは注意される。

6号墳では勾玉・管玉・櫛玉・小玉・白玉が出土している。勾玉は碧玉・瑪瑙・滑石で作られ、碧玉製と瑪瑙製の勾玉は最大高42～44mmを測り、片面穿孔をしている。管玉は碧玉・滑石・緑色凝灰岩を使用している。碧玉製のものは最大高46mmを測り、両面穿孔を施している。白玉や小玉は滑石と思われる。碧玉製の勾玉は古時代前期後半からみられるもので、滑石は古墳時代前期末頃から玉石材として使用されるようになる。また、玉類が多彩であることや穿孔方法を考慮すると6号墳の玉類の時期は古墳時代前期末頃と考えられる。

玉類の様相から、1・3号墳は古墳時代中期前半、6号墳は古墳時代前期末と考えられ、玉類からも古墳の新旧が看取される。

他にST01や表土から古代の須恵器が出土している。ST01は8世紀前半頃の墓壇で、当該期に埋葬が行われている。

第5項 樋岡古墳群の年代観

ここでは樋岡古墳群の墳丘や主体部、出土遺物の検討から古墳の時期を検討してみたい。ただし、前述したように土層断面と遺物の新旧では異なるところがあり、今後の課題があることを前提として変遷を述べてみたい。

本古墳群は古墳時代前期末に6号墳から造墓が始まる。次いで4号墳が造られ、その後本古墳群の盟主墳である3号墳が造られている。3号墳周溝からは古墳時代前期末から中期前半の土器が出土しており、主体部から出土した玉類が古墳時代中期の様相を示していることから古墳時代中期前半頃の埋葬が想定される。3号墳に続いて2号墳、1号墳が造られている。いずれも出土遺物からすると古墳時代中期前半頃である。5号墳の鉄鏝についても須恵器出現前のTK216以前と考えられることから、本古墳群は古墳時代前期末から中期前半の須恵器出現以前に築造された古墳群と考えられる。

樋岡古墳群と同じように古墳が隣接する在り方をする類例に安来市門生町に所在する五反田古墳群

表4 樋岡古墳群玉類集計表

	出土位置	勾玉	管玉	小玉	白玉	櫛玉	不明	総個数
1号墳	墓壇内・墓壇外	瑪瑙 1	碧玉 3	—	—	—	—	4
3号墳	墓壇内（棺外）	瑪瑙 2	碧玉 4	ガラス 122 （金具81・透眼41）	—	—	—	126
6号墳	棺内	瑪瑙 1 碧玉 1 滑石 2	碧玉 1 滑石 1 緑色凝灰岩 2	滑石 23	滑石 10	滑石 1	1	42
合計		7	10	145	10	1	1	174

が挙げられる。古墳時代前期後半から中期初頭に築造され、方墳2基、円墳5基からなる。5号墳(方墳)から造墓が始まり、次に盟主墳である1号墳(円墳)を築造して順次隣接するように従属墳が造られている。1号墳は径が約25mを測る中規模古墳である。埋葬主体は竪穴式石槨・木槨・箱式石槨の3種が確認され、遺物は埴輪・重圏文鏡・鉄器・玉類が出土している。樋岡古墳群とは墳丘の規模や主体部、出土遺物において階層差が認められ、時期的にはやや先行すると思われる。ただ狭い範囲に隣接するように古墳を造ることや方墳から造墓が始まり盟主墳は円墳であることなど類似点が窺われる遺跡である。

第6項 結語

以上、今回の調査により大橋川南岸における古墳時代前期末から中期前半の古墳群の様相を知ることができた。大橋川南岸では古墳時代前期後半から中期前半にかけて、大型古墳では全長57mの前方後円墳の廻田1号墳や全長67mの前方後円墳である上竹矢7号墳が築造され、出雲東部の広域首長墓域が安来市の能義地区から意宇中枢に移動した時期である。本古墳群の被葬者は、古墳の規模や出土遺物から地域の有力家長クラスの被葬者であると考えられ、廻田1号墳や上竹矢7号墳の大型古墳の被葬者に従属する下位下層の墓と推測される。

今回の調査で得られた遺構や遺物は有意義であり、今後の調査事例の積み重ねにより、当地の古墳時代の様相がより具体的に解明されることを期待したい。

註

- (1) 仁木聡 2015 『第2章 出雲の豪族とその序列—古墳副葬の鉄製武器について—』『前方後円墳と東西出雲の成立に関する研究 鳥根県古代文化センター研究論集第14集』 この論考のなかで、埴輪塚古墳例の短茎式鉄鐙は共伴遺物から、TK216型式以前(中期中葉)に相当するものと考えられるとしている。
- (2) 鳥根県教育庁 埋蔵文化財調査センター深田浩氏のご教示による。
- (3) 鳥根県教育庁 埋蔵文化財調査センター深田浩氏に6号墳から出土した玉類は古墳時代前期末の様相を呈しているとのこと教示を頂いた。

参考文献

- 鳥根県能島町教育委員会 1985『奥才古墳群』
 鳥根県教育委員会・建設省松江国道工事事務所 1998『五反田古墳群』『門生黒谷1遺跡 門生黒谷2遺跡 門生黒谷3遺跡(門生山根1号釜・門生黒谷1号壺・五反田古墳群)』
 仁木聡 2015『出雲の豪族とその序列—古墳副葬の鉄製武器について—』『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究 鳥根県古代文化センター研究論集第14集』
 松江市教育委員会 1992『2名留古墳群発掘調査報告書』
 古代歴史文化協議会 2018『玉—古代を彩る至宝—』

第11節 樋岡3号墳出土ガラス小玉の分析

田村 朋美 (奈良文化財研究所)

1. はじめに

樋岡3号墳出土のガラス小玉について、製作技法を推定し、化学組成から基礎ガラスの種類および着色材の特徴を把握することを目的として自然科学的調査を実施した。以下、その結果について報告する。

2. 資料と方法

調査対象とした資料は、鳥根県松江市に所在する樋岡3号墳から出土したガラス小玉102点である。保存状態は比較的良好であり、一部にはガラス光沢も認められる。

これらのガラス小玉について、製作技法を推定するため、ガラス小玉に含まれる気泡の並びや形状、ガラス小玉表面および孔壁面の状態や孔の形状などに着目して、落射光および透過光下での肉眼および実体顕微鏡観察をおこなった。顕微鏡観察に使用した機材はライカ製MZ16で、必要に応じて付属のデジタルカメラ(Nikon DXM1200F)で撮影した(第43図)。

次に、ガラス小玉の主要な構成成分とその含有量を知るために蛍光X線分析を実施した。蛍光X線分析にあたっては、顕微鏡下で風化の影響ができるだけ少ない場所を測定箇所を選定し、超音波およびエチルアルコールを用いて洗浄したうえで実施した。測定結果は、測定試料と近似する濃度既知のガラス標準試料を用いて補正した理論補正法(Fundamental Parameter Method: FP法)により、検出した元素の酸化物の合計が100%になるように規格化した。測定に用いた装置は、エネルギー分散型蛍光X線分析装置(エダックス社製EAGLE III)である。励起用X線源はロジウム(Rh)管球、管電圧は20kV、管電流は200 μ A、X線照射径は50 μ m、計数時間は300秒とし、真空中で測定した。なお、一部の資料については、20keV以上のスペクトルを検出するため、管電圧を50kVに設定して定性分析を実施した。

3. 結果と考察

3-1 製作技法

顕微鏡観察の結果、引き伸ばし法、鋳型法、加熱貫入法(大賀2002)の3種類の製作技法が認められた。このうち、最も多いのが引き伸ばし法によるもので、96点が相当する。引き伸ばし法は、軟化したガラスを引き伸ばして製作したガラス管を分割して小玉を得る方法で、孔内が比較的平滑で孔と平行方向に並ぶ気泡列や気泡筋が認められるのが特徴である。

一方、鋳型法によって製作されたと推定される小玉は4点であった(No.35、37、41、42)。鋳型法は、孔周辺に凹凸が多く、色むらや大小の気泡が散在する特徴から、微細なガラス片を鋳型に詰めて加熱することによって小玉を製作したと推定される。さらに、加熱貫入法で製作されたと考えられるガラス小玉は2点(No.3およびNo.13)確認された。加熱貫入法で製作されたガラス小玉は、扁平で孔径が両端面でわずかに異なるという特徴を持つ。ガラス片を加熱軟化させた状態で芯棒を貫通さ



第 43 図 植岡 3 号墳出土ガラス小玉の顕微鏡写真 (倍率不同)

せて孔を作出する方法で製作されたと考えられる。

3-2 蛍光 X 線分析結果

蛍光 X 線分析の結果を表 5・6 に示す。蛍光 X 線分析の結果、44 点がカリガラスグループ、54 点がソーダガラスグループに属するガラスであることがわかった。以下、グループごとに詳細に検討する。なお、鋳型法で製作されたガラス小玉 4 点は異なる材質グループのガラスが混合されている可能性があるため、別途検討する。

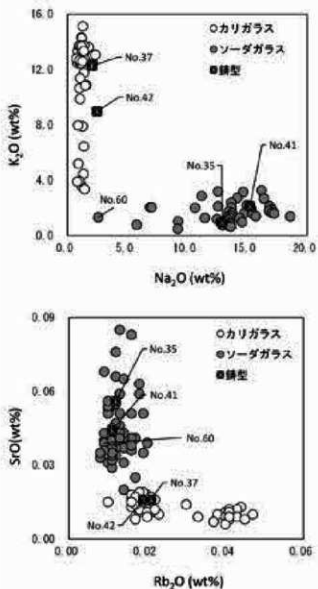
(1) カリガラスグループ

102 点のガラス小玉のうち 44 点が、 K_2O 含有量が多く、融剤としてカリウムを利用したカリガラスであった (第 44 図)。これらの中には風化の影響で K_2O 含有量が 10% よりも少ない値を示すものもあるが、風化の影響を受けにくいとされる重元素成分のルビジウム (Rb_2O) およびストロンチウム (SrO) の含有量が他の個体と共通することから、カリガラスであると判断した (第 45 図)。

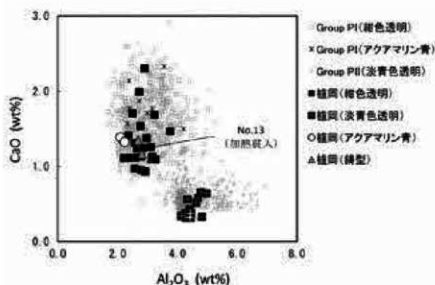
これらのカリガラス小玉には、紺色透明のものが 25 点、淡青色透明のものが 17 点、アクアマリン青色のものが 2 点含まれている。

このうち、紺色透明のものは CoO を $0.05 \pm 0.02\%$ 含有しており、コバルトイオンが主要な着色成分である。コバルト原料の特徴として、不純物と考えられる MnO を $1.39 \pm 0.37\%$ 含有し、 CuO および PbO の含有量がきわめて少ない (0.1% 未満)。 MnO と CoO との間には相関が認められる (第 47 図)。すなわち、 MnO はコバルト原料の不純物と考えられる。なお、紺色透明のカリガラス小玉には加熱貫入法で製作されたガラス小玉 1 点が含まれるが、化学組成の特徴は引き伸ばし法によるものと有意な差異は認められず、同種のガラス素材から製作されていると考えられる。

一方、淡青色透明のカリガラス小玉は、いずれも CuO の含有量が多く ($1.1 \pm 0.2\%$)、銅イオンが主要な着色要因である。いずれも微量の鉛 (PbO) と錫 (SnO_2) を含有しており、着色剤として青銅が利用された可能性が示唆される。アクアマリン青色のカリガラス小玉は鉄を $0.53\text{--}0.55\%$ 含有する



第 44 図 カリガラスとソーダガラスの判別
(上: K_2O vs. Na_2O 、下: SrO vs. Rb_2O)

第 45 図 カリガラスの細分 (CaO vs. Al_2O_3)

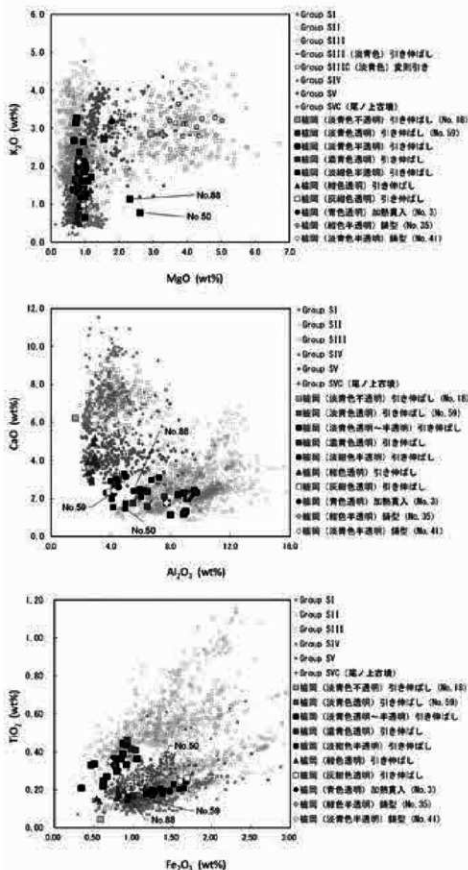
以外は着色に関与する成分に乏しい。少量の MnO (0.13%) を含む点は注目されるものの、基本的に鉄イオンによる発色であると考えられる。

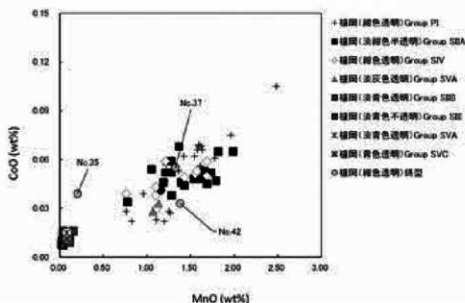
既往研究 (Oga and Tamura 2013) において、日本列島で出土するカリガラスは、 CaO と Al_2O_3 の含有量から二種類 (Group PI および Group PII) に大別され、Group PI はコバルト着色の紺色カリガラス小玉に、Group PII は銅着色の淡青色カリガラス小玉に対応することが明らかとなっている。植岡 3 号墳出土の紺色ガラス小玉は典型的な Group PI に、淡青色カリガラス小玉は Group PII に相当するものである。一方、アクアマリン青色のカリガラス小玉 2 点は Group PI に属するものであった。なお、アクアマリン青色のカリガラスについては、類例は多くはないものの、これまで日本列島で出土している同色のガラス小玉はいずれも Group PI に属するものであり (大賀・田村 2015)、同様の結果が得られたといえる。

(2) ソーダガラスグループ

102 点のガラス小玉のうち 54 点が、 Na_2O 含有量が多く、融剤としてナトリウムを利用したソーダガラスであった (第 44 図)。カリガラスと同様に、これらの中には風化の影響で Na_2O 含有量が少ない値を示すものもあるが、 Rb_2O および SrO の含有量が他の個体と共通することから、ソーダガラスと判断される (第 45 図)。これらのソーダガラスについては、既存の 5 グループ (Group SI ~ SV) への帰属を検討した (第 46 図)。その結果、高アルミナタイプ (Group SII)、植物灰タイプ (Group SIII)、ナトロン主体タイプ (Group SIV)、プロト高アルミナタイプ (Group SV) に帰属するソーダガラスが含まれていることがわかった。

高アルミナタイプのソーダガラス (Group SII) は MgO - K_2O のグラフ上で MgO が少なく K_2O が多く、かつ、 CaO - Al_2O_3 のグラフ上で比較的 Al_2O_3 の多い ($\geq 5\%$) 特徴を有する (第 46 図上)。また、Group SII は、着色剤や流通時期から Group SIIA と Group SIIIB に分けられる。Group SIIA はすべて引き伸ばし法で製作され、1 ~ 2% の MnO をともなうコバルト原料で着色され灰色を帯びた淡紺色

第46図 ソーダガラスの細分 (上: K_2O vs. MgO 、中: CaO vs. Al_2O_3 、下: TiO_2 vs. Fe_2O_3)



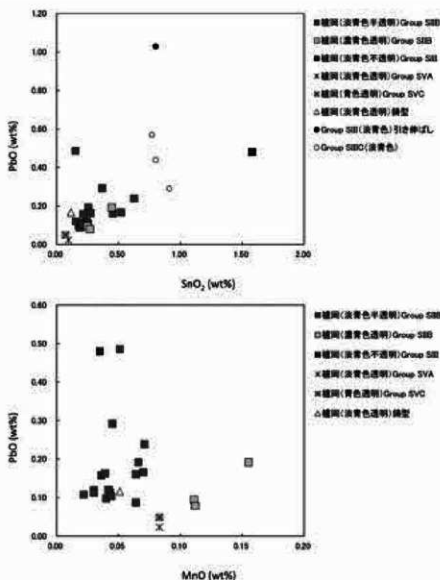
第47図 着色剤の特徴1 (CoO vs. MnO)

を呈する。酸化チタン (TiO_2) の含有量が Group SII の中では比較的少ない。植岡3号墳では、引き伸ばし法で製作された淡紅色のガラス小玉20点が Group SIIA に、淡青色半透明のガラス小玉17点および濃青色透明のガラス小玉3点が Group SII B に相当することが分かった(第46図下)。ただし、Group SIIA のうち、No.50 と No.88 については MgO が多く(2.3-2.6%)、やや特殊な組成を示す(第46図上)。 MgO が多い以外の特徴は他の Group SIIA と共通しており、現状では同種のガラス小玉として理解しておく。なお、Group SIIA としての個体のうち、一部については $\text{CaO-Al}_2\text{O}_3$ の分布図(第46図中)上でむしろ Group SV の集中する領域にプロットされる。Group SIIA と Group SVA については、化学組成から明確に区別できないものも多く、色調や製作技法も共通しているため、今後グループの統合を含めて再検討する可能性もある。

着色剤に関しては、Group SII B の小玉は、すべて CuO を $0.77 \pm 0.21\%$ 含有しており、銅イオンが主要な着色要因であると言える。さらに、微量の鉛と錫が検出されたことから、着色剤としての銅原料に青銅が用いられたことが示唆される(第48図上)。色調として淡青色と濃青色が区別されるが、後者は前者に比べてやや MnO の含有量がわずかに多い傾向が認められる(第48図下)。マンガンがやや暗めの色調に関与している可能性が高いと推察される。鉛と錫の量については淡青色のものと有意な差異は認められなかった。マンガンの由来は明らかでない。

Group SIIA については、 CoO を $0.05 \pm 0.01\%$ 含有することからコバルト着色である。さらに、 MnO を $1.42 \pm 0.30\%$ 伴うのが特徴で、上述の紺色の Group PI と同様に MnO と CoO との間には相関が認められる(第47図)。すなわち、これらのガラス小玉には、着色剤として Group PI と同種のコバルト原料が利用されている。

植物灰タイプのソーダガラス(Group SIII)は、 $\text{MgO-K}_2\text{O}$ のグラフ上で MgO と K_2O がともに1.5%よりも多く、かつ、 $\text{CaO-Al}_2\text{O}_3$ の分布図(第46図中)上で Al_2O_3 が少なく($< 5\%$)、 CaO が多い($> 5\%$)

第48図 着色剤の特徴2 (上: PbO vs. SnO₂、下: PbO vs. MnO)

特徴を有する。植岡3号墳では1点(No.18)のみ該当した。着色剤はCuOを0.90%含有することから銅イオンが主な着色要因である。鉛と錫が含まれるのが特徴であるが、上述のGroup SIIIと比較すると特に錫の含有量が極めて多く、不透明な色調と関連する可能性も考えられる。植物灰タイプのソーダガラスは、日本列島で流通した植物灰ガラス(Group SIII)は、流通時期や製作技法などの違いによって、Group SIII A～Cに分かれるが、通有の引き伸ばし法による淡青色不透明の植物灰ガラスは極めてまれで、上述のGroup SIII A～Cのいずれにも該当しない。通有の引き伸ばし法による植物灰ガラス製のガラス小玉はほぼ紺色透明に限られており、銅着色の淡青色ものは筆者らが確認しているのは本例以外では2点のみである。淡青色の植物灰ガラスは、古墳時代後期末に出現する変則的な引き伸ばし法によるガラス小玉(Group SIIIC)にも少数ながら出現する。これらの淡青色の植物灰ガラスと比較すると、本資料はややMgOが少ない。PbOやSnO₂を多く含む点など、着色または不透明感に関与すると考えられる成分については類似する。

ナトロン主体タイプのソーダガラス (Group SIV) は、MgO および K₂O の含有量が比較的少ないタイプのソーダガラスで、ナトロンガラス (Group SI) と類似するが、典型的な Group SI と比較すると CaO 含有量が少ない。さらに、コバルト原料の選択も典型的な Group SI とは異なり、MnO 含有が多く、CuO および PbO の含有量が極めて少ないタイプのコバルト原料が用いられていることも特徴である。すなわち、上述の Group PI および Group SIIA と同種のコバルト原料が用いられている (第 47 図)。今回調査した資料には 10 点含まれていた。

プロト高アルミナタイプのソーダガラス (Group SV) は、化学組成の変異が大きく、一部の Group SIII や Group SIV と化学組成だけでは区別が困難だが、製作技法、着色剤の選択、流通時期などとの対応関係から独立した一群と考えている。Group SV は製作技法との関係から、引き伸ばし法による Group SVA、連珠法による Group SVB、加熱貫入法による Group SVC に細分される。樋岡 3 号墳出土品には、引き伸ばし法による Group SVA が 3 点、加熱貫入法による Group SVC が 1 点 (No.3) 含まれる。Group SVA にはくすんだ灰紺色を呈するものが 2 点 (No.63、No.69) と淡青色透明のものが 1 点 (No.59) 存在する。灰紺色の個体に関しては、紺色の色調は希薄であるものの、CoO を 0.03% 前後、MnO を 1% 以上含有する特徴は、コバルト着色の Group PI や Group SIIA、Group SIV のガラス小玉と共通することから (第 47 図)、着色剤としてこれらと同種の原料が用いられていると考えられる。銅着色の Group SVA は、筆者らの分析ではこれまでに事例がない。着色剤は CuO を 0.91% 含有することから、銅イオンが主な着色要因である。ただし、同色の Group SIIB などと比較すると PbO および SnO₂ の含有量が少なく、異なる特徴を示す (第 48 図上)。一方で後述の Group SVC とは共通の特徴を持つ。

加熱貫入法で製作された青色透明の No.3 は、第 46 図でプロト高アルミナタイプのソーダガラス (Group SV) の集中域にプロットされる。製作技法と併せて典型的な Group SVC である。類例として、筆者らが分析調査をおこなった広島県尾ノ上古墳出土例 (21 点) (未発表) と比較しても類似の組成を有することが分かった。着色剤は銅 (CuO : 1.45%) で、鉛や錫などの不純物成分は少ない点で上述の Group SVA と共通する (第 48 図)。なお、このような着色剤の特徴は類例の尾ノ上古墳例とも共通する。

(3) 鋳型法によるガラス小玉

鋳型法によるガラス小玉は異なる素材のガラスが混合されている可能性があるため、材質分類は行わないが、4 点のうち、2 点 (No.37、42) がカリガラスを主要な素材として再生され、残り 2 点 (No.35、41) はソーダガラスを主要な素材として再生されている可能性が高い (第 44 図)。それぞれ素材となったガラスについて検討を加えておく。まずカリガラスを主要な素材として再生されていると推定される No.37 と No.42 はいずれも Group PI の材質的特徴と共通しており、Group PI を主要な素材として再生されたと推定される。ただし、No.37 はやや紫色味の強い色調を呈することから、No.37 の素材となったガラス小玉は、Group PI のなかでも、とくに弥生時代後期後葉および古墳時代中期前半に流通する、紫紺色で直径が 2mm 前後という非常に小型の引き伸ばし法によるガラス小玉である可能性が高い。

ソーダガラスを主要な素材として再生された可能性の高い2点のうち、紺色透明を呈するNo.35は、第46図でナトロンガラス (Group SI) と類似の組成を示す。Group SI製の小玉は樋岡3号墳出土品には含まれていない。コバルト原料についても樋岡3号墳出土の他のコバルト着色のガラス小玉がすべてMnOを多く含む (> 0.7%) のに対し、No.35の測定箇所では0.21%と明らかに少ない。Group SI製の小玉は弥生時代後期後葉と古墳時代中期前半に流通しているが (Oga and Tamura 2013)、前者はアンチモン (Sb₂O₃) を多く含むため (Group SIA)、本資料の素材ではない。後者のナトロンガラス (Group SIB) 製の小玉が素材になった可能性があるが、Group SIB製の小玉自身の出土数が相対的に非常に少ないため、今後このようなGroup SIBを素材として鋳型で再生された小玉の類例がどれほどあるのか、注意深く探索する必要がある。なお、Group SIBのナトロンガラスについてはMnOが少ないものが多いが、一部にMnOが多いものも存在する。また、ナトロンガラスと主成分が類似するものにナトロン主体ガラス (Group SIV) がある。樋岡3号墳のNo.35は、MnOの少ないナトロンガラスとしては、ややMnOが多い傾向が認められるため、MnOの少ないGroup SIBに異なる素材のガラス (例えば、MnOの多いGroup SIBやGroup SIV) が混合されている可能性もある。

もう1点のソーダガラスを主要な素材として再生された可能性の高いNo.41については、淡青色半透明を呈する。本資料は、基礎ガラスの化学組成も着色剤の特徴も共伴する同色のGroup SIIBと共通することから、淡青色半透明のGroup SIIBが主要な素材となっている可能性が高い。

4. 結語

樋岡3号墳出土のガラス小玉について自然科学的調査を実施した結果、基礎ガラスおよび着色剤の特徴を明らかにすることができた。樋岡3号墳出土のガラス小玉102点の構成としては、Group PI (27点)、PII (17点)、SIIA (20点)、SIIB (20点)、SIV (10点) が多く、他にGroup SVAが2点、Group SVCおよびGroup SIIIがそれぞれ1点、鋳型法によるガラス小玉が4点という内訳であった。今回の調査で明らかとなったガラス小玉の構成から時期的な検討をおこなうと、概ね古墳時代中期前半の典型的な様相を呈しており、典型的な植物灰タイプのソーダガラス製の小玉 (Group SIIB) が含まれていないことから、古墳時代中期後半 (中Ⅳ期) (大賀 2020) には降らないと言える。

参考文献

- 大賀克彦 2002 「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』、(『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V)。
 大賀克彦 2020 「ガラスの材質分類と時期区分」『いにしへの河をのぼる：古川登さん退職記念献呈考古学文集』。
 Oga, K., Tamura, T. 2013. Ancient Japan and the Indian Ocean Interaction Sphere: Chemical Compositions, Chronologies, Provenances and Trade Routes of Imported Glass Beads in Yayoi-Kofun Period (3rd Century BCE-7th Century CE). *Journal of Indian Ocean Archaeology*, 9.

表5 ガラス玉計測表1

報告書 番号	製作技法	色調	屈折	分析結果				備考1	備考2
				大別	細分	Group	着色材		
1	引き伸ばし	紺色透明	やや濃い	カリ	中アルミナ		Co(Mn)	風化	
2	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	ナトリウム主体	SV	Co(Mn)		
3	加熱貫入	青色透明		ソーダ	プロト高アルミナ	SVC	Cu		
4	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
5	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	ナトリウム主体	SV	Co(Mn)		
6	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	ナトリウム主体	SV	Co(Mn)		
7	引き伸ばし?	紺色透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
8	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	ナトリウム主体	SV	Co(Mn)		
9	引き伸ばし	濃青色透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
10	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ		Cu		
11	引き伸ばし	紺色透明	やや緑味	カリ	中アルミナ		Co(Mn)	風化	
12	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
13	加熱貫入	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
14	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	ナトリウム主体	SV	Co(Mn)		
15	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	ナトリウム主体	SV	Co(Mn)		
16	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
17	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
18	引き伸ばし?	淡青色不透明		ソーダ	植物灰	SH	Cu		
19	引き伸ばし	アクリル青色透明		カリ	中アルミナ		Fe		
20	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
21	引き伸ばし	淡青色透明	やや濃い	カリ	高アルミナ		Cu	風化	
22	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PI	Cu		
23	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
24	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
25	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PI	Cu		
26	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
27	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PI	Cu		
28	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PI	Cu		
29	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
30	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
31	引き伸ばし	紺色透明	緑味 (風化層か)	カリ	中アルミナ		Co(Mn)	風化	
32	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
33	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
34	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
35	鑄型?	紺色半透明							
36	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
37	鑄型?	紫紺色							
38	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PI	Cu		
39	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
40	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
41	鑄型?	淡青色半透明	やや濃い					SHが主な素材? PIが主な素材	風化
42	鑄型	紺色							
43	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PI	Cu		
44	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	ナトリウム主体	SV	Co(Mn)		
45	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
46	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
47	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
48	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
49	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
50	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
51	引き伸ばし	紺色透明	緑味 (風化層か)	ソーダ	ナトリウム主体	SV	Co(Mn)	風化	
52	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
53	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		
54	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
55	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
56	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PI	Cu		
57	引き伸ばし	アクリル青色透明		カリ	中アルミナ		Fe		
58	引き伸ばし	淡青色透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
59	引き伸ばし	淡青色透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
60	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SH	Co(Mn)		

報告書 番号	重量濃度 (%)																			non-std
	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	
1	1.0	0.7	2.8	78.3	0.1	0.1	13.7	1.1	0.11	0.03	0.83	9.90	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.09	0.06
2	13.5	0.8	2.8	75.7	0.1	0.2	0.7	3.5	0.20	0.02	1.56	0.89	0.05	0.03	0.02	0.03	0.02	0.05	0.09	0.05
3	12.6	1.8	4.5	71.0	0.7	0.4	3.2	2.6	0.20	0.02	0.08	1.25	0.01	1.45	0.03	0.05	0.03	0.03	0.09	0.07
4	1.4	0.7	3.0	79.2	0.1	0.1	11.8	1.4	0.12	0.02	1.18	0.88	0.04	0.02	0.01	0.02	0.03	0.02	0.11	0.09
5	9.2	0.9	2.7	81.1	0.1	0.2	0.5	2.9	0.16	0.02	1.11	0.91	0.03	0.02	0.02	0.03	0.02	0.05	0.09	0.07
6	13.6	0.8	2.9	73.9	0.1	0.3	1.3	4.9	0.15	0.02	1.22	0.54	0.06	0.03	0.02	0.03	0.02	0.04	0.09	0.07
7	12.8	1.0	4.2	75.0	0.1	0.2	1.0	2.3	0.21	0.02	1.22	1.65	0.05	0.11	0.02	0.04	0.02	0.03	0.13	0.07
8	13.2	0.9	3.1	74.5	0.1	0.3	1.1	3.8	0.20	0.02	1.69	0.81	0.05	0.03	0.02	0.03	0.02	0.05	0.06	0.06
9	15.0	0.8	7.6	69.4	0.0	0.4	2.2	2.1	0.46	0.02	0.11	0.93	0.01	0.63	0.02	0.10	0.02	0.04	0.17	0.25
10	1.8	0.7	4.4	77.0	0.1	0.3	13.6	0.3	0.12	0.02	0.01	0.39	0.00	1.04	0.02	0.18	0.04	0.03	0.08	0.36
11	1.4	0.7	2.4	78.6	0.1	0.2	12.7	1.4	0.14	0.02	1.08	0.99	0.04	0.04	0.02	0.03	0.03	0.03	0.08	0.15
12	15.5	0.8	9.1	68.6	0.0	0.4	1.6	2.2	0.27	0.02	0.04	0.67	0.01	0.52	0.03	0.10	0.02	0.05	0.09	0.18
13	1.1	0.8	3.1	77.3	0.1	0.1	12.4	1.3	0.23	0.02	1.61	1.62	0.06	0.03	0.02	0.02	0.03	0.03	0.10	0.09
14	13.6	0.8	2.5	75.9	0.1	0.2	0.8	3.9	0.14	0.02	1.10	0.58	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02	0.04	0.08	0.06
15	13.6	0.8	2.8	74.8	0.1	0.3	0.9	4.0	0.17	0.02	1.57	0.82	0.05	0.03	0.02	0.02	0.01	0.05	0.07	0.07
16	1.6	0.9	3.5	75.7	0.1	0.1	10.9	3.6	0.19	0.02	1.13	2.09	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.10	0.07
17	1.3	0.9	3.8	73.7	0.1	0.1	15.1	1.5	0.26	0.02	1.21	1.81	0.05	0.03	0.02	0.03	0.03	0.03	0.10	0.59
18	11.2	2.9	1.6	72.1	0.1	0.7	2.9	6.2	0.05	0.02	0.04	0.58	0.01	0.90	0.02	0.48	0.02	0.05	0.11	1.58
19	0.9	0.9	2.1	85.7	0.1	0.0	8.0	1.4	0.07	0.02	0.13	0.55	0.01	0.02	0.01	0.03	0.03	0.02	0.06	0.07
20	0.8	0.7	2.7	79.8	0.1	0.1	12.8	1.2	0.09	0.02	0.78	0.81	0.03	0.02	0.01	0.02	0.03	0.03	0.09	0.07
21	0.9	0.7	4.5	77.5	0.0	0.4	13.4	0.4	0.12	0.02	0.02	0.43	0.01	1.19	0.02	0.25	0.05	0.03	0.12	0.18
22	2.0	0.9	4.4	77.0	0.0	0.3	12.5	0.4	0.13	0.02	0.02	0.41	0.01	1.48	0.03	0.24	0.04	0.02	0.09	0.24
23	17.1	0.7	9.6	65.2	0.0	0.4	1.7	2.4	0.39	0.01	0.07	0.87	0.01	1.06	0.02	0.19	0.02	0.06	0.17	0.26
24	13.7	0.8	6.2	71.5	0.1	0.4	2.4	2.4	0.17	0.02	1.14	0.82	0.04	0.05	0.02	0.02	0.03	0.06	0.13	0.17
25	1.2	0.8	5.0	86.1	0.1	0.5	3.6	0.6	0.14	0.02	0.02	0.47	0.01	1.12	0.02	0.25	0.04	0.02	0.08	0.25
26	12.5	0.9	3.7	75.8	0.1	0.2	1.2	2.3	0.18	0.02	1.62	1.20	0.05	0.03	0.02	0.03	0.02	0.04	0.10	0.09
27	1.3	0.8	4.8	82.6	0.1	0.3	7.9	0.3	0.12	0.02	0.01	0.41	0.01	1.05	0.02	0.17	0.03	0.03	0.06	0.23
28	1.3	0.9	4.8	85.3	0.1	0.4	4.5	0.7	0.13	0.02	0.02	0.40	0.01	1.04	0.02	0.23	0.04	0.03	0.10	0.27
29	13.7	1.0	6.1	71.4	0.1	0.3	2.0	2.4	0.19	0.02	1.39	1.17	0.05	0.04	0.01	0.04	0.02	0.06	0.08	0.14
30	7.0	0.9	5.0	78.1	0.1	0.4	2.0	3.1	0.17	0.02	1.43	1.20	0.04	0.04	0.01	0.05	0.02	0.06	0.11	0.08
31	1.7	1.0	3.1	77.1	0.1	0.1	12.5	1.1	0.20	0.02	1.29	1.42	0.06	0.03	0.01	0.03	0.03	0.03	0.09	0.09
32	10.7	0.8	5.9	74.1	0.1	0.5	2.0	2.4	0.20	0.02	1.69	1.39	0.05	0.06	0.02	0.04	0.02	0.04	0.09	0.09
33	14.8	0.9	6.0	71.8	0.1	0.3	1.6	2.1	0.17	0.02	0.78	1.25	0.03	0.02	0.01	0.02	0.02	0.04	0.11	0.08
34	13.4	1.2	7.2	69.3	0.2	0.2	1.7	3.1	0.24	0.02	1.37	1.66	0.07	0.03	0.02	0.02	0.02	0.07	0.10	0.08
35	12.9	1.2	2.6	73.2	0.2	0.5	0.9	6.7	0.10	0.01	0.21	0.92	0.04	0.16	0.02	0.11	0.02	0.05	0.08	0.12
36	14.4	1.0	4.0	72.3	0.1	0.3	1.3	2.9	0.19	0.02	1.66	1.47	0.05	0.06	0.02	0.05	0.02	0.04	0.12	0.08
37	2.0	1.0	2.7	77.8	0.1	0.1	12.3	1.3	0.14	0.02	1.38	0.86	0.03	0.02	0.02	0.02	0.03	0.04	0.09	0.14
38	0.8	0.8	4.3	78.6	0.0	0.4	12.5	0.3	0.12	0.02	0.02	0.39	0.01	1.27	0.02	0.29	0.04	0.03	0.08	0.33
39	1.2	0.7	2.6	76.3	0.0	0.1	13.4	1.0	0.18	0.03	2.48	1.56	0.11	0.05	0.02	0.03	0.04	0.03	0.08	0.10
40	1.4	0.8	2.6	78.6	0.1	0.1	12.7	1.3	0.13	0.02	1.25	0.84	0.03	0.02	0.02	0.02	0.02	0.03	0.11	0.07
41	15.2	0.8	7.7	69.8	0.1	0.4	2.1	1.8	0.35	0.01	0.05	0.71	0.01	0.61	0.03	0.12	0.02	0.06	0.11	0.17
42	2.5	0.9	2.8	80.5	0.1	0.2	9.0	1.2	0.14	0.03	1.33	1.06	0.06	0.02	0.02	0.03	0.03	0.03	0.10	0.11
43	1.0	0.8	4.6	86.4	0.1	0.5	3.9	0.5	0.13	0.02	0.02	0.41	0.01	1.09	0.02	0.23	0.04	0.02	0.11	0.17
44	13.4	1.2	2.9	73.1	0.2	0.2	1.4	5.2	0.17	0.02	1.10	0.99	0.04	0.02	0.02	0.02	0.02	0.05	0.08	0.06
45	1.4	1.1	2.7	75.7	0.1	0.1	13.7	2.0	0.16	0.03	1.37	1.40	0.05	0.03	0.01	0.02	0.03	0.03	0.11	0.08
46	1.6	1.0	3.1	76.5	0.1	0.1	12.7	1.1	0.24	0.02	1.60	1.63	0.07	0.03	0.01	0.03	0.03	0.03	0.09	0.09
47	18.6	0.7	9.1	65.4	0.1	0.4	1.4	2.1	0.34	0.01	0.04	0.77	0.01	0.70	0.02	0.16	0.02	0.05	0.11	0.22
48	15.7	1.0	8.9	67.8	0.1	0.3	1.4	2.3	0.36	0.02	0.04	1.05	0.02	0.75	0.02	0.11	0.02	0.06	0.13	0.23
49	1.2	0.9	2.9	76.1	0.1	0.1	13.7	1.2	0.18	0.03	1.78	1.49	0.06	0.03	0.02	0.02	0.02	0.03	0.08	0.10
50	5.8	2.6	4.9	80.3	0.1	0.3	0.8	1.5	0.18	0.03	1.28	1.16	0.06	0.11	0.02	0.16	0.05	0.14	0.54	0.20
51	13.0	0.9	2.9	74.7	0.1	0.2	0.7	4.2	0.21	0.02	1.69	1.15	0.06	0.03	0.02	0.03	0.02	0.04	0.11	0.07
52	16.4	0.7	8.0	69.2	0.0	0.3	2.7	1.1	0.21	0.01	0.02	0.34	0.01	0.72	0.02	0.11	0.02	0.04	0.10	0.25
53	13.6	1.0	4.1	75.6	0.1	0.2	0.7	1.5	0.18	0.02	1.28	1.37	0.05	0.10	0.02	0.03	0.01	0.04	0.10	0.16
54	13.7	0.8	7.8	71.2	0.0	0.6	1.5	1.8	0.25	0.01	0.05	0.62	0.01	1.11	0.02	0.49	0.01	0.05	0.10	0.15
55	1.0	0.9	3.2	77.2	0.1	0.1	12.7	1.1	0.22	0.03	1.58	1.62	0.07	0.03	0.01	0.03	0.02	0.02	0.10	0.08
56	0.9	0.8	4.7	85.3	0.1	0.4	5.2	0.6	0.13	0.02	0.02	0.42	0.01	1.09	0.02	0.22	0.04	0.02	0.10	0.19
57	0.8	1.0	2.2	89.7	0.1	0.1	3.9	1.3	0.08	0.02	0.13	0.53	0.01	0.01	0.01	0.03	0.03	0.03	0.06	0.07
58	13.8	0.8	6.4	72.5	0.1	0.4	1.6	2.4	0.36	0.01	0.06	0.85	0.02	0.48	0.02	0.09	0.02	0.04	0.13	0.19
59	14.2	1.6	4.2	71.8	0.4	0.4	2.7	2.3	0.17	0.02	0.08	1.00	0.02	0.91	0.03	0.02	0.02	0.02	0.10	0.10
60	2.6	0.8	5.0	85.1	0.1	0.6	1.3	1.7	0.15	0.03	1.15	0.93	0.04	0.04	0.02	0.37	0.02	0.04	0.09	0.18

表6 ガラス玉計測表2

報告書 番号	製作技法	色調	細分	分析結果				備考1	備考2
				大別	細分	Group	着色材		
61	引き伸ばし	紺色透明	緑色味	カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
62	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
63	引き伸ばし	灰紺色透明		ソーダ	プロト高アルミナ	SVA	Co(Mn)		
64	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHA	Co(Mn)		
65	引き伸ばし?	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
66	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PII	Cu		
67	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHA	Co(Mn)		
68	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
69	引き伸ばし	灰紺色透明		ソーダ	プロト高アルミナ	SVA	Co(Mn)		風化
70	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PII	Cu		
71	引き伸ばし	淡青色透明	緑味 (風化層か)	ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
72	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		風化
73	引き伸ばし	淡紺色半透明	淡い	ソーダ	高アルミナ	SHA	Co(Mn)		風化
74	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
75	引き伸ばし	淡青色半透明	緑味 (風化層か)	ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
76	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
77	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
78	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
79	引き伸ばし	濃青色透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
80	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHA	Co(Mn)		
81	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
82	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
83	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PII	Cu		
84	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PII	Cu		
85	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PII	Cu		
86	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PII	Cu		
87	引き伸ばし	紺色透明	やや淡い	ソーダ	高アルミナ	SHA	Co(Mn)		
88	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHA	Co(Mn)		
89	引き伸ばし	紺色透明		ソーダ	ナトロン主体	SV	Co(Mn)		
90	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
91	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
92	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		風化
93	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHA	Co(Mn)		
94	引き伸ばし	淡紺色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHA	Co(Mn)		
95	引き伸ばし?	青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
96	引き伸ばし	淡青色半透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
97	引き伸ばし	紺色透明	緑味 (風化層か)	ソーダ	ナトロン主体	SV	Co(Mn)		
98	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PII	Cu		
99	引き伸ばし	濃青色透明		ソーダ	高アルミナ	SHB	Cu		
100	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		風化
101	引き伸ばし	紺色透明		カリ	中アルミナ		Co(Mn)		
102	引き伸ばし	淡青色透明		カリ	高アルミナ	PII	Cu		

報告書 番号	重量濃度 (%)																			non-std SnO ₂
	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	P ₂ O ₅	SO ₃	K ₂ O	CaO	TiO ₂	Cr ₂ O ₃	MnO	Fe ₂ O ₃	CoO	CuO	ZnO	PbO	Rb ₂ O	SrO	ZrO ₂	
61	1.1	1.1	2.5	79.1	0.1	0.2	11.4	1.7	0.16	0.02	1.22	1.28	0.06	0.02	0.01	0.02	0.03	0.03	0.09	0.10
62	2.1	1.0	3.3	76.2	0.1	0.2	12.5	1.1	0.20	0.03	1.55	1.55	0.06	0.04	0.01	0.03	0.03	0.03	0.14	0.08
63	14.6	0.9	3.8	73.7	0.1	0.3	1.0	2.3	0.25	0.02	1.07	1.60	0.03	0.05	0.01	0.03	0.02	0.04	0.07	0.08
64	15.3	1.0	5.6	69.6	0.1	0.4	2.0	2.4	0.20	0.02	1.79	1.31	0.05	0.05	0.02	0.03	0.02	0.04	0.10	0.12
65	17.1	0.8	9.2	65.9	0.0	0.4	1.9	2.1	0.44	0.01	0.04	0.88	0.01	0.82	0.02	0.16	0.02	0.07	0.14	0.27
66	1.3	0.6	4.4	77.4	0.1	0.2	13.7	0.3	0.12	0.02	0.02	0.43	0.01	0.94	0.02	0.16	0.04	0.02	0.09	0.29
67	12.6	1.0	4.5	72.3	0.1	0.3	2.1	2.9	0.23	0.03	1.99	1.51	0.07	0.08	0.02	0.15	0.02	0.04	0.12	0.15
68	2.1	0.8	2.8	76.4	0.1	0.1	13.0	1.0	0.21	0.03	1.60	1.58	0.07	0.04	0.01	0.02	0.02	0.03	0.09	0.07
69	9.2	1.1	4.2	78.3	0.1	0.3	1.0	2.4	0.26	0.02	1.13	1.69	0.03	0.05	0.02	0.03	0.02	0.04	0.08	0.15
70	1.2	0.9	4.3	76.3	0.0	0.3	14.3	0.4	0.13	0.02	0.02	0.46	0.01	1.34	0.03	0.24	0.05	0.02	0.07	0.25
71	16.2	0.8	9.0	67.0	0.0	0.4	3.3	1.3	0.33	0.01	0.03	0.47	0.01	0.83	0.02	0.12	0.03	0.04	0.11	0.24
72	1.4	0.9	2.2	88.7	0.1	0.2	3.4	1.1	0.12	0.03	1.20	0.55	0.02	0.02	0.01	0.02	0.03	0.03	0.07	0.10
73	6.9	1.0	4.9	78.0	0.1	0.4	2.0	3.3	0.19	0.02	1.54	1.28	0.05	0.05	0.02	0.04	0.03	0.06	0.08	0.11
74	17.1	0.8	9.3	66.0	0.1	0.4	1.9	2.2	0.33	0.02	0.04	0.78	0.02	0.73	0.02	0.12	0.02	0.06	0.16	0.15
75	17.3	1.0	8.5	66.5	0.1	0.5	1.6	2.2	0.33	0.01	0.07	0.91	0.01	0.65	0.02	0.24	0.02	0.05	0.12	0.63
76	14.7	0.7	8.9	69.3	0.0	0.4	3.2	1.2	0.34	0.01	0.03	0.51	0.01	0.45	0.02	0.11	0.02	0.04	0.10	0.20
77	16.8	0.8	9.1	67.1	0.1	0.4	1.8	2.0	0.30	0.01	0.04	0.80	0.01	0.44	0.02	0.10	0.02	0.04	0.12	0.20
78	16.9	0.9	9.7	64.2	0.0	0.7	2.1	2.3	0.44	0.02	0.05	0.92	0.02	1.09	0.03	0.29	0.02	0.08	0.13	0.37
79	11.5	1.1	5.5	75.8	0.1	0.3	1.3	1.8	0.41	0.02	0.16	1.03	0.02	0.78	0.02	0.19	0.02	0.05	0.15	0.45
80	13.4	1.0	5.9	72.4	0.1	0.2	1.2	2.5	0.25	0.02	1.06	1.68	0.05	0.02	0.02	0.03	0.02	0.04	0.08	0.13
81	1.4	0.8	2.9	76.7	0.1	0.1	13.3	0.9	0.22	0.03	1.63	1.57	0.07	0.04	0.01	0.02	0.03	0.03	0.09	0.05
82	2.3	0.8	2.9	76.1	0.1	0.1	13.1	0.9	0.21	0.02	1.62	1.53	0.07	0.04	0.02	0.03	0.03	0.03	0.09	0.11
83	1.3	0.7	4.4	78.0	0.1	0.3	13.1	0.3	0.12	0.02	0.02	0.42	0.01	0.94	0.03	0.16	0.05	0.03	0.09	0.25
84	1.4	0.7	4.4	77.2	0.1	0.2	13.7	0.3	0.12	0.02	0.02	0.42	0.01	0.90	0.02	0.15	0.04	0.02	0.12	0.30
85	0.9	0.8	4.4	77.7	0.0	0.3	13.3	0.4	0.12	0.02	0.01	0.40	0.01	1.21	0.02	0.25	0.04	0.02	0.09	0.30
86	1.0	0.6	4.4	77.5	0.1	0.5	13.7	0.3	0.13	0.02	0.02	0.44	0.01	0.95	0.03	0.15	0.04	0.03	0.10	0.30
87	13.0	0.8	4.1	74.7	0.1	0.3	0.9	2.0	0.20	0.02	1.82	1.59	0.07	0.08	0.02	0.05	0.03	0.05	0.11	0.13
88	13.9	2.3	5.5	71.4	0.1	0.2	1.1	2.4	0.16	0.03	1.19	0.94	0.05	0.05	0.02	0.06	0.04	0.12	0.37	0.09
89	13.3	0.8	2.5	77.2	0.1	0.2	0.6	3.4	0.16	0.02	0.76	0.79	0.04	0.02	0.01	0.02	0.02	0.05	0.08	0.07
90	1.0	1.1	3.2	79.2	0.1	0.1	10.6	1.7	0.22	0.02	1.27	1.19	0.03	0.02	0.01	0.03	0.02	0.03	0.08	0.06
91	1.3	1.0	2.6	77.1	0.1	0.1	12.6	1.1	0.18	0.03	1.96	1.63	0.08	0.03	0.02	0.02	0.02	0.03	0.08	0.06
92	1.1	0.8	2.4	82.5	0.1	0.2	9.9	1.1	0.12	0.02	1.11	0.59	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.02	0.05	0.06
93	13.1	1.1	4.3	73.2	0.2	0.2	1.6	3.0	0.21	0.02	1.28	1.35	0.04	0.06	0.01	0.04	0.02	0.05	0.11	0.08
94	14.8	0.9	6.7	67.4	0.1	0.4	2.6	3.0	0.24	0.02	1.74	1.67	0.05	0.04	0.02	0.05	0.02	0.06	0.12	0.11
95	16.7	0.9	9.2	67.0	0.0	0.4	1.4	2.1	0.22	0.01	0.06	0.62	0.01	1.05	0.03	0.16	0.02	0.05	0.12	0.45
96	17.0	1.0	9.3	65.6	0.1	0.4	1.9	2.2	0.36	0.02	0.07	0.76	0.01	0.92	0.03	0.17	0.02	0.06	0.12	0.52
97	12.0	0.7	2.7	78.0	0.1	0.2	0.5	3.0	0.18	0.02	1.43	0.81	0.05	0.02	0.02	0.03	0.02	0.04	0.11	0.25
98	1.2	0.8	4.1	76.5	0.0	0.3	14.3	0.3	0.13	0.02	0.02	0.46	0.01	1.37	0.02	0.25	0.04	0.03	0.06	0.35
99	15.8	0.7	6.4	70.5	0.0	0.5	1.7	1.6	0.42	0.02	0.11	0.98	0.01	0.80	0.08	0.08	0.02	0.05	0.13	0.27
100	1.4	1.1	2.8	83.2	0.1	0.1	6.4	1.5	0.16	0.02	1.42	1.55	0.06	0.03	0.02	0.02	0.03	0.02	0.09	0.16
101	1.5	1.0	2.9	78.9	0.1	0.1	10.8	2.3	0.12	0.02	0.96	1.00	0.04	0.03	0.02	0.02	0.03	0.03	0.07	0.10
102	1.0	0.6	4.3	76.3	0.1	0.4	12.5	0.6	0.12	0.02	0.02	0.39	0.01	1.00	0.02	0.25	0.04	0.03	0.08	0.20

土器観察表

遺物 番号	出土地点	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴	焼成	色調	備考
				口径	底径	高さ				
17-1	1号墳・周溝	土師器	小型の壺	9.7	—	(7.8)	外 斜め方向ハケメ、ヘラケズリ 内 斜め方向ハケメ ヘラケズリ後ナデ、指通し痕	良好	黄褐色	
17-2	1号墳・周溝	土師器	小型の壺	10.4	—	12.2	外 ココナデ、斜め方向ハケメ 内 ヘラケズリ後ナデ、指通し痕	良好	褐色	古墳時代前期末～中期初頭 底部を穿孔している
17-3	1号墳・周溝	土師器	壺	20.4	—	(7.7)	外 ココナデ 内 ココナデ、横方向ハケメ後ナデ 指通し痕	良好	黄褐色	古墳時代中期前半 ～前中葉
17-4	1号墳・周溝	土師器	甕	—	—	(4.7)	外 ココナデ 内 風化	良好	黄褐色	古墳時代中期前半 複合口縁
17-5	1号墳・周溝	土師器	甕	—	—	(5.1) (4.3)	外 ココナデ、斜め方向ハケメ 内 羽根紋 ヘラケズリ	良好	黄褐色	古墳時代中期前半 複合口縁
17-6	1号墳・周溝	土師器	甕	(17.5)	—	(12.0)	外 ココナデ、横・斜め方向ハケメ 内 ココナデ、ヘラケズリ、指通し痕	良好	黄褐色	古墳時代中期前半 複合口縁
17-7	1号墳・周溝	土師器	甕	(21.2) 頸部付	—	(9.1)	外 ココナデ、斜め方向ハケメ後ナデ 内 ヘラケズリ、指通し痕	良好	黄褐色	古墳時代中期前半 複合口縁
17-8	1号墳・周溝	土師器	甕	(19.0)	—	(17.8)	外 ココナデ、斜め方向ハケメ ヘラケズリ、ココナデ	良好	黄褐色	布留式の甕、単純口縁 古墳時代前期末～中期初頭
18-1	1号墳・周溝	土師器	甕	17.9	—	(24.6)	外 ココナデ 内 縦方向ハケメ後横方向ハケメ ヘラケズリ、ココナデ、指通し痕	良好	黄褐色	古墳時代前期末～中期初頭 複合口縁
18-2	1号墳・周溝	土師器	甕	20.0	—	(32.8)	外 ココナデ 内 縦方向ハケメ後斜め方向ハケメ 横方向ハケメ後ナデ、ヘラケズリ 指通し痕	良好	黄褐色	布留式の甕、単純口縁 古墳時代前期末～中期初頭
20-1	1号墳・主体部	土師器	高杯の杯部か	—	—	(1.7)	外 ナデ 内 ナデ	良好	黄褐色	
23-1	2号墳・周溝	土師器	甕	—	—	(4.3) (3.7)	外 文様あり 内 風化	良好	明黄褐色	
23-2	2号墳・主体部	土師器	直口壺	16.8	—	(18.8)	外 ココナデ、縦・斜め方向ハケメ 内 ココナデ、ヘラケズリ、絞り痕 指通し痕	良好	黄褐色	古墳時代中期初頭
27-1	3号墳・周溝	土師器	甕	(16.4)	—	(5.4)	外 ココナデ 内 縦方向ハケメ後ナデ、ヘラケズリ	良好	黄褐色	布留式甕、単純口縁 古墳時代前期末～中期初頭 複合口縁
27-2	3号墳・周溝	土師器	壺	(17.6)	—	(5.7)	外 ココナデ 内 ココナデ	良好	黄褐色	古墳時代前期末～中期初頭 複合口縁
30-1	4号墳・主体部	土師器	甕	—	—	(3.6)	外 ココナデ 内 ココナデ	良好	黄褐色	古墳時代中期前半 単純口縁
30-2	4号墳・主体部	土師器	甕	—	—	(4.5)	外 ココナデ 内 ココナデ	良好	黄褐色	古墳時代中期前半 単純口縁
30-3	4号墳・主体部	土師器	甕	—	—	(5.8)	外 ココナデ 内 風化	不良	黄褐色	古墳時代中期前半、大甕式 複合口縁
40-1	ST01	須恵器	蓋	14.0	—	3.4	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 ココナデ	やや不良	灰色	出雲国府編年第2型式 7c末～8c第1四半期
40-2	ST01	須恵器	高台付杯	14.2	8.6	5.5	外 回転ナデ、回転糸切り痕ナデ 静止ナデ、底紋のヘラ 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第2型式 7c末～8c第1四半期
40-3	ST01	須恵器	無高台杯	14.2	8.0	4.6	外 回転ナデ、回転糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲国府編年第2型式 7c末～8c第1四半期
42-1	1号墳・盛土	縄文土器	深鉢の口縁部	—	—	(2.3)	外 磨消縄文 ナデ	不良	黄褐色	縄文時代後期
42-2	5号墳・盛土	弥生土器	壺か甕の底部	—	(7.1)	(2.4)	外 ナデ 内 ナデ、指通し痕	不良	褐色	
42-3	表土(2号墳)	須恵器	無高台杯	11.3	8.0	(2.8)	外 回転ナデ、回転糸切り痕 内 回転ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第2型式 8c第3四半期～第4四半期
42-4	表土(2号墳)	須恵器	高台付甕	(15.4)	(8.6)	3.5	外 回転ナデ、回転糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第2型式 8c第3四半期～第4四半期
42-5	表土(1号墳)	土師器	底部	—	(5.6)	(1.2)	外 ナデ、回転糸切り痕 ナデ	やや不良	黄褐色	中世土器か

石製品観察表

遺物 番号	出土地点	種類	石材	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備考
				最大長 (横)	最大幅	最大厚			
23-3	2号墳・主体部	粘板岩製石製品	—	2.8	—	0.9	8.32	緑灰色	中央に直径 5mmの孔あり
42-7	表土(6号墳)	瀬片	磨礫石	2.9	2.9	0.9	6.28	黒色	二次加工の痕跡あり
42-8	表土(4号墳)	瀬片	磨礫石	4.7	2.6	1.3	20.13	黒色	跡による新しい加工の痕跡あり
42-9	表土(5号墳)	磨礫石	—	10.0	4.7	3.4	237.28	灰色	磨礫石

金属製品観察表

遺物 番号	出土地点	種類	材質	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長 (径)	最大幅	最大厚		
30-4	4号墳・主体部	刀子		8.3	1.55	0.35	9.56	刃部長 5.6cm、茎部長 2.7cm、古墳時代前半
33-1	5号墳・主体部	鉄鏃	鉄	7.2	4.0	0.3	17.91	短茅三角形形式鏃、鏃身部に 5mm の孔あり、古墳時代中期中部
37-21	6号墳・主体部	刀子		3.2	1.4	0.3	2.75	刀子の刃身部か
42-6	表土 (6号墳)	古銭		2.3	2.3	0.3	2.51	寛永通寶

玉類観察表 (1)

遺物 番号	出土地点	器種	石材	色調	法量 (mm)			重量 (g)	備考
					最大高	最大厚 (径)	孔径		
20-2	1号墳	勾玉	瑪瑙	赤褐色	36.0	11.0	2.8	9.82	片面穿孔
20-3	1号墳	管玉	碧玉	濃緑色	30.0	5.0	2.6	1.04	両面穿孔
20-4	1号墳	管玉	碧玉	濃緑色	(17.3)	4.5	2.1	0.55	両面穿孔
20-5	1号墳	管玉	碧玉	濃緑色	(14.7)	4.7	2.0	0.51	両面穿孔
27-3	3号墳	勾玉	瑪瑙	赤褐色	27.0	7.4	2.0 × 4.0	3.89	片面穿孔
27-4	3号墳	勾玉	瑪瑙	赤褐色	26.0	8.1	2.0 × 4.0	3.60	片面穿孔
27-5	3号墳	管玉	碧玉	緑色	31.0	5.4	2.8	1.34	両面穿孔
27-6	3号墳	管玉	碧玉	緑色	29.9	5.3	3.3	0.93	両面穿孔
27-7	3号墳	管玉	碧玉	緑色	29.5	5.4	2.6	1.34	両面穿孔
27-8	3号墳	管玉	碧玉	緑色	26.0	4.8	2.0	0.93	両面穿孔
27-9	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	4.8	5.1	1.2	0.17	
27-10	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	3.1	5.5	1.2	0.13	
27-11	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.4	5.5	1.6	0.09	
27-12	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	3.3	4.6	1.8	0.08	
27-13	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.7	4.7	1.3	0.08	
27-14	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.9	4.6	1.7	0.09	
27-15	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	3.1	4.7	1.5	0.08	
27-16	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.7	4.7	1.5	0.08	
27-17	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	3.6	3.7	0.8	0.06	
27-18	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	3.2	4.4	1.1	0.08	
27-19	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.0	4.5	2.1	0.03	
27-20	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.5	4.3	1.7	0.05	
27-21	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.1	4.7	1.1	0.06	
27-22	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	3.1	4.4	1.5	0.07	
27-23	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	3.1	4.2	1.3	0.07	
27-24	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.5	4.2	1.5	0.06	
27-25	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.2	3.8	1.5	0.03	
27-26	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.7	3.4	0.9	0.05	
27-27	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.4	4.0	1.4	0.05	
27-28	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.3	3.7	0.8	0.04	
27-29	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.7	3.7	1.4	0.04	
27-30	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.8	3.9	1.3	0.03	
27-31	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.7	4.0	1.3	0.05	
27-32	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	3.2	3.3	1.3	0.04	
27-33	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.3	3.2	1.0	0.03	

玉類観察表 (2)

遺物 番号	出土地点	器種	石材	色調	法量 (mm)			重量 (g)	備考
					最大高	最大厚 (径)	孔径		
27-34	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.2	3.8	1.3	0.11	
27-35	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	1.7	3.2	0.8	0.02	
27-36	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.2	3.2	0.9	0.03	
27-37	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	1.5	3.5	1.0	0.03	
27-38	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.3	3.3	1.0	0.03	
27-39	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	1.5	2.8	0.7	0.01	
27-40	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	1.6	3.4	0.7	0.02	
27-41	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	1.2	3.0	0.9	0.01	
27-42	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.2	2.6	0.8	0.02	
27-43	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	1.9	3.3	0.9	0.08	
27-44	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.0	2.8	0.7	0.02	
27-45	3号墳	小玉	ガラス	紫青色	1.6	2.5	0.8	0.01	
27-46	3号墳	小玉	ガラス	淡緑色	2.6	3.3	1.3	0.03	
27-47	3号墳	小玉	ガラス	濃青色	2.3	2.9	0.8	0.03	
37-1	6号墳	碧玉	碧玉	濃緑色	43.6	13.0	2.9	20.54	片面穿孔
37-2	6号墳	碧玉	瑪瑙	赤褐色	42.1	13.6	3.0	16.27	片面穿孔
37-3	6号墳	碧玉	滑石	暗灰色	36.0	11.2	1.8	10.07	片面穿孔
37-4	6号墳	碧玉	滑石	灰白色	26.8	7.8	1.9	3.71	両面穿孔
37-5	6号墳	碧玉	滑石	淡灰色	(14.4)	5.2	2.1	0.57	両面穿孔
37-6	6号墳	碧玉	緑色凝灰岩石	緑灰色	(15.9)	4.1	1.8	0.31	両面穿孔
37-7	6号墳	碧玉	碧玉	濃緑色	46.0	10.0	4.2	8.04	両面穿孔
37-8	6号墳	碧玉	滑石	暗灰色	12.0	6.2	1.7	0.61	両面穿孔
37-9	6号墳	白玉	滑石	暗灰色	2.5	5.9	1.6	0.10	外面に横あり
37-10	6号墳	白玉	滑石	暗灰色	3.3	6.0	1.5	0.18	外面に横あり
37-11	6号墳	白玉	滑石	暗灰色	3.5	6.3	1.6	0.19	外面に横あり
37-12	6号墳	白玉	滑石	暗灰色	3.6	6.2	1.6	0.20	外面に横あり
37-13	6号墳	白玉	滑石	暗灰色	3.0	6.3	1.6	0.17	外面に横あり
37-14	6号墳	白玉	滑石	暗灰色	3.1	6.2	1.6	0.16	外面に横あり
37-15	6号墳	白玉	滑石	暗灰色	1.9	5.4	1.6	0.08	
37-16	6号墳	小玉	滑石	暗灰色	4.0	4.6	1.8	0.12	
37-17	6号墳	白玉	滑石	暗灰色	2.6	5.0	2.0	0.09	
37-18	6号墳	小玉	滑石	暗灰色	4.4	4.2	1.8	0.10	
37-19	6号墳	小玉	滑石	暗灰色	3.6	4.2	1.7	0.08	
37-20	6号墳	小玉	滑石	暗灰色	3.7	4.1	1.9	0.08	

第4章 南外古墳群

第1節 遺跡の位置と調査の経過

第1項 遺跡の位置(第49・50図)

南外古墳群は松江市東津田町・矢田町に位置する古墳群である。大橋川へと流れ込む馬橋川流域右岸の標高 35～73m の南側丘陵に立地し、南側から北側に向けて派生する東西二つの尾根筋に 5 基の古墳が所在する。古墳群の南側には『出雲国風土記』に「神名樋野」と記された茶白山が眺望される。

第3章で報告した榎岡古墳群は本古墳群の南西側に位置し、さらに南に下れば山代方墳、山代原古墳、山代二子塚古墳、大庭鶴塚など古墳時代後期を代表する出雲地方東部の首長墓群の谷に至る。

第2項 南外古墳群の配置と概要

(第49・50図・表7)

南外古墳群は 5 基からなる古墳群である。南外 1 号墳は古墳群が所在する東側丘陵の高所に位置する。平成 12(2000)年 3 月～8 月にかけて島根県教育委員会により分布調査や試掘調査が行われ、墳長約 20m の前方後円墳であることが確認された。溝や外堤のほか埋葬施設に関連すると思われる石材が検出され、遺物は土師器の小片が 1 点出土している。明確な築造時期は不明であるが、墳丘形態の特徴や立地などにより中期～後期初頭頃の古墳と推測されている。

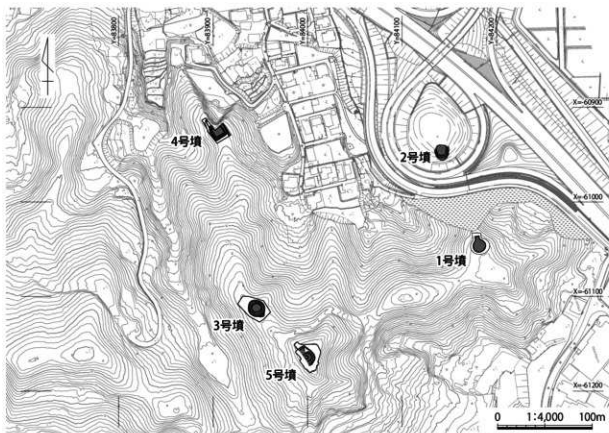
南外 2 号墳は 1 号墳の約 120m 北側に位置する。平成 17(2005)年に島根県教育委員会により本調査が行われ、一辺 12.5m、高さ 1.0～2.2m ありの方墳が検出された。墳頂部の対角線上に細長い墓壇が配置されており、墓壇内から須恵器の蓋環が出土している。築造時期は出土遺物から出雲 2 期、6 世紀前半である。

今回、本調査を行った南外 3～5 号墳は、南外 1・2 号墳の西側丘陵の尾根筋に所在している。南外 3・4 号墳は先に述べた平成 12 年の島根県教育委員会による分布調査で



第 49 図 南外古墳群周辺の遺跡分布図

確認されていた。南外5号墳については、当該事業に伴って平成30(2018)年に実施した試掘調査後に遺跡の整理を行い、来美東遺跡2号墳としていた遺跡を南外5号墳としたものである。南外3号墳は円墳、4号墳は方墳、5号墳は短小型前方後円墳で尾根筋に距離を置いて所在している。



第50図 南外古墳群配置図

第3項 本調査の方法

古墳の現況は山林である。試掘調査結果をもとに松江市埋蔵文化財調査課と協議を行い、廃土置き場を含めた範囲の伐採を行った。その後、各古墳ごとに調査範囲の設定と調査前のコンタ測量、地形測量を実施し、土層観察用の畦を設定した後、人力による表土掘削、遺構検出、掘削を行った。

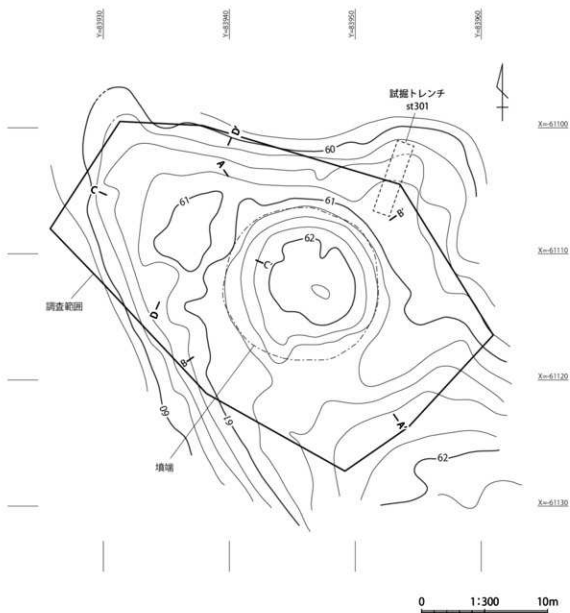
墳丘や遺構の平面実測はトータルステーションを用いて行い、その測量データと遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。方位は世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺 1/20 で作成した。

遺構の記録写真は3mmデジタルカメラとフルサイズデジタルカメラ一眼レフを併用して撮影を行った。各古墳の全体写真は、写真用足場を用いて撮影すると同時にドローンによる高所からの撮影を実施した。

第2節 南外3号墳(第51・52・53図)

南外3号墳は、丘陵尾根筋を北に下る緩斜面に築かれた円墳である。南西側 70m の丘陵最高所に5号墳が、北西側斜面下方 190m に4号墳が位置する。古墳の北西側は緩斜面で遺構が存在する可能性が考えられることから、この緩斜面を含めた範囲を調査範囲としている。調査面積は 577.5㎡である。

調査は、調査前測量を実施した後、墳丘中央で十字に交差する畦 (A-A'・B-B') と北西側平坦面から緩斜面にかけて縦断・横断の土層観察用の畦 (C-C'・D-D') を設定して調査を始めた。厚さ 15cm 程度の表土を取り除くと墳丘や周溝が検出された。主体部は畦の土層観察や墳頂部の精査、サブトレを設定して調査を実施したが検出されず、墳丘の流失により失われたものと思われる。古墳以外では北西側緩斜面や周溝底面、南側から西側にかけての緩斜面から土坑・溝・柱穴が検出された。



第51図 南外3号墳調査前地形測量図

以下では、まず試掘調査の結果を述べ、次に検出した遺構・遺物について詳述する。

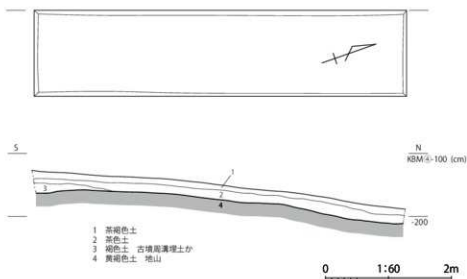
南外古墳群の報文では、各古墳の古墳以外の遺構（試掘トレンチを含めた）番号は、種別ごとに連番でつけるが、番号の頭に古墳の数字を入れて記載する。（例：SXは3号墳ではSX301、4号墳ではSX401、5号墳ではSX501と記する。）

第1項 試掘トレンチ(st301)(第52図・表7)

南外3号墳の北東側に設定した長さ5.9m、幅1.3mのトレンチである。表土下2cmの深さで地山を検出したが遺構は検出されなかった。ただし、南西側で地山が落ち込み褐色土（3層）の堆積がみられ、南外3号墳の墳端に近いことから周溝の一端を検出したものと考えられる。遺物は土師器の細片が出土している。

表7 試掘トレンチ (st301)

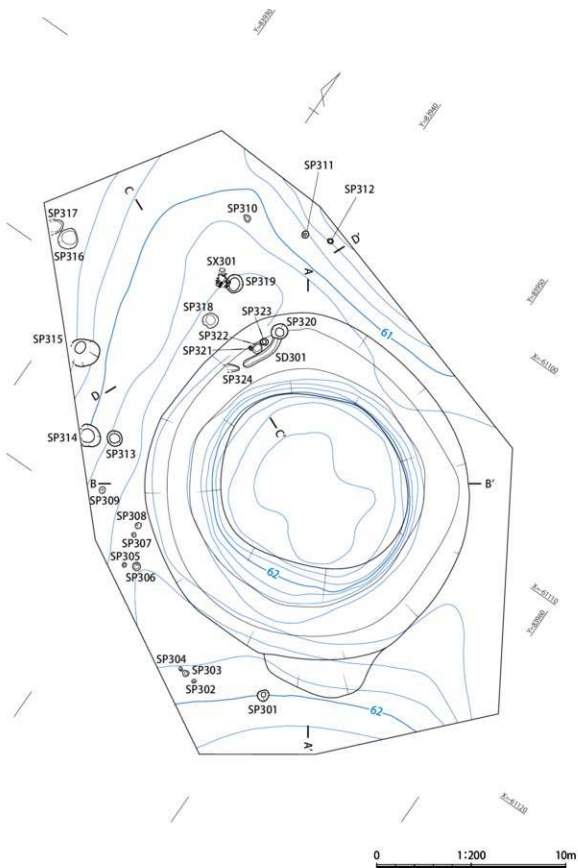
トレンチ	トレンチ位置	トレンチ 設定方向	設定範囲 (長軸×短軸)	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
st301	3号墳 北東	北—南	5.9m×1.3m	7.67㎡	0.2m	—	土師器の細片



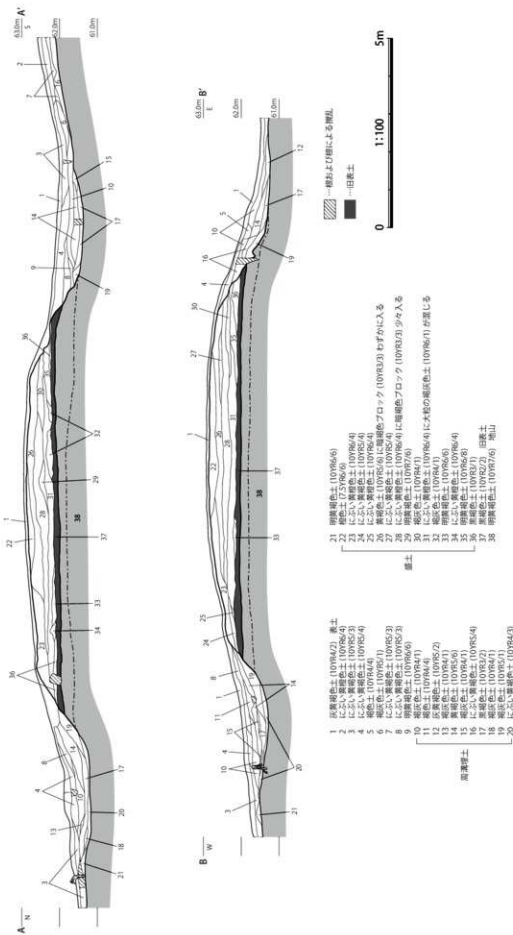
第52図 南外3号墳試掘トレンチ (st301) 実測図

第2項 墳丘の規模・形態(第53図)

3号墳は円墳で、周溝南東側の外側に平坦面をもつ。墳丘規模は南北12.0m、東西11.9mで、周溝を含めると南北18.2m、東西17.2mを測る。墳頂部標高は62.9mを測り、墳丘の高さは墳裾から約1.75mである。形態は、墳裾の径に比べると墳頂平坦面が広い、いわゆる座布団状を呈していることから、墳丘上半は流失していると考えられる。外表施設は認められなかった。



第53図 南外3号墳遺構配置図



第54図 南外3号墳土層断面図 A-A'・B-B'

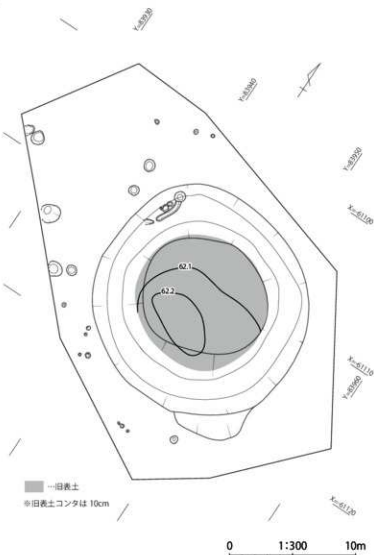
第3項 墳丘の築造(第54・55図)

墳丘はまず、尾根筋の緩斜面に円形の溝を掘削して南北10m、東西10.2mの基盤を造り、その上に盛土を施している。東側や北側では基盤の端部に明黄褐色土(35層)や黒褐色土(36層)を土手状に施して土留めとした後、その内側にぶい黄褐色土や褐灰色土などの土層(31～34層)を盛土している。その後、にぶい黄褐色土や明黄褐色土(26～30層)を水平に盛り、さらに墳丘全体に盛土を施したあと整形を行って墳丘を完成させている。盛土の厚さは70～80cmを測る。

盛土下には旧表土の黒褐色土(37層)が確認される。旧表土は緩やかに南から北に向かって傾斜し、若干の高低差はあるもののほぼ水平である。盛土以前にある程度の整地が行われていると考えられるが、地山面もほぼ水平であることから、3号墳が立地するこ

の場所は古墳築盛以前から平坦面に近い緩斜面であったと考えられる。

旧表土面や地山面で精査を行ったが遺構は検出されなかった。遺物は旧表土や地山面直上から縄文土器が出土しており、この土器については第5項で述べる。



第55図 南外3号墳旧表土検出面測量図

第4項 周溝

規模・形態(第53・54図)

周溝は墳丘を全周するように廻っている。規模は上端径3.5～3.8m、底幅1.1～2.4m、深さ25cmを測り、断面形はゆるいU字状を呈する。底面標高は南側で61.4mを測り、北東側に向かうほど低くなっている。周溝の南東側の外側には東西5m、南北2m、深さ15cm程の浅い平坦面がみられる。

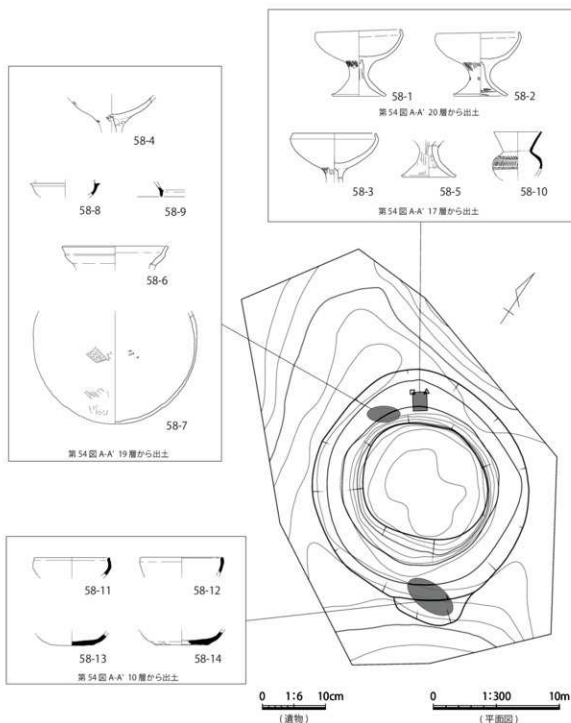
埋土(第54図)

周溝底面に地山の風化土と思われるにぶい黄褐色土(20層)が確認され、その上に黒褐色土(17層)

や褐灰色土(10層)が堆積している。墳裾には黄褐色土(14層)や褐灰色土(19層)が厚く堆積しており、これらの土層は墳丘からの流失土と考えられる。

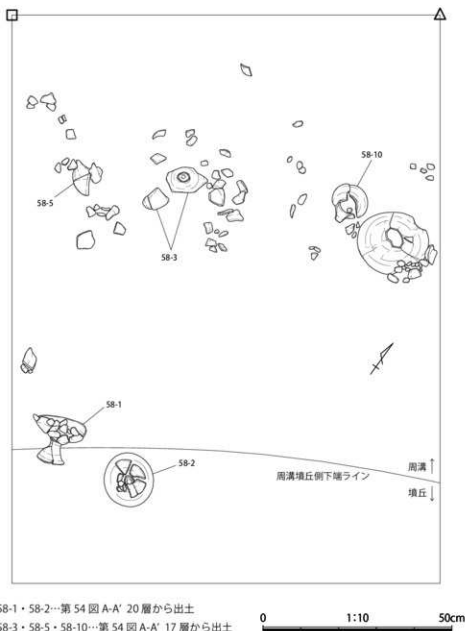
遺物出土状況(第56・57・58図)

周溝の北西側と南東側で土師器と須恵器が出土している。北西側の周溝底面から出土した2個の高坏(58-1・58-2)は、一方が横倒し、もう一方は坏部を下にして伏せた状態であった。いずれも壊れてはいるが1個体に復元できる状態で、墳丘上にあったものが落ちたのではなく、この場所に据



第56図 南外3号墳周溝遺物出土状況図

えおかれたものと考えられる。ほかに周溝埋土の黒褐色土（土層断面 A-A'17 層）から土師器の高坏と須恵器の小型の壺が、褐灰色土（土層断面 A-A'19 層）から土師器の高坏・甕と須恵器の坏身・高坏が出土している。褐灰色土から出土した土師器の甕 (58-6・7) は、接合はできなかったが同一個体と思われる破片で墳丘斜面からまとまって出土している。17・19 層から出土した遺物は、出土状況から墳丘上にあったものが転落したと思われる。周溝南東側では周溝埋土の褐灰色土（土層断面 A-A'10 層）から古代の坏や底部が出土している。古墳とは時期差があり、周溝に土層が堆積してフラットになった後に斜面上方から流れ込んだ遺物と考えられる。



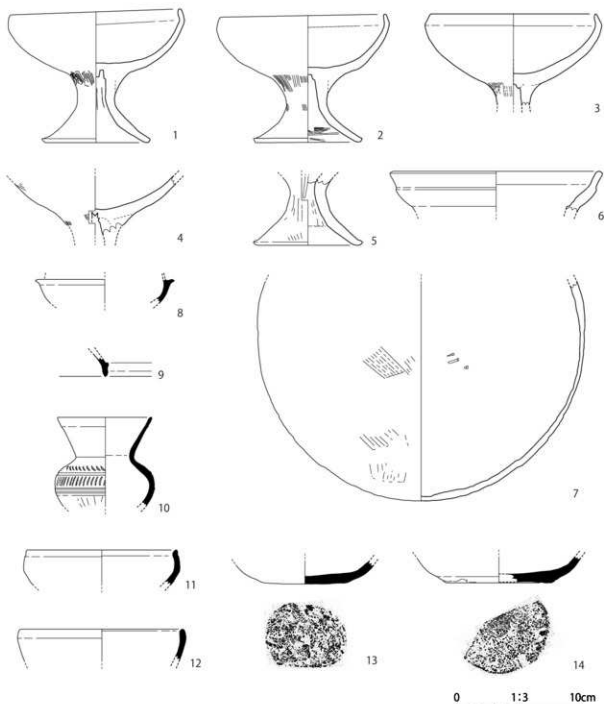
58-1・58-2…第54図 A-A' 20 層から出土

58-3・58-5・58-10…第54図 A-A' 17 層から出土

第57図 南外3号墳北西側周溝遺物出土状況図

周溝出土遺物(第58図)

第58図 1～7は土師器、8～14は須恵器である。58-1～3は埴形の高坏で、いずれも橙色を呈する。坏部は丸くて深く、口縁端部は内傾している。58-1は口径13.6cm、器高10.6cmを測る。調整は坏部内外面にヨコナデ、接続部外面にハケメを施し、脚部内面に絞り痕と軸痕が認められる。58-2は口径13.2cm、器高10.3cmを測り、調整は、脚部内外面にハケメがみられる。58-3は口径13.2cmを測る。58-4は高坏の坏から脚にかけての破片で、外面にややハケメがみられる。58-5は高坏の脚部である。外面をヘラミガキとハケメで調整し、内面に絞り痕が認められる。58-6は退化した複合口縁



第58図 南外3号墳周溝出土遺物実測図

を呈する甕である。器壁は厚く、外傾して立ち上がる。58-7は丸底を呈する甕の胴部～底部である。器壁は厚く、調整は外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。58-6・7は接合はできなかったが、出土位置・胎土・色調が同じであることから同一個体と思われる。58-1～7は松山Ⅲ期、古墳時代中期後半に相当する。58-8は坏身または有蓋高坏の破片である。58-9は高坏の脚端部で、内傾する外面に稜を持つ。58-10は口径7.6cmを測る小型の壺である。胴部外面に沈線と刺突文を施し、口縁外面にわずかに稜がみられる。調整は口縁内外面と体部内面にナデを、外面に工具による縦方向のナデを施している。58-8～10はいずれも器壁が薄く、灰白色を呈するもので古い印象を受けることから出雲1期中相と考えられる。58-11は口縁端部が短く屈曲する坏で、国府第2型式、7世紀末～8世紀第1四半期である。58-12は内湾する坏の口縁部である。明確な時期はわからないが8世紀代と思われる。58-13・14は坏の底部である。底部調整は、58-13はヘラ切り後ナデを施し、国府第1型式、7世紀後葉に相当する。58-14は静止糸切り後ナデを施し、国府第1～2型式、7世紀後葉～8世紀第1四半期である。

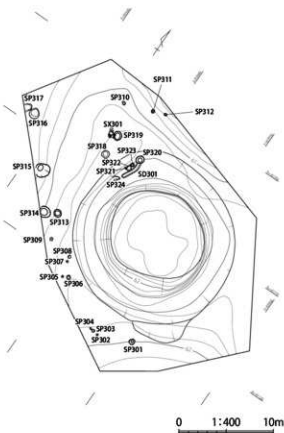
第5項 その他の遺構と出土遺物(第59～63図)

ここでは、古墳の周溝底面や周辺の緩斜面から検出した性格不明遺構1基(SX301)・溝1条(SD301)・柱穴(SP301～324)をその他の遺構として掲載し、北西側緩斜面と旧表土及び地山直上から出土した遺物について述べる。

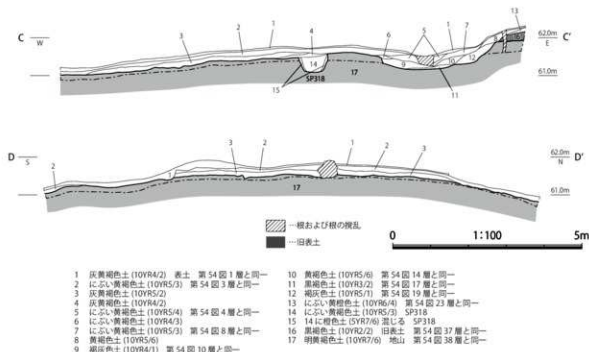
緩斜面の土層堆積状況(第60図)をみると10cm程度の表土の下に2層(にぶい黄褐色土)や3層(灰黄褐色土)が10～20cmの厚さでみられ、その下に地山が確認される。SX301以外の遺構は地山面で検出している。

1.SX301(第59～61図)

SX301は3号墳の北西側緩斜面に位置する。緩斜面の掘削を行っていくと灰黄褐色土(第60図土層断面C-C'3層)から地山にかけて径10～30cmの角礫が検出された。礫の多くは根による攪乱を受けているため原位置をとどめていないと思われるが、北側のやや大きめの礫は地山に固定されている状況で原位置を留めているものと思われる。攪乱土を除去すると礫の内側の地山面に長径48cm、短径30cmの浅い落込みが確認され、大半は攪乱を受けているものの遺構の可能性があるためSX301として報告



第59図 南外3号墳 SX301・SD301・柱穴配置図



第60図 南外3号墳土層断面図C-C'・D-D'

することとした。遺物はなく、時期や遺構の性格は不明である。

2.SD301(第62図)

SD301は周溝北西側の底面で検出した溝である。規模は長さ2.3m、幅40cm、深さ12cmを測り、やや弧状を呈する。周辺に柱穴はみられるが遺構の性格は不明である。また、遺物がないため時期も不明である。

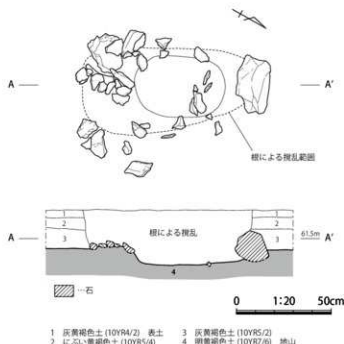
3.SP301~324(第63・64図)

調査区南側から北西側にかけて24基の柱穴が検出された。規模は、径が15~130cm、深さ5~57cmを測る。埋土はにぶい黄褐色土や灰黄褐色土で柱痕は確認されなかった。現況から

建物跡や遮蔽物の復元はできず、また、遺物が出土していないため時期は不明である。

4.その他の出土遺物(第65図)

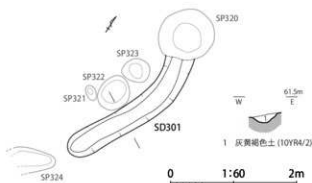
第65図に遺構に伴わない遺物を掲載した。65-1~4は盛土下の旧表土及び地山面から出土した縄文土器である。65-1は深鉢の口縁部で、内外にナデを施す。65-2は口縁端部が平坦面を呈する破片



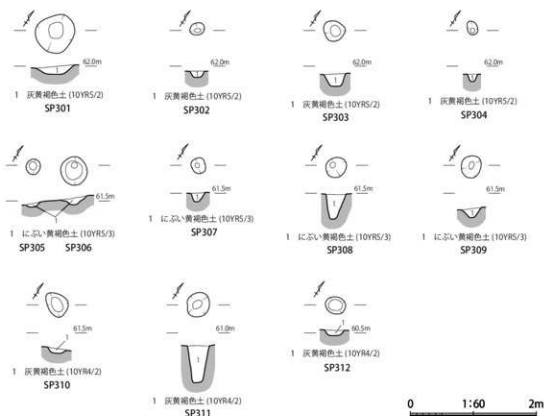
第61図 南外3号墳SX301実測図

である。外面に条痕を、内面にナデを施す。
65-3は胴部片である。外面に条痕の痕跡が
わずかに認められ、内面はナデている。65-4
は底部で、胴部に向かって大きく開く傾向が
認められることから浅鉢と思われる。調整は、
内面はナデ、外面は風化により不明である。
これらの土器は縄文時代後期の範疇に含まれ
ると思われる。65-5・6は北西側緩斜面で出
土した土師器である。65-5は短く外反す
る小型丸底壺の口縁である。器壁は厚く、

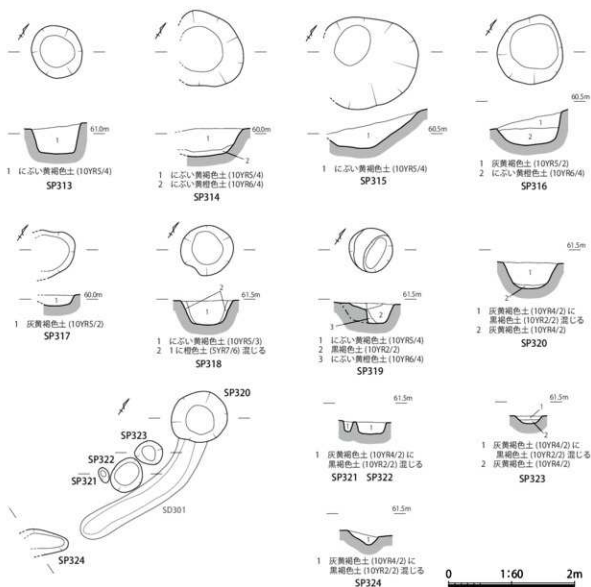
暗褐色を呈する。内外面の調整はヨコナデである。65-6は小型丸底壺の体部である。調整は外面に
ハケメ後ナデを施し、内面に指頭圧痕が認められる。65-5・6は同じ場所から出土しており、色調・
焼成・胎土が同じであることから同一個体と考えられる。時期は古墳時代中期後半と思われる。



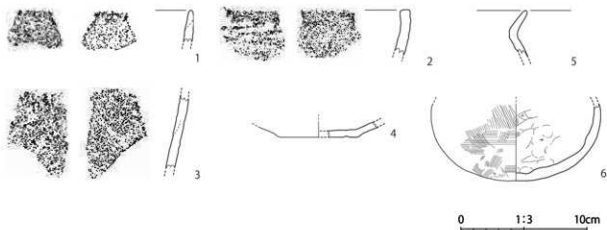
第62図 南外3号墳 SD301 実測図



第63図 南外3号墳柱穴実測図 1



第 64 図 南外 3 号墳柱穴実測図 2



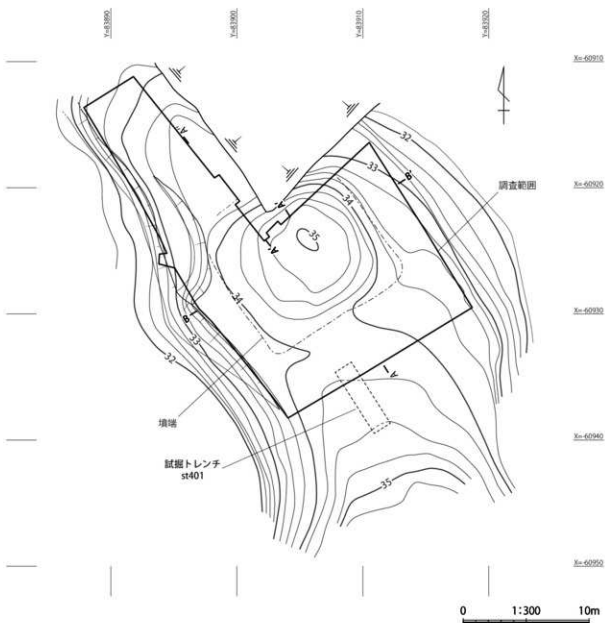
第 65 図 南外 3 号墳遺構外出土物実測図

第3節 南外4号墳(第66図)

南外4号墳は、南外3号墳から尾根筋を北側に190m下った緩斜面に位置する。古墳の北西側は緩斜面を呈し、北側は後世の削平により矢われ崖となっていた。調査範囲は安全のため崖端から1.5mの緩衝地を設けて設定を行い、調査面積は北西側緩斜面を含めて348.2㎡である。

発掘調査は、古墳の墳丘中央で十字に交差する土層観察用の畦(A-A'・B-B')を設定して人力による表土を掘削した後、遺構の検出を行った。厚さ10～20cm程度の表土を取り除くと墳丘や周溝が検出され須恵器や土師器が出土した。主体部の検出は根や後世の攪乱により難しく、サプトレを入れながら調査を行った結果、墳頂部平坦面の北西側で埋葬施設と考えられる落ち込みが検出された。

ほかに遺構は墳丘北西側で土坑(SX401)と南西側平坦部で柱穴(SP401～404)を検出している。



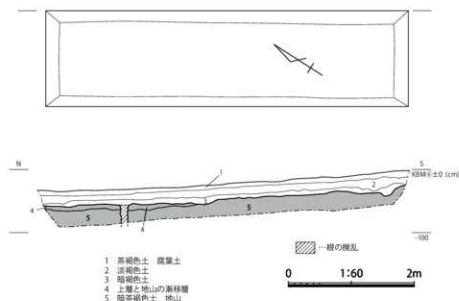
北西側緩斜面の土層は調査区東壁により土層観察を行っている。以下では、まず試掘調査の結果を述べ、次に遺構・遺物について詳述する。

第1項 試掘トレンチ(st401)(第67図・表8)

南外4号墳の南東側に設定した長さ5.7m、幅1.5mのトレンチである。表土下20～30cmの深さで地山を検出し、遺構は検出されなかった。遺物は土師器・須恵器の細片が出土している。

表8 試掘トレンチ(st401)

トレンチ	トレンチ位置	トレンチ 設定方向	設定範囲 (長軸×短軸)	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
st401	4号墳 南東	北→南	5.7m×1.5m	8.55㎡	0.3m	—	土師器・須恵器 の細片

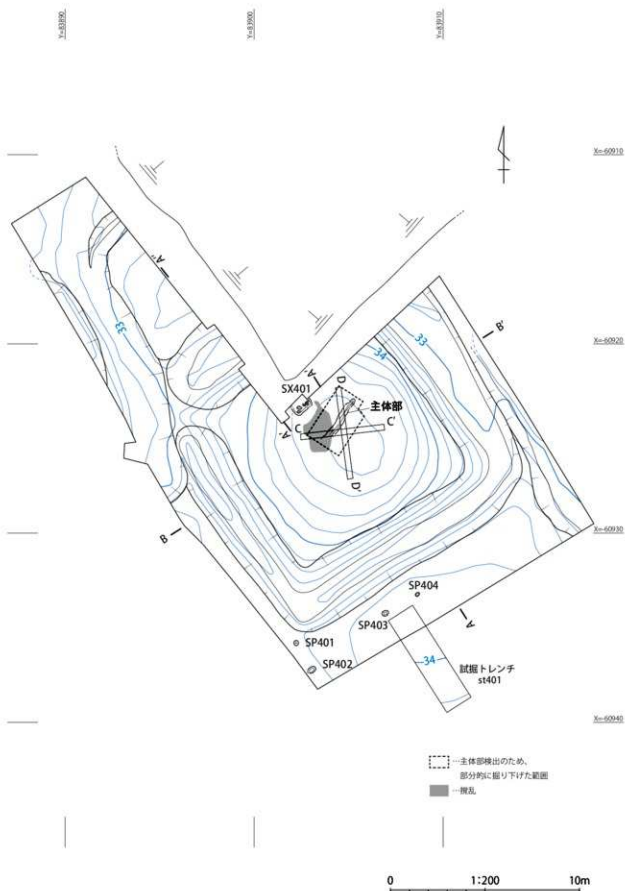


第67図 南外4号墳試掘トレンチ(st401)実測図

第2項 墳丘の規模・形態(第68図)

南外4号墳は墳頂部標高34.9mを測る方墳である。厚さ10～15cmの表土を掘削すると墳丘と周溝が検出された。墳丘面には根による攪乱が多くみられ、また、墳頂部平坦面の北西側には攪乱された不整形な落ち込みが確認された。この攪乱は主体部まで達しており、この攪乱土層から勾玉の破片と刀子が出土している。

墳丘の規模は現状で、南北12.3m、東西12.6mで、周溝を含めると南北17.0m、東西16.4mを測る。墳頂部平坦面は南北9.8m、東西10.5mを測り、墳裾からの墳丘の高さは約1.55～1.75mである。墳丘の北西側隅にあたる地山は陸橋状に掘り残され、周溝外と墳丘をつなぐ橋になっている。



第 68 図 南外 4 号墳遺構配置図

第3項 墳丘の築造(第69・70図)

墳丘の築造については第69図土層断面図から工程を整理していく。土層断面 A-A'-A'' は南北畦 (A-A') と調査区北西側緩斜面東壁土層断面 (A'-A'') を合成したものである。

墳丘の築造について述べる前に、主体部検出の経過を述べておく必要があると考えられるため先にここで述べる。4号墳は前述したように墳頂部で十字に交差するように土層観察用の畦 (第69図 A-A'・B-B') を設定して調査を始めた。周溝掘削と同時に主体部検出を行ったが、表土から墳丘面までの堆積土が少なかったこともあり表層は根による攪乱をかなり受けていた。そのため、主体部の検出は困難を極め、墳丘面を少しずつ掘り下げて精査を行ったり、主体部と思われる範囲に十字のトレンチ (第69図土層断面 C-C'・D-D') を入れて調査を実施した。土層断面 C-C'・D-D' の土層観察を行ったところ U 字状の落ち込みが確認され、この落ち込みを主体部と考えたが、幅が狭いため墓壇ではなく木棺を据えるための坑の可能性も考えられた。ただ、この落ち込みのほかに主体部と考えられる埋葬施設が検出できなかったことから、この落ち込みを主体部と判断して調査を進めた。土層断面 C-C'・D-D' の土層観察から推定して主体部の範囲 (第68図参照) の設定をおこない調査を行うと、主体部は掘り方を持たない無墓壇の木棺直葬と考えられ、この主体部については第6項にて詳述する。

以下では、土層断面 (A-A'-A''・B-B'・C-C'・D-D') の土層観察から墳丘の築造工程について述べる。なお、土層の整合性を考え、同じ性格の土層は段階ごとに同色にしている。

第1段階

尾根筋の緩斜面上に平面方形の溝を掘削して南北 10.0m、東西 10.5m の基盤を造る。地山の上には旧表土と思われる黒褐色土 (35層) が確認され、端部が中央付近よりやや高くみられることから盛土の流出を防ぐ意図があったと考えられる。旧表土の標高は南側で 34.0m、北側で 33.8m、東側と西側で 33.9m を測り、10～20cm の高低差で南側から北側に向かって傾斜している。旧表土の範囲は南北 9.3m、東西 9.8m である。

その後、削り残した旧表土上に暗灰黄色土と黄橙色土の混合土 (33層) や褐灰色土と明黄褐色土の混合土 (34層) を 10～20cm の厚さで盛土を行い、表面を水平に整える。

第2段階

整地した面 (33層上面) を掘り込んで断面 U 字状の溝を掘り棺床を造る。次に棺身を据え置くと同時に盛土 (31層) を施して棺床を固定する。遺体の埋葬を行って棺蓋をし、その周りに盛土 (27～29層) を土饅頭状に施して小墳丘を完成させる。小墳丘の平面形は楕円形を呈し、主軸は主体部に準じている。盛土の範囲は土層断面から推定して南北 4.8m、東西 4.0m、高さは 60cm 程度である。

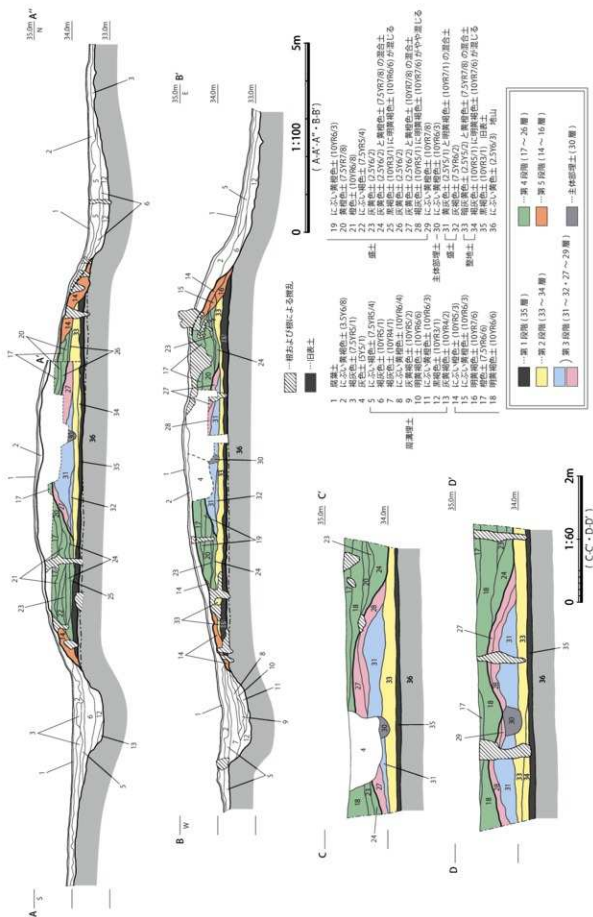
第3段階

小墳丘がかくれる高さまで周辺に盛土 (17～26層) を施す。南側では墳丘の辺縁部に土手状に盛土 (22・23層) を施して土留めとし、さらに盛土 (20・21層) をしている。

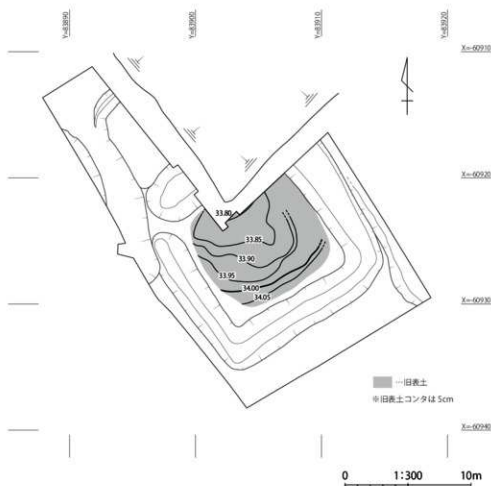
第4段階

最後に墳丘全体に盛土 (14～16層) を施して整形を行い、古墳築造が完成する。

以上のような工程により墳丘の築造を行い、盛土の高さは現状で最大 1.1m を測る。



第69図 南外4号墳土層断面図



第70図 南外4号墳旧表土検出面測量図

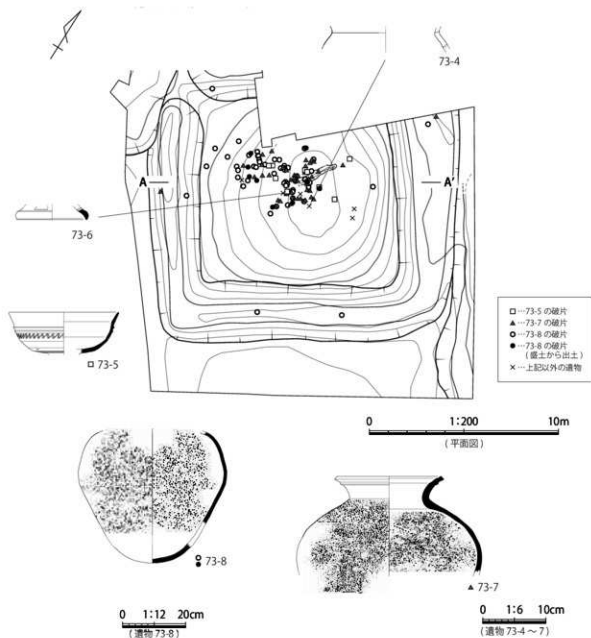
第4項 墳丘面及び盛土出土遺物

墳丘面及び盛土の遺物出土状況(第69・71・72図)

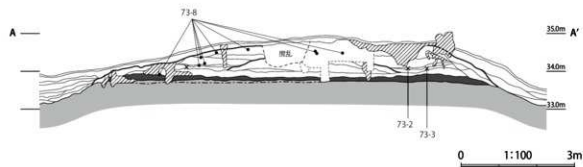
墳頂部平坦面から墳丘斜面、盛土から弥生土器・土師器・須恵器の破片が出土している。第71図に墳丘面及び盛土から出土した遺物の出土ポイントを示し、第72図にはそのなかで盛土から出土した遺物のポイントを掲載している。

墳丘面や盛土から多く出土したのは須恵器片である。須恵器片は墳丘中央部から北西側にかけて全部で252点確認され、色調・焼成・胎土から甕2個体、高坏2個体の破片と判断された。甕片は灰黄色を呈する甕(73-7)と緑灰色を呈する甕(73-8)で、いずれも墳頂部平坦面中央から北西側の表土や墳丘面で多く確認され、緑灰色を呈する甕は盛土内から9点出土している。また、緑灰色を呈する甕は墳頂部に破片の集積が確認されており、このような出土状況から破砕した甕を散布しながら盛土を行った可能性が考えられる。高坏(73-5)の破片も墳頂部北西側に散在している状態で、土師器の甕片は墳丘面南側の狭い範囲に点在していた。

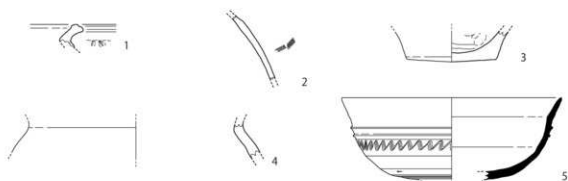
ほかに弥生土器が墳丘面と盛土(第69図23・24層)から出土している。特に墳丘東側の24層では掲載した弥生土器以外にも破片が出土し、墳丘築造の際に盛土内に混入したものと考えられる。



第71図 南外4号墳填丘面及び盛土遺物出土状況図



第72図 南外4号墳盛土出土遺物断面図



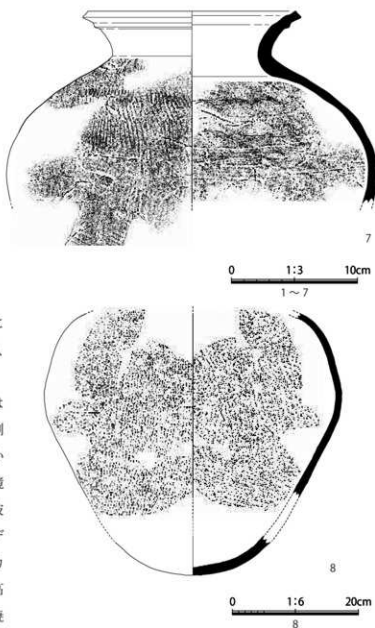
墳丘面及び盛土出土遺物

(第73図)

73-1～3は弥生土器で黄橙色を呈する。73-1は口縁がくの字状に屈曲する甕である。端部はわずかに拡張して凹線文を施す。頸部外面にわずかに指頭圧痕文帯の痕跡が残る。弥生時代中期後葉、松本Ⅳ-1様式と思われる。73-2は器壁の薄い甕の胴部片である。風化しているが外面にわずかにハケメが認められる。73-3は平底の底部で、底径7.0cmを測る。73-2・3は弥生時代中・後期と思われる。

73-4は土師器の甕である。内面にヘラケズリの痕跡が認められるが、外面は風化により不明である。

73-5～8は須恵器である。73-5は無蓋高坏の坏部で、口径17.4cmを測る。薄いつくりで、口縁部は緩やかに外傾している。口縁部と体部に2条の突帯が廻り、体部に櫛描波状文を施している。調整は回転ナデと底部外面に丁寧なヘラケズリ後カキメをしている。73-6は内湾する高坏の脚端部である。73-5と胎土や焼成が似ているため同一個体の可能性



第73図 南外4号墳墳丘面(一部盛土)出土遺物実測図

が考えられる。この高環は出雲1期新相である。73-7は灰黄色を呈する甕である。口縁部は緩やかに外反し、外面に1条の突帯が廻る。調整は、口縁部は回転ナデ、胴部外面に平行叩きを施し、内面は無文の当て具痕をナデ消している。甕の形状・焼成・胎土・色調からすると高環より古い様相を呈しているが、同じ墳丘面から出土していることを考えると出雲1期新相までこのような甕が残っていたものと思われる。73-8は緑灰色を呈する甕の胴部から底部で外面に軸がかかる。外面に叩き痕が認められ、内面は当て具痕をナデている。墳丘面から出土した遺物が出雲1期新相であることから、この甕も同時期の範疇におさまるものと考えられる。

第5項 周溝

規模・形態(第68図)

周溝は北西隅以外で検出している。前述したように、北西隅には幅1.0m、長さ約3.0mの陸橋状の構造が確認され、周溝はその両側から墳丘を廻るように掘られていた。周溝の幅は北西側が最も広く上端径3.6m、下端径2.0m、西側と南側は上端径2.25～2.65m、下端径1.4mを測りやや狭くなっている。周溝の断面はU字状を呈し、深さ50cmを測り、周溝底面の標高は33.1～33.3mで南西隅を最高所として北側に向かうほど低くなっている。

埋土(第69図)

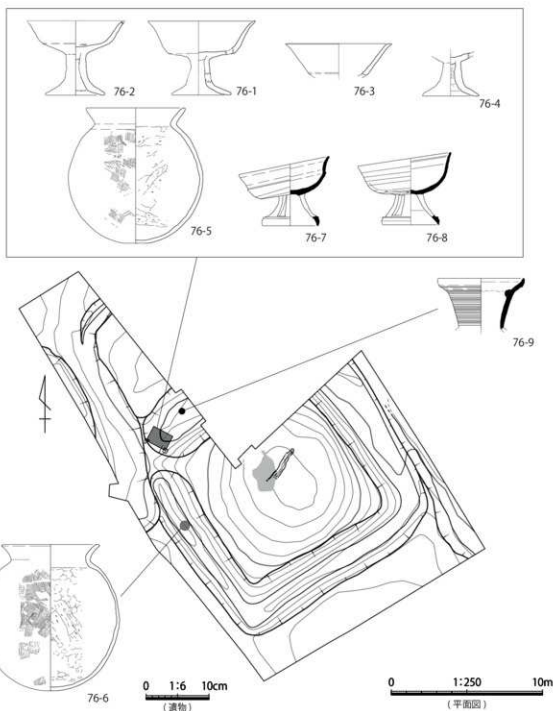
周溝には黒褐色土や褐色土、にぶい黄褐色土などが堆積していた。周溝底面に黒褐色土や褐色土が厚さ20～50cm程度堆積し、その上に黄褐色系の土層が堆積している。

遺物出土状況(第74・75図)

周溝北西側と西側の底面及び底面上の黒褐色土から土師器と須恵器が出土している。特に北西側の地山が陸橋状に掘り残されている近から、土師器の高環と甕、須恵器の高環がまとめて出土している。土師器の高環は破片で風化が進んでいたが、その場で壊れたような状況を呈していた。また、須恵器は高環が2個体出土しており、一個体(76-7)は坏部を下にして伏せた状態で脚部は壊れており、もう一個体(76-8)もその場で壊れたような状態であった。これらの高環は墳丘上から転落した可能性も考えられるが、坏部を下にしていることやその場で壊れたような状況であることからこの場所に置かれた可能性が高いと思われる。ほかに、周溝東側から壺の口縁部や西側の周溝底面から土師器の甕が出土している。周溝西側底面から出土した土師器の甕は、横倒した甕の上部が土圧により押し潰されたような状況であった。

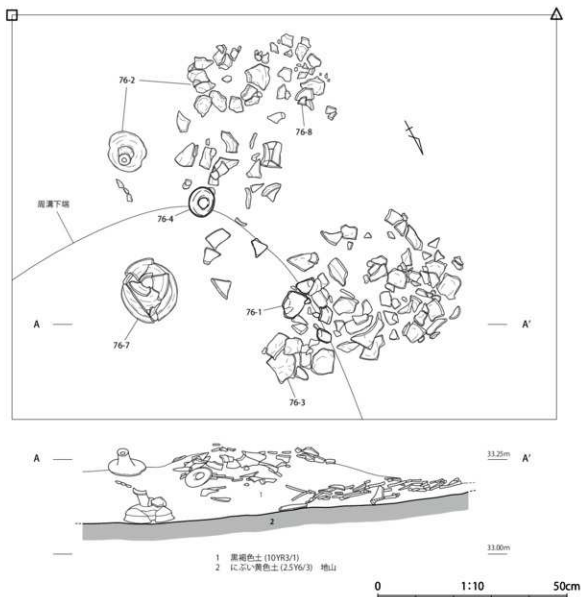
周溝出土遺物(第76図)

第76図の1～6は土師器、7～9は須恵器である。76-1の高環は胎土・色調・焼成・出土位置から同一個体と考えられる破片を合成して図化している。坏部底面から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、口径17.0cm、器高11.8cmを測る。器面の風化が著しく、内面にわずかにハケメが認められる。76-2は76-1と同様な形を呈するもので、底径9.3cmを測り、推定される器高は11.8cm、口径は15.3cmである。器面は風化しているが、坏底部内面にわずかにハケメが認められる。76-3は高環の坏部で、口縁は緩やかに外反して立ち上がり、外面にわずかに段がみられる。外面が暗灰色に変色し



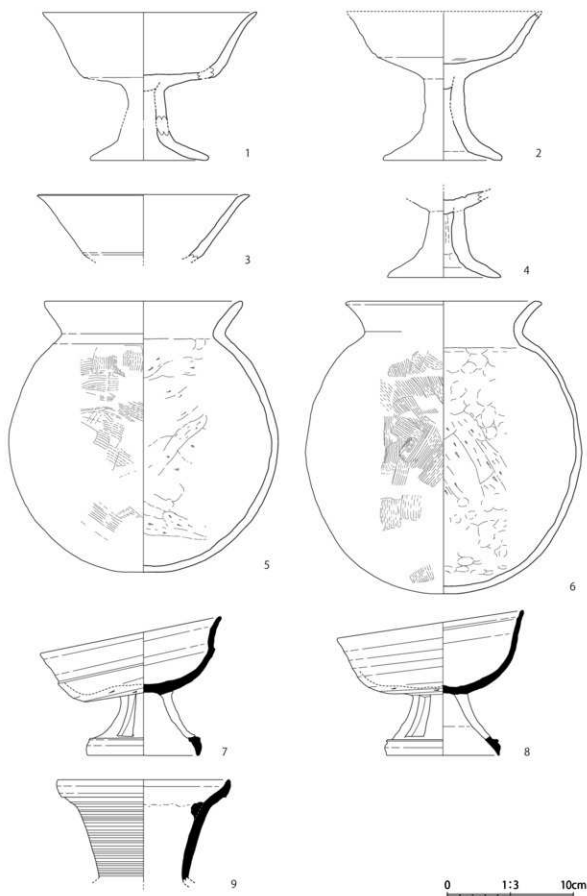
第74図 南外4号墳周溝遺物出土状況図

ている。76-4は高環の脚部である。底径9.0cmを測り、接合部に充填した粘土がみられる。これらの高環はいずれも橙色を呈する。76-1・2は出雲1期の須恵器と同じ時期とみられる高環で、古墳時代中期後半から後期前半頃と思われる。76-3・4も形が似ているため同時期の範疇に属すると思われる。76-5・6は単純口縁の甕である。76-5は、口縁が短く直線的に開き、調整は胴部外面に縦方向や斜め方向のハケメを、内面にヘラケズリを施す。76-6の口縁は外傾して立ち上がり、端部はやや外傾する平坦面を呈する。調整は胴部外面に斜め方向のハケメを、内面にヘラケズリと指頭圧痕がみられる。76-7・8は無蓋高環である。いずれも人為的か自然かはわからないが片方に傾いている。76-7は



第75図 南外4号墳北西側周溝遺物出土状況図

青灰色を呈し、口縁部と体部の境に段をもち口縁は外反する。脚部は方形の透かしを1段3方に入れ、内傾する脚端部の外面に突帯が廻る。口径14.5cm、器高8.8cmを測る。76-8は浅黄色を呈し、口径14.9cm、器高11.5cmを測る。口縁部と体部の間に76-7のような段はなく、丸みをもつ体部から緩やかに外反する口縁部となる。口縁端部内面にナデによる浅い沈線がみられる。脚部には方形の透かしを1段3方にいれ、外面に突帯が廻っている。これらの高環は坏部の形にやや違いは認められるが脚端部の形や透かしの状態からいずれも出雲1期新相に属するものである。76-9は壺の口頸部で、口径13.6cmを測る。口縁端部は内湾し、外面下端部に稜が廻る。頸部外面には丁寧なカキメを施している。外面から口縁部内側にかけて暗緑色の自然釉がかかり、口縁部内面の一部に粘土の溶着が認められる。須恵器の時期は出雲1期の新相に相当する。



第76図 南外4号墳周溝出土遺物実測図

第6項 主体部

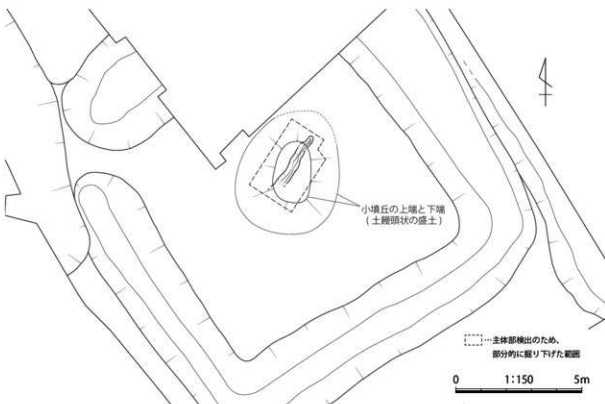
規模・形態(第77・78図)

4号墳の主体部は前述したように土饅頭状の盛土のなかの落ち込みを主体部として報告する。この落ち込みについては棺を据えて安定させるための坑との指摘もあるが、ほかに埋葬施設と思われる遺構を検出していないことや竈を行って埋葬した可能性が考えられることから主体部とした。

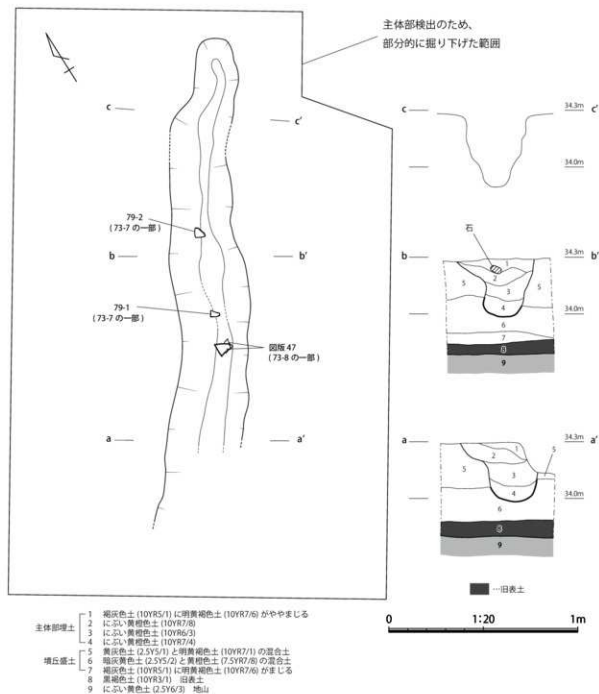
主体部は墳頂部平坦面の北西側に位置する。墳丘の完成後、墳頂部から墓壇を掘り込む墓壇ではなく、墳丘構築初期過程で埋葬を行う無墓壇の主体部である。土饅頭状を呈する小墳丘内で検出された主体部の規模は現況で長さ2.6m、幅25～40cm、深さ30～37cmを測り、棺は腐朽に伴い側面や上面が陥没して不整形な形状を呈していた。土層断面で木棺の痕跡は確認されなかったが、底面が弧状をわずかにとどめており例り抜き木棺と推測される。頭位方向は棺底の高さが北東側より南西側が若干高いことから南西側頭位と推定している。また、主軸方位はN-34°-Eを測り、方墳の対角を向く斜交主体部の傾向を示しており、単葬を意図したものと思われる。埋土は上層に褐灰色土に明黄褐色土が混じる土層、その下層ににぶい黄橙色土が堆積していた。

遺物出土状況(第78図)

遺物は主体部検出面から表片が4点出土している。これらの表片は胎土・焼成・調整から墳丘面や盛土から出土している第73図の7・8と同一個体で、主体部中央付近から73-7の破片2点が間隔をおいて、73-7の南西側で73-8の破片2点が重なって出土している。これらの表片は主体部検出面からの出土であるが、第69図土層断面C-C'、D-D'をみると盛土である第69図18層の下面にあたり、



第77図 南外4号墳主体部測量図



第 78 図 南外 4 号墳主体部実測図



第 79 図 南外 4 号墳主体部出土遺物実測図

盛土内に存在した破片が棺の腐朽に伴い盛土と一緒に落ち込んだと推察される。したがって、73-7の甕についても盛土を施す際に散布をした可能性が考えられる。

主体部出土遺物(第79図)

主体部から出土した甕片4点のうちの2点は73-8の甕と接合しているため、写真図版(写真図版47)のみに掲載して実測は行っていない。第79図に73-7の甕と同一個体と思われる破片2点の実測図を掲載した。

79-1は灰黄色を呈する甕片で、残存長5.0cmを測る。胴部外面に平行叩きを施し、内面は無文の当て具痕をナデ消している。79-2も灰黄色を呈する甕片で、残存長8.5cmを測る。内面に当て具の痕跡がわずかに認められる。

第7項 その他の遺構と出土遺物

ここでは、古墳の調査区北西側で検出した土坑(SX401)と南西側周溝外の緩斜面で検出した柱穴(SP401～404)、遺構外から出土した遺物について述べる。

1.SX401(第68・80図)

SX401は調査区北西端に位置し、墳丘を基盤とする遺構である。現状での規模は長軸1.0m、短軸52cm、深さ30cmを測り、北西側調査区外へと続いている。底面は南西から北東に向かって下がり、径12～27cmの角礫が6個検出された。遺構内には明黄褐色土や褐色土が堆積しており、遺物は出土していない。4号墳築造後の遺構とは考えられるが、明確な時期や性格は不明である。

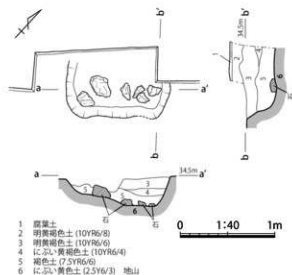
2.SP401～404(第68・81図)

南西側周溝外の緩斜面で4基の柱穴を検出した。柱穴の平面プランは円形や楕円形を呈し、規模は長径24～47cm、短径18～30cm、深さ4～53cmを測る。大きさと深さは様々で、柱穴の位置や距離に規則性もないため建物跡に伴うものとは考えにくい。遺物は出土していないため、時期は不明である。

3.遺構外出土遺物(第82図)

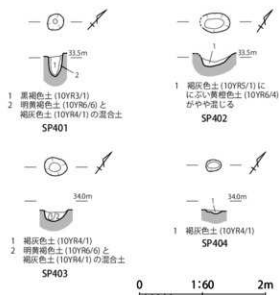
第82図に遺構に伴わない遺物を掲載した。それぞれの遺物は、82-1・7は旧表土、82-2・3は調査区南東隅の周溝外の緩斜面、82-4・8は調査区北西側周溝外の緩斜面、82-5・6は墳頂部の攪乱土から出土している。

82-1～3は弥生土器である。82-1は甕の口縁部である。口縁端部を上下に拡張し、側面に凹線文を施す。82-2はくの字状に屈曲する口縁部をもつ。端部は上下にやや拡張して側面にわずかに凹線文の痕跡が残る。頸部直下に直径5mmの円孔が穿たれている。82-3は口径14.0

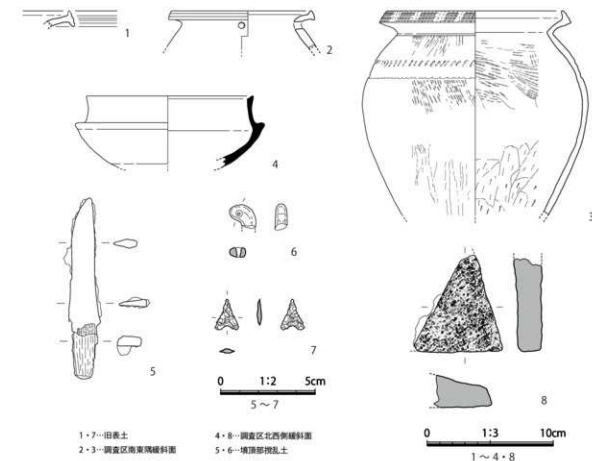


第80図 南外4号墳SX401実測図

cmを測る裏である。口縁部はくの字状に屈曲し、端部は上に拡張して凹線文を廻らせ刻目を施している。胴部上半には列点文を廻らせている。胴部の調整は、外面にヘラミガキとハケメを、内面にヘラケズリとハケメを施している。82-1～3は弥生時代中期後葉、松本Ⅳ-2様式に属する。82-4は須恵器の坏身で、口径13.1cmを測る。口縁部の立ち上がりは高く、端部に段をもつ。古墳時代中期後半、出雲1期新相である。82-5は刀子で、全長9.6cm、茎長3.0cm、元幅1.9cmを測る。茎に木質が残り、刃間と棟間が認められる。古墳時代後半期のものと思われる。82-6は勾玉の破片である。瑪瑙製で片面穿孔をしている。古墳時代後期と思われる。82-6・7は墳頂部南西側の攪乱土から出土しており、攪乱が主体部まで達していることから副葬品の可能性が高い。82-7は黒曜石の石鏃である。82-8の石製品は、表面と側面に細かな擦痕が認められる。



第81図 南外4号墳 SP401～404実測図



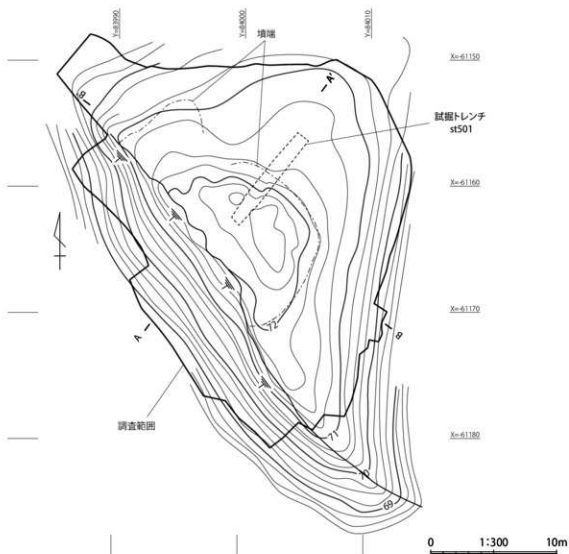
第82図 南外4号墳遺構外出土遺物実測図

第4節 南外5号墳(第83・85図)

南外5号墳は墳頂部標高72.5mを測り、本古墳群のなかで最高所に位置する。尾根筋の南東側下方に南外3号墳が、北東側尾根筋に南外1号墳が所在する。また、南東側には茶白山が眺望される。

平成14年度に行われた試掘調査(st501)により盛土が確認され、当該地に古墳が存在することが想定されていた。調査前から古墳の約半分、南西側から西側はすでに削平されており急斜面を呈していた。立木の伐採後コンタ測量及び地形測量を行い、残存する墳丘の中央で十字に交差する土層観察用の畦(A-A'・B-B')を設定して土層観察を行い、同時に表土掘削から調査を始めた。表土掘削後に精査を行うと周溝・墳丘・石室が検出されたが、既に墳丘や石室の上半は失われていた。調査区南西側の斜面下方には石室と同じ石材70個余りが集積(第85図参照)されたような状況で検出された。

南外5号墳は当初、周溝が南東側から北西側にかけて弧状に検出されたことから円墳と考えられた。しかし、土層観察により北西側の周溝としていたところは後世の溝状の遺構であることが判明し、さらにその遺構の南側(墳丘側)にもう1条の溝状の落ち込みが確認された。これらの遺構は調査後に



第83図 南外5号墳調査前地形測量図

検討を行った結果、周溝及び墳丘を掘り込んでいることから古墳築造に伴わない遺構と考えられ、性格不明の遺構(SX502・503)として扱うこととした。最終的に南外5号墳は帆立貝形古墳(短小型前方後円墳:以下、短小型前方後円墳と記述する。)で、主体部の大半は壊されていたが横穴式石室と考えられた。

また、南外5号墳では調査の過程で石室・盛土・旧表土・旧表土下の土層から石器が複数出土している。この石器は旧石器と考えられることから注目され、第7項で詳述する。

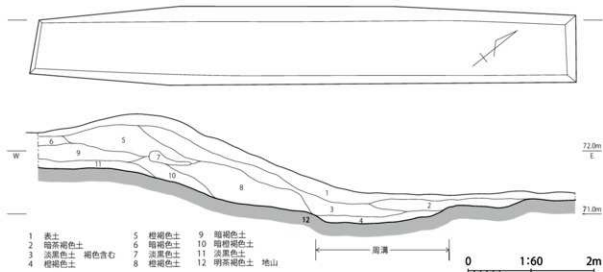
遺構は他にSX502の検出面から性格不明の土坑や古墳周辺から加工段や竪穴建物跡が検出された。

第1項 試掘トレンチ(st501)(第84図・表9)

調査区中央付近で北東から南西方向に設定した長さ8.7m、幅1.2mのトレンチである。表土下約1.0mの深さで地山を検出し、遺物は検出されなかったが橙褐色土・暗褐色土・淡黒色土などの人為的な盛土(5～11層)と周溝が確認された。

表9 試掘トレンチ(st501)

トレンチ	トレンチ位置	トレンチ 設定方向	設定範囲 (長軸×短軸)	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
st501	5号墳 北東側	北東—南西	8.7m×1.2m	10.4㎡	1.0m	墳丘	—



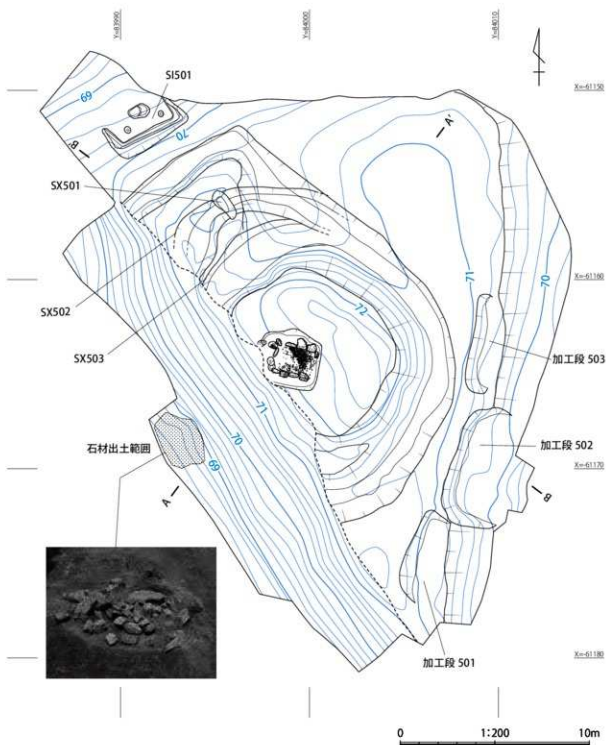
第84図 南外5号墳試掘トレンチ(st501)実測図

第2項 墳丘の規模・形態(第85図)

南外5号墳は短小型前方後円墳である。墳丘の南西側から西側は後世の削平により失われ、また、墳丘くびれ部から前方部の一部は後世の遺構(SX502・503)により掘削され原形を留めていない。墳丘の規模は現状で全長18.5m、前方部長5.5m、後円部長13.0m、周溝を含めると21.5mを測る。前方部を北西側に向け、主軸はN-40°-Wである。外堤や葺石などの外表施設は認められなかった。

第3項 墳丘・石室の築造(第86・87図)

後円部の墳丘は盛土により築造され、盛土下に旧表土が確認される。後円部の盛土の高さは現状で最大 1.0m を測る。前方部も同じように墳丘の築造を行ったと考えられるが、前方部では旧表土の上に墳丘の流失土と思われる土層(6層にぶい褐色土)が厚く堆積しているのみで盛土は確認されなかった。



第 85 図 南外 5 号墳遺構配置図

南外5号墳の築造については、周溝の掘削、盛土、横穴式石室の構築があげられ、土層断面で横穴式石室の構築と墳丘中心部の盛土が対応して行われていたことは判断される。石室床面の礫敷きは土層断面から腰石設置後と判断され埋葬までに行われたとは考えられるが、下記に述べる第2段階なのか第3段階なのかは不明である。また、周溝掘削は第3段階までに行われたと考えられる。

以下では畦の土層断面と石室の断面から考えられる古墳築造の工程について述べる。

第1段階

旧表土面(標高71.9m)の整地を行い、石室を構築するために旧表土を約30cm程度掘り込んで石室床面を造る。この掘り方は石室の実測図から腰石の高さと同程度の深さである。

第2段階

石室床面にさらに腰石を据える場所を掘削して腰石を据える。腰石の裏側に61層を裏込めして固定させる。

第3段階

腰石の上方に石を積み上げ、壁体の間や背後に裏込めを行うと同時に周囲に盛土(57～60層)を施す。土層断面をみると、小墳丘が外側に広がっていく状況がみられ55・56層を盛土した後に48～54層を施しており、石室の構築に伴い段階的に盛土を行ったものと考えられる。土層断面をみると、墳丘の端部に黒色土の土塊⁽²⁾を積んで土留めとし、その内側に明黄褐色土や褐灰色土など土質の違う土層を盛土している。この土塊は直径30～40cm、厚さ約20cmを測り、墳丘の端部を廻るように置かれていた。

第4段階

さらに盛土を施して古墳を完成させる。この際にも第3段階と同じように盛土を行う際に墳丘の端部に土塊を積み、その内側に橙色土・明褐色土・褐灰色土などの盛土を施している。第3・4段階では土塊の内側に盛土を水平に施している。

第4項 周溝

規模・形態(第85・86図)

周溝は後円部から前方部にかけて広さを増し、盾形の平面形を呈する。規模は、前方部は上端径1.3m、下端径1.0m、深さ20cm、後円部は上端径1.5～2.2m、下端径0.6～1.2m、深さ20～30cmを測り、断面形は緩いU字状を呈する。底面標高は前方部の南東側で70.4m、後円部の南側で71.2mを測り、南東側が一番低い。

埋土(第86図)

周溝には黒褐色土やにぶい黄褐色土などの土層(第86図23～26層)が20～30cmの厚さで堆積していた。

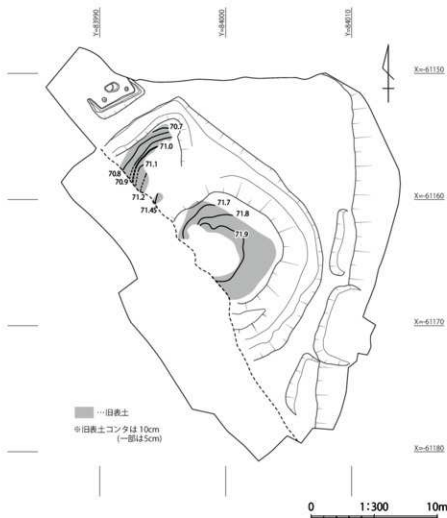
遺物出土状況(第88図)

遺物は、墳丘のくびれ部周辺から土師器・須恵器・石鐏が出土している。特に前方部側に多く、須恵器の有蓋高环(89-5～7・9)・环蓋(89-3)・埴瓶(89-10)がまとめて出土している。これらの土器

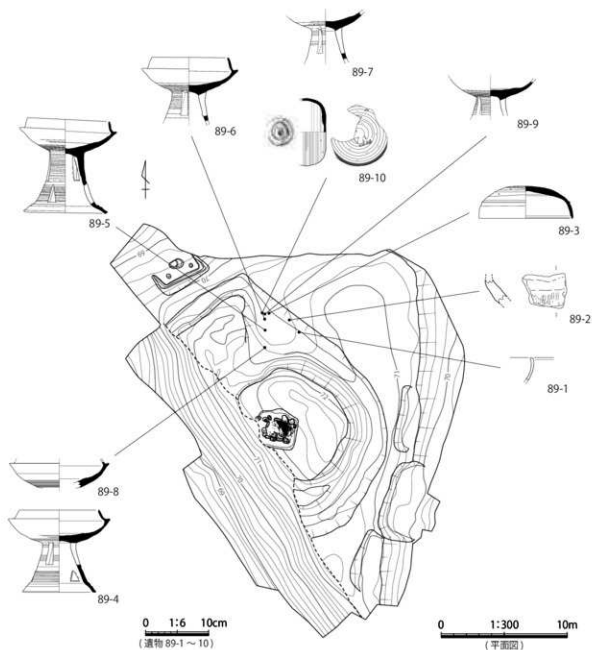
は周溝底面からではなく、周溝埋土26層上面から出土し、その場で壊れたような状況を呈していた。近くの前方部に据えられたものが落ちて壊れた可能性も考えられるが、破片がまとまっていることからするとその場にあったものが壊れた可能性の方が高いと思われる。また、出土土層から、周溝完掘後すぐの遺物ではなく、ある程度の時間の経過が想定される。ほかに墳丘のくびれ部から有蓋高環(89-4・8)と後円部側から土師器や石甕が出土している。

周溝出土遺物(第89図)

89-1・2は土師器である。89-1は碗状を呈する環の口縁部である。器壁は薄手で、淡褐色を呈する。古墳時代中期後半に属するものと思われる。89-2は甕の胴部片である。器壁は厚く、外面にハケメを施す。89-3～10は須恵器である。89-3は坏蓋で、口径14.7cm、器高5.1cmを測る。天井部と口縁部の境は沈線とナデによる段が廻り、口縁端部内面は段状に仕上げている。調整は、外面の天井部に丁寧なヘラケズリを、内面に回転ナデと静止ナデを施す。89-4～9は有蓋高環である。若干の個体差はあるもののほぼ同様な形態と手法をとっている。89-4・5は脚筒部中段に凹線を廻らせ、その上下に2段3方向の三角形の透かしを入れている。脚筒部と脚裾部の境は段と稜で区切られ、脚裾部は甕の口縁部を逆転させたような形を呈している。坏底部と脚筒部の外面にはカキメがみられる。調整は回転ナデや静止ナデで、坏部内面は特に丁寧に仕上げナデを行っている。法量は、89-4は口径12.6cm、器高13.0cm、89-5は口径12.9cm、器高15.2cmを測り、89-4がやや小型である。89-6は口径12.0cmを測る。坏底部外面にカキメを施し、坏部と脚部の接合部に3方に透かしを入れた痕跡がみられる。89-7は坏底部から脚部上半である。外面にカキメが認められるが、坏部のカキメは他の



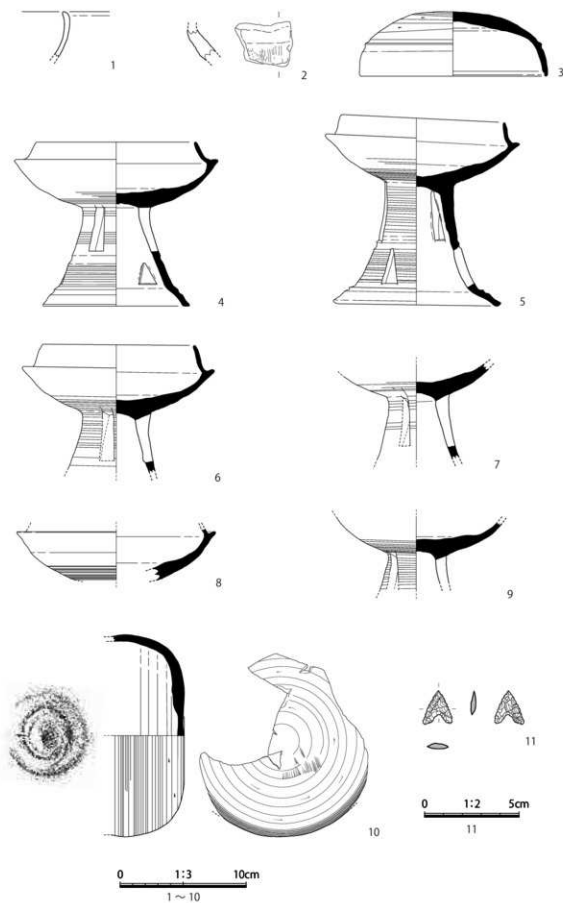
第87図 南外5号墳旧表土検出面測量図



第88図 南外5号墳周溝遺物出土状況図

ものと比べるとやや丁寧さを欠いている。89-8は坏部で、受部径は15.8cmを測る。外面下半にカキメを施す。89-9は坏底部から脚部上半である。3方向に三角形の透かしを入れ、坏底部から脚部外面にカキメを施している。89-6～9も坏部内面に丁寧な仕上げナデを施している。89-10は堤瓶の背面部である。背面の外面に丁寧なヘラケズリを、側面にカキメを施している。内面の背面中央にスタンプ状の痕跡が認められ、それを消すように丁寧な回転ナデをしている。これらの須恵器は出雲2期と考えられる。ただし、有蓋高坏の口縁端部に段がみられないため、出雲2期のなかでも新しい様相が認められる。

89-11は黒曜石の石鐏である。最大長1.8cm、最大幅1.5cmを測り、混入品と思われる。



第89図 南外5号墳周溝出土遺物実測図

第5項 主体部(第90図)

南外5号墳の主体部は南東側から北西側に向かって開口する横穴式石室である。主体部の大半は後世の攪乱または削平により壊され、石室の左側壁と奥壁の一部、右側壁の腰石が残存しているのみである。また、羨道も一部しか残っていない。

石室内には攪乱土と思われるやわらかい土層(第90図A-A'・B-B'2層)が堆積し、その土層から須恵器や土師器の破片が出土している。

石室の構築については古墳の築造のところで述べたが、旧表土を約30cm程度掘り下げて石室の掘り方を造り、次に腰石の掘り方を掘削して腰石を据え、さらに石を積みながら側壁を造っている。石室左側壁と奥壁の配置や腰石の掘り方の状況から、奥壁の腰石を据えた後に側壁の腰石を置き、袖石を設置したと考えられる。

石室の規模・形態

玄室の規模は、内法で奥行2.07m、幅は奥壁側で1.35m、玄門側で1.38mを測り、平面形は長方形を呈する。主軸方位はN-76°-Wで、墳丘の右ぐびれ部方向に開口していたと推測される。

石室の両側壁にはそれぞれ4個の腰石が置かれていて、右側には自然石を、左側壁には加工を施した石を据えており左右の壁面が異なる様相を呈している。腰石の大きさは幅42～60cm、高さ20～45cm、厚さ20～30cmを測る。右側壁の奥壁側の石は石室内側に傾き、左側壁の玄門側の石は袖石側に動いており原位置を留めていない。左側壁は腰石の上に自然石を積み、裏込めと控え積みを施している。やや内傾しているため若干動いていると思われる。

奥壁は右側壁側に1個の腰石が残存していた。ほかに2個の掘り方がみられることから奥壁には3個の腰石が据えられていたようである。

玄門部には両袖となる袖石の一部と抜き取り痕、榫石の痕跡が確認された。左袖側には径47cm、深さ32cmの掘り方に高さ45cm、最大径45cmの袖石が残存していた。右袖石の掘り方は最大径44cm、深さ20cmを測り、やや左側より浅いが同程度の袖石が置かれていたものと思われる。両袖石の心々距離は95cmを測る。両袖石の間に長さ50cm、幅18cm、深さ4cmの榫石の抜き取り痕が確認された。両袖で榫石を伴うことから、九州系の両袖式横穴式石室と考えられる。

羨道は玄門から北西側に1.3m残存し、床面は若干玄門側が低い。

床面

玄室には径5cm前後の円礫が敷かれており礫床と考えられる。円礫は腰石の掘り方から検出していないため、腰石を据えた後に整地土(灰黄色土:第90図A-A'・B-B'11層)を施して礫を敷いている。現状で円礫は奥壁から左側壁側で1.4m、右側壁側で50cm付近までは密にみられるが玄門側では疎であり、玄室内の攪乱土から円礫が出土していることからすると、玄門側の円礫は攪乱を受け失われたものと思われる。

遺物出土状況(第91図)

遺物は攪乱土や床面のほか、礫床の円礫と土層を水洗した際に検出され、須恵器・玉製品・金属製品・石製品が出土している。第91図に石室床面から出土した遺物の位置と水洗した円礫や土層から検出

された遺物を掲載している。床面から出土した須恵器はいずれも破片で、なかには攪乱土から出土した破片と接合したものもあり原位置を留めているとは言い難い。勾玉(92-7)は玄門側の左側腰石内側から胴部が、左袖石近くの原位置を留めていない腰石の下から出土した頭部が接合しており、攪乱を受けた際に壊れ、腰石の下に入り込んだものと思われる。

礎床の礫や土層から須恵器片(92-22)・金属製品(92-8～16)・玉製品(92-16～20)のほか石製品(92-23～26)が検出された。金属製品や玉製品は古墳に伴う遺物と考えられるが、須恵器(92-22)と石製品(105-6)は表面が丸みをおびて滑らかで風化が進んでいるため、おそらく別の場所から礫と一緒に持ち込まれた可能性が考えられる。黒曜石の石鐮や玉髓のスクレーパーは混入品である。そのなかの玉髓の石製品(105-6)については第7項で盛土や旧表土などから出土した石器と一緒に詳述する。

ほかに腰石の裏込め土から縄文土器(92-21)が出土している。この土器は石室構築の際に混入したもので石室内からの出土ではないが、石室に伴う出土遺物のなかで掲載して記述する。

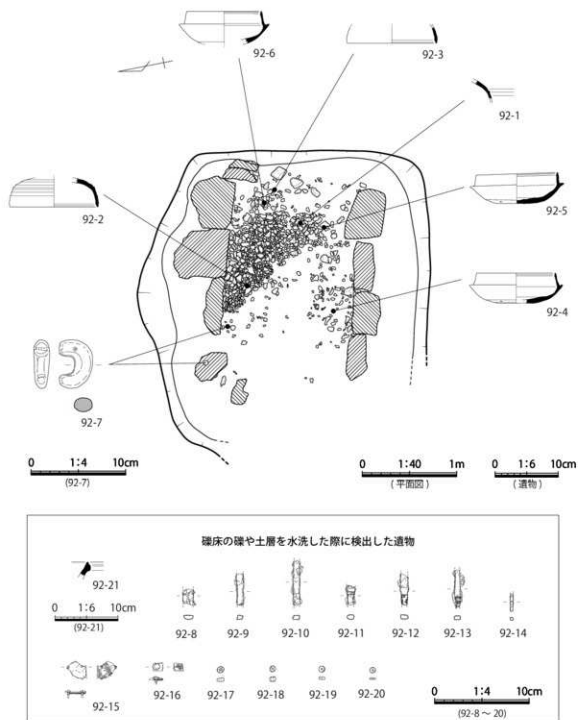
石室に伴う出土遺物(第92図)

第92図は石室や腰石の裏込め土から出土した遺物である。92-1～7は床面出土遺物、92-8～25は礎床の礫や土を水洗した際に検出した遺物で混入品と考えられる。92-26は裏込め土から出土した縄文土器である。

92-1～6は須恵器である。92-1は坏蓋である。口縁部と天井部の境にナデによる稜が認められる。内面は非常に滑らかで風化しているため混入品と考えられ、礫を敷く際に持ち込まれたものかもしれない。92-2の坏蓋は口径13.8cm、器高4.5cmを測る。口縁部と天井部の境はナデと沈線による稜をもち、天井部にむけて丸みをおびている。口縁端部内面は段状を呈する。92-3は坏蓋の口縁部である。口径14.0cmを測り、端部内面は段状である。92-4～6は坏身である。92-4は口径15.3cm、受部径13.8cm、器高5.0cmを測る。器壁は薄く、体部のやや浅いものである。立ち上がりは2.1cmを測り、口縁端部内面は段状を呈する。92-5は口径12.8cm、受部径14.8cm、器高4.9cmを測る。立ち上がり直線的で、高さは92-4に比べると1.8cmとやや低い。92-6は、口縁部が92-4と同様な形を呈するもので、口径12.0cm、受部径14.3cmを測る。立ち上がりは2.1cmと高く、器壁は薄手である。これらの蓋坏は出雲2期に相当する。92-7は碧玉の勾玉で、最大高5.2cm、最大幅1.9cm、孔径4mmを測る。コの字状を呈し、穿孔方法は片面Ⅱe⁽³⁾類である。古墳時代後期の所産と考えられる。

92-8～14は長頸鐮の破片である。いずれも笠被部や頸部で鐮身部は検出されていない。茎部の破片には木質や糸巻の痕跡がみられる。92-15は現状での最大幅2.0cm、厚さ2mmの鉄製品である。片面に木質または樹皮が付着している。径2mmの円柱状の鉄が1.5cmの間隔で打たれているのが確認され、片側が先細りになっていることから銚頭はないが銚と思われる。92-16は現状での最大幅1.0cm、厚さ2mmの鉄製品で、銚頭径7mmの銚が打たれている。銚頭の反対面に木質がみられる。92-15と16は接合はしないが、同一個体と考えられ、鉄板の厚さや銚の大きさから刀や短甲の破片とは考えにくく、また、片面に木質や樹皮の痕跡が認められることから、鞆金具などの盛矢具の一部、あるいは辻金具や革帯金具などの馬具(装具)の一部と考えられる。⁽⁴⁾

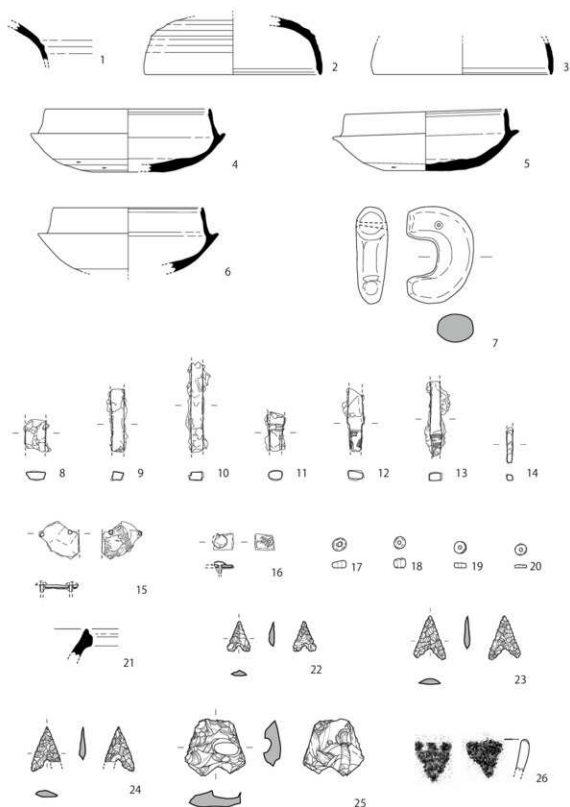
92-17～20は玉製品である。92-17・18は青色を呈するガラス製の小玉である。92-17は最大径7.5



第 91 図 南外 5 号墳石室遺物出土状況図

mm、厚さ 4mm、92-18 は最大径 6mm、厚さ 5mm を測る。92-19・20 は滑石製の白玉である。92-21 は甕または埴瓶の口縁部である。外面は台形状を呈し、端部は上方に摘み上げるようにして丸くおさめている。内外面共に滑らかで風化している。

92-22～24 は黒曜石の石鏃、92-25 は黒曜石の残核または二次加工の剥片である。92-26 は奥壁左側の腰石の裏込め土から出土した縄文土器である。風化しているが口縁端部に刻み目が施され、縄文時代晩期の深鉢と思われる。



※ 1～20…石室床面
21～25…混入品か
26…石室裏込め土

0 1:3 10cm
1～6・21・26

0 1:2 5cm
7～20・22～25

第92図 南外5号墳石室及び裏込め土出土遺物実測図

第6項 その他の遺構と出土遺物

南外5号墳では古墳以外に竪穴建物跡1棟(SI501)・加工段3基(加工段501～503)・性格不明の遺構(SX501～503)が検出された。SI501は調査区北西端に、加工段は南東側斜面に位置し、3基の加工段が南西側から北東側方向にみられる。SX501・502は墳丘くびれ部から前方部で検出された遺構で、土層断面から墳丘築造後の後世の遺構と考えられる。

ほかに遺構に伴わない遺物として調査区南西側斜面の堆積土から出土した遺物を掲載する。

1.SI501(第93図)

規模と形態

SI501は調査区北西斜面で検出した竪穴建物跡で、検出標高は70.0mを測る。建物跡の北側は削平され、北西側は斜面となっている。コの字状に壁体が残存し、その壁際に幅20～30cm、深さ2～5cm程度の壁隙溝がみられる。柱穴は床面の南東側で2基検出され、その柱穴の間から浅い中央ビットと思われる落ち込みが検出された。柱穴の大きさは径が18cm、深さ12cm・16cmを測り、浅いことから削平されていると思われる。中央ビットは長径1.1m、短径56cm、深さ5cmを測り、埋土から炭がやや出土している。遺物は床面から土師器と思われる破片が出土している。SI501は建物跡が方形を呈することや出土遺物から古墳時代と考えられるが詳細な時期は不明である。

SI501出土遺物(第94図)

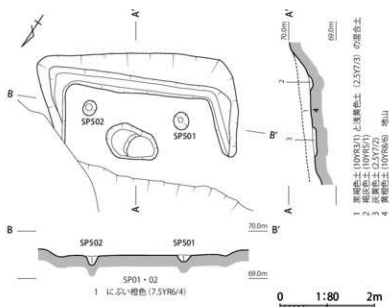
94-1は土師器片で器種や時期は不明である。

2.加工段501(第95図)

規模と形態

加工段501は調査区南東側斜面に位置し、検出面標高は71.3mを測る。南北6m、東西2.2m、平面形はL字状を呈している。段の高さは30cmを測り、黒褐色土やにぶい黄褐色土が堆積していた。ビットや溝は検出されなかった。

遺物は、土師器が黒褐色土(2層)から、弥生土器がにぶい黄褐色土(3層)から出土しており、古墳時代以降の加工段と考えられる。



第93図 南外5号墳 SI501 実測図



第94図 南外5号墳 SI501 出土遺物実測図

加工段501出土遺物

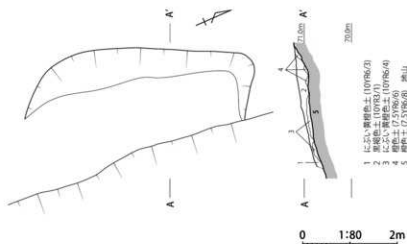
(第96図)

96-1～3は弥生土器である。96-1は壺の頸部と思われる。薄手で、外面にハケメを施している。96-2は壺・甕類の胴部片である。外面に丁寧なヘラミガキを施し、内面にハケメがみられる。96-3は底部で、外面にヘラミガキを施し、内面は丁寧なナデをしている。これらの弥生土器は中・後期に属するものと思われる。96-4は土師器で壺か甕の口縁部と考えられるが時期は不明である。

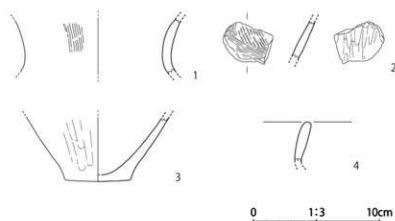
3.加工段502(第97図)

規模・形態

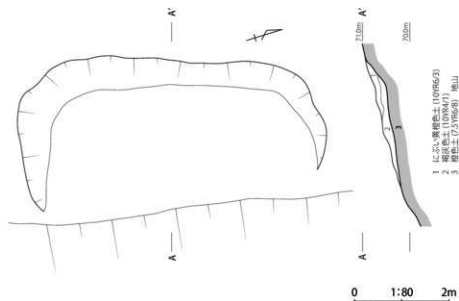
加工段 502 は加工段 501 の北東側に隣接し、平面形はコの字状を呈する。規模は南北 6.56m、東西 3.2m、段の高さは 40cm を測り、検出面標高は 70.9m を測る。遺構内には、にぶい黄橙色土や褐灰色土が堆積していた。ビットや溝は確認されなかった。遺物にはにぶい黄橙色土(1層)から土師器片が出土している。



第95図 南外5号墳加工段501実測図



第96図 南外5号墳加工段501出土遺物実測図



第97図 南外5号墳加工段502実測図

加工段502出土遺物(第98図)

98-1は土師器片である。内面にわずかにヘラケズリの痕跡がみられることから、壺か甕の胴部片と思われる。

4.加工段503(第99図)

規模と形態

加工段503は、加工段502の北東側に位置する。平面形はコの字状を呈し、規模は南北5.28m、東西1.68m、段の高さ36cmを測る。検出面標高は71.0mである。遺構内には褐灰色土が堆積しており、遺物は出土していない。ピットや溝などは確認されなかった。

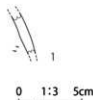
5.SX501(第100図)

SX501は墳丘のくびれ部に位置し、後述するSX502の埋土を掘り込んでいることから、SX502より新しい。平面形は不整形な楕円形を呈し、主軸方位はN-40°-Wである。検出面標高は71.06~71.26m、規模は長径1.1m、短径53~58cm、深さ22cmを測る。遺物は出土していないため時期は不明である。

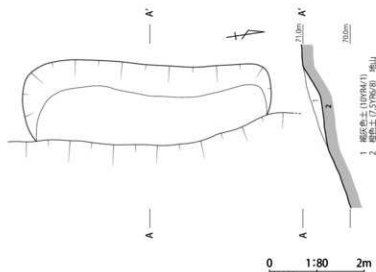
6.SX502(第101図)

規模と形態

SX502は墳丘のくびれ部に位置する。当初、南外5号墳の北側周溝としていた溝状の落ち込みで、北東から南西に向かって弧状を呈している。遺構は第86図の土層断面から後述するSX503に土層が堆積した後、SX503北側の上端を切るように掘られているため、SX503より新しい遺構である。検出面標高は南西側で71.3m、北東側で70.95m、規模は長さ約10.0m、幅1.4~2.4m、深さ15~30cmを測る。底面標高は南西側で71.0m、北東側で70.7mを測り、南西側から北東側に向かって傾斜している。遺物が出土していないため時期は不明である。



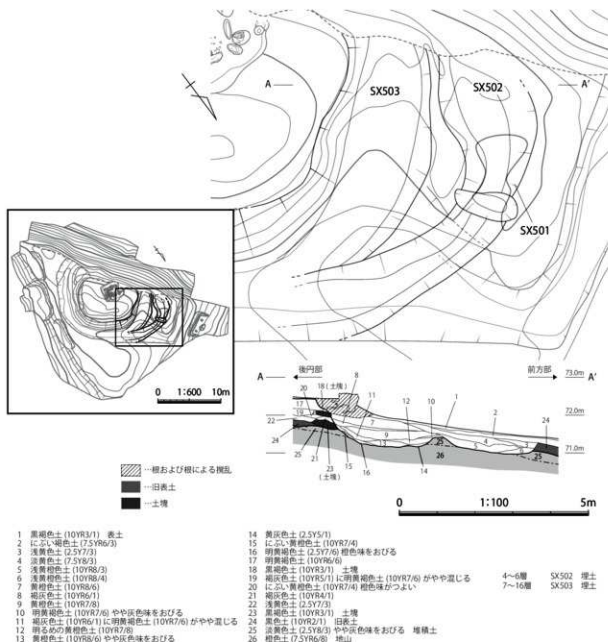
第98図 南外5号墳
加工段502出土遺物実測図



第99図 南外5号墳加工段503実測図



第100図 南外5号墳SX501実測図



第101図 南外5号墳SX502・503実測図

7.SX503(第101図)

規模・形態

SX503はSX502の南側に位置する。後円部北側に沿うように弧状を呈する溝状の落ち込みである。検出面標高は71.46～70.76m、規模は長さ約7.0m、幅2.2～3.2m、深さ47～20cmを測る。底面標高は南西側で71.3m、北東側で70.7mを測り、南西側から北東側に向かって傾斜している。遺物は埋土上層、黄褐色土(7層)から高環の脚部が出土している。

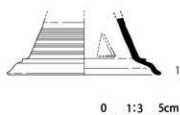
SX503出土遺物(第102図)

102-1は高環の脚部である。脚筒部と脚裾部の境は段と稜線で区切られ、脚裾部は大きく内湾して開き、端部は丸みをおびる。外面にカキメを施し、調整は回転ナデである。この高環の脚部は周溝出

土の有蓋高環と同じ形や手法を呈し、胎土・色調・焼成も似ていることから、有蓋高環の脚部と考えられ、時期は出雲2期である。

SX503の性格

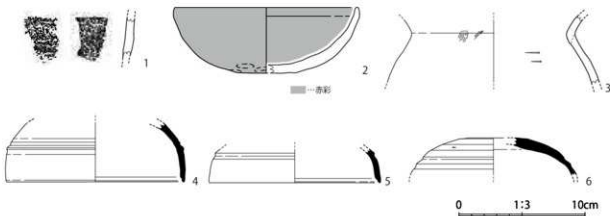
SX503は、調査時には位置や遺構の南西側端が主体部の浅道付近につながる可能性があることから墓道を想定していた。しかし、墓道とした場合、なぜ浅道に直接つながる方向ではなく北側から回り込むような道なのかという疑問が生じてしまう。また、出土した高環は遺構埋土上層、検出面に近い場所からの出土であり、遺構が埋まる際に混入したものと考えられる。したがってSX503は古墳に伴う遺構の可能性は低く、現状では性格は不明である。ただ、SX503については調査時から様々な見解が示されており、今後の検討を要する遺構である。



第102図 南外5号墳 SX503
出土遺物実測図

8. 遺構外出土遺物(第103図)

ここでは調査区西側の表土及びにぶい黄橙色土(第86図2層)と旧表土から出土した土器を遺構外出土遺物として取り扱う。にぶい黄橙色土から出土した遺物は石室南西側斜面で検出され、石室が攪乱を受けた際に落ちたものである。103-1は旧表土、103-5は表土、それ以外はにぶい黄橙色土から出土している。103-1は縄文土器で、内外面にナデを施している。細片のため時期は不明である。103-2は口径14.6cm、器高5.2cmを測り、碗状を呈する土師器の坏である。橙褐色を呈し、やや厚手で内外面に朱を施している。調整は内外面共にナデで、底部外面に指頭圧痕が認められる。古墳時代中期後半と思われる。103-3は土師器の甕で、黄橙色を呈する。器壁は薄く、風化しているが、内面にヘラケズリ、外面にハケメの痕跡が残る。103-4～6は須恵器の坏蓋である。103-4は口径14.0cm、器高4.7cmを測る。口縁部と天井部の境はナデによる稜をもち、口縁端部内面は段状を呈する。調整は内外面共に回転ナデである。103-5は口径13.0cmを測る。口縁部と天井部の境は段を呈し、口縁端部内面は段状である。103-6は天井部から口縁にかけての破片である。天井部のヘラケズリは丁寧で、境にはナデにより稜を施している。これらの坏蓋は石室から出土したものと形や手法が同じもので、出雲2期に属すると思われる。



第103図 南外5号墳遺構外出土遺物実測図

第7項 南外古墳群出土の石器(玉髓)について

南外5号墳の調査では主体部・盛土・旧表土(第86図65層)・旧表土下の淡黄色土(第86図66層)から玉髓の石器が14点出土している。本項ではこの石器の様相を示し、第7章総括 第1節においてその性格について詳細に触れてみたい。

出土状況(第104図)

南外5号墳を調査している過程で、盛土内や周溝堆積土などから玉髓の剥片が数点出土していた。当初は断片的な資料として取り上げられてきたが、前方後円墳と判明し、前方部を掘り下げていく過程で、盛土下の旧表土の下に堆積している淡黄色土(第86図66層)から石器が出土した。しかも、至近距離で数個の石器が出土し、それらが接合することが明らかになった。この時点で古墳盛土や周溝から出土していた剥片も、古墳の周溝を削平する過程で掘り上げられ、盛土に混入したものと推察されるに至った。よって、これらの石器群を「南外5号墳出土石器群」として一括して扱うこととする。ただし、後述するようにすべてが同一石器群とすることに躊躇する資料もあるが、この点については以下個別石器の記述で触れたい。

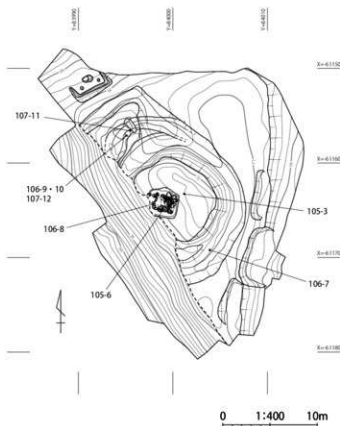
石器(第105～110図)

14点の石器と1点の原石が出土している。このうち4点が接合する。またやや大型の石核と節理に沿って割れた断片が接合する。いずれも玉髓製で、個体により色調や透明感にはばらつきがある。

剥片等(第105・106図)

105-1は透明感のない黄褐色でグラデーション状に赤褐色を呈す玉髓製の二次加工のある剥片である。打面は平坦な剥離面で、先端は折れている。両側面にはわずかながら石核の剥離面が残されており、石核の作業面の上下端まではがした剥片である。背面は腹面と同一方向の剥離面と礫面で構成される。腹面の下縁側に平坦剥離による二次加工が、打面を切るように背面から施されている。

105-2は暗褐色基調に赤褐色や褐色が縞状に混合する玉髓製の剥片である。打面は礫面で、下端部も礫面が残っているため、上下が礫面の石核から剥がされたものである。腹面は打面の端部を打点としており、腹面は下方に向かって波状の凹凸が見られる。端部を打っているため、側面や背面の一部に狭小な剥離を生じて



第104図 南外5号墳石器出土位置図

いる。背面は大きなポジティブな面にネガティブな剥離面が見られ、石核の作業面がポジ面だったことがうかがえる。

105-3は濃緑色から灰色がかった暗緑色を呈し、わずかに透明感がある瑠璃質がかった玉髓製剥片である。広い剥離面に小さな打点から打ち剥がしたもので、打点から割れ円錐を呈し、周囲に向かっては不規則で凹凸の強い面をなす。背面側は3面の剥離面で構成されるが、これらも凹凸がひどく、元の石核形状が察しづらい。

105-4は褐色、暗褐色、灰褐色などが縞状を呈す石核14から節理に沿って割れた玉髓製石核断片である。背面と片側面は風化度合いから見て礫面と判断した。A面に腹面から急角度の二次加工が見られ、先端が鋭角になっている。なお、側面の剥離面は打面が近いものとみられるので、石核とみることもできる。

105-5は褐色、黒色、暗褐色、灰褐色などが縞状を呈す玉髓製の、二次加工のある剥片である。打面は平坦な剥離面で、腹面は全体的に湾曲度が高い。側面の片側は切断されており、そこを打面に反対側の側面に至る槌状の剥離面が見られる。対面の側面には鋭利な縁辺が残っている。背面には礫面を残すが、他の二面はそれぞれ方向の異なる剥離面からなる。

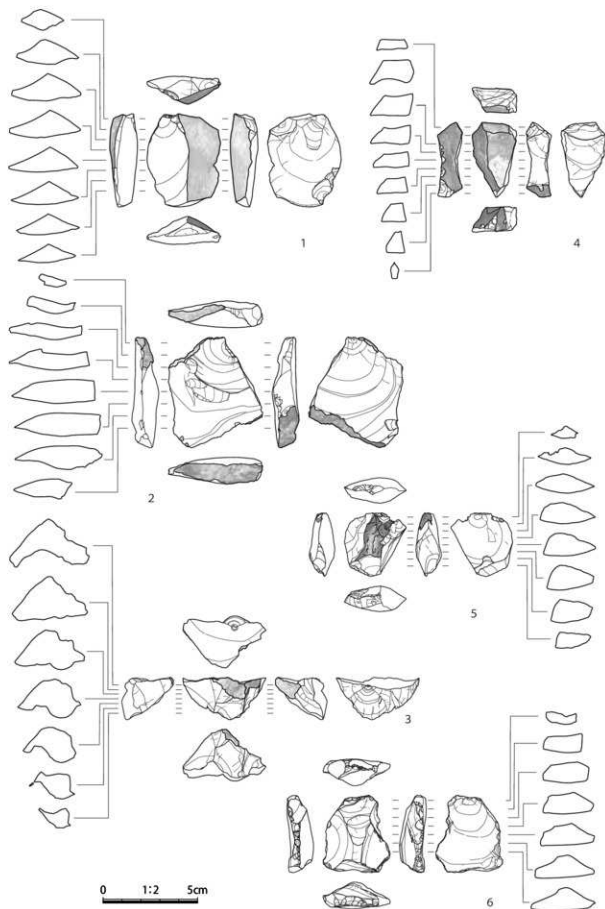
105-6はスクレイパーとしているが、他の資料と様相が異なるものである。暗灰色、白色、赤褐色などが縞状に見える玉髓である。明確に複数面の剥離面打面からやや縦長の剥片が剥離され、その下端と右側縁には急角度でノッチ状の剥離面が、左側面には角度の緩い剥離が見られる。全体として剥離面に覆われており、石器として理解可能な資料ではある。一方で他の資料とは風化度が著しく異なる。剥離面全体にマット感があり、稜線は鋭さを欠いて丸みを帯びるとともに、周縁にはつづれが観察できる。他の資料の剥離面は比較的新鮮で、稜線はシャープであり、不自然感が否めない。あえて例えれば、松江市烏ヶ崎遺跡湖岸で採集される資料と似ている。ただ、周辺にみられる石ではなく、持ち込まれた石であることも間違いない。気になるのは、この資料は南外5号墳の横穴式石室床の礫を水洗いした際に出ていることである。石室構築に伴って持ち込まれた可能性も考慮したい。

106-7は暗黄色の玉髓製の石刃状の剥片である。平坦な剥離面を打面とし、やや斜め方向に剥離が進んで、先端は尖り気味である。薄い剥片で先端部付近にわずかな剥離痕が見られるが、その目的は不明である。背面には同一打面から2面の剥離面が認められ、全体として稜線がY字形となっている。厚さが5.5mmと薄い。

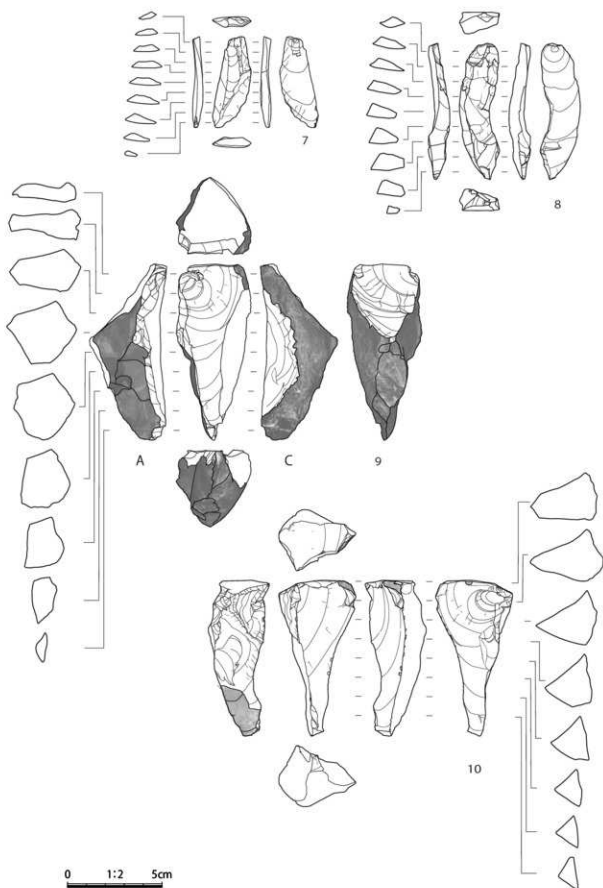
106-8はやや光沢のある暗褐色の玉髓製、石刃状の剥片である。平坦な剥離面を打面とし、やや曲がった細長い剥片である。バルブが丸く形成され、バルブスカーは見られない。腹面は全長の約4分の3あたりでステップ状となり、その下方には湾曲のない面が続く。背面は不規則剥離面もあるが、おおむね同一方向の剥離面で構成される。先端部は槌状の剥離がみられ、尖り気味である。

接合資料(第106・107・108・109図)

106-9・10、107-11・12は褐色で、一部黒色を含む玉髓の接合資料である。4点ともに単設の平坦剥離面から剥離されたものである。打面は緩やかなポジティブ面である。接合時には、片面が垂円礫の礫面でおおわれており、1点の剥片(2)は礫面を除去するために剥がされた可能性が高い。他の



第105図 南外5号墳出土の石器(玉髓)実測図(1)



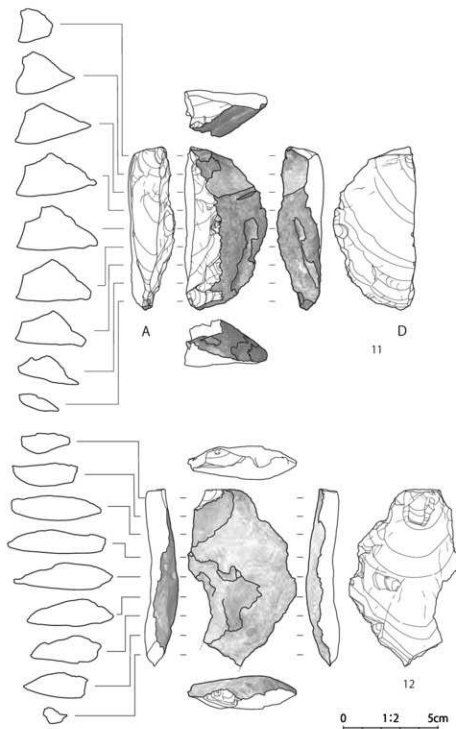
第106図 南外5号墳出土の石器(玉髓)実測図(2)

2点の剥片は同一方向に後退して剥離しており、残された残核(9)は礫面が多い。長さは比較的そろっており、元の石核の長さ分、剥離が進んでいるものと推測される。

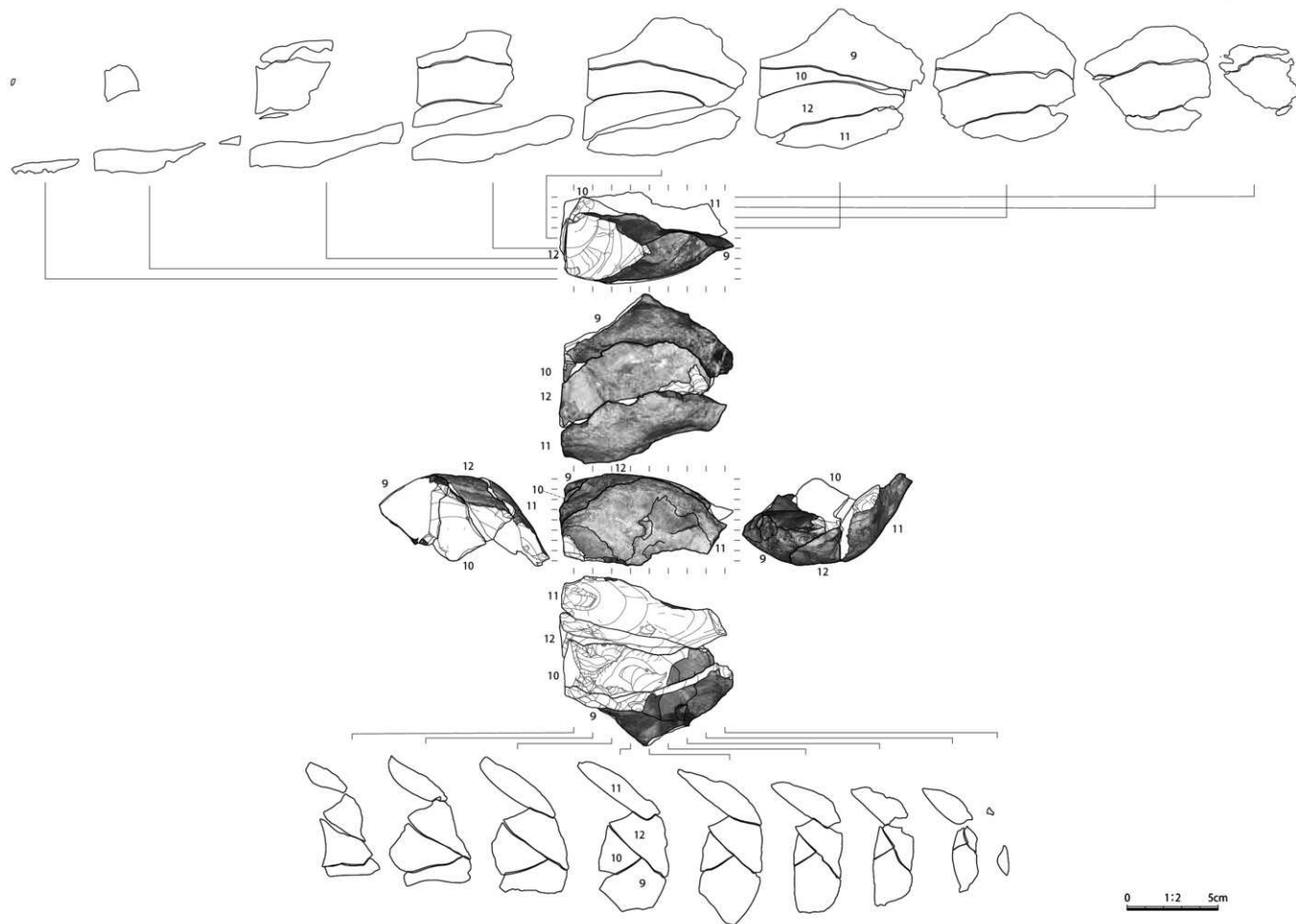
106-9は背腹ともにネガティブ面で、石核である。腹面側の短い三角形の剥離面は、全損する打面の幅の短さを考えると、背面側の剥片106-10を剥取した際に、衝撃の強さで同時に剥がれた可能性がある。C面の剥離面は剥片11の腹面が接合する。A面も剥離面だが、剥離が不規則で微妙に風化度が異なるため、大部分を礫面と考えた。

106-10は106-9から剥がされた縦長の剥片である。打面の奥を打撃しているため、打面の残存幅が広いが、石核打面の端を強くたたいて剥がされており、106-9との接合面の打面付近は同時に割れ落ちていようである。打点から少し離れて平坦で広いコーン面が発達し、その先からバルブが発生している。複数回打撃した結果生じた痕跡の可能性がある。背面は先行する107-11の剥離面で、その面に規定されて横断面が三角形状を呈している。先端は折れている。

107-11は106-9と10の石核打面の

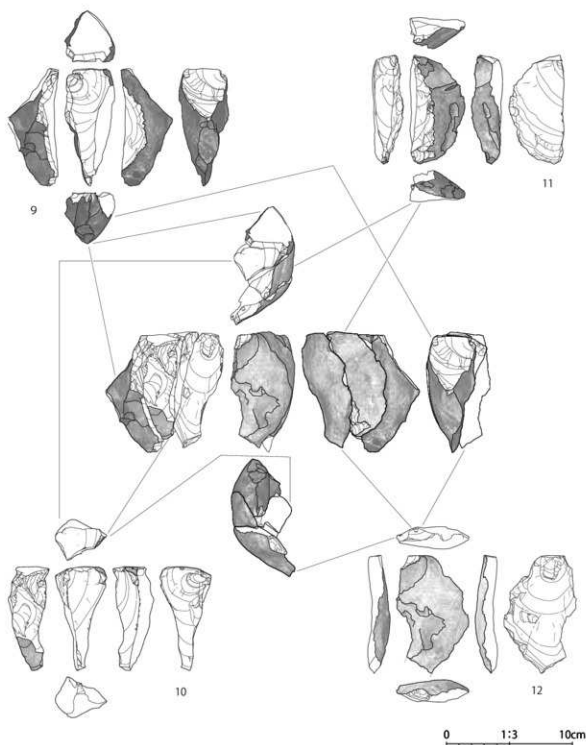


第107図 南外5号墳出土の石器(玉髓)実測図(3)



第108図 南外5号下層及び周辺出土の石器実測図(4) 接合資料

奥側を打撃して得られた剥片で、その後側面 A の縦長剥片が剥離されているため、石核ともいえる。ポジ面（D 面）の打瘤はあまり発達せず、緩やかに波打ちながら石核の下端まで剥離が及んでいる。側面のネガ剥離面は打面の端部を打点としており、やや横方向に力が向かいながらも最終的にほぼ下端まで剥離は進行し、縦長剥片がとられたものと推測される。背面のネガ面は 107-12 の主要剥離面



第 109 図 南外 5 号墳石器接合資料の接合状況

の痕跡である。

107-12は背面がほぼ全面礫面の縦長剥片である。打面は106-9・10、107-11と同一の面で、比較的浅い部分を打撃している。打面には半円の小さな打点と打撃痕が残され、パルプの両端から強いフィッシャーラインが形成されている。節理面が確認できるが、比較的スムーズに剥離が端部まで至っている。先端は折れている。他の3点に比べて薄い剥片で、礫面を除去するための剥離だった可能性が高い。

石核(第110図)

110-13は黄褐色の玉髓の石核である。一部に礫面を残しているが、打面を固定せず、小型で幅広や不定形の剥片を剥離したものと考えられる。礫面は原礫面と風化した剥離面からなる。

110-14は暗褐色で碧玉様の緑色が観察される玉髓製で、大型の石核である。風化した剥離面で構成される角礫を素材とし、分割したうえで剥片剥離を行っている。B面が大きな剥離面で、分割された際の面と考えられ、先細りの三角形を呈している。その面を作業面として何度か剥片剥離を試みているが、面の長さに比して短い剥離痕しか観察できない。A面の階段状に見える三角形の面は、何らかの衝撃の際に節理面に沿ってこぼれた部分で、剥片4が接合する。断片が外れたのちB面とステップ部分から剥片剥離が試みられている。有効な剥片剥離には至らずに放棄された可能性が高い。

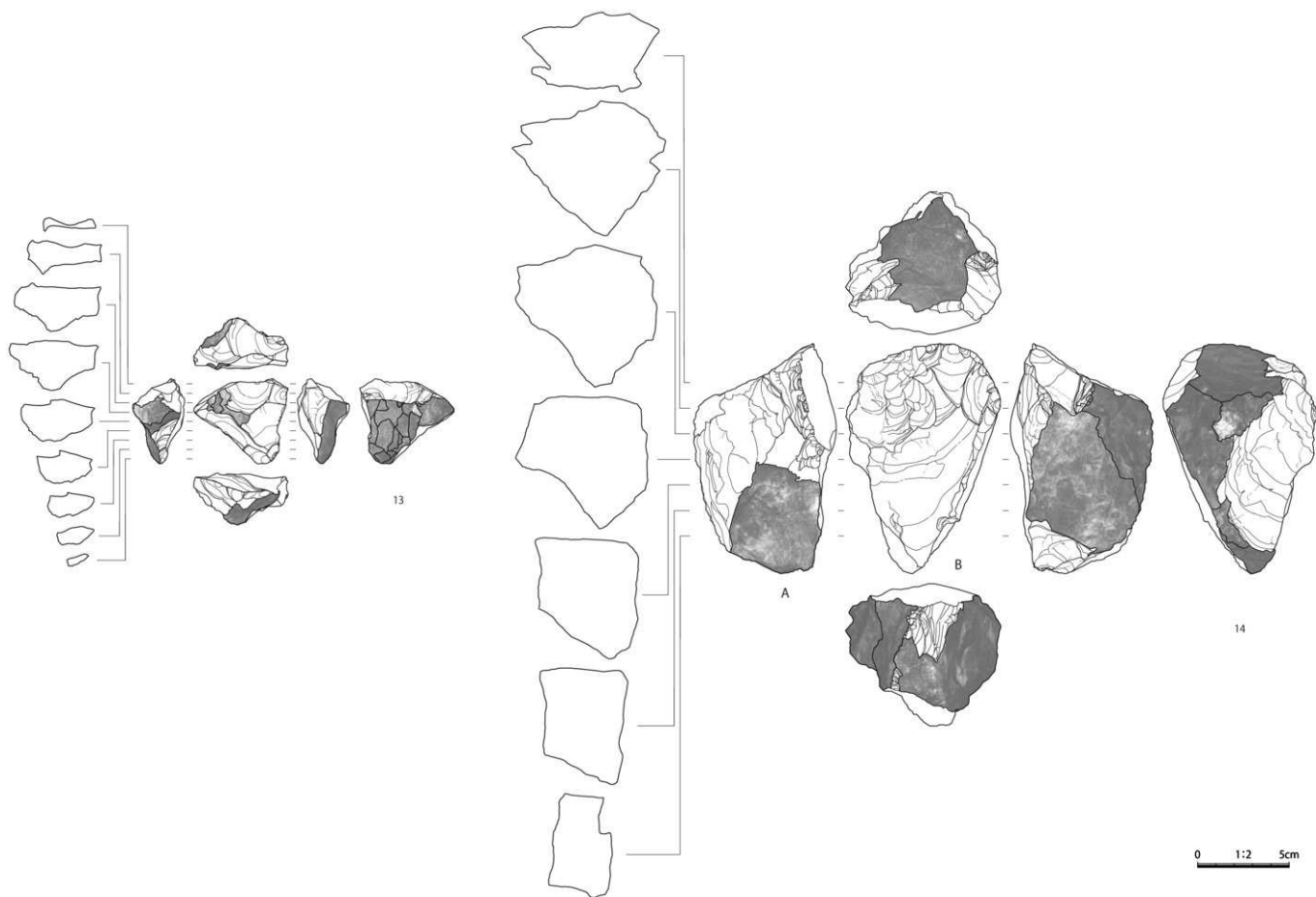
そのほかに、ほぼ礫面で構成され、部分的に剥離痕が観察できる資料が表採されている。長さ106mm、幅92.9mm、厚さ93.9mmとこぶし大程度の資料で、空隙が多い原石のため、試し割りののち廃棄されたものか。表採資料でもあり、図化をしていない。

石器群の評価

石器群のうち剥片3と接合資料のうちの3点(106-9・10、107-12)が、南外5号墳の盛土下層旧表土の下に堆積した第86図66層から出土している。接合資料が含まれることから、この66層が本来の包含層だったことは間違いない。また5点が5号墳の盛土内や石室の堆積土、接合資料のうちの1点が接合資料の至近の盛土から出土しており、古墳を築成する時点で周囲の表土下を削られた際に動かされたものと考えて矛盾はない。そのほかの4点も5号墳やその周辺の流土から出土していること、いずれも玉髓製で周辺の土層内にはない石であることなどから、おおむね同一・同時期の石器群とみて問題ないと考えられる。これは、打面が残る剥片11点のうち9点が平坦な剥離面を打面としているという、打撃法の共通性からも首肯できる。

ただし、スクレイパーとしている105-6は、前述しているように他の資料に比べて全体が風化し、表面に薄皮が被ったようなマット状を呈している。しかも縁辺につぶれが見られることも円磨していることを暗示する。総体として人工品とも理解できる資料だが、他の石器とは全く異なる顔つきをしており、同一石器群と判断するのは難しい。石室床面の礫敷きの水洗によって見つかっており、床に敷かれた円礫とともに搬入された可能性もある。

石器群の帰属時期については、層位的には古墳時代以前、ということが言えるのみである。しかし石器の剥離技術を見ると、接合資料は単設の同一打面から連続的に縦長剥片を剥離している。また石刃状の縦長剥片が2点出土しているが、これも平坦打面から剥離され、背面の剥離方向も同一の方



第110図 南外5号墳区旧表土下1層および周辺出土の石器実測図(5)

向が多い。一方で寸詰まりでやや小型の剥片が見られるが、これらも1点が礫面打面であることを除けば、平坦な剥離面を打面としており、石核110-13のような石核から剥離された可能性が高い。接合資料が狭い範囲でまとまって出土していることも併せて、旧石器時代の石器群と考えたい。

表10 南外5号墳出土石器(玉髄)一覧表

NO.	部種	法 量				石材	打面	備考	出土地
		幅(cm)	長(cm)	厚(cm)	重さ(g)				
105-1	二次加工のある剥片	3.88	4.63	1.41	25.38	玉髄 黄褐色で一部赤褐色	平坦・準設	先端新痕(取)、背面二次加工。ざらついた礫面	北東側埋土上(第86回26層)
105-2	剥片	4.88	5.73	1.30	35.00	玉髄 暗褐色基調で暗赤褐色部分	礫面	両端が礫面、背面にわずかに二次的創縁	南東側埋土盛土
105-3	剥片	4.28	2.67	1.79	15.00	玉髄、ややめのう質、暗緑色から緑白色に移行	平坦・準設、曲率あるネガ面	背面は割れ目縁を平切した状況、最打面あり	墳頂部埋土上下1層(第86回66層)
105-4	石核断片	2.24	3.99	1.32	11.54	玉髄 暗茶褐色～黒褐色が結状	不明	打面は背面(礫面)から切断か。礫面は剥離面だが風化しやや白化	南側トレンチ埋土盛土
105-5	二次加工のある剥片	3.31	3.32	1.42	12.42	玉髄、黒褐色～暗褐色～褐色	平坦・準設	下端付近から、複数種類の二次剥離面あり	南西側埋土堆積土(第86回5層)
105-6	スクレイパー?	3.53	4.10	1.30	17.82	玉髄 黒～茶褐色～灰白色～暗灰色	小さくて不明瞭	全体が剥離面に覆われているが、風化度が高くマット感が強い	石室底面埋土敷き土層(第90回11層)
106-7	石刃状剥片	1.73	4.81	0.48	4.00	玉髄 黄土色で層状の薄い粗粒	平坦・準設		南西側土上
106-8	石刃状剥片	1.80	7.16	1.13	11.81	玉髄 暗褐色、上下にアイボリーの不透明部分	平坦・準設	上下双方から長い剥離面あり	右袖石張り方埋土(第90回13層)
106-9	石核か、接合資料	3.91	9.40	3.63	105.30	玉髄 褐色、礫面は潰れ多い面とマットな剥離面	平坦・準設	d面のネガの面はb面剥離時に同時に形成された可能性がある。	前方部埋土上下1層(第86回66層)
106-10	剥片、接合資料	3.82	8.10	2.45	60.49	玉髄 褐色で打面付近は黒、礫面マットな剥離面	平坦・準設	打点の下に幅1.25cm長1.05cmのはば平坦なコーン状の面あり	前方部埋土上下1層(第86回66層)
107-11	剥片、接合資料	4.38	8.57	2.38	88.63	玉髄 褐色、礫面は潰れ多い面とマットな剥離面	平坦・準設		前方部埋土上下1層(第86回66層)
107-12	剥片、接合資料	5.35	9.44	1.48	76.29	玉髄 褐色で一部黒、礫面マットな剥離面	平坦・準設	下端が折れている。	前方部埋土上下1層(第86回66層)
110-13	石核	5.11	4.61	2.88	4.55	玉髄 黄褐色			北東側埋土上(第86回26層)
110-14	石核	8.51	12.66	7.84	773.00	玉髄 黒褐色～暗褐色～褐色、一部緑色(碧玉)		全体的に最打面多数	南東側埋土盛土

第5節 小結

南外古墳群は、島根県松江市を東西に流れる大橋川の南岸の丘陵上に所在する。5基からなり1号墳と2号墳は既に確認調査や本調査が行われ、今回は3～5号墳の3基について調査を実施した。

本古墳群周辺の大橋川両岸や意宇平野には出雲東部を代表する有力墳が多く所在する地域であり、今回の調査成果は当該地の古墳時代の様相を知るうえで新たな資料といえる。以下、遺構・遺物についてまとめた。

第1項 南外古墳群の遺構について

墳丘(表11)

南外古墳群は丘陵尾根上に立地し、その在り方は70～200mほどの距離をとって独立して位置する。丘陵上の最も高い場所(標高72.5m)に5号墳が位置し、東側尾根筋に1・2号墳が、西側尾根筋に3・4号墳が所在する。

古墳群の1・5号墳は約20mの短小型前方後円墳、3号墳は円墳、2・4号墳は方墳で径、一辺共に10m余の小規模な古墳である。

表11 南外古墳群一覧表

古墳	墳形	規模(m) (周溝を含む全長)	墳頂部 標高 (m)	主軸方位	周溝		主体部				時期
					規模(m)	出土遺物	埋葬施設	規模(m)	主軸方位	出土遺物	
1号墳	短小型 前方後 円墳	全長20.0 (30.0) 前方部7.0×6.5 後円部13.0	54.23	N-5°-W	上端径 5.2 下端径 2.4 深さ 0.67	なし			未調査		中略～後期 初頭か
2号墳	方墳	12.5×12.5 (14.7×18.4)	36.35	—	上端径 2.0×5.8 下端径 0.5～0.9 深さ 1.0	土師器 甕 須恵器 甕 甕 甕 高杯	墓壇	長さ 2.7 幅 0.75～0.85	N-40°-W	須恵器 蓋片	出雲2期 TK10
3号墳	円墳	12.0×11.9 (18.2×17.2)	62.90	—	上端径 3.5～3.8 下端径 1.1～2.4 深さ 0.25	土師器 高杯 須恵器 坪身 高杯 小型の甕			流出		出雲1期 (中略) TK23・47
4号墳	方墳	12.3×12.6 (17.0×16.4)	34.90	—	上端径 2.25～3.6 下端径 1.4～2.2 深さ 0.5	土師器 高杯 甕 須恵器 高杯 甕	割り抜き木棺	長さ 幅 0.25～0.4 深さ 0.3～0.37	N-34°-E	須恵器 甕片	出雲1期 (新相) MT15
5号墳	短小型 前方後 円墳	全長18.5 (21.5) 前方部5.5 後円部13.0	72.50	N-40°-W	上端径 1.3～2.2 下端径 1.0～1.2 深さ 0.2～0.3	土師器 坪 須恵器 坪蓋 有蓋高杯 埴輪 石製品 石鏡	横穴式石室	玄室 奥行 2.07 幅 1.35～1.38	N-76°-W	須恵器 高杯 玉璽 勾玉 鉄製品 長頸瓶 遮矢具か 馬具?	出雲2期 TK10

古墳の築造方法(第111・112図)

本古墳群で調査を行った2～5号墳ではいずれも墳丘のほとんどを盛土により築造しており、盛土下に旧表土残す点で共通している。3号墳は一部に土留めの為に墳丘の端部を高くしているところはみられるが、概ね水平に盛土を施して墳丘を築造している。4号墳と5号墳の墳丘築造過程については本文中で述べているが、ここで簡単に整理しておきたい。

4号墳(第111図)

第1段階(整地)

尾根筋の緩斜面に平面方形の溝を掘削して、旧表土を残した状態で基盤を造る。盛土の流失を防ぐ意図があったようであり、旧表土の墳丘端部は丘陵下方側をわずかに高く削り残している。その後、削り残した旧表土上に盛土を施して表面を水平に整える。

第2段階(埋葬と一次墳丘の構築)

整地した面を掘り込んで断面U字状の溝を掘り棺床を造る。そこに木棺を据え置き、土饅頭状に盛土を施して木棺を固定する。遺体の埋葬を行って棺蓋をし、その周りに土饅頭状に盛土をして小墳丘を完成させる⁽⁵⁾。

第3段階(二次墳丘の構築)

小墳丘がかくれる高さまで盛土を施す。南側では墳丘の縁辺部に土手状に盛土を施して土留めとしている。

第4段階(墳丘の完成)

既定の高さまで盛土を施して整形を行い、古墳築造が完成する。

5号墳(第112図)

5号墳は短小型前方後円墳で、横穴式石室を主体部とする。墳丘上半は後世の削平により失われたため、墳丘築造過程の全容はわからないが以下のような過程で築造されたものと考えられる。

第1段階(整地)

石室を構築する場所の旧表土を掘り込んで石室床面を造る。

第2段階(石室底部の構築)

石室床面にさらに腰石を据える場所を掘削して腰石を据える。

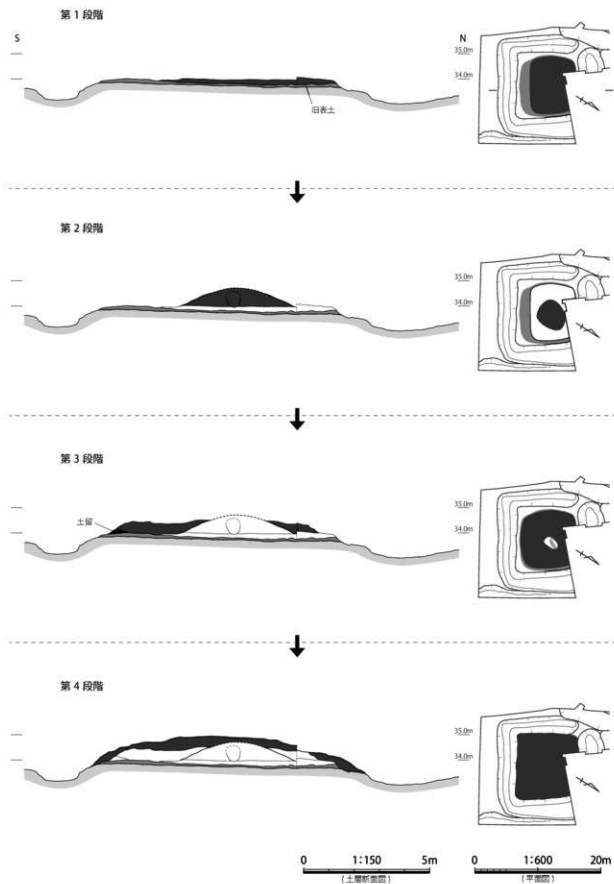
第3段階(石室と一次墳丘の構築)

腰石の上に石を積み上げ、壁体の間や背後に裏込めを行うと同時に周囲に盛土を行う。石室の構築に伴い盛土を段階的に行っていく墳丘を造る。盛土の状況を見ると、墳丘の端部に黒色土の土塊を積んで土留めとし、その内側に明黄褐色土や褐灰色土など土質の違う土層を盛土している。この土塊は墳丘の端部を廻るように置かれていた。

第4段階(二次墳丘の構築)

さらに盛土を施して古墳を完成させる。この際にも第3段階と同じように盛土を行う際に土塊を積み、その内側に橙色土・明褐色土・褐灰色土などの盛土を施している。

5号墳は以上のような古墳築造の過程が想定される。盛土は現状で高さ60cm程であるが、石室の



第111図 南外4号墳築造過程模式図

高さを考えると少なくとも 2.0m 以上は想定される。

このような土塊積みによる墳丘築造が行われた古墳には南外 2 号墳のほか伝宇牟加比売命御陵古墳や八色谷 4 号墳、論田 4 号墳などが挙げられる。南外 2 号墳では墳丘の谷側の端部にブロック状の盛土（灰茶褐色土や暗黄褐色土など）を施して土留めを行っている。また、鳥取県では晩田山 29・30 号墳で同じ工法によると思われる墳丘築造が確認される。晩田山 30 号墳は古墳時代後期の小規模な円墳で、報告書のカラー写真をみるかぎり南外 5 号墳の盛土の平面・断面ともに酷似している。これまでの調査事例からすると、このような土塊を積み上げて墳丘の築造を行う方法は当該地に限らず採用され、中期末から後期にかけてみられるように思われる。

主体部

南外古墳群ではこれまでの調査で南外 2 号墳で掘り込み墓壇が確認されている。1 号墳はトレンチから埋葬に伴うと思われる石材が出土していることから、横穴式石室の可能性が考えられる。

今回調査を行った 3 基の古墳のうち埋葬施設が確認されたのは 4・5 号墳である。3 号墳で主体部は検出していないが、調査の成果からすると 2 号墳と同じような掘り込み墓壇の可能性が考えられる。

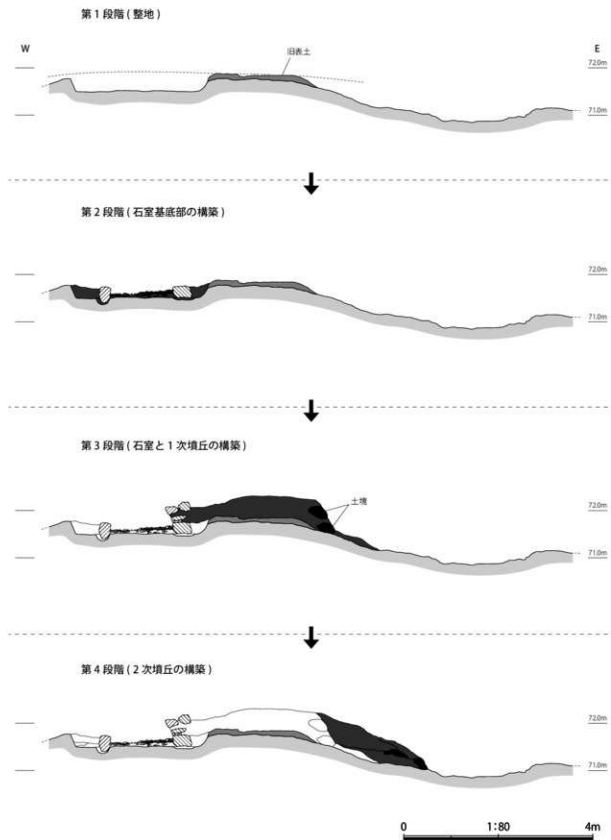
4 号墳は無墓壇の主体部である。削り抜き木棺を据えて、周りに土饅頭状の盛土を施して埋葬を行っている。削り抜き木棺は長さ 2.6m を測り、主軸が墳丘の対角を向く斜交主体部である。斜交主体部は古墳時代中期中葉に出現する埋葬配置で、単葬を指向した可能性が指摘され⁽⁶⁾古墳時代中期後葉から後期前葉に盛行する。南外 2 号墳も斜交主体部で、ほかに松江市八雲町の増福寺古墳群や谷の奥古墳群で確認されている。

南外 5 号墳の主体部は石室の大半が失われ、基底部と一部の側壁しか残存していないが両袖で羨道部が短い九州系の横穴式石室である。玄室は長方形プランを呈する。

出雲東部における導入期の横穴式石室として松江市坂本町に所在する薄井原古墳と松江市玉湯町に所在する林 43 号墳があげられる。薄井原古墳は全長約 50m の前方後円墳で、畿内系の片袖式横穴式石室のなかに石棺が納められている。林 43 号墳は全長 16.2m の前方後円墳である。主体部は九州系の両袖式横穴式石室で、玄室の規模は奥行 2.6m、幅 1.8m、高さ 2.1m を測る。この 2 基の古墳は南外 5 号墳と同時期と考えられ、特に林 43 号墳は同じ九州系の横穴式石室である。林 43 号墳と南外 5 号墳については遺物から第 4 項で詳述する。

第2項 南外古墳群の副葬品について

南外古墳群で主体部が検出され、副葬品が出土しているのは南外 2・5 号墳だけである。南外 2 号墳では主体部の墓壇内から須恵器の坏蓋 6 点が出土したのみで、玉製品や金属製品は出土していない。古墳の築造時期は出土した蓋坏から 6 世紀前半代、出雲 2 期にあたる。南外 5 号墳では、横穴式石室から須恵器の蓋坏・碧玉の勾玉、ガラス小玉、滑石の白玉、長頸鍬、盛矢具または馬具の一部と思われる金属製品が出土している。須恵器の蓋坏は口径や器高から出雲 2 期と考えられ、坏身・坏蓋ともに口縁端部が段状を呈することから古い様相を呈している。玉類では最大高 5.2cm を測る碧玉製の勾玉やガラス小玉、滑石の白玉が出土し、鉄製品も出土している。ほかに副葬品の可能性があるも



第112図 南外5号墳築造過程模式図

のとして南外4号墳の瑪瑙製の勾玉と刀子があげられる。

南外3・4・5号墳の副葬品の様相をみると、南外5号墳の副葬品はほかの2基と比べると玉類の種類が多く、鉄製品も出土している点が特徴としてあげられる。また、南外5号墳は本古墳群のなかで最高所に位置していることや前方後円墳という墳形から南外古墳群のなかでは有力な被葬者の可能性が考えられる。

第3項 南外古墳群の時期(表12)

第3項では、まず南外3～5号墳で出土した土師器と須恵器から時期を整理して、南外古墳群の時期について述べてみたい。

土師器では南外3・4号墳で出土した高環をみると、3号墳の高環は、坏部が碗状を呈し、端部が内側にやや内傾して脚部は低い。4号墳の高環は、脚部の高さは3号墳のものより高く、坏底部から口縁部にかけて立ち上がる。他の遺跡の調査例から古墳時代中期後半頃の高環をみると、脚部は中期末に低くなりその後また高くなる傾向にある⁽¹⁷⁾。南外3・4号墳の高環も同じ様相を示しており、古墳時代中期後半のなかでも3号墳が古く、4号墳が新しいと考えられる。

次に、須恵器をみると、南外3号墳から出土した坏身や小型の壺、高環は薄手で灰白色を呈するもので、ほかの2基の須恵器と比べると古い印象を受ける。このような須恵器は、松江市大草町に所在する東百塚山71号墳(出雲1期・TK208～47)で確認されており須恵器のなかでも古い時期と思われる。3号墳周溝から出土した土師器の高環の時期に併行するもので、出雲1期中相(TK23・47)に相当する。

南外4号墳では周溝から高環・壺が、墳丘面や盛土から高環と甕が出土し、出雲1期新相(MT15)に併行すると考えられる。ただ、なかには波状文をもつ高環や灰白色で外面に叩き痕、内面に無文の当て具痕をナデ消している甕といった古い要素をもつ土器が認められる。高環は同じ型式の範疇に属するものと考えられ、甕は他の遺物と同じ墳丘面から出土していることからすると、出雲1期新相(MT15)までこのような土器が残っていたものと思われる。4号墳では、ほかに墳丘面と盛土から須恵器の甕片が出土している点が注目される。破片の多くは墳丘面上で検出し、盛土内からも少々と破砕した甕片が出土しているほか主体部検出面からも出土している。さらに、墳頂部にも同じ甕片の集積が認められ、これらの甕片は意図的に破砕して散布したものと考えられる。このような類例は現段階では少なく、松江市西川津町の柴2号墳が知られている⁽¹⁸⁾。

南外5号墳の須恵器は主体部から蓋環が、周溝から有蓋高環と坏蓋が出土している。改めてみると、主体部から出土した蓋環は蓋・身ともに口縁端部に沈線による段がみられる。坏蓋の口径は13.8cmと14.0cm、器高は4.5cmを測る。坏身は口径12.0～13.0cm、器高約5.0cmを測り、立ち上がりが高くて器壁は薄い。いずれも出雲1期と比べると天井部は丸みはあるものの器高は低く、口縁端部の段は退化傾向にある。これらの蓋環は出雲2期(TK10)と考えられる。周溝から出土した坏蓋は口径14.7cm、器高5.1cmを測り、口縁端部に段をもつもので、有蓋高環とセットになるものである。有蓋高環の口縁端部に段はなく、脚筒部に2段3方向の透かしを施し、脚裾部は内傾している。

さて、これまで南外5号墳から出土した蓋環と有蓋高環を出雲2期と述べてきたが、これらを大谷編年⁽⁹⁾の分類から型式にあてはめると蓋環はA2型である。A2型の蓋環に伴う坏身は口縁端部の段の有無で分けられ、段があるものはA2a型、段のないものはA2b型に細分されている。主体部出土の蓋環は蓋・身共に段がみられるためA2a型である。有蓋高環は大谷氏の分類ではF型に属し、口縁端部に段がないため蓋環のA2b型と同じと考えられる。大谷氏の型式にこれを当てはめると、主体部の蓋環は出雲2a期、周溝出土遺物は出雲2b期に該当することから主体部遺物より周溝遺物が新しい様相を呈している。これは埋葬時期と墳丘完成時または二次墳丘造成時の時期差を示していると考えられ、周溝出土遺物は埋葬直後ではなくある程度の時間の経過後に行われた周溝祭祀に伴うものと考えられる。

以上のことから南外古墳群の時期は、3号墳は出雲1期中相(TK23・47)、4号墳は出雲1期新相(MT15)、5号墳は埋葬は出雲2a期、墳丘完成時または二次墳丘造成時の祭祀は出雲2b期と考えられる。南外2号墳は南外5号墳と同じ出雲2期であり、本古墳の新旧関係は、南外3号墳⇒4号墳⇒2号墳・5号墳となる。1号墳については確認調査による報告によると古墳時代中期末～後期初頭と考えられている。

表12 南外古墳群時期一覧

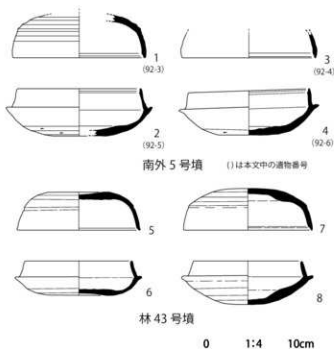
時期 墳形	出雲1期(中相) TK23・47	出雲1期(新相) MT15	出雲2期 TK10
円墳	3号墳		
方墳		4号墳	2号墳
前方後円墳		※1号墳	5号墳

※南外1号墳の時期は確認調査報告による。

第4項 南外5号墳と林43号墳の出土遺物について(第113図)

第1項の主体部で導入期の横穴式石室について述べた。ここでは、九州系の横穴式石室である南外5号墳と林43号墳の時期について遺物から触れてみたい。

林43号墳の横穴式石室からは、須恵器の蓋環・埴瓶・横瓶・鉄刀・玉製品などが出土している。坏蓋は、玄室玄門側中央、玄室奥壁中央、玄室奥壁東側側の3箇所で見出され、底部または天井部を上に向けて2個ずつ並んで3セット出土している。第113図に南外5号墳と



第113図 南外5号墳と林43号墳の坏蓋実測図

林 43 号墳の蓋環を掲載した。113-1～4 は南外 5 号墳玄室内、113-5～8 は林 43 号墳玄室内から出土した蓋環である。113-5・6 と 113-7・8 はそれぞれセット関係にある。113-5・6 と 113-7・8 をみると 113-7・8 の法量が大きく、蓋環の天井部は丸みを帯びている。口縁端部内面の段状は環蓋だけにみられる。報告書では、113-5・6 は出雲 2c 期、113-7・8 は出雲 3 期及び 4 期で、113-5・6 が初葬に伴うとしている。

林 43 号墳の 113-5・6 と南外 5 号墳の 113-1～4 では南外 5 号墳の蓋環が口径・器高ともに大きく、丸みをおびている。また、環蓋の口縁や環身の立ち上がりも直線的で高く、蓋、身共に口縁端部内面に段が確認される。林 43 号墳、南外 5 号墳ともに出雲 2 期の範疇に属するもので同じ一群として捉えられるが、第 3 項で述べたように南外 5 号墳の出土遺物は、南外 5 号墳の主体部遺物は出雲 2a 期とえられることから南外 5 号墳の環蓋が林 43 号墳より古いところに位置づけられる。したがって、南外 5 号墳は、現状で確認されている導入期の横穴式石室のなかでも古い段階に位置づけられるものと推測される。

第5項 南外5号墳の系譜

南外 5 号墳は短小型前方後円墳である。短小型前方後円墳について、椿真治氏は埴輪の時期的変化と埴形変化が一致する点を指摘し、首長墳の変遷において方墳から前方後方墳への過渡期に一時期的短小型前方後円墳や円墳が盛行すると指摘されている⁽¹⁰⁾。

出雲の短小型前方後円墳は出雲東部では中海西岸と大橋川南岸で確認されている。大橋川南岸の短小型前方後円墳は井ノ奥 4 号墳と南外 1 号墳、それと今回調査を行った南外 5 号墳である。そのなかでも最大級の短小型前方後円墳は井ノ奥 4 号墳で、墳丘の約 2/3 は削平され、主体部も失われていたが、全長約 57m を測る大橋川南岸の最高首長の墓である。墳丘斜面に全面に葺石を貼り、周溝の周りに外堤がみられる。また、墳丘上には埋設された円筒埴輪が 158 本残存し、この円筒埴輪の時期から古墳時代中期後半 (TK23 段階) に位置づけられている。南外 1・5 号墳は墳丘規模や遺物出土状況、外表施設からすると明らかに井ノ奥 4 号墳とは異なるが、墳丘形態の同一性からみると同一首長系列墓と考えられる。ただ、短小型前方後円墳は当地においては TK208 ～ TK23 型式の古墳と考えられており、南外 5 号墳の時期には前方後方墳が盛行していると思われる。したがって、南外 5 号墳は時期や地域からすれば、本遺跡北東側に位置し、前方後方墳である竹矢岩船古墳を最高首長としてそれに従属する下位の中小首長の墓と捉えられるのではないだろうか。

第6項 結語

南外古墳群は大橋川南岸に所在する小規模な古墳群である。古墳の在り方から古墳時代中期後半にみられる古式群集墳とは言いつらく、大橋川南岸の小首長が丘陵尾根筋に間隔をもって独立的に古墳を造っているような状況である。今回の調査では、小規模な古墳ながら築造方法や出土遺物において新たな成果が得られた。特に、南外 5 号墳では土塊を施して盛土を行う築造方法や出雲 2 期 (TK10) のなかでも蓋環両方の口縁端部に段を施す古い要素をもつ蓋環が出土したことにより導入期の横穴式

石室として新たな事例を加えることができた。また、南外4号墳においては無墓墳主体部とそれに伴う築造方法を示した。ただ、無墓墳主体部については今後検討を要する課題と言える。

意宇平野周辺では古墳時代前期末から後期後半に至るまで造墓が行われている。大型古墳が集中しているそのなかで本古墳群は小規模な古墳群であるが、古墳時代中期末から古墳時代後期前半における横穴式石室の導入までの古墳の動向を知る良好な資料といえる。

今後の調査事例の増加により大橋川兩岸及び意宇平野周辺における古墳時代の様相や動向が明らかになることを期待したい。

註

- (1) 南外5号墳は後世の遺構や根による掘削のため墳丘形態の判断が難しいが、前方部が短いことや周溝の形状から最終的に短小型前方後円墳と判断した。
- (2) 南外5号墳では墳丘の盛土を行う際に墳丘端部に黒褐色土の塊を施して土留めとしている。報文中ではこの土層の塊を土塊として記述する。この土塊は、外面に囊の痕跡が確認されないことから土囊として扱わない。
- (3) 米田克彦 2009 「穿孔技術から見た出雲玉作の特徴と系譜」『出雲玉作の特徴に関する研究—古代出雲における玉作研究Ⅲ—』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
南外5号墳から出土した碧玉の勾玉の穿孔方法は、片面穿孔で、孔の形態は逆円錐形を呈し、米田氏の分類では片面Ⅱe類に属する。この穿孔方法は古墳時代前期後半から後期にかけて一貫して認められる。
- (4) 鳥根県埋蔵文化財調査センター 仁木聡氏のご教示による。
- (5) 第3節南外4号墳 第6項主体部を参照
- (6) 池淵俊一 2007 「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』鳥根県古代文化センター・鳥根県埋蔵文化財調査センター
斜交主体部は方形区画墓の対角線上に埋葬施設を配置するもので、古墳時代中期中葉に出現し、中期中葉から後葉に盛行する。主として一辺10m前後の小規模な方墳に採用され、単葬を意図したものと評価されている。
- (7) 鳥根県埋蔵文化財調査センター 松山哲弘氏のご教示による。
- (8) 柴2号墳は、3基からなる柴古墳群のなかの1基である。柴2号墳は径約5mの円墳で、表土や盛土のなかから須恵器の細片が100片ほど出土している。
- (9) 大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域性」『鳥根考古学会誌 第11集』鳥根考古学会
- (10) 橋本真 2008 「出雲東部地域における墳輪出土古墳・中期後半を中心として」『古代文化』59-4 古代学協会を参考にしている。

参考文献

- 池淵俊一 2015 「出雲における中・後期前方後円墳の成立と展開」『前方後円墳と東西出雲の成立に関する研究』鳥根県古代文化センター
- 大谷晃二・吉松優希 2022 「大草丘陵古墳群出土遺物について—大草丘陵古墳群の調査(2)—」『古代文化研究』第30号 鳥根県古代文化センター
- 仁木聡 2015 「巨大方墳の被葬者」『前方後円墳と東西出雲の成立に関する研究』鳥根県古代文化センター
- 松山哲弘 2021 「地域報告(鳥根県)」『中期古墳研究の現状と課題Ⅴ—古墳時代中期の土師器・須恵器をめぐって』中国四方前後円墳研究会・第24回研究会実行委員会
- 出雲市教育委員会 2007 「上島古墳出土遺物の再調査報告」『出雲市埋蔵文化財調査報告書』第17集
- 日本道路公団中国支社・鳥根県教育委員会 2001 「権ノ木古墳群」『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』5
- 鳥根県教育委員会 1962 『薄井原古墳調査報告』
- 鳥根県教育委員会 1993 『八色谷古墳群』
- 鳥根県教育委員会 2001 「南外1号墳確認調査報告」『埋蔵文化財調査センター年報』IX
- 鳥根県教育委員会 2007 「南外2号墳・勝負道跡」
- 鳥根県考古学会 2007 「松江市玉湯町所在の前方後円墳墳丘測量報告(下)」『鳥根県考古学会誌』第24集
- 松江市 2012 『松江市史 史料編2 考古史料』

松江市教育委員会 1993 『伝宇牟加比売命御陵古墳』

松江市教育委員会 1985 『柴古墳』

松江市教育委員会・財団法人松江市教育文化振興財団 1994 『論田4号墳発掘調査報告書』

八雲村教育委員会 1981 『増福寺古墳群発掘調査報告書』

八雲村教育委員会 2002 『谷の奥道跡』

大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・鳥取県大山町教育委員会 2000 『妻木晩田遺跡発掘調査報告』Ⅳ＜洞ノ原・松尾城地区＞

3号墳 土器観察表

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	寸法 (cm)			調整・文様の特徴		焼成	色調	備考
				口径 実部径	底径	器高	調整・手法	焼成			
58-1	周溝	土師器	埴形高杯	13.6	8.2	10.6	外 内 ハケメ、ヨコナデ ヨコナデ、脚部にしぼり痕	良好	棕色	古墳時代中期後半 松山編年早期	
58-2	周溝	土師器	埴形高杯	13.2	8.4	10.3	外 内 ハケメ、ヨコナデ 脚端部に横方向ハケメ	良好	棕色	古墳時代中期後半 松山編年早期	
58-3	周溝	土師器	埴形高杯	(13.2)	—	(5.6)	外 内 ヨコナデ、ハケメ ヨコナデ	普通	棕色	古墳時代中期後半 松山編年早期	
58-4	周溝	土師器	高杯	—	—	(4.7)	外 内 ハケメ ナデ	良好	棕色	古墳時代中期後半 松山編年早期	
58-5	周溝	土師器	高杯	—	(8.6)	(5.4)	外 内 ハケメ、ヘラミガキ しぼり痕、軸痕	普通	棕色	古墳時代中期後半 松山編年早期	
58-6	周溝	土師器	甕	(16.8)	—	(3.2)	外 内 ヨコナデ ヨコナデ	普通	浅黄棕色	甕合口縁 古墳時代中期後半 松山編年早期 58-7と同一個体	
58-7	周溝	土師器	甕	—	—	(17.5)	外 内 ハケメ ヘラミガキ	普通	浅黄棕色	古墳時代中期後半 松山編年早期 内面に横付痕 58-6と同一個体	
58-8	周溝	須恵器	坏身または 有蓋高杯	— [11.0]	—	(2.0)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰白色	出雲1期(中組)	
58-9	周溝	須恵器	高杯	—	—	(1.8)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰白色	脚端部の厚さ4mm 出雲1期(中組)	
58-10	周溝	須恵器	小型の甕	7.6	—	(7.1)	外 内 縦方向ナデ、洗線、刺突文 回転ナデ	不良	灰白色	口縁部の厚さ2.5mm 体部の厚さ4mm 内面に横付痕 出雲1期(中組)	
58-11	周溝	須恵器	無蓋台杯	(11.8)	—	(2.8)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第2型式 7c末～8c第1四半期	
58-12	周溝	須恵器	無蓋台杯	(13.0)	—	(2.6)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	不良	にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	8c代か	
58-13	周溝	須恵器	無蓋台杯	—	(6.8)	(1.8)	外 内 底部へら切り後ナデ 回転ナデ、静止ナデ	不良	にぶい黄褐色～ にぶい黄褐色	出雲国府編年第1型式 7c後葉	
58-14	周溝	須恵器	無蓋台杯	—	(8.2)	(2.2)	外 内 底部静止系切り後ナデ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲国府編年第1～2型式 7c後葉～8c第1四半期	
65-1	旧衣土	縄文土器	深鉢	—	—	(2.5)	外 内 ナデ ナデ	良好	外 明黄褐色 内 黄褐色	縄文時代後期	
65-2	旧衣土	縄文土器	—	—	—	(4.6)	外 内 条痕 ナデ	良好	棕色	縄文時代後期	
65-3	旧衣土	縄文土器	—	—	—	(5.8)	外 内 条痕 ナデ	良好	棕色	縄文時代後期	
65-4	旧衣土	縄文土器	浅鉢	—	(6.2)	(1.3)	外 内 風化 ナデ	良好	にぶい黄褐色	縄文時代後期	
65-5	北西側 縁部	土師器	小型丸底甕	—	—	(3.7)	外 内 ヨコナデ ヨコナデ	良好	暗褐色	古墳時代中期後半 65-6と同一個体	
65-6	北西側 縁部	土師器	小型丸底甕	—	—	(6.1)	外 内 ハケメ後ナデ ヘラミガキ、指頭圧痕	良好	暗褐色	外面に横付痕 古墳時代中期後半 65-5と同一個体	

4号墳 土器観察表(1)

遺物番号	遺構名	種類	器種・部位	寸法 (cm)			調整・文様の特徴		焼成	色調	備考
				口径 実部径	底径	器高	調整・手法	焼成			
73-1	墳頂部	弥生土器	甕	—	—	(1.8)	外 内 回転文、指頭圧痕文市 ヨコナデ	良好	黄棕色	弥生時代中期後葉 IV-1 群式	
73-2	墳上	弥生土器	甕	—	—	(5.2)	外 内 ハケメ 風化	普通	黄棕色	弥生時代中・後期か	
73-3	墳上	弥生土器	底部	—	7.0	(2.5)	外 内 風化 ナデ、指頭圧痕	普通	黄棕色	弥生時代中・後期か	
73-4	墳丘面	土師器	甕	—	—	(3.0)	外 内 風化 ヘラミガキ	良好	棕色	頸部径(17.0cm)	
73-5	墳丘面	須恵器	無蓋高杯	(17.4)	—	(6.5)	外 内 腰縁波状文、突帯2条 回転ナデ 底部へら切り後ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲1期(新組) 73-6と同一個体か	
73-6	墳頂部	須恵器	高杯	—	(11.0)	(1.8)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	普通	灰色	3方向の透かし 出雲1期(新組) 73-5と同一個体か	
73-7	墳頂部	須恵器	甕	(16.6)	—	(15.2)	外 内 平行タタキ後ナデ消し 突帯1条、回転ナデ 無文の当て具痕をナデ消し 回転ナデ	不良	灰黄色	古墳時代中期後半	
73-8	墳頂部	須恵器	大甕	—	—	(29.3)	外 内 タタキ痕 当て具痕、ナデ	良好	緑灰色	外面に灰緑がかる	
76-1	周溝	土師器	高杯	(17.0)	(9.2)	11.8	外 内 ハケメ ハケメ	普通	棕色	松山編年IV期	
76-2	周溝	土師器	高杯	(15.3)	9.3	(11.8)	外 内 風化 ハケメ	普通	棕色	松山編年IV期	
76-3	周溝	土師器	高杯	(16.8)	—	(5.1)	外 内 風化 風化	普通	外 暗灰色 内 棕色	松山編年IV期	
76-4	周溝	土師器	高杯	—	9.0	(6.8)	外 内 風化 風化	普通	黄棕色	松山編年IV期	
76-5	周溝	土師器	甕	15.5	—	21.5	外 内 縦・斜め方向ハケメ ヘラミガキ	普通	明黄褐色	単口縁 松山編年IV期	
76-6	周溝	土師器	甕	(15.0)	—	23.2	外 内 ヘラミガキ、指頭圧痕 回転ナデ	普通	黄棕色	単口縁 松山編年IV期	
76-7	周溝	須恵器	無蓋高杯	14.5	8.8	11.0	外 内 回転ナデ、回転ヘラミガキ 回転ナデ	普通	青灰色	1段3方向に方形透かし 出雲1期(新組)	
76-8	周溝	須恵器	無蓋高杯	14.9	(8.9)	11.5	外 内 回転ナデ、回転ヘラミガキ、突帯 回転ナデ、洗線	不良	浅灰色	1段3方向に方形透かし 出雲1期(新組)	

4号墳 土器観察表(2)

遺物番号	遺物名	種類	器種・部位	寸法 (cm)			調整・文様の特徴			色調	備考
				口径 [受部径]	底径	器高	調整・手法	焼成			
76-9	甕	須恵器	甕	13.6	—	(8.2)	外 口ナデ、口ナデナデ 内 タタキ肌 無文のツツ見をナデ消し	良好	オリブ～ 黒色	頸部径 7.0cm 内外面に自然釉 口縁の内側に粘土が溶着	
79-1	主体部	須恵器	甕	—	—	(5.0)	外 タタキ肌 内 無文のツツ見をナデ消し	やや不良	灰黄色	73.7 と同一個体	
79-2	主体部	須恵器	甕	—	—	(8.5)	外 タタキ肌 内 無文のツツ見をナデ消し	やや不良	灰黄色	73.7 と同一個体	
82-1	口蓋土	弥生土器	甕	—	—	(1.2)	外 口ナデ、口ナデナデ 内 口ナデ	良好	淡黄色	弥生時代中期後葉 (Ⅳ-2 様式)	
82-2	調査区 南東側 埴積土	弥生土器	甕	(11.0)	—	(3.1)	外 口ナデ、口ナデ 内 口ナデ	普通	黄褐色土	調査区下に 5mm の円孔 弥生時代中期後葉 (Ⅳ-2 様式)	
82-3	調査区 南東側 埴積土	弥生土器	甕	(14.0)	—	(16.3)	外 口ナデ 3本、口ナデ、ハケメ 内 口ナデの上に刻み目 ハケメ、ハケメズリ、口ナデ	普通	黄褐色土	外面に覆付着 弥生時代中期後葉 (Ⅳ-2 様式)	
82-4	調査区 北側埴積土	須恵器	坏身	(13.1) (15.0)	—	(5.3)	外 口ナデ、口ナデ 内 口ナデ	普通	灰色	古墳時代中期後半 出雲 1 期 (4号墳)	

4号墳 石製品観察表

遺物番号	遺物名	種類	石材	寸法 (cm)			重量 (g)	色調	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
82-6	埴積部 段凡土	勾玉	瑪瑙	1.6	1.5	0.65	129	淡褐色	片面穿孔、孔径 3mm 通部厚 0.5cm
82-7	埴積土	石鏡	黒曜石	1.6	1.25	0.25	0.27	黒色	
82-8	埴積土	不明	—	(7.7)	(7.1)	2.5	150.63	にぶい黄褐色	表面と側面に磨痕の擦痕

4号墳 金属製品観察表

遺物番号	遺物名	種類	材質	寸法 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
82-5	埴積部 段凡土	刀子	鉄	9.6	1.55	5.5	11.21	刃長 30cm / 刀身長 6.6cm / 元幅 1.9cm 茎に木質が嵌る 刀間と縁間が認められる 古墳時代後半

5号墳 土器観察表(1)

遺物番号	遺物名	種類	器種・部位	寸法 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口徑 受部径	底径	器高	調整・手法	焼成		
89-1	甕	土器	坏	—	—	(3.6)	外 ヨコナデ 内 ヨコナデ	良好	淡褐色	古墳時代中期後半
89-2	甕	土器	甕	—	—	(2.4)	外 ハケメ、ナデ 内 口ナデ	良好	黄褐色	
89-3	甕	須恵器	坏蓋	14.7	—	5.1	外 口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰色	出雲 2 期 (TK10)
89-4	甕	須恵器	有蓋高坏	(12.6) (16.2)	(11.6)	13.0	外 カキ目、口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰色	内面の底面に丁寧な仕上げナデを施す 2 段 3 方向の三角形透かし 出雲 2 期 (TK10)
89-5	甕	須恵器	有蓋高坏	(12.9) (15.4)	13.2	15.2	外 カキ目、口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰色	内面の底面に丁寧な仕上げナデを施す 2 段 3 方向の三角形透かし 出雲 2 期 (TK10)
89-6	甕	須恵器	有蓋高坏	(12.0) (15.3)	—	(10.0)	外 カキ目、口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰色	内面の底面に丁寧な仕上げナデを施す 3 方向の透かし 出雲 2 期 (TK10)
89-7	甕	須恵器	有蓋高坏	—	—	(7.2)	外 カキ目、口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰色	内面の底面に丁寧な仕上げナデを施す 3 方向の透かし 出雲 2 期 (TK10)
89-8	甕	須恵器	有蓋高坏	— (15.8)	—	(4.05)	外 口ナデナデ、カキ目、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰白色	出雲 2 期 (TK10)
89-9	甕	須恵器	有蓋高坏	—	—	(5.9)	外 カキ目、口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰色	内面の底面に丁寧な仕上げナデを施す 3 方向の三角形透かし 出雲 2 期 (TK10)
89-10	甕	須恵器	甕	—	—	(14.2)	外 口ナデヘラズリナデ、カキ目 スタンパの残跡、口ナデナデ	良好	にぶい褐色	出雲 2 期 (TK10)
92-1	主体部	須恵器	坏蓋	—	—	(2.9)	外 口ナデナデ 内 口ナデナデ	良好	灰色	内面滑らか
92-2	主体部	須恵器	坏蓋	(13.8)	—	(4.5)	外 口ナデヘラズリナデ、口ナデナデ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	普通	灰色	口縁部内面は段状 出雲 2 期 (TK10)
92-3	主体部	須恵器	坏蓋	(14.0)	—	(2.5)	外 口ナデナデ 内 口ナデナデ	良好	灰色	口縁部内面は段状 出雲 2 期 (TK10)
92-4	主体部	須恵器	坏身	(13.0) (15.3)	—	(5.3)	外 口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰色	口縁部内面は段状 出雲 2 期 (TK10)
92-5	主体部	須恵器	坏身	(12.8) (14.8)	—	(6.3)	外 口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデナデ	良好	灰色	口縁部内面は段状 出雲 2 期 (TK10)
92-6	主体部	須恵器	坏身	(12.0) (14.3)	—	(5.1)	外 口ナデナデ、口ナデヘラズリ 内 口ナデナデ、口ナデヘラズリ	良好	灰色	口縁部内面は段状 出雲 2 期 (TK10)

5号墳 土器観察表(2)

通物 番号	通物名	種類	器種・部位	寸法 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径 [変形径]	底径	器高	調整・手法	焼成		
92-21	主体部	須恵器	費か提瓶	—	—	(2.3)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	内外面に輪
92-26	主体部	縄文土器	深鉢	—	—	(2.6)	外 斜目 内 底化	良好	暗灰黄色	縄文時代前期
94-1	SI501	土師器	碗片	—	—	(2.0)	外 内 内 ヨコナデ	良好	明黄褐色	
96-1	加工段 501	弥生土器	壺	—	—	(4.5)	外 ヨコナデ、ヘラミガキ 内 ヨコナデ	良好	にぶい黄褐色	弥生時代
96-2	加工段 501	弥生土器	胴部片	—	—	(2.9)	外 ヘラミガキ 内 ハケメ	良好	灰色 黄褐色	弥生時代
96-3	加工段 501	弥生土器	底部	—	(5.2)	(5.1)	外 ヘラミガキ、ナデ 内 ナデ	良好	赤褐色 ～黒色	弥生時代
96-4	加工段 501	土師器	壺	—	—	(3.5)	外 ハケメ 内 ヨコナデ	良好	明黄褐色	古墳時代
98-1	加工段 502	土師器	胴部片	—	—	(3.5)	外 調整不明 内 ヘラミガキ	良好	明黄褐色	古墳時代
102-1	SI503	須恵器	高杯	—	(12.2)	(4.5)	外 カキメ、回転ナデ 内 回転ナデ	良好	灰色	有蓋高杯か 出雲2期(TK10)
103-1	旧表土	縄文土器	碗片	—	—	(3.1)	外 ナデ 内 ナデ	良好	黄色～黒色	時期不明
103-2	黄褐色土	土師器	杯	(14.6)	(4.6)	5.2	外 ナデ、指頭圧痕 内 ナデ	普通	褐色	内外面に赤色顔料 古墳時代(中前後半)
103-3	黄褐色土	土師器	壺	—	—	(5.6)	外 ハケメ 内 ヘラミガキ	良好	黄褐色	古墳時代
103-4	黄褐色土	須恵器	環蓋	(14.0)	—	(4.7)	外 回転ナデ、回転ヘラミガキ 内 回転ナデ	良好	灰色	口縁部内面は段状 出雲2期(TK10)
103-5	表土	須恵器	環蓋	(13.0)	—	(2.7)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	良好	灰色	口縁部内面は段状 出雲2期(TK10)
103-6	黄褐色土	須恵器	環蓋	—	—	(3.0)	外 回転ナデ、回転ヘラミガキ 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲2期(TK10)

5号墳 石製品・ガラス製品観察表

通物 番号	通物名	種類	石材	寸法 (cm)			重量 (g)	色調	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
89-11	周溝	石蔵	黒曜石	1.8	1.5	0.3	0.46	黒色	
92-7	主体部	勾玉	碧玉	5.2	1.9	1.6	36.69	緑色	孔径 4mm 古墳時代後期
92-17	主体部	小玉	ガラス	φ 0.6 ~ 0.75	—	0.4	0.31	青色	孔径 2mm
92-18	主体部	小玉	ガラス	φ 0.6	—	0.5	0.28	青色	孔径 2mm
92-19	主体部	白玉	滑石	φ 0.6	—	0.25	0.15	灰色	孔径 1.5mm
92-20	主体部	白玉	滑石	φ 0.6	—	0.15	0.08	灰色	孔径 2mm
92-22	主体部	石蔵	黒曜石	1.6	1.2	0.3	0.34	黒色	
92-23	主体部	石蔵	黒曜石	2.35	1.65	0.3	0.67	黒色	
92-24	主体部	石蔵	黒曜石	1.8	1.5	0.35	0.69	黒色	
92-25	主体部	残核または 一次加工の断片	黒曜石	3.0	3.2	0.9	7.77	黒色	

5号墳 金属製品観察表

通物 番号	通物名	種類	材質	寸法 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
92-8	主体部	長距離		(1.7)	(1.05)	(0.5)	1.96	
92-9	主体部	長距離		3.35	0.7	0.5	3.09	
92-10	主体部	長距離		(4.8)	0.8	0.5	4.28	
92-11	主体部	長距離		(2.1)	0.8	0.55	2.02	
92-12	主体部	長距離		(3.35)	0.9	0.55	3.26	本質が残る
92-13	主体部	長距離		(4.8)	0.7	0.45	3.99	本質が残る
92-14	主体部	長距離		(1.9)	0.4	0.35	0.42	
92-15	主体部	盛矢貝または 馬貝の一部	鉄	1.7	2.0	0.2	1.45	銅の痕跡が残る(径 2mm) 片面に本質または銅皮が残存 92-16 と同一個体か
92-16	主体部	盛矢貝または 馬貝の一部	鉄	0.85	1.0	0.2 (銅の部分0.65)	0.49	銅が穿たれている(銅径 7mm) 銅面の反対側の面に本質が残存 92-15 と同一個体か

第5章 奥宇田瀬遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の経過

第1項 遺跡の位置(第114図)

奥宇田瀬遺跡は松江市矢田町宇田瀬に所在する。今回調査を行った樋岡古墳群や南外1・5号墳が所在する丘陵尾根から南東側に下った谷部の西側緩斜面に位置している。調査区南側から東側は谷部であり、常に水が湧くような低湿地となっている。

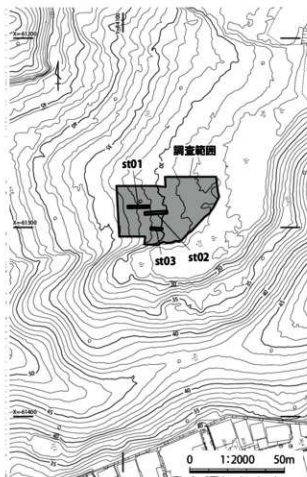
本遺跡の周辺の遺跡は、谷を挟んだ南東側に来美墳墓が、また東側丘陵の尾根上には来美東古墳群がみられる。なかでも来美東1号墳は、一辺15m(周溝を含めると約20m)を測る方墳である。また、南東側には国の史跡である山代郷北新造院があり、周辺に多時期の遺跡が所在している。

第2項 試掘調査の概要と経過(第115・116図、写真1・表13)

当地の現況は山林である。平成14年に松江市教育委員会が実施した試掘調査により、古代の遺物包含層が確認された。その後、平成31年に当地の造成工事が計画されたため、過去の当該地一帯の状況を空中写真で確認したところ、調査地である緩斜面は1956年頃には水田(写真1)として利用



第114図 奥宇田瀬遺跡周辺の遺跡分布図



第115図 奥宇田瀬遺跡位置図

され、その後1962年頃には大規模な造成を受けて削平や谷部の造成が行われて埋め立てられていた。そのため本調査に先立ち、遺跡の範囲を確認するためにトレンチ2本(st02・03)の調査を実施した。

以下では平成14年のトレンチ1本(st01)と平成31年のトレンチ2本(st02・03)について概要を述べる。

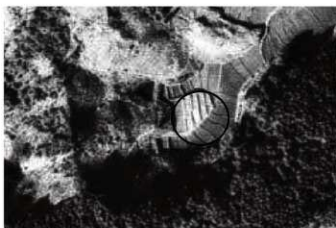


写真1 1956年の奥宇田瀬遺跡一帯の空中写真

※出典：国土地理院ウェブサイト（一部改変）

表13 試掘トレンチ(st01・02・03)

トレンチ	トレンチ位置	トレンチ 設定方向	設定範囲 (長軸×短軸)	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
st01	西側緩斜面	東—西	11.4m × 1.2m	13.68㎡	1.7m	加工段	土師器・須恵器 陶磁器
st02	西側緩斜面	東—西	12.0m × 1.0m	12.0㎡	1.6m	—	土師器・須恵器 瓦
st03	西側緩斜面	東—西	6.4m × 1.0m	6.4㎡	1.2m	—	—

1.試掘トレンチ(st01)

st01は緩斜面の標高32m付近の東西方向に設定した長さ11.4m×幅1.2mのトレンチである。トレンチ東側で加工段状の落ち込みが確認され、7層(淡黒灰色土)から多くの土師器や須恵器が出土した。この落ち込みは、本調査において、SI01-1の壁体の一部であることが確認された。

2.試掘トレンチ(st02)

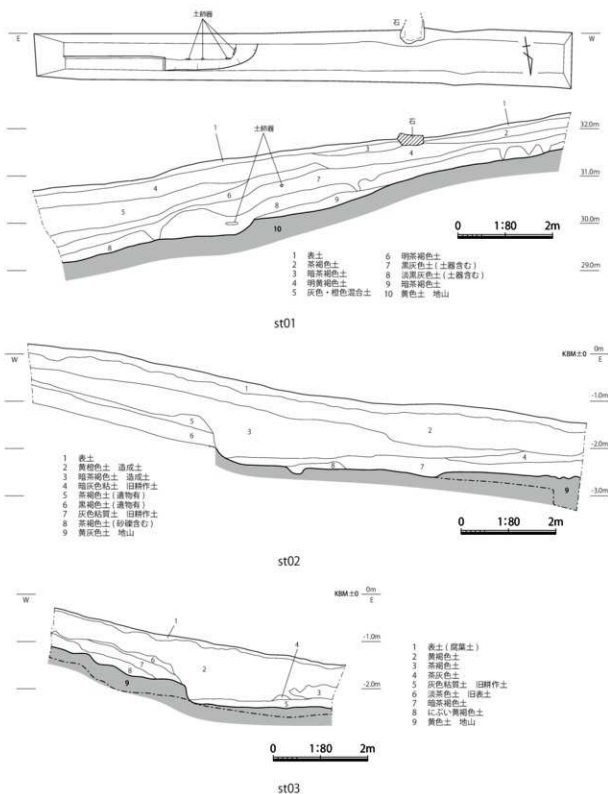
st01の南側で東西方向に設定した長さ12m×幅1.0mのトレンチである。遺物包含層の範囲と水田跡を確認するために調査を行った。表層の腐葉土を除去すると、2層(黄橙色土)や3層(暗茶褐色土)の造成土が東側にむかって厚く確認され、西側では5層(茶褐色土)や6層(黒褐色土)から土師器や須恵器が多く出土した。ただし、トレンチの東側については地山まで削平を受け、水田の耕作土と推定される水平な灰色粘質土が地山上にみられ、水田造営による削平を受けた範囲であることが確認された。

3.試掘トレンチ(st03)

st02に平行して南側に設定したトレンチである。st02同様に調査区東側は水田造営により削平を受けている状況が確認された。また、調査区西側では造成前の旧表土(6層)は残っているものの、遺物包含層は確認されなかった。

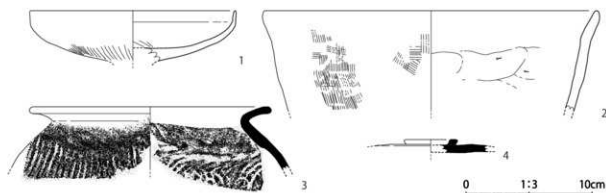
4.試掘トレンチ出土遺物(第117図)

第117図は試掘トレンチの出土遺物である。いずれもst01の7層(淡黒色土)から出土している。117-1・2は土師器、117-3・4は須恵器である。117-1は椀状を呈する高環の坏部である。口径16.3



第116図 奥宇田瀬遺跡試掘トレンチ実測図

cmを測り、橙色を呈する。古墳時代中期後半と思われる。117-2は口径26.5cmを測る瓶である。内面にヘラケズリとヨコナデを、外面にハケメとヨコナデを施す。117-3は甕である。口縁部は強く外反し、外面に叩き痕が、内面に当て具痕が明瞭にみられる。117-4は輪状つまみの蓋で、出雲国府編



第117図 試掘トレンチ出土遺物実測図

年第2型式、7世紀末葉～8世紀第1四半期である。

第3項 本調査の方法と経過(第118・119図)

発掘調査対象地は山林であったため事前に立木の伐採や草刈りを行い、伐採作業終了後に基準点測

量と調査前地形測量を実施し

た。調査範囲は試掘調査結果か

ら南北約25m、東西約17.5m、

面積約430㎡である。調査は、

まず試掘トレンチ st02 と同じ

位置にあためて土層観察用の

トレンチ (T1) を設定して土層

観察を行い、重機による表土・

造成土の掘削を行った。調査を

進めていくと調査区東側で方

形のプランや柱穴が検出され

たため松江市埋蔵文化財調査室と協

議を行い、当初の調査範囲の東

側にさらにトレンチを入れて遺

構・遺物の確認を行った。その

結果、東側にも遺構が広がっ

ていることが確認されたため調査

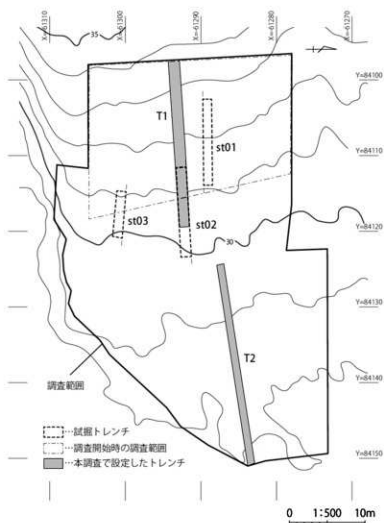
範囲の拡張を行った。これによ

り調査範囲は南北35m、東西

54.5m、面積1,487㎡となった。

東側に拡張した範囲について

は新たにトレンチ (T2) を設定



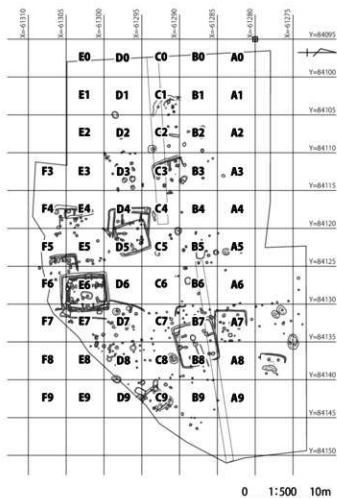
第118図 調査前地形測量図

して土層観察を行い調査を実施した。T2 土層断面においても旧耕作土や造成土が確認され、表土と造成土を重機掘削した後に調査を実施した。

重機掘削後、調査区には世界測地系平面直角座標系第Ⅲ系に基づいた 5m 四方のグリッドを設定した。グリッドは北東角 (X = -61280 と Y = 84095 の交点) を基点とし、縦軸は Y 座標軸、横軸は X 座標軸に平行とし、列番号は基点から南側に向けてアルファベット順、行番号は東側に向けてアラビア数字順に付し、各区画は行・列の順に番号を繋いで呼称した。それぞれの区画は各交点の北西隅をもってグリッドの名称としている。

遺構の平面実測はトータルステーションを用い、その測量データと遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。方位は世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺 1/20 で作成した。

遺構の記録写真は 3mm デジタルカメラとフルサイズデジタルカメラ一眼レフを併用して撮影を行った。各古墳の全体写真は、写真用足場を用いて撮影すると同時にドローンによる高所からの撮影を実施した。



第 119 図 調査グリッド配置図

第2節 本調査の成果

第1項 本調査の概要(第120図)

本調査区は西側から東側に向かって傾斜する谷部の緩斜面(標高 25.8m～33.2m)に位置する。

表土や造成土を除去すると、西側では緩斜面に併行して地山が検出された。調査区中央付近では南北方向に地山が段状を呈しており、段の下側に水田の旧耕作土と思われる灰色粘質土が確認されることから地山を段状に加工して水田造成を行ったと考えられる。調査区東側も造成土や旧耕作土が全体に確認され、その下方に部分的に遺物包含層が残存しているような状況であった。

遺構は地山面から竪穴建物跡・掘立柱建物跡・柱穴列・溝・土坑・炉跡・多数の柱穴が検出された。竪穴建物跡のなかには1回または2回の建て替えが行われており、のべの棟数は18棟となる。また、竪穴建物跡には玉作工房跡と考えられる建物跡(SI06-1)が確認され、本遺跡を特徴づける遺構である。

遺物は堆積土や遺構埋土から土師器・須恵器・石製品・金属製品が出土している。遺物は古墳時代と古代のもので古墳時代の遺物が大半を占めている。石製品は玉作関連遺物が多く、水晶・瑪瑙・碧玉・滑石のほか砥石や敲石などが出土している。

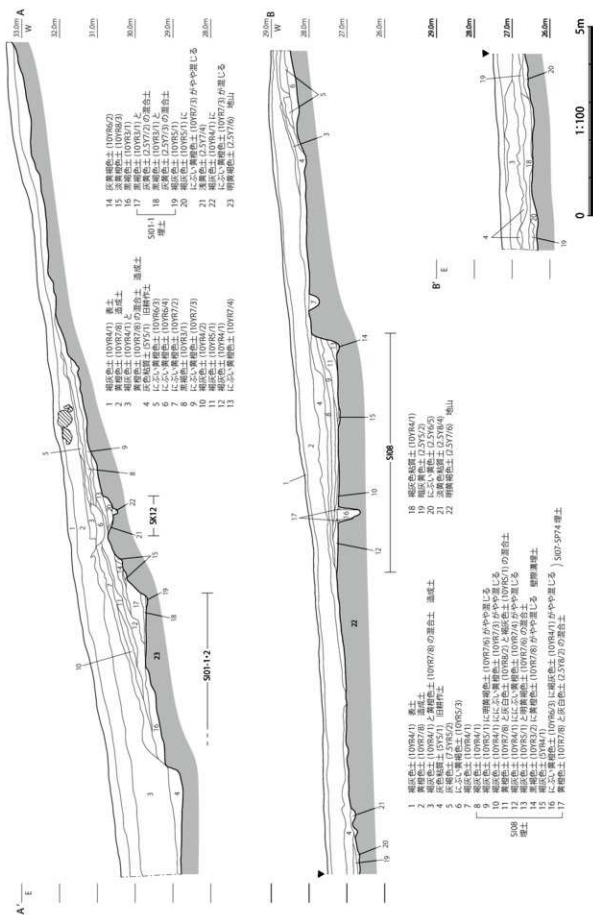
第2項 基本層序(第121図)

本調査区は、西側から東側に向かって傾斜する谷部の緩斜面に位置する。第1項で述べたように本調査区は水田として利用された後、大規模な削平や造成により谷部は埋め立てられトレンチ調査においてもその状況が確認された。

本調査では緩斜面西側にT1トレンチを東西方向に設定して土層観察を行い、また、調査範囲が拡張した際にはT1トレンチ(A-A')の東側で東西方向にT2トレンチ(B-B')を設定して土層観察を行った。土層断面をみると、表土下に0.2～1.3mの厚さで黄橙色土(A-A'・B-B'2層)や黄橙色土と褐灰色土の混合土(A-A'・B-B'3層)の造成土が確認される。その下層には耕作土と思われる灰色粘質土(A-A'・B-B'4層)が調査区中央から東側で10～30cmの厚さで確認される。B-B'の西側で地山面が段状を呈するところは、水田造成の際に削平されたところである。

土層断面A-A'の7～16層は調査区西側緩斜面の堆積土である。褐灰色土やにぶい黄橙色土が30～60cmの厚さで堆積しており、古墳時代から古代の遺物が出土している。特に古代の遺物が多くみられ、古代の遺物包含層と思われる。土層断面A-A'の中央より東側にみられる17～19層は竪穴建物跡(SI01)の埋土である。黒褐色土と灰黄褐色土の混合土や褐灰色土が厚さ30cm程度堆積しており、古墳時代の土師器や須恵器が出土している。

土層断面B-B'5・6層は部分的に残存していた堆積土で、古墳時代の土器が出土している。土層断面B-B'8～17層は竪穴建物跡(SI07)の埋土で、褐灰色土やにぶい黄橙色土などが30～40cmの厚さで堆積している。これらの土層からは、遺物は土師器や須恵器のほか水晶の未成品や剥片、瑪瑙の素材などが出土している。



第121図 奥宇田瀬遺跡土層断面図 A-A'・B-B'

第3項 遺構と遺物

今回検出した遺構は調査区全体にまんべんなくみられるが、西側と北東側はやや希薄である。竪穴建物跡 11 棟 (SIO1 ～ 11)、掘立柱建物跡 4 棟 (SB01 ～ 04)、柱穴列 2 本 (SA01・02)、加工段 1 基、溝 1 条 (SD01)、土坑 24 基 (SK01 ～ 24)、炉跡 1 基、多数の柱穴を検出し、竪穴建物跡は 11 棟のうち 6 棟で建て替えが行われている。

遺物は、堆積土や遺構埋土、床面から土師器・須恵器のほか、金属製品・石製品が出土している。土器は古墳時代から奈良・平安時代のもので、特に古墳時代の土器が多く、また玉作関連遺物も多数出土している。

本項ではこれらの遺構について種別ごとに概要を述べ、各遺構から出土した遺物と併せて遺構・遺物の順に報告する。なお、建て替えが行われた建物跡については枝番を付けて記載し、柱穴・土坑の番号は連番で付している。

1.SIO1(第122～124図)

SIO1 は調査区西側 C3 区に位置し、標高 28.0 ～ 30.1m の地山面に検出した竪穴建物跡である。斜面に平行するように建てられ、建物の東側は流出しているが西側はよく残存している。西側壁体の北端は試掘調査の際に検出したものを合成している。床面から 10 基以上の柱穴が検出され、主柱穴は SP01 ～ 04 の 4 基の建物と考えられた。壁体の高さは 40cm を測り、壁際には壁際溝が廻っていた。床面の精査を行うと北側で周溝と切り合う別の溝が確認され、また、焼土下から新たな柱穴が検出された。そのため建て替えの可能性が考えられたことから柱穴の位置や埋土から検討を行い、2 棟の建物跡を想定した。土層断面に切り合いがみられないため壁体側の周溝に伴う建物跡が新しく、焼土下から検出した柱穴に伴う建物跡が古いと判断して、新しい建物跡を SIO1-1、古い建物跡を SIO1-2 として各建物跡について述べる。

SIO1-1(第122図)

規模と形態 SIO1-1 の東側は流出しているが、残存する壁体の形から平面プランは方形と考えられる。規模は掘り方で南北 4.94m、東西 3.7m 以上を測り、建物西壁の方位は N - 19° - W である。

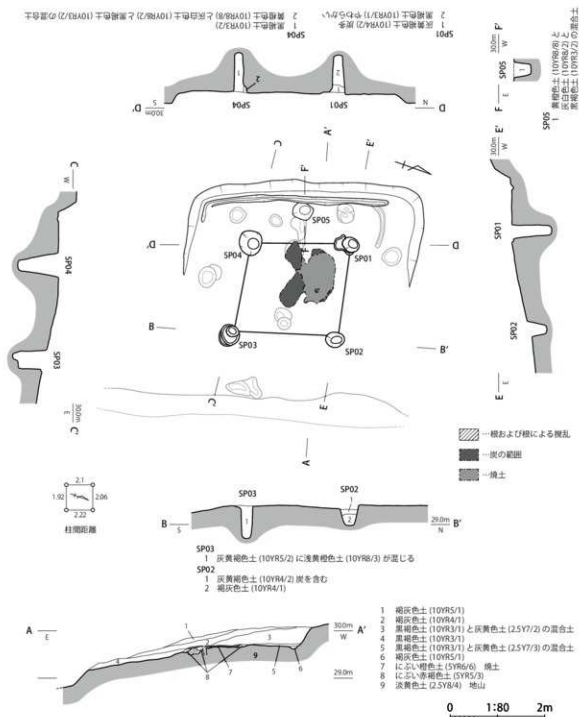
主柱穴は SP01 ～ 04 の 4 基で、壁際溝に接する SP05 も主柱穴と埋土が同じであるため SIO1-1 に伴う柱穴と思われる。主柱穴の平面形は楕円形を呈し、規模は径 35 ～ 48cm、深さ 40 ～ 86cm を測る。半截断面で柱痕は確認されなかった。主柱穴間の心々距離は 1.92 ～ 2.22m である。SP05 は径 43cm、深さ 37cm を測る柱穴で、埋土には炭化物がやや含まれ土師器の直口壺が出土している。SP05 はいわゆる壁際ビットと思われる。

床面は壁際溝の内側で南北 4.35m、東西は建物を構成する主柱穴の位置から 3.5m 以上あると思われる。床面積は 15.23㎡以上と考えられる。床面標高は 29.30 ～ 29.70m を測る。壁際溝は壁体に沿うように西側から南側に一部にみられ、幅約 10 ～ 12cm、深さ 2 ～ 4cm である。

焼土や炭が、床面の中央よりやや北西側で検出された。南北 40cm、東西 60cm の範囲が良く焼けていて硬く締まり、周りには炭が多くみられた。

遺物出土状況 遺物は覆土や柱穴内から出土している。床面から土師器の甕片(123-3)と須恵器の無蓋高坏(123-6)が、主柱穴 SP01 から土師器片(123-2)が、SP05 から土師器の直口壺(123-1)が出土している。直口壺は柱穴上端から約 20cm 下で口縁を下にして出土しており、壊れていたがほぼ 1 個体になるもので柱穴が埋まる際に近くに置かれていたものが落ち込んだものと思われる。

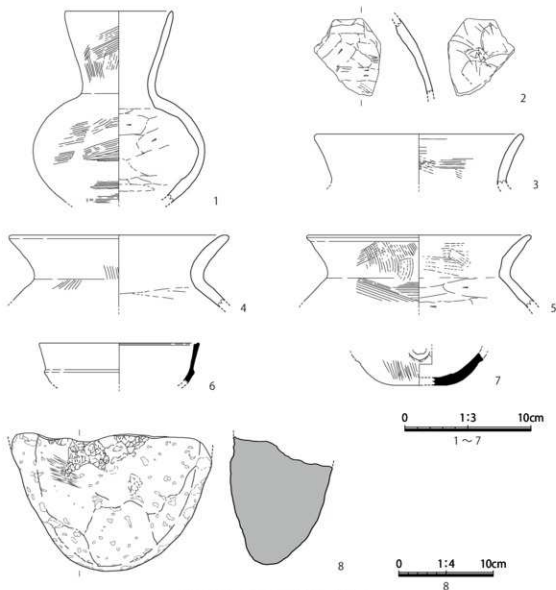
出土遺物(第123図) 123-1～5は土師器である。123-1は直口壺である。口縁部がまっすぐ立ち上がり、胴部が口縁部より張り出している。古墳時代中期後半頃と思われる。123-2は器壁の薄い甕片



第122図 SI01-1 実測図

である。黄橙色を呈し、外面に細い線で弧や直線が描かれている。123-3～5は単純口縁の裏で、くの字状を呈する。口縁部は外反し、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。古墳時代中期後半以降と思われる。

123-6・7は須恵器である。123-6は無蓋高坏で、口縁部と体部の境に段をもち、口縁部は外反する。出雲1期の新相に属する。123-7は円孔をもつ小型の壺と思われる。調整は外面にハケメを、内面にナデを施している。123-8は台石で、半分以上が欠損している。残存長14.3cm、幅21.0cm、最大厚11.0cm、重さ2.9kgを測り、中央付近に敲打痕が確認される。



第123図 SI01-1 出土遺物実測図

SI01-2(第124図)

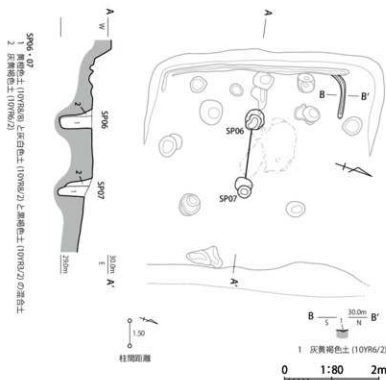
規模と形態 SI01-2は焼土下からピットが検出されたことやSI01-1の壁隙溝が北側で別の溝と切り合っていることから建て替えが行われたと判断して想定した竪穴建物跡である。焼土下から検出したピットの位置や埋土から主柱穴2本(SPO6・07)の建物と考えられ、北側で検出した溝は埋土が同じ

であるためこの建物に伴う壁際溝と思われる。

建物の平面形は検出した壁際溝がやや弧を描くように L 字状を呈することから方形と思われる。壁際溝は北側のみで確認され南側や西側で検出していないため、SI01-1 は SI01-2 の西側壁際溝を踏襲して北側に建物を拡張しているように思われる。

主柱穴は SP06・SP07 の 2 本である。平面形は不整形な楕円形を呈し、規模は SP06 が径 44cm、深さ 73cm、SP07 が径 40cm、深さ 68cm を測り、いずれも半載断面から径約 20cm の柱痕が確認された。柱間距離は 1.5m である。

遺物は SP06 から土師器片が出土しているが細片のため図化できなかった。

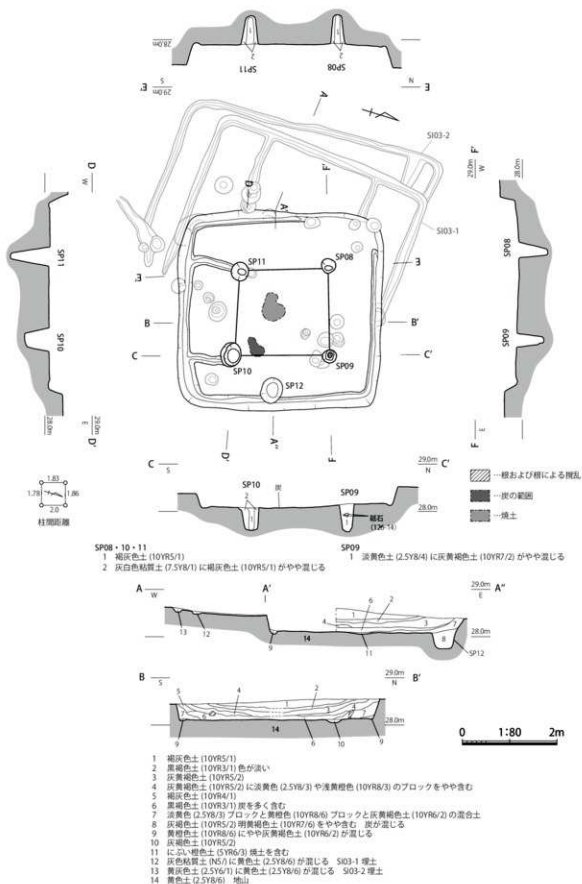


第 124 図 SI01-2 実測図

2.SI02(第121・125・126図)

SI02は調査区のほぼ中央、D4・D5区に位置する。調査区中央付近では地山が水田造成の際に削平されており、旧耕作土(第121図土層断面A-A'4層)の上に造成土(第121図土層断面A-A'3層)が厚く盛られていた。それらの土層を掘削して精査を行うと、標高28.5～28.6mの地山面で黒色土を埋土とする方形のプランとその西側からコの字状を呈する2条の溝のプランが検出された。この2条の溝は建物の壁際溝と考えられ、方形プランの建物跡とは主軸方位を異にする2棟の建物が西側に存在していたと考えられた。この2棟は主軸方位が似ているため建て替えと判断され、一番新しい方形のプランの建物跡をSI02、西側の2棟をSI03-1、SI03-2として後述する。遺構の新旧関係は検出状況から、SI02が一番新しく、次いでSI03-1、SI03-2と古くなる。

規模・形態 SI02の平面形は方形を呈し、規模は掘り方で南北4.3m、東西4.23m、床面は南北3.8m、東西2.8mを測り、床面積は10.64㎡である。壁体の高さは40cm、床面標高は28.1～28.15mを測る。



第 125 図 SI02 実測図

建物西壁の方位はN-22°-Wである。床面から10基以上柱穴が検出され、後述するSIO3-1・2の柱穴も含まれる。そのなかでSIO2に伴う主柱穴はSP08～11の4基である。主柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、規模は径28～50cm、深さ46～60cmを測る。柱穴の半截断面からSP08・SP10・SP11で径11～15cmの柱痕が確認された。主柱穴間の心々距離は1.78～2.0mを測る。

壁際溝は北西側では掘りすぎたため確認できなかったが、幅7～18cm、深さ2～3cmを測り、南側の壁際溝から主柱穴SP10・SP11に延びる2条の溝が確認された。西側の溝は長さ90cm、幅15～20cm、深さ2cm、東側の溝は長さ60cm、幅15～20cm、深さ3cmを測る。2条の溝の間隔は約2mである。この溝は壁際溝から主柱穴に繋がり、仕切りの性格の溝と思われる。また、建物の東壁の中央付近には壁際溝に接するSP12がみられる。平面形は楕円形を呈し、南北45cm、東西53cm、深さ36cmを測り、壁際ピットと考えられる。

床面の中央には南北50cm、東西57cmの不整形な焼土面があり、焼土面の南東側では南北20cm、東西40cmの範囲で炭が検出された。

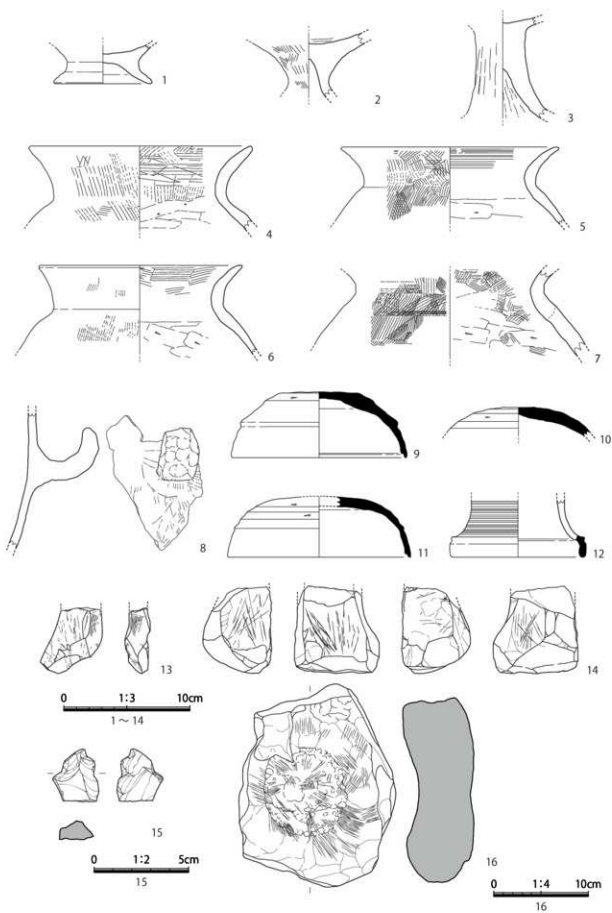
埋土は褐灰色土・黒褐色土・灰黄褐色土などで床面中央に向かって弧状に堆積している。

遺物出土状況 遺物は土師器・須恵器・石製品が出土している。遺物は埋土の4層（灰黄褐色土）や6層（黒褐色土）の下面に多く、床面から土師器の甕(126-6)や須恵器の坏蓋(126-9・11)が、主柱穴のSP09から石製品(126-14)が出土している。

出土遺物(第126図) 第126図の1～8は土師器である。126-1は脚が付く坏の底部である。低脚坏がやや大型化したような形で、脚部は外反する。橙色を呈し、脚部底径は7.8cmを測る。126-2は低い脚の付く坏と思われる。内外面にハケメを施している。126-3は高坏の脚部である。内面に絞り痕、外面にヘラミガキを施し、丹塗りの痕跡がわずかに残る。126-4～6は単純口縁の甕である。いずれも口縁部がくの字状に外反する。器壁はやや厚く、にぶい橙色を呈している。調整は、外面にハケメ、内面にハケメとヘラケズリを施す。126-7は甕の頸部から胴部で、外面にハケメ、内面にヘラケズリをしている。126-4～7は古墳時代後期以降と思われる。126-8は甕の胴部と把手である。胴部内面にヘラケズリ、外面にハケメを施し、把手には指頭圧痕が認められる。

126-9～12は須恵器である。126-9の坏蓋は口径13.6cm、器高5.2cmを測る。口縁端部内面に沈線を入れて段状に仕上げ、外面の天井部と体部の境（以下、肩部と呼ぶ）に稜を施す。外面の回転ヘラケズリの幅はやや広い。126-10は坏蓋の天井部で、外面の回転ヘラケズリの幅が広く、やや古い段階の様相がみられる。126-11は口径14.4cm、器高4.8cmを測る坏蓋である。口縁端部内面に段状に仕上げ、肩部に緩い稜がみられる。126-12は高坏の脚部である。脚端部は外面に丸みを帯びた段をもち、内湾する。また、外面にカキメを施している。126-10・12は出雲1期新相、126-11は出雲2期と思われる。

126-13～16は石製品である。126-13は砥石の破損品で、擦痕が認められる。126-14も破損品である。3面を使用面として用いており、各面に擦痕が確認される。126-15は碧玉の剥片である。126-16は台石で長さ16.6cm、幅21.5cm、厚さ7.0cm、重さ3.83kgを測る。中央部に凹面状の窪みがあり、擦痕が放射状に多数確認される。



第 126 図 SI02 出土遺物実測図

3.S103(第127～130図)

前述したように S103 は S102 の西側で検出されたコの字状の溝に伴う竪穴建物跡である。2 棟の竪穴建物の方位は似ているため建て替えと判断した。

S103-1(第127図)

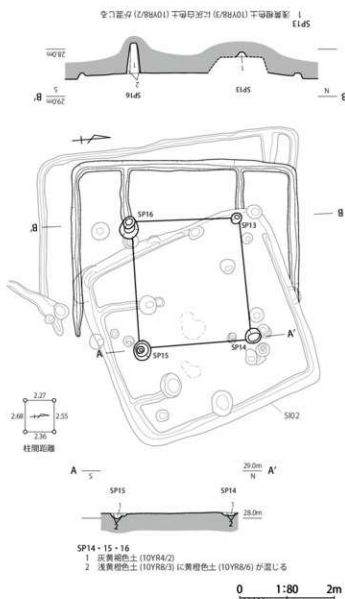
規模・形態 S103-1 は S102 の西側に位置する竪穴建物跡である。建物の壁体は水田造成の際に削平され、東側の壁際溝や床面は S102 の建て替えの際に失われている。S103-1 の平面形は残存していた壁際溝の形から方形と考えられ、現状での床面標高は 28.5m である。床面の規模は残存する壁際溝から南北 4.35m、東西 3.5m 以上、床面積は 15.23㎡以上と想定される。建物西壁の方位は $N-7^{\circ}-E$ を示す。

建物を構成する主柱穴は SP13～16 の 4 基で、そのうち 3 基 (SP13～15) は S102 の床面から検出され、柱穴の底面のみが残存しているような状況であった。主柱穴の平面形は円形や楕円形で、規模は径 20～47cm、深さ 6～64cm を測り、半截断面で SP15 で 16cm、SP16 で 18cm の柱痕を確認している。主柱穴間の心々距離は 2.27～2.68m を測る。

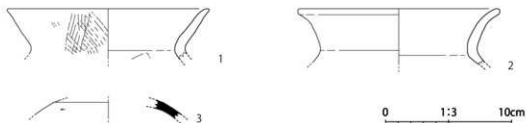
壁際溝は幅 15～20cm、深さ 2～3cm を測り、壁際溝と主柱穴 SP13・SP16 を繋ぐように溝が 2 条確認された。北側の溝は長さ 80cm、幅 15cm、深さ 3cm、南側の溝は長 1.05m、幅 13～20cm、深さ 3cm を測り、2 条の溝の間隔は 2.4m である。この 2 条の溝は仕切り溝と思われる。焼土は検出していない。

遺物出土状況 遺物は床面から土師器の甕片 (128-1・2) が、主柱穴 SP15 から須恵器の坏蓋片 (128-3) が出土している。

出土遺物 (第 128 図) 128-1・2 は土師器の単純口縁の甕である。128-1 は口縁部がくの字状にひらく口縁で、外面にハケメを施す。128-2 は外反する口縁部である。調整は内外面ともにヨコナデであ



第 127 図 S103-1 実測図



第128図 SI03-1 出土遺物実測図

る。128-3は須恵器の环蓋の一部と思われる。外面に回転ヘラケズリ、内面に回転ナデが施されている。128-1が128-2よりやや古い、いずれも古墳時代中期後半以降に属するものと思われる。

SI03-2(第129図)

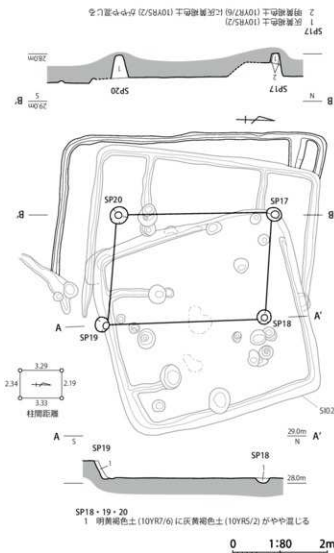
規模・形態 SI03-2はSI03-1の西側に位置する竪穴建物跡である。建物の壁体は水田造成の際に削りされ、東側の壁際溝や床面はSI02やSI03-1の建て替えの際に大半が失われている。

建物の平面形は残存する壁際溝の形から方形と考えられ、床面の規模は壁際溝の内側で南北5.17m、東西2.7m以上、床面積は14.0㎡以上と想定される。現状の床面標高は28.6mを測り、建物西壁の方位はN-3°-Wを示す。

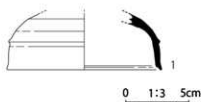
建物を構成する主柱穴はSP17～20の4基で、そのうちのSP17～19の3基はSI02、SI03-1の床面や壁体で検出され、SP18は底面の一部のみが残存しているような状況であった。

主柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径28～40cm、深さ10～49cmである。主柱穴間の心々距離は2.19～3.33mを測る。柱穴の半截断面からSP17で径15cmの柱痕を確認している。

壁際溝は幅12～15cm、深さ2～3cmを測り、コの字状にみられる。壁際溝



第129図 SI03-2 実測図



第130図 SI03-2 出土遺物実測図

の北側には東側に向かって延びる長さ 55cm、幅 27 ~ 35cm、深さ 3cmの溝があり、SI03-1 建て替えの際に切られているが SI03-1 の状況からすると南側にも存在していた可能性が考えられ、仕切りのな性格と思われる。

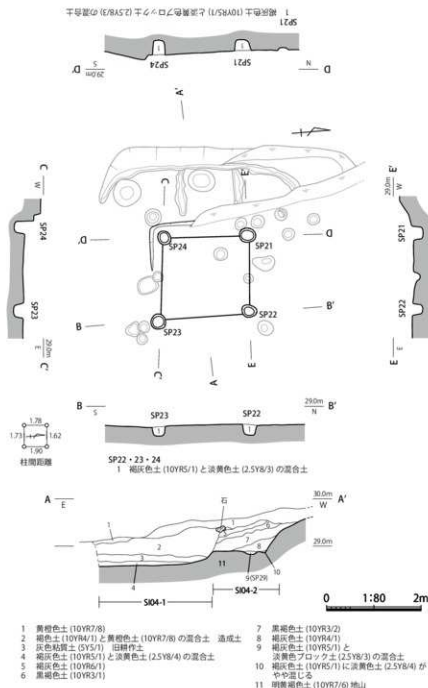
遺物出土状況 遺物は床面上にわずかに残存していた堆積土 (第 125 図 13 層) から須恵器 (130-1) が出土している。

出土遺物 (第 130 図) 130-1 は須恵器の坏蓋で、口径 12.2cm を測る。口縁端部はわずかに外反し、内面に沈線を入れて段状に仕上げている。肩部は 1 条の沈線とナデにより稜をなす。出雲 1 期新相と思われる。

4.SI04 (第131~133図)

SI04 は、調査区南側の中央付近、E4・F4 区に位置し、標高 29.4m の地山面で検出した竪穴建物跡である。建物跡の北側は後世の削平により失われている。

土層断面 A-A'・3 層は造成土と旧耕作土、4 層は東側地山面上の堆積土、6 ~ 10 層は西側建物跡に伴う堆積土である。4 ~ 10 層下の地山面からは壁際溝と思われる溝や柱穴が検出され、建物跡が想定された。2・3 層に土層が切られているため 4 層と 6 ~ 10 層の切り合い関係はわからないが、西側遺構面を切って 4 層下遺構面があるようにみえるため、東側の建物跡を SI04-1、西側の建物跡を SI04-2 として各建物跡について述べる。



第 131 図 SI04-1 実測図

SI04-1(第131図)

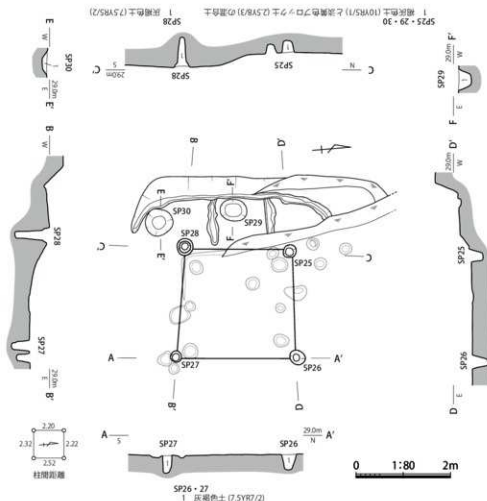
規模・形態 SI04-1の平面形は南西側にみられるわずかなL字状の段から方形と思われる。段の高さは10cm程度で、壁際溝は検出していない。主柱穴は位置や埋土からSP21～24の4基と考えられ、主柱穴の平面形は円形や楕円形を呈する。主柱穴の規模は径26～35cm、深さ19～35cm、柱間距離は1.62～1.90mを測り、柱痕は確認されなかった。

床面標高は28.6～28.8mを測る。床面の規模は建物を構成する主柱穴の位置から、南北・東西ともに2.2m以上と推測される。建物西壁の方位は残存している範囲が少ないため明確なことは言えないがN-2°-W程度と思われる。遺物は出土していない。

SI04-2(第132図)

規模・形態 SI04-2はSI04-1の西側に位置する。建物の東側や北側はSI04-1や水田造成の際に削平され、西側の一部が残存している。壁体の形から方形の竪穴建物跡と思われるが、壁際溝がやや弧状を呈していることからやや隅丸に近い建物跡の可能性も考えられる。

壁体の高さは40cm、西壁の方位はN-4°-Eを示す。残存する床面の規模は、壁際溝の内側で南北3.7m、東西1.0mを測り、建物を構成する主柱穴の位置からすると東西は3.3m以上と考えら



第132図 SI04-2実測図

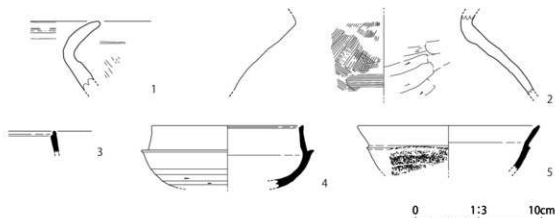
れる。

主柱穴は SP25～28 の 4 基である。平面形は円形や楕円形を呈し、規模は径 25～36cm、深さ 33～67cm を測る。半載断面から柱痕は確認されなかった。主柱穴間の心々距離は 2.20～2.52m を測る。また、壁際溝の中央から径 55cm、深さ 27cm の柱穴 SP29 と、南西側隅から径 57cm、深さ 10cm の浅い柱穴 SP30 が検出された。SP29 の両側には壁際溝から延びる 2 条の溝が確認され、この 2 基の柱穴は壁際ピット、溝はピットを仕切るための溝と考えられる。2 条の溝の規模は、北側は長さ 73cm、幅 13～20cm、深さ 2～5cm、南側は長さ 1.0m、幅 13～25cm、深さ 3～5cm を測り、間隔は 1.2m である。

遺物出土状況 SI04-2 から出土した遺物は少なく、いずれも埋土からの出土である。第 131 図 7 層 (黒褐色土) から土師器 (133-1・2) の甕や須恵器の高坏 (133-5) が、8 層 (褐灰色土) から須恵器の蓋坏 (133-3・4) が出土している。須恵器の坏蓋は床面に近く建物の廃絶時期に近いと思われる。

出土遺物 (第 133 図) 133-1・2 は土師器である。133-1 は単純口縁の甕でくの字状を呈する。口縁は外反し、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。133-2 は甕の胴部で、外面にハケメを、内面にヘラケズリを施す。133-1・2 古墳時代中期後半以降に属するものと思われる。

133-3～5 は須恵器である。133-3 は坏身の口縁端部で、内面は段状を呈する。133-4 は口径 12.0cm、受部径 13.6cm を測る坏身である。器壁は薄く口縁端部にわずかに段をもつ。133-5 は無蓋高坏の坏部である。薄手で口縁部は外反し、外面に稜と波状文を施す。133-3～5 は出雲 1 期新相と考えられる。



第 133 図 SI04-2 出土遺物実測図

5.SI05(第134～136図)

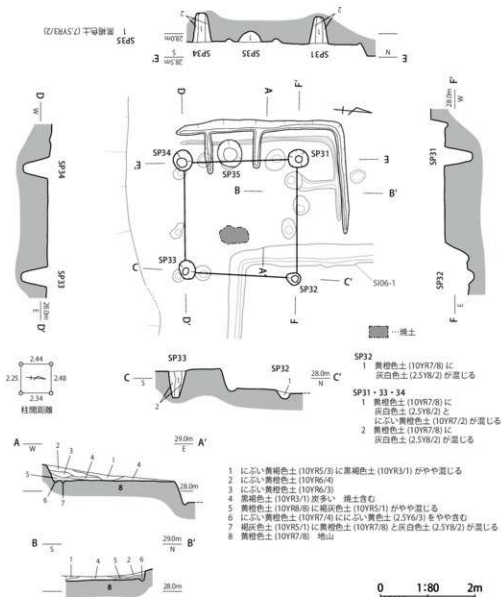
SI05 は調査区南側の中央付近、E5～6 区、F5～6 区に位置する。堆積土の掘削後、地山面の精査を行うと切り合いのある二つの黒色プランが検出された。二つの黒色のプランはいずれも方形を呈して東西に並び竪穴建物跡と考えられたため、西側の建物跡を SI05、東側の建物跡を SI06 として調査を進めた。新旧関係は検出状況から SI05 が古、SI06 が新であり、SI06 については後述する。

SI05 は標高 27.55m の地山面で検出した竪穴建物跡である。建物の東側は SI06 に切れ、南側は流出しており、建物の半分程度が残存しているような状況であった。遺構内にはにぶい黄橙色土や黒

褐色土など（第134図土層断面A-A'～5層）が堆積し、その堆積土を掘削すると西側から北側にかけてL字状の壁体と壁際溝、床面から10基以上の柱穴が検出された。さらに精査を行うと壁際溝が2重に検出されたことから建て替えが想定され、外側の壁際溝に伴う建物跡をSI05-1、内側の壁際溝に伴う建物跡をSI05-2とした。土層断面に切り合いがみられないため建物は外側に拡張されたと考えられる。

SI05-1(第134図)

規模・形態 SI05-1は残存する壁体の形から方形と考えられる。壁体の規模は西壁が3.5m、北壁が2.35mを測り、方位はN-7°-Wを示す。主柱穴はSP31～34の4基と考えられる。4基のなかのSP32は後述するSI05-1床面で検出した柱穴で底面しか残っていないが、位置や底面標高、埋土からSI05-1の伴う主柱穴と判断した。柱穴の規模は径36～42cm、深さ4～64cmを測り、SP31、



第134図 SI05-1 実測図

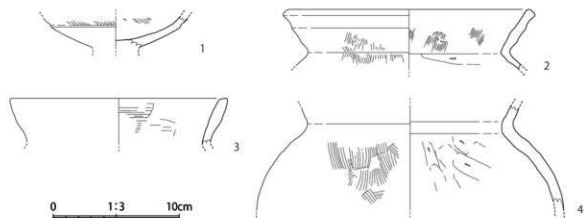
SP33、SP34の半載断面で径16cmの柱痕が確認された。主柱穴間の心々距離は2.25～2.48mを測る。床面標高は28.2mを測り、床面の規模は主柱穴の位置から南北3.5m、東西3.1m以上と思われる。

壁際溝は幅5～8cm、深さ2～4cmを測る。西側では壁際溝から東側へ延びる2条の溝が確認され、その間にSP35がある。SP35は壁際ビットで、2本の溝は仕切り溝と思われる。

焼土は床面の中央よりやや東側で検出され、南北60cm、東西36cmと狭い範囲だが硬く焼きしまっている。

遺物出土状況 SI05-1から出土した土器は少なく、SP35から土師器の甕(135-3)が出土している。ほかに2層(にぶい黄橙色土)から土師器の高坏(135-1)や甕(135-2・4)が出土している。

出土遺物(第135図) 135-1 高坏の坏部である。外面にわずかに段がみられ、内外面にハケメを施している。135-2～4は単純口縁の甕である。135-2は単純口縁でく字状を呈し、端部は外傾して平坦面をもつ。135-3は口縁部がやや膨らみながら内湾気味に立ち上がる。135-4は甕の胴部で、外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。これらの土器は古墳時代中期後半以降に属するものと思われる。



第135図 SI05-1 出土遺物実測図

SI05-2(第136図)

規模・形態 内側の壁際溝に伴う竪穴建物跡で、壁際溝がL字状を呈することから方形の竪穴建物跡と考えられる。また、土層断面に切り合いがみられないためSI05-1より古い建物跡で、西側壁際溝の方位はSI05-1と同じN-7°-Eである。

主柱穴は4基と考えられるが、北東側の主柱穴については確認できなかった。SP36～38は主柱穴で、規模は径27～47cm、深さ32～48cmを測り、いずれの柱穴の半載断面から径15cmの柱痕が確認された。主柱穴間の心々距離は西側が1.54m、南側が2.4mである。主柱穴の位置からすると床面は南北3.13m以上、東西3.0m以上と想定される。

壁際溝は幅7～10cm、深さ2～3cmを測る。北側では壁際溝からSP39に向かって溝が認められ、仕切り溝と思われる。また、SP39の東側にも埋土を同じくするSP40が認められる。

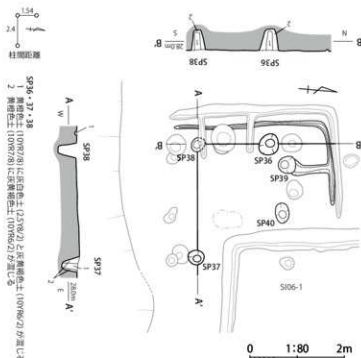
壁際溝の状況を見るとそれほど大きく拡張はしていないように思われる。遺物は出土していないため時期はわからないが、SI05-1とあまり時期差はないと思われる。

6.SI06(第137~154図、表14~16)

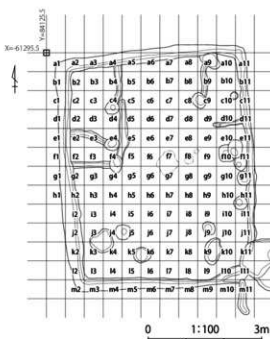
SI06は調査区中央の南側、SI05の東側に位置し、標高28.25mの地山面で検出した竪穴建物跡である。検出時の規模は南北6.3m、東西5.1mを測り、平面形は方形を呈する。SI05とSI06を検出した際に、切り合い関係を確認するために東西方向にトレンチを入れたところ、SI06の床面近くから水晶の原石や剥片が検出された。そのためSI06は玉作工房跡の可能性が考えられたことから、まず建物跡中央に十字の畦を設定して床面上5cmまで慎重に土層の掘り下げを行い、土層観察、実測後に畦を

除去した。次に、便宜的に建物跡北西側座標点X=-61299.5とY=84125.5の交点を基点として50cmのグリッド設定を行い、縦軸をY座標軸、横軸をX座標軸に平行とし、列番号は基点から南側に向けてアルファベット順、行番号は東側に向けてアラビア数字順に付して各区画を行列の順に番号を繋いで呼称した。各区画ごとに遺物の検出を行いながら床面まで掘削を行い、その掘削土はすべて持ち帰り水洗を行った。水洗した土層から水晶・滑石・碧玉・瑪瑙の玉作関連遺物が検出され、遺構埋土や床面から須恵器・土師器・石製品などが出土した。これらの遺物については、遺構内から出土した遺物と併せて後述する。

床面の精査を行うと、多数の柱穴と3条の壁際溝や焼土が検出された。壁際溝は壁体に沿って1条、その内側に2条の壁際溝が確認され、2回の建て替えが想定された。畦の土層断面に切り合いがみられないため建物は内側から外側に向かって拡張されたと考えられ、壁体沿いの壁際溝に伴う建物跡が一番新しく、内側にむかって古いと判断して、新しい建物跡から順にSI06-1⇒SI06-2⇒SI06-3として、各建物跡について述べる。



第136図 SI05-2実測図



第137図 SI06-1グリッド配置図

SI06-1(第138～150図)

規模・形態 SI06-1 は方形を呈する竪穴建物跡である。壁体はほぼ垂直に立ち上がり、壁の高さは西側で 50cm を測り、東側は流失している。建物西壁の方位は $N-5^{\circ}-W$ を示す。床面標高 27.75 ～ 27.8m、床面の規模は南北 5.78m、東西 4.68m、床面積 27.05㎡ を測り、本遺跡のなかでは最大の建物跡である。壁沿いには幅 10 ～ 15cm、深さ 3 ～ 7cm の壁際溝が廻るが、南西隅はやや内側に寄り、SX03 に切られている。

柱穴は床面から多数検出され、遺構埋土や切り合いから SI06-1 に伴う柱穴は 16 基が想定された。主柱穴はそのなかの SP41 ～ 44 の 4 基と思われる。主柱穴の径は 33 ～ 42cm、深さ 50 ～ 63cm を測り、半截断面から各柱穴で径 20cm 程度の柱痕が確認された。主柱穴間の心々距離は 2.26 ～ 3.4m を測る。SP41 と SP42 の北側には溝があり、SP41 は壁際溝と繋がり、SP42 は壁際溝に接する SP47 と繋がっている。いずれの溝も幅 15 ～ 20cm、深さ 4cm を測り、溝の間隔は 2.1m である。この 2 条の溝は床面を仕切る溝と思われる。また、SP41 と SP44 の間にある SP45 と SP46 の西側にも壁際溝に繋がる溝とその東側にも溝が確認される。これらの柱穴や溝および周辺からは多くの玉作関連遺物が出土しており、これらの遺構は玉作りに関連する施設と考えられる。玉作関連遺物が多く出土した遺構はほかに東側壁際溝近くの柱穴 4 基 SP49 ～ 53 がある。これらの柱穴には切り合いがみられるが、SI06-2 や SI06-3 の壁際溝を切っているため SI06-1 に伴うと思われる。

焼土は床面中央で 1 箇所、そのやや東側 2 箇所で検出された。中央の焼土は径が 60cm を測り、良く焼けていた。この中央の焼土は、SI06-2、SI06-3 においても床面のほぼ中央に位置するため建物が拡張されても火処は変わらなかったように思われる。

埋土は 3 層からなり、床面上に黒褐色土が堆積し、その上層に黒褐色土にぶい黄褐色土が混じる土層や黒褐色土が堆積していた。

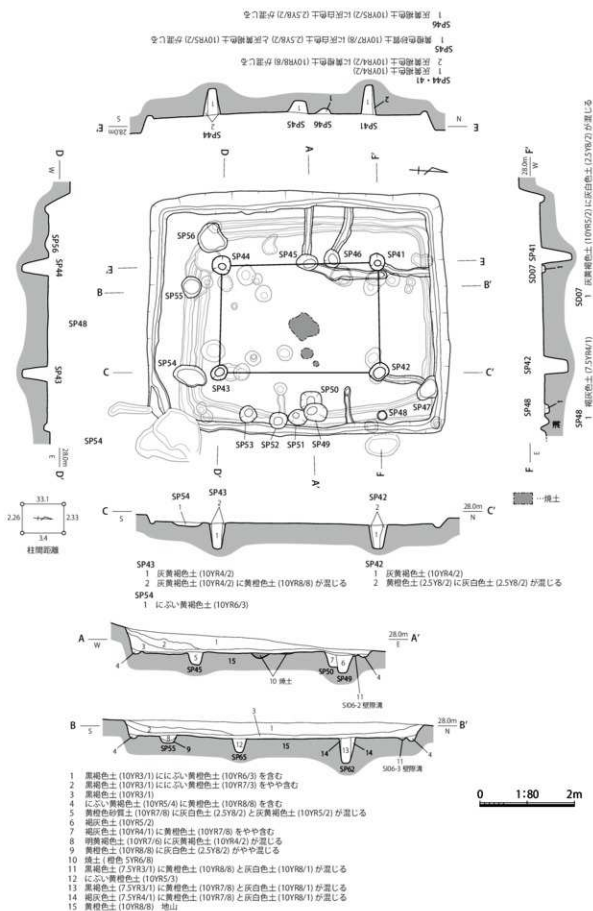
以下では出土した遺物を土器と玉作関連の遺物に分けて述べる。

土師器・須恵器出土状況(第 139 図) 遺物は土層断面 A-A'・B-B' 3 層黒褐色土や床面、柱穴から出土している。器種では土師器の甕や須恵器の蓋環が多くみられる。

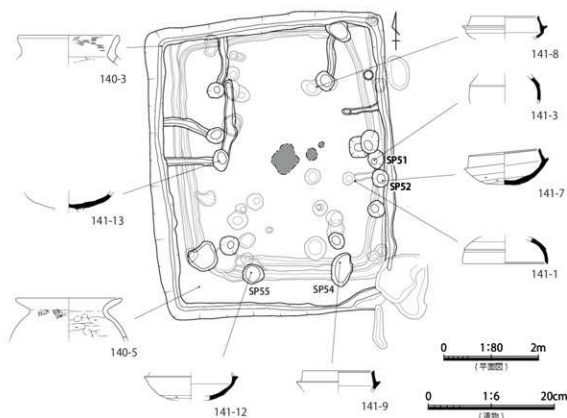
床面から土師器の甕 (140-3・5) や須恵器の蓋環 (141-1・8)・高環 (141-13) が、西側壁際溝から土師器の甕 (140-9) が出土している。出土した土器は床面中央付近に少なく、壁に近い場所、特に東壁側の中央付近に多い傾向にある。床面東端の SP52 から出土した坏身 (141-7) は半分は割れ、土師器の甕片と重なるようにして出土しており、出土状況を見る限り建物が廃絶した後に埋まる過程で流れ込んだというより意図的に入れたようにみえる。

土師器・須恵器・石鏡(第 140・141 図) 第 140・141 図は SI06-1 から出土した須恵器・土師器・石鏡である。

第 140 図は土師器と混入品と思われる石鏡である。140-1 は橙色を呈する高環の坏底部である。内外面にハケメを施す。140-2 は高環の脚部である。橙褐色を呈し、器壁は厚く、外面にわずかにヘラミガキの痕跡が残る。140-3 ～ 9 は単純口縁の甕で、いずれも器壁は厚い。140-3・4 は、口縁部が短く、くの字状に開くもので端部を丸くおさめている。140-5 ～ 8 は口縁が外反するもので、140-5



第 138 図 SI06-1 実測図



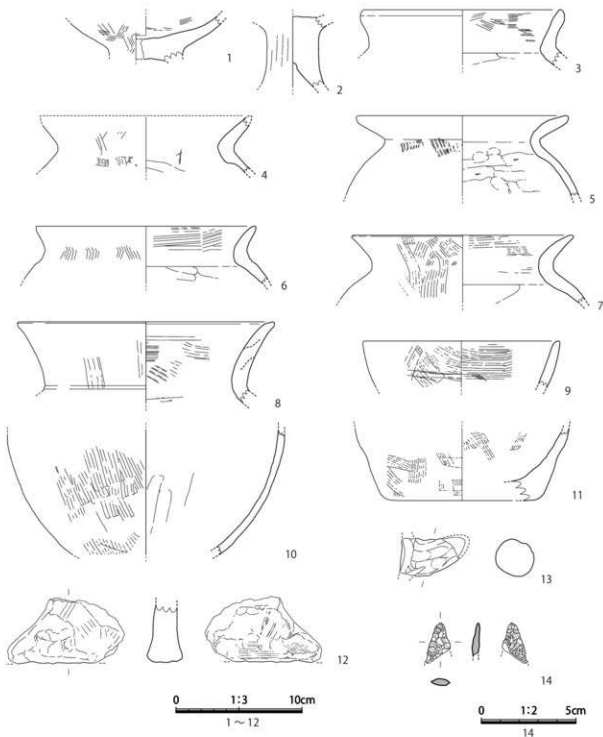
第139図 SI06-1 遺物出土状況図(土師器・須恵器)

は口縁部が大きく外反して開き、頸部外面にハケメを、胴部内面にヘラケズリと指頭圧痕が認められる。140-6・7は口縁部が短く外反している。140-8は口縁部がほかのものとは比べるとやや長く、外反する。調整は内・外面にハケメを施す。140-9は口縁部が内湾するもので、内・外面に丁寧なハケメを施す。140-1～4は古墳時代中期後半、140-5～9は古墳時代後期と思われる。140-10は甕の胴部片で、外面に縦方向のハケメを、内面に縦方向のヘラケズリをしている。140-11は鉢の底部と思われる。平底で、内外面にハケメを施している。140-12は甕の底部で、内外面にハケメや指頭圧痕が認められる。140-13は甕の把手である。140-14は3層の黒褐色土から出土した凹基無茎式の黒曜石製の石鏃で、一部が欠損している。

第141図は須恵器である。141-1・8・13は床面、141-3・7・9・12は柱穴、それ以外は床面近くの3層黒褐色土からの出土である。141-1～6は坏蓋である。141-1は口径13.4cm、残存高4.1cmを測る。口縁端部内面に沈線を入れ、段状に仕上げている。肩部に低い稜がみられる。141-2は口径12.2cm、残存高4.3cmを測り、141-1より口径はやや小さいが、形は同じである。141-3は焼きの悪い破片で、肩部は緩い稜をなす。141-4はやや他のものより厚手である。口縁端部に沈線を入れて段状にし、肩部は下側に沈線を入れて稜を表現している。口径15.6cm、残存高3.6cmを測る。141-5は肩部から天井部で、焼きが悪く、淡灰色を呈している。肩部は沈線を入れることにより稜をつくり、外面の回転ヘラケズリは幅が広く丁寧である。141-6も外面のヘラケズリも幅が広く丁寧である。

141-7～12は坏身である。141-7はSP52から出土した坏身である。焼きが悪く、焼き歪んで変形

している。口縁端部に沈線を入れて、段状に仕上げている。口径11.2～11.6cm、受部径13.4～13.8cm、器高5.7cmを測る。141-8は口径11.0cm、受部径13.4cmを測る。受部下で屈曲するような形を呈し、口縁段部はわずかに段状である。141-9は口縁が直立気味に立ち上がり、端部は段状を呈する。口径11.2cm、受部径13.2cmを測る。141-10は口径12.1cm、受部径14.2cm、器高5.2cmである。口縁端部は丸くおさめ、段はみられない。外面のヘラケズリは幅広く丁寧である。141-11は底部が平らで焼歪んだものと思われる。底部外面に粘土が焼き剥がれた痕跡がみられる。受部径は14.0cmを測る。



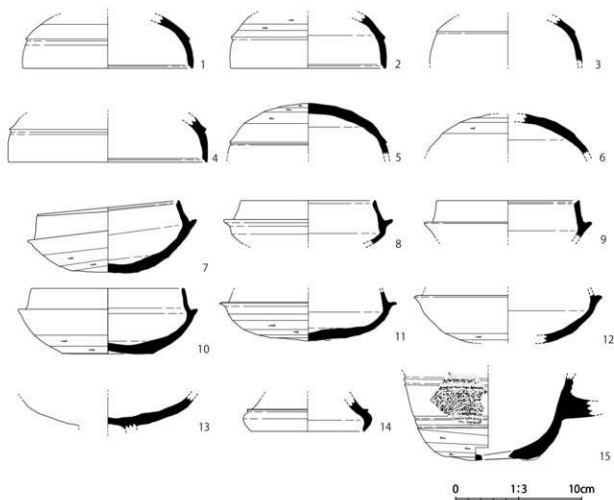
第140図 SI06-1出土遺物実測図1(土師器)

141-12は受部径14.9cmを測る。これらの蓋環は、出雲1期新相から2期に属するものと思われる。

141-13は碗状を呈する高環の環底部である。焼きが悪く、淡黄灰色を呈する。141-14は高環の脚部である。脚端部外面に稜がみられ内湾する。出雲1期新相と思われる。141-15は把手付の碗である。把手は破損しているが、幅1.5cmの把手が体部に付くものである。把手の上下には2本の沈線が廻り、その間に波状文を施す。底部外面には剥がれた粘土の痕跡があり、また底部中央に焼成後に打ち欠いた孔が開いている。

玉作関連遺物出土状況(第142～144図、表14・15) SI06-1では床面やグリッドごとに水洗した土層から、水晶・瑪瑙・碧玉・滑石などの原石・未成品・剥片・チップのほか、砥石などの石製品といった玉作関連遺物が多数出土している。

表14は、SI06-1で検出した水晶・瑪瑙・碧玉・滑石の重量をグリッドごとに示したもので、遺構から出土した石材も区ごとに分けて加えている。製品からチップまで全ての石材の総重量は411.13gを量る。表15は石材ごとの重量比を円グラフに示したものである。水晶が308.24gで全体の約75%、瑪瑙が83.89gで約20%、滑石が16.09gで約4%、碧玉が2.91gで約1%である。瑪瑙は数ではそれほど多くないが、個々の重量が水晶と比べると重いため多い割合を示している。滑石は製品



第141図 SI06-1 出土遺物実測図2(須恵器)

表 14 S106-1 石材別重量集計表

区	石材 (g)				合計
	水晶	瑪瑙	碧玉	滑石	
a1	—	—	—	—	—
a2	0.01	—	—	0.12	0.13
a3	0.02	—	—	0.05	0.07
a4	—	—	—	—	—
a5	0.57	0.06	0.01	—	0.64
a6	—	—	—	—	—
a7	0.13	—	—	—	0.13
a8	—	0.17	—	0.03	0.20
a9	1.85	—	—	0.31	2.16
a10	—	—	—	0.11	0.11
a11	1.15	—	—	—	1.15
b1	—	—	—	—	—
b2	—	—	—	—	—
b3	0.04	—	0.01	—	0.05
b4	0.30	—	0.08	0.26	0.64
b5	0.94	—	0.05	—	0.99
b6	1.56	—	—	—	1.56
b7	0.86	—	—	—	0.86
b8	—	—	—	—	—
b9	—	—	—	—	—
b10	—	—	—	—	—
b11	—	—	—	—	—
c1	—	—	—	—	—
c2	0.83	—	—	—	0.83
c3	4.63	0.05	—	0.21	4.89
c4	0.68	0.18	0.01	0.57	1.44
c5	1.68	0.03	—	0.19	1.90
c6	—	—	—	—	—
c7	—	—	—	—	—
c8	0.34	0.68	—	0.03	1.05
c9	15.62	0.53	—	—	16.15
c10	0.86	—	—	—	0.86
c11	—	—	—	—	—
d1	—	—	—	—	—
d2	0.17	—	—	—	0.17
d3	0.07	—	—	—	0.07
d4	2.55	0.37	—	0.32	3.24
d5	6.54	13.02	0.01	0.09	19.66
d6	0.13	0.11	—	—	0.24
d7	—	—	—	—	—
d8	0.13	—	—	—	0.13
d9	0.29	—	0.01	0.08	0.38
d10	0.01	—	0.04	—	0.05
d11	0.03	—	—	—	0.03
e1	1.03	0.65	—	—	1.68
e2	7.01	0.01	0.03	0.15	7.20
e3	11.37	12.19	0.02	0.15	23.73

区	石材 (g)				合計
	水晶	瑪瑙	碧玉	滑石	
e4	10.57	0.39	0.66	0.06	11.68
e5	9.51	13.50	0.04	0.13	23.18
e6	1.38	0.03	—	—	1.41
e7	5.03	0.16	0.01	0.02	5.22
e8	1.89	0.32	0.01	—	2.22
e9	3.33	1.7	—	0.09	5.12
e10	3.79	3.03	—	0.13	6.95
e11	0.75	0.02	—	—	0.77
f1	—	—	—	—	—
f2	11.31	0.09	—	0.09	11.49
f3	4.39	0.05	0.01	0.05	4.50
f4	23.11	0.72	0.72	0.22	24.77
f5	11.35	12.37	0.01	0.22	23.95
f6	1.14	—	—	—	1.14
f7	4.02	3.28	—	0.02	7.32
f8	1.79	0.23	0.01	—	2.03
f9	2.75	0.67	0.01	—	3.43
f10	16.89	1.24	0.06	1.27	19.46
f11	15.74	4.96	0.02	0.15	20.87
g1	—	—	—	—	—
g2	2.8	0.15	—	—	2.95
g3	3.5	0.08	0.01	0.11	3.70
g4	4.88	0.01	0.08	0.18	5.15
g5	0.84	0.2	—	—	1.04
g6	0.23	0.05	—	—	0.28
g7	0.35	—	0.01	—	0.36
g8	0.76	0.07	0.01	0.01	0.85
g9	3.64	1.56	—	—	5.20
g10	5.2	1.14	—	—	6.34
g11	9.0	1.67	0.91	0.08	11.66
h1	—	—	—	—	—
h2	2.48	—	—	0.01	2.49
h3	1.34	—	—	0.01	1.35
h4	1.32	0.15	—	—	1.47
h5	0.23	0.03	—	0.50	0.76
h6	—	—	0.01	—	0.01
h7	—	—	—	—	—
h8	0.10	—	0.01	—	0.11
h9	0.06	0.41	—	0.17	0.64
h10	0.16	0.90	—	—	1.06
h11	4.35	0.01	—	—	4.36
i2	—	—	—	—	—
i3	0.11	—	—	0.15	0.26
i4	0.06	—	0.01	0.16	0.23
i5	0.07	—	—	0.05	0.12
i6	—	—	—	—	—
i7	1.71	—	—	0.24	1.95

区	石材 (g)				合計
	水晶	瑪瑙	碧玉	滑石	
i8	0.01	0.14	—	0.21	0.36
j9	0.11	—	—	7.37	7.48
j10	1.08	—	—	0.47	1.55
j11	—	—	—	—	—
j2	—	—	—	—	—
j3	3.59	—	—	—	3.59
j4	0.10	1.71	—	0.01	1.82
j5	0.98	—	0.01	0.14	1.13
j6	—	—	—	—	—
j7	0.06	0.07	—	0.08	0.21
j8	—	—	—	—	—
j9	0.16	—	—	0.39	0.55
j10	0.39	—	—	—	0.39
j11	0.02	—	—	—	0.02
k2	0.68	—	—	—	0.68
k3	—	—	—	—	—
k4	0.46	—	—	—	0.46
k5	1.03	0.01	0.01	—	1.05
k6	5.02	—	—	—	5.02
k7	1.17	0.20	0.01	0.17	1.55
k8	—	—	—	—	—
k9	2.37	—	—	—	2.37
k10	—	—	—	—	—
k11	0.09	—	—	0.04	0.13
l2	0.56	—	—	—	0.56
l3	0.01	—	—	—	0.01
l4	—	—	—	0.01	0.01
l5	—	—	—	—	—
l6	0.01	—	—	—	0.01
l7	0.02	—	—	0.01	0.03
l8	—	—	—	—	—
l9	—	0.08	—	0.01	0.09
l10	—	—	—	—	—
l11	—	—	—	—	—
m2	—	—	—	—	—
m3	—	0.20	—	—	0.20
m4	—	—	—	—	—
m5	1.56	—	—	—	1.56
m6	—	—	—	0.05	0.05
m7	0.02	—	—	—	0.02
m8	—	—	—	—	—
m9	4.27	—	—	—	4.27
m10	—	—	—	—	—
m11	—	—	—	0.02	0.02
出土区不明	51.14	4.24	—	0.32	55.70
合計	308.24	83.89	2.91	16.09	411.13

や破損品のほか素材が多くみられ、碧玉はわずかしこ出土していない。この結果をみると、水晶が75%を占めており、SI06-1における玉生産の中心が水晶であったことがわかる。次に、これらの石材の重量をグリッドごとに示したのが第142図である。計測を行うと1gに満たない区が多いことから、重量を0～1g未満、1～5g、5～10g、10～15g、15g以上の5つに分けて色の濃淡で表している。

水晶は、床面からまんべんなく出土しているが中央付近の東西端に多く、特にf4区・c9区・f10区・f11区から15g以上出土している。建物の北端や南側は希薄で、南側が一番出土量が少ない傾向がみられる。切子玉や丸玉の未成品や円錐形剥片のほか剥片やチップも多く出土している。

瑪瑙は個々の大きさが大きい場合重量では全体の2割を占めている。瑪瑙も出土状況を見ると水晶とおなじように床面中央付近の東西端に多く、特にe3区・d5区・e5区、f5区に多い。剥片や原石が出土し、未成品や破損品は出土していない。

碧玉は1g以下のわずかな量が出土し、出土状況は水晶や瑪瑙と同じ様相を呈している。円錐形剥片が1点と剥片が数点出土しているのみで未成品や破損品は出土していない。

滑石は1～5gの量が床面からまんべんなく出土している。やや多く出土しているのは床面東側のf10区とi9区である。白玉の製品や未成品、施溝途中の素材などが出土している。

これらの石材の重量を合計してグリッドに反映したのが第143図である。この状況をみるとやはり床面中央付近の東西端に出土量が多く確認され、この場所が玉作りの主たる作業場所と考えられる。

第144図は、SI06-1で光波実測をして取り上げた水晶・瑪瑙・滑石・碧玉の出土状況図である。これら遺物の重量は総重量に含まれている。水晶の切子玉や小玉の未成品、原石、剥片や円錐形剥片、滑石の製品や未成品、碧玉の割れ円錐、瑪瑙の剥片などが出土している。出土状況をみると、SP41・SP45・SP46周辺、特にこれらの柱穴の東側溝で多く確認され、円錐形剥片や丸玉の接合資料もここから出土している。この出土状況は第143図のグリッド図と重なる。

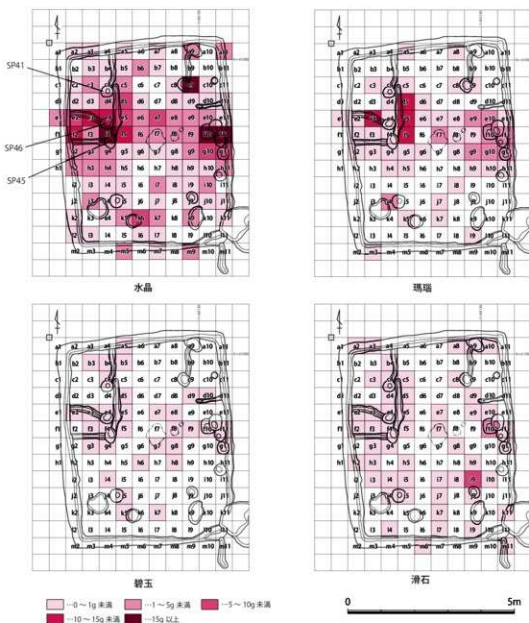
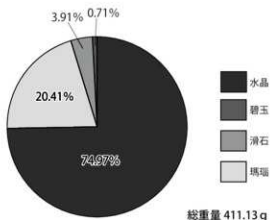
このほか床面からは筋砥石や砥石などの石製品や土製の小玉や土玉が出土している。土製の土玉や小玉はこの場所で作られたとも考えられるが、装身具または祭祀の道具の可能性が高いように思われる。また、鉄製品は出土していないが、鉄針の一部と思われる細片が水洗した土から1点検出された。ほかに鉄製品はなく、鉄製品は特注品で貴重なため持ち出されているのかもしれない。

以上、SI06-1の出土状況を述べた。後述するSI06-2とSI06-3の遺構内埋土から少量の水晶などの石材や滑石の白玉が出土している。これらの遺物については各建物に伴うものとして取り上げているため各遺構の出土遺物として掲載しているが、SI06-1が埋まる過程で混入した可能性が高い。

玉作関連出土遺物(第145～150図) 第145～150図は玉作関連遺物である。第145図は水晶である。145-1・2は原石で、いずれも下端面を欠いている。幅が1.0cm程度で細く、丸玉の素材と思われる。この状態から調整剥離や敲打を行い、丸玉を作ろうとしている。145-3は石核で、原石の下端面を欠く。幅が約2.3cmあることから素材が2個取れる大きさである。145-4は原石の上下端面を打ち欠き、上面に調整剥離を、下面に敲打を施している。145-5は石核を作り出した後、縦分割により作出された素材である。大きさから丸玉しか作れないと思われる。145-6も縦分割した素材で、敲打や調整剥

離をし始めている。145-7は切子玉の素材と思われる。外面に細かな剥離痕が確認され、切子玉を作るために調整剥離をし始めている。ただ、丸玉の素材が2個取れる大きさがあるため、その場合は石核となる。145-8は丸玉の素材剥片である。145-9は原石の下端面を打ち欠いた後、上端面を切除せずに敲打をし始めている。145-10は丸玉の素材である。原石が小さいため上下端面を切除した後、調整剥離をし始めている。敲打はしていない。145-11は丸玉

表 15 SI06-1 石材重量比



第 142 図 SI06-1 石材出土状況図 (水晶・瑪瑙・碧玉・滑石)

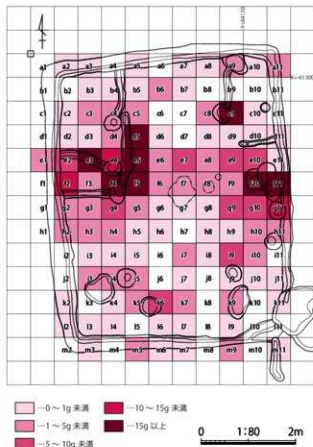
の破損品である。調整剥離の段階で敲打をし始めたが壊れたものと思われる。145-12も丸玉の破損品である。敲打を行い、鉄針で片面穿孔の途中で壊れている。145-13は切り玉の未成品で、全体を敲打している。穿孔はしていない。145-14は丸玉または算盤玉の破損品である。敲打を行い、穿孔した際に壊れたもので、孔は貫通しているが下側が破損している。145-15～18は剥片で、調整剥離の痕跡がみられる。145-19・20は床面北西側で検出した丸玉の破損品で接合する。いずれの破片も側面に調整剥離と上端面に敲打を施している。敲打面に打撃痕がみられないため、側面の調整剥離の際に破損したものである。

第146図は碧玉と水晶の円錐形剥片である。円錐形剥片は片面穿孔の際に貫通すると同時に終孔部端面に生じる円錐形の剥片である。碧玉の円錐形剥片は1点(146-7)のみで

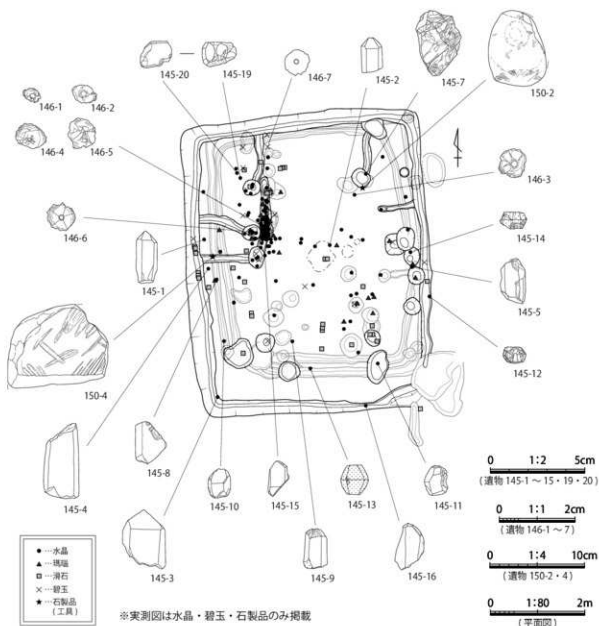
床面北西側から検出された。また、水晶の円錐形剥片はSP45北側溝や周辺に多く、全部で25点を確認され、そのなかの7点を図化している。径は約3～8mm、厚さ約1～2.5mmを測り、4点は径が7～8mmとやや大きめである。剥離面に径1.5～2.4mmの鉄針の痕跡が確認され、なかには鉄針がぶれたのか数箇所の鉄針の痕跡が認められた。背面には敲打痕や擦痕がみられる。

第147図は滑石の製品・未成品・素材剥片である。調査では小玉5点、白玉41点、未成品5点、素材剥片41点を確認し、そのなかの14点を図化した。147-1・2は小玉、147-3～8は白玉である。白玉は径が3～7mm程度のものがみられる。147-9は小玉の破損品で、上端が欠けている。147-10は剥片で、表・裏面に施溝途中の溝がある。また、一端に施溝痕がみられる。147-11は方形板状を呈する白玉の素材剥片である。径は9.24×8.43mm、厚さ3.62mmを測り、両面に研磨痕が確認される。また、3方の側面に施溝の痕跡がみられる。147-12は方形板状の未成品である。端面には施溝の痕跡がみられ、表・裏面に研磨を施している。中央には1.80mmの孔が穿たれている。147-13も平行四辺形の板状未成品である。表・裏面に研磨痕が確認され、穿孔している。147-14は板状未成品の破損品である。

第148図はガラス小玉、土製の小玉と土玉である。ガラス小玉は緑色と青色の破損品が1点ずつ出土している。148-1はそのなかの1点を図化したもので、残存径3.28mm、厚さ2.41mmを測り、緑色を呈する。



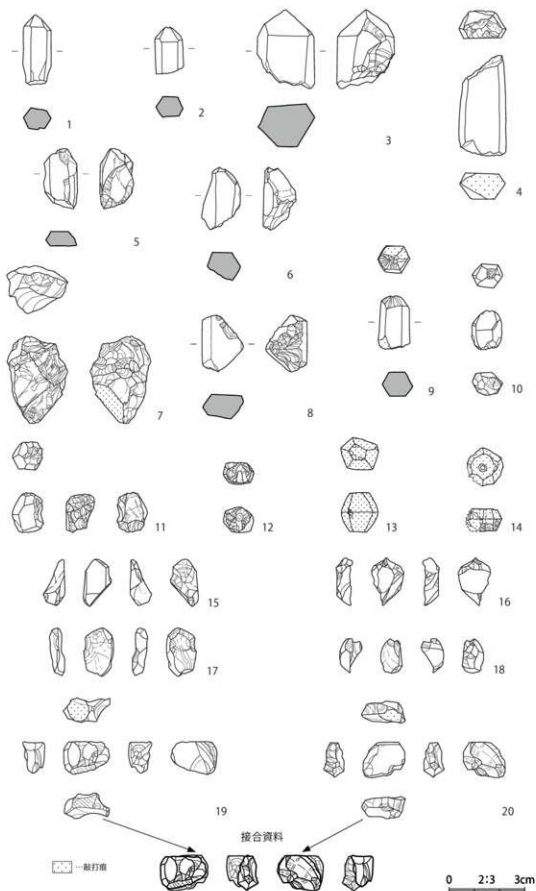
第143図 SI06-1 石材出土状況図(総合)



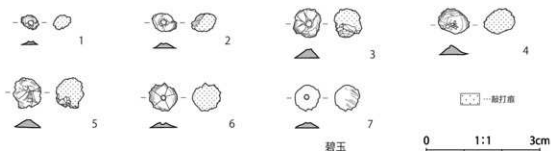
第144図 SI06-1 玉作関連遺物出土状況図

小玉は10点出土し、そのなかの5点を図化した。148-2～5は小玉で、最大径は5～7mm、最大厚は約3～6mmを測る。148-6は土玉である。最大径13.38mm、最大厚12.0mm、孔径2.37mmを測る。土製の小玉や土玉は工房跡で作製したというより、装身具や祭祀の道具として用いられたものかもしれない。

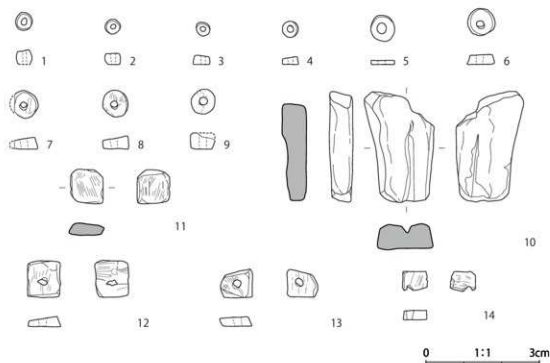
第149図は碧玉・瑪瑙・石英の剥片や原石である。SI06-1で出土した碧玉の剥片やチップの数は少なく、また重量も前述した円錐形剥片1点も含めて2.91gと少ない。149-1は唯一、円錐形剥片以外で図化できた碧玉の調整剥片である。149-2～4は瑪瑙である。瑪瑙は前述したように数は多くないのだが個々の重さが重く、重量比では2番目に多い石材である。149-2は調整剥片、149-3も調整剥片で、一面に礫面が残り、上端に敲打痕がわずかにみられる。149-4は断面が三角形状を呈する素材剥片と思われる。149-5は石英の剥片、149-6は石英の原石である。



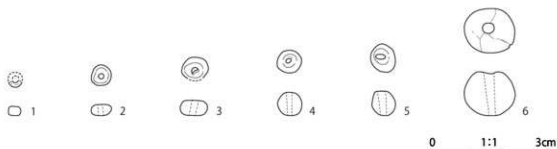
第 145 図 SI06-1 玉作関連出土遺物実測図 1(水晶)



第 146 図 SI06-1 玉作関連出土物実測図 2(円錐形剥片)

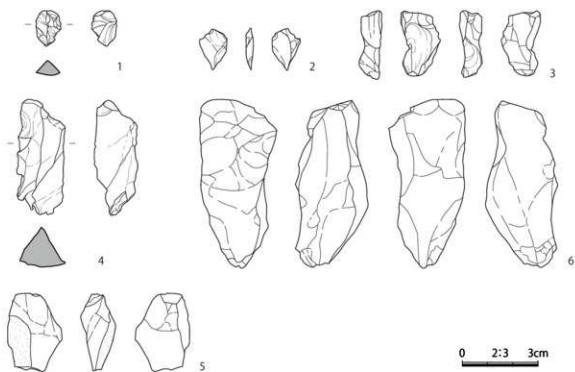


第 147 図 SI06-1 玉作関連出土物実測図 3(滑石)

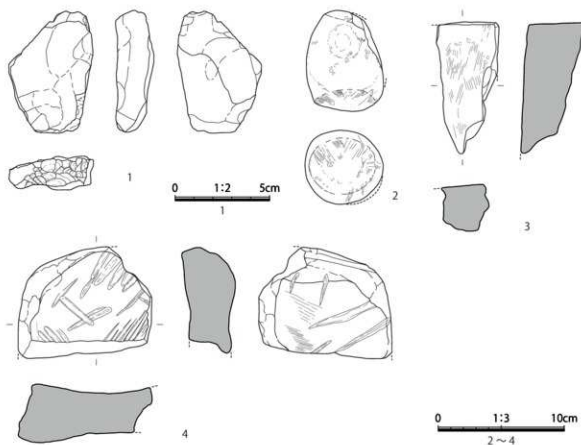


第 148 図 SI06-1 玉作関連出土物実測図 4(ガラス小玉・土製小玉・土玉)

第 150 図は玉の生産工具である。150-1 は瑪瑙製の敲石で、長さ 6.5cm、幅 4.3cm、厚さ 1.8cm を測り、手のひらにおさまる大きさである。下側の周縁部に敲打痕が顕著に確認され、荒割りや調整の際に用いられたものと考えられる。150-2 は川原石で長さ 8.0cm、幅 6.0cm を測る。敲打痕や擦痕が確認され、用途に応じて使用したものと思われる。150-3 は砂岩製の平砥石で一部破損している。一面に擦痕が



第 149 図 S106-1 玉作関連出土遺物実測図 5(碧玉・瑪瑙・石英)



第 150 図 S106-1 玉作関連出土遺物実測図 6(石製品 (工具))

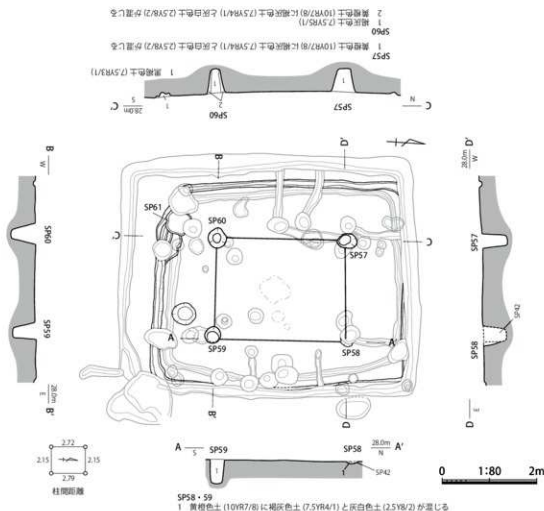
認められる。150-4は筋砥石の破損品である。残存長8.4cm、幅10.5cm、厚さ4.6cmを測る。表・裏両面に幅3～5mm程度の溝が斜め方向にみられ、裏面の一部には擦痕も認められる。

SI06-2(第151図)

規模・形態 SI06-2はSI06-1の床面で検出した壁際溝2条のうち、外側の壁際溝に伴う竪穴建物跡である。平面形は壁際溝の形から方形である。

床面の規模は南北5.05m、東西4.2m、床面積21.21mを測る。SI06-2に伴う柱穴は埋土や遺構の切り合いからSP57～61の5基が想定され、主柱穴はそのなかのSP57～60の4基である。SP58はSI06-1のSP42に切られているため規模はわからないが、ほか3基の柱穴の径は30～44cm、深さ48～52cmを測る。SP60の半截断面で径18cmの柱痕が確認された。主柱穴間の心々距離は2.15～2.79mを測る。

SI06-1とSI06-2の主柱穴の位置をみると北側の2基の位置はほぼ変わらないが、南側2基は南側に拡張して掘られている。また、壁際溝も北側と東側はSI06-1の壁際溝とほぼ重なり、西側と南側に拡張されている。遺物の出土状況から北側が入口の可能性が高いことからすると、入り口側の柱穴や壁際溝の位置はあまり変わらずに、南側や西側に建物を拡張しているようである。壁際溝の規模は



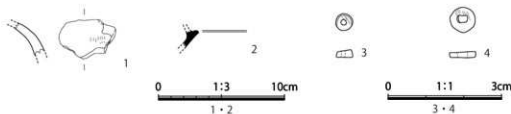
第151図 SI06-2実測図

幅 12 ～ 17cm、深さ 6 ～ 7cmを測る。

新たに焼土は検出していないが、SI06-1の焼土がSI06-2においてもほぼ床面中央に位置することから火処の位置は変わらないと思われる。

遺物出土状況 出土した遺物は少なく、SP57 から土師器の甕片 (152-1) と須恵器の坏身片 (152-2) と滑石の白玉 (152-4) が、SP60 から滑石の白玉 (152-3) が出土している。これらの遺物はSI06-2に伴うものであるが、いずれも柱穴上方からの出土であるためSI06-1 が埋まる際に混入した可能性が考えられる。

出土遺物 (第152図) 152-1は土師器の甕片と思われ、外面にハケメがみられる。152-2は須恵器の坏身片である。破片が小さいため時期はわからない。152-3・4は滑石の白玉である。径は152-3が4.02mm、152-4が6.37mmを測る。



第152図 SI06-2 出土遺物実測図

SI06-3 (第153図)

規模・形態 SI06-3はSI06-1の壁際溝の内側で検出した2条の壁際溝のうち、内側の壁際溝に伴う壁穴建物跡である。壁際溝はSI06-2の壁際溝に沿うように確認され、壁際溝の形から建物跡の平面形は方形である。壁際溝の規模は幅 10 ～ 15cm、深さ 3 ～ 5cmを測る。

床面の規模は壁際溝の内側で南北4.68m、東西3.78m、床面積17.69㎡を測る。SI06-3に伴う柱穴は、柱穴の位置や埋土からSP62 ～ 66の5基が想定され、主柱穴はSP62 ～ 65の4基である。主柱穴の規模は径32 ～ 40cm、深さ51 ～ 60cmを測り、4基の柱穴の半截断面から径18 ～ 20cmの柱痕を確認している。主柱穴間の心々距離は1.33 ～ 2.51mを測り、南北方向の柱間距離に比べて東西方向が狭い配置である。

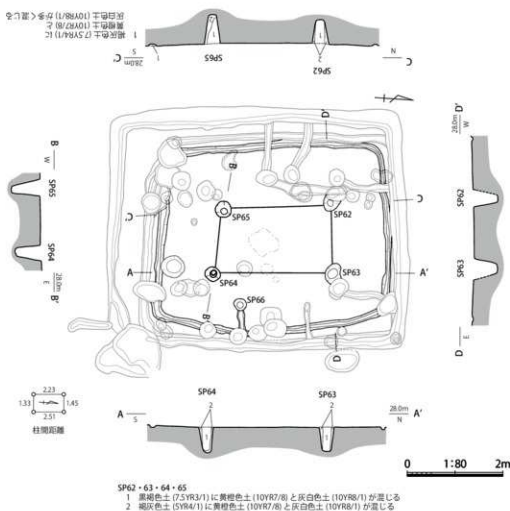
北側の主柱穴SP62・63はSI06-1・2の主柱穴と切り合うような場所に位置し、南側のSP64・65はSI06-2の主柱穴より内側に位置している。また、壁際溝は、北側はSI06-1・2とほぼ同じ位置にあり、南側がSI06-2の内側にみられる。このような壁際溝や柱穴の位置をみると、SI06-3の北側主柱穴や壁際溝の位置は踏襲して南側に建物を拡張していることがわかる。

SI06の建物の様相や遺物の出土状況を見るとSI06-1・2は普通の住居として機能し、その後、玉生産をするために広い建物が必要となり建て替えられたように思われる。

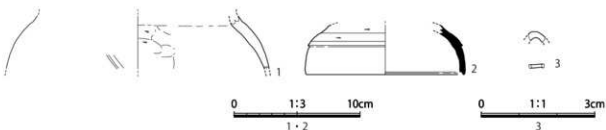
遺物出土状況 遺物は床面東側に位置する柱穴SP66と壁際溝から出土している。SP66は東側壁際溝に繋がる柱穴で須恵器の坏蓋 (154-2) と滑石の白玉 (154-3) が、壁際溝から土師器の甕片 (154-1) が出土している。これらの遺物もSI06-2同様に埋土の上方から出土しており、SI06-1が埋まる際に混入したものと考えられる。

出土遺物 (第 154図) 154-1 は土師器の甕の胴部片である。外面にハケメが、内面にヘラケズリが確認される。154-2 は須恵器の坏蓋で、口径 12.5cm を測る。口縁端部内面は段状に仕上げ、肩部に沈線を入れて稜を作っている。出雲 2 期と思われる。154-3 は滑石の白玉の破損品である。厚さ 1mm 程度で、3 分の 1 程度しか残存していない。

表 16 に SI06-1 ～ 3 から出土した主な水晶と滑石、そして全ての円錐形刺片の計測表を示した。そのなかには遺物観察表と重複するものも含まれている。



第 153 図 SI06-3 実測図



第 154 図 SI06-3 出土遺物実測図

表 16 SI06-1～3 水晶・滑石計測表
水晶 (SI06-1)

検出番号	遺構	出土地	分類	計測値					
				長さ・高さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	孔径 (mm)	
1	145-1	SI06-1	f2 区	原石	27.02	10.68	8.78	3.89	—
2	145-2	SI06-1	f7 区	原石	18.82	9.88	8.27	2.66	—
3	145-3	SI06-1	i3 区	石核	31.08	22.81	16.65	14.82	—
4	145-4	SI06-1	g2 区	素材	39.35	18.08	9.99	10.78	—
5	145-5	SI06-1	g11 区	素材	23.88	13.14	6.11	2.80	—
6	145-6	SI06-1	m9 区	素材	24.36	12.37	11.90	4.27	—
7	145-7	SI06-1	SP42	素材または石核	34.07	22.8	15.57	13.85	—
8	145-8	SI06-1	g3 区	素材	22.24	16.10	9.81	4.37	—
9	145-9	SI06-1	j6 区	丸玉の素材	21.07	12.28	9.90	4.23	—
10	145-10	SI06-1	j3 区	丸玉の素材	15.32	11.53	9.06	2.15	—
11	145-11	SI06-1	SP54	丸玉の破損品	15.64	11.81	9.87	2.37	—
12	145-12	SI06-1	h11 区	丸玉の破損品	10.03	11.94	8.61	1.36	2.99
13	145-13	SI06-1	k6 区	切子玉の未成品	13.02	14.53	16.49	3.93	—
14	145-14	SI06-1	SP51	丸玉または貫通玉の破損品	13.42	14.07	9.12	2.44	2.66
15	145-15	SI06-1	SP45	削片	18.62	9.91	6.92	1.16	—
16	145-16	SI06-1	i8 区	削片	18.82	12.19	6.77	1.26	—
17	145-17	SI06-1	g3 区	削片	18.48	11.86	4.73	1.08	—
18	145-18	SI06-1	d4 区	削片	12.66	9.01	4.89	0.70	—
19	145-19	SI06-1	c4 区	丸玉の破損品	12.27	17.73	9.14	2.15	—
20	145-20	SI06-1	c3 区	丸玉の破損品	17.95	13.02	7.85	2.27	—
21	—	SI06-1	SP49	削片	11.55	9.22	3.03	0.38	—
22	—	SI06-1	SP45	削片	6.55	8.74	1.89	0.10	—
23	—	SI06-1	a11 区	削片	12.44	10.57	6.13	0.56	—
24	—	SI06-1	b5 区	削片	14.09	8.89	6.05	0.58	—
25	—	SI06-1	b10 区	削片	13.94	8.82	4.96	0.72	—
26	—	SI06-1	C5 区	削片	16.46	12.52	5.27	1.13	—
27	—	SI06-1	d4 区	削片	15.02	9.18	6.20	0.59	—
28	—	SI06-1	d0 区	削片	9.90	7.85	5.74	0.37	—
29	—	SI06-1	e4 区	削片	7.84	7.18	3.44	0.15	—
30	—	SI06-1	e4 区	削片	12.72	9.71	3.27	0.38	—
31	—	SI06-1	e4 区	削片	7.06	6.59	1.26	0.06	—
32	—	SI06-1	e8 区	削片	3.07	2.86	1.10	0.01	—
33	—	SI06-1	e8 区	削片	3.49	2.87	0.63	0.01	—
34	—	SI06-1	e11 区	削片	13.22	8.43	2.55	0.33	—
35	—	SI06-1	f3 区床面	削片	5.41	3.21	0.76	0.01	—
36	—	SI06-1	f4 区床面	削片	12.45	7.70	2.43	0.28	—
37	—	SI06-1	f4 区床面	削片	6.82	4.88	1.20	0.05	—
38	—	SI06-1	f4 区床面	削片	10.44	8.70	2.65	0.22	—
39	—	SI06-1	f4 区床面	削片	9.34	8.78	3.87	0.27	—
40	—	SI06-1	f4 区	削片	10.64	5.90	4.35	0.31	—
41	—	SI06-1	f4 区	削片	5.04	4.17	2.12	0.04	—
42	—	SI06-1	f4 区	削片	7.99	2.42	2.20	0.03	—
43	—	SI06-1	f4 区	削片	10.66	10.18	3.93	0.37	—
44	—	SI06-1	f5 区	削片	8.42	3.95	2.34	0.08	—
45	—	SI06-1	f5 区	削片	8.51	6.96	4.59	0.32	—
46	—	SI06-1	f5 区	削片	7.80	7.43	3.78	0.25	—
47	—	SI06-1	f5 区	削片	10.13	9.29	5.70	0.48	—
48	—	SI06-1	f6 区	削片	9.24	5.04	2.32	0.08	—
49	—	SI06-1	f6 区	削片	15.01	9.28	2.27	0.29	—
50	—	SI06-1	f9 区	削片	18.71	12.83	8.15	1.20	—
51	—	SI06-1	g4 区	削片	10.30	15.45	5.61	0.81	—
52	—	SI06-1	g5 区	削片	12.75	3.87	3.58	0.29	—
53	—	SI06-1	g9 区	削片	7.07	2.73	1.79	0.03	—
54	—	SI06-1	h8 区	削片	7.91	6.04	1.52	0.06	—
55	—	SI06-1	北畦	削片	9.71	7.71	2.12	0.17	—

	押印番号	遺構	出土地	分類	計測値				
					長さ・高さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	孔径(mm)
56	—	SI06-1	東柱	銅片	9.53	7.42	1.41	0.10	—
57	—	SI06-1	—	銅片	11.73	8.63	4.35	0.42	—
58	—	SI06-1	—	銅片	4.71	2.80	2.79	0.01	—
59	—	SI06-1	—	銅片	11.93	9.07	3.48	0.32	—
60	—	SI06-1	—	銅片	8.02	5.69	1.51	0.05	—
61	—	SI06-1	—	銅片	8.24	6.15	2.33	0.11	—
62	—	SI06-1	—	銅片	5.19	4.00	1.74	0.04	—
63	—	SI06-1	—	銅片	8.60	3.21	1.86	0.05	—
64	—	SI06-1	—	銅片	8.77	6.30	3.69	0.24	—
65	—	SI06-1	—	銅片	9.11	5.48	2.20	0.07	—
66	—	SI06-1	—	銅片	5.98	4.98	2.26	0.06	—
67	—	SI06-1	—	銅片	4.98	4.40	1.49	0.04	—
68	—	SI06-1	—	銅片	3.72	3.29	0.54	0.01	—
69	—	SI06-1	—	銅片	7.87	5.02	2.45	0.07	—
70	—	SI06-1	—	銅片	5.40	2.67	1.83	0.01	—
71	—	SI06-1	—	銅片	4.15	2.30	0.76	0.01	—
72	—	SI06-1	—	銅片	5.02	2.13	1.16	0.01	—
73	—	SI06-1	—	銅片	6.57	5.85	2.18	0.08	—
74	—	SI06-1	—	銅片	4.04	2.72	2.93	0.01	—
75	—	SI06-1	—	銅片	6.52	5.07	1.16	0.04	—
76	—	SI06-1	—	銅片	4.10	2.70	1.57	0.02	—
77	—	SI06-1	—	銅片	3.01	2.96	1.29	0.01	—
78	—	SI06-1	—	銅片	4.99	3.74	1.18	0.03	—
79	—	SI06-1	—	銅片	9.11	3.77	1.36	0.05	—
80	—	SI06-1	—	銅片	7.63	7.23	3.93	0.25	—
81	—	SI06-1	—	銅片	6.34	4.25	1.72	0.04	—
82	—	SI06-1	—	銅片	5.64	4.41	1.56	0.02	—
83	—	SI06-1	—	銅片	7.77	4.54	2.55	0.07	—

円錐形銅片(SI06-1 水晶・碧玉)

	押印番号	遺構	出土地	分類	計測値			
					径(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	孔径(mm)
1	146-1	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	4.83 × 3.65	0.93	0.01	1.48 × 1.42
2	146-2	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	6.86 × 5.23	1.42	0.03	2.29 × 2.14
3	146-3	SI06-1	d8 区	水晶	7.28 × 7.47	2.41	0.09	1.87 × 1.71
4	146-4	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	8.14 × 6.14	2.58	0.08	0.65 × 0.58
5	146-5	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	7.94 × 7.33	2.05	0.08	2.00 × 2.31
6	146-6	SI06-1	SP46	水晶	7.17 × 7.25	1.49	0.05	2.35 × 2.09
7	146-7	SI06-1	b5 区	碧玉	6.62 × 6.59	1.54	0.05	1.20
8	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	4.71 × 4.37	1.22	0.01	1.53 × 1.61
9	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	5.14 × 4.49	1.28	0.02	1.65 × 1.46
10	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	4.08 × 5.05	0.99	0.01	1.91 × 1.69
11	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	5.28 × 3.83	1.06	0.01	2.28 × 2.31
12	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	6.13 × 4.92	1.29	0.02	2.05 × 2.32
13	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	5.36 × 4.55	1.39	0.02	1.78 × 1.86
14	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	5.17 × 5.65	1.35	0.02	1.69 × 1.81
15	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	5.51 × 4.83	1.70	0.02	2.38 × 2.00
16	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	4.60 × 3.68	0.98	0.01	1.66 × 1.47
17	—	SI06-1	SP45 北側溝	水晶	6.56 × 5.69	1.37	0.03	1.70 × 1.90
18	—	SI06-1	床面	水晶	4.76 × 4.82	1.30	0.01	2.02 × 2.20
19	—	SI06-1	d2 区	水晶	3.90 × 4.61	1.22	0.01	1.45 × 1.48
20	—	SI06-1	d3 区	水晶	3.56 × 3.68	0.99	0.01	1.93 × 1.56
21	—	SI06-1	d5 区	水晶	5.41 × 4.32	0.91	0.01	1.92 × 1.85
22	—	SI06-1	e4 区	水晶	4.63 × 3.59	1.01	0.01	1.92 × 1.76
23	—	SI06-1	f4 区	水晶	3.06 × 4.45	0.97	0.01	1.92 × 1.94
24	—	SI06-1	f5 区	水晶	6.82 × 5.40	1.45	0.03	2.42 × 2.32
25	—	SI06-1	h11 区	水晶	5.19 × 4.96	1.40	0.01	2.08 × 2.04
26	—	SI06-1	i9 区	水晶	4.48 × 3.89	0.99	0.01	1.93 × 1.89

滑石 (S106-1 ~ 3)

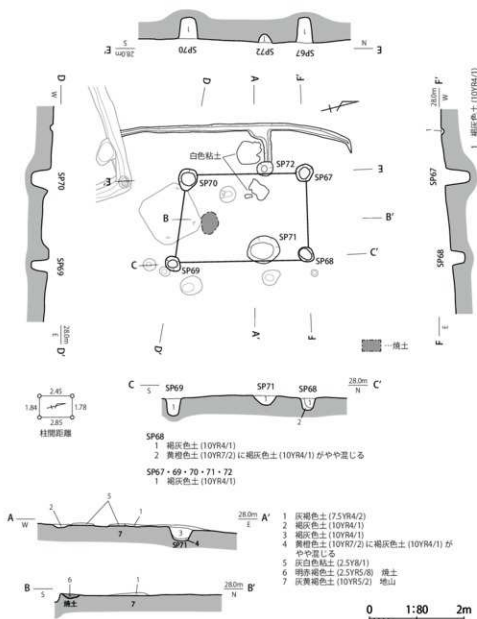
採石番号	通稱	出土地	分類	計測値				
				径 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)	孔径 (mm)	
1	147-1	S106-1	西側浮岩溝	小玉	4.85	4.05	0.11	1.88
2	147-2	S106-1	h3 区	小玉	4.25	2.98	0.08	1.64
3	147-3	S106-1	h10 区	白玉	4.00	2.38	0.06	1.62
4	147-4	S106-1	h4 区	白玉	4.25	2.19	0.07	1.54
5	147-5	S106-1	h7 区	成品	6.46	1.03	0.05	2.59
6	147-6	S106-1	SP45 北側溝	成品	6.79	2.60	0.16	1.80
7	147-7	S106-1	SP43	成品	6.63	3.03	0.17	1.76
8	147-8	S106-1	m7 区	成品	6.51	3.32	0.18	1.62
9	147-9	S106-1	SP43	成品	6.31	4.64	0.23	1.97
10	147-10	S106-1	h9 区	素材割片	27.81 × 17.19	6.95	4.50	—
11	147-11	S106-1	h11 区	素材割片	9.24 × 8.43	3.62	0.38	—
12	147-12	S106-1	SP41	穿孔品	9.25 × 8.81	3.00	0.31	1.83
13	147-13	S106-1	SP41 北側溝	穿孔品	8.28 × 8.44	2.63	0.25	1.84
14	147-14	S106-1	SP45 北側溝	穿孔品	6.34 × 5.63	2.36	0.11	1.49
15	—	S106-1	西側浮岩溝	成品	5.19	1.61	0.06	1.19
16	—	S106-1	g3 区	成品	6.41	2.03	0.11	1.84
17	—	S106-1	g4 区	成品	6.52	1.48	0.09	1.95
18	—	S106-1	h4 区	成品	6.50	2.23	0.13	1.68
19	—	S106-1	h7 区	成品	6.48	2.17	0.14	1.55
20	—	S106-1	h7 区	成品	6.30	1.43	0.08	1.56
21	—	S106-1	床面	成品	6.61	1.49	0.07	1.49
22	—	S106-1	床面	成品	6.42	1.51	0.08	1.82
23	—	S106-1	床面	成品	6.33	1.41	0.07	1.41
24	—	S106-1	焼土	成品	4.89	3.32	0.10	1.57
45	—	S106-1	h4 区	素材割片	8.73 × 7.0	3.95	0.41	—
46	—	S106-1	h9 区	素材割片	18.04 × 36.0	4.47	2.7	—
25	—	S106-1	d10 区	穿孔途中の破損品	9.71	3.28	0.34	1.72
26	—	S106-1	h8 区	穿孔途中の破損品	9.37	3.81	0.18	1.43
27	—	S106-1	西側浮岩溝	成品の破損品	5.43	1.32	0.02	2.07
28	—	S106-1	西側浮岩溝	成品の破損品	5.08	1.20	0.02	1.59
29	—	S106-1	西側浮岩溝	成品の破損品	6.40	2.91	0.08	1.95
30	—	S106-1	SP45 北側溝	成品の破損品	6.19	1.11	0.03	1.91
31	—	S106-1	SP45 北側溝	成品の破損品	5.30	0.75	0.01	1.15
32	—	S106-1	SP56	成品の破損品	4.89	1.05	0.01	1.78
33	—	S106-1	SP45	成品の破損品	5.78	1.34	0.03	1.67
34	—	S106-1	c5 区	成品の破損品	6.73	0.92	0.03	1.21
35	—	S106-1	g11 区	成品の破損品	6.16	1.82	0.03	1.84
36	—	S106-1	h2 区	成品の破損品	3.22	0.79	0.01	1.73
37	—	S106-1	h9 区	成品の破損品	6.53	2.08	0.09	1.98
38	—	S106-1	h4 区	成品の破損品	4.26	1.24	0.01	1.74
39	—	S106-1	j7 区	成品の破損品	4.61	3.22	0.04	1.09
40	—	S106-1	m11 区	成品の破損品	4.54	1.12	0.01	1.50
41	—	S106-1	h4 区	成品の破損品	5.27	1.84	0.03	1.60
42	—	S106-1	h3 区	成品の破損品	6.05	1.06	0.01	1.98
43	—	S106-1	c4 区	割片	4.22	1.13	0.01	—
44	—	S106-1	c5 区	割片	4.01	0.91	0.01	1.38
47	152-3	S106-2	SP60	白玉	4.02	2.09	0.05	1.45
48	152-4	S106-2	SP57	成品	6.37	1.69	0.07	2.08
49	—	S106-2	SP57	成品の破損品	5.19	0.80	0.01	—
50	—	S106-2	SP57	成品の破損品	6.58	1.79	0.04	—
51	—	S106-2	SP57	成品の破損品	2.98	1.15	0.01	—
52	—	S106-2	SP57	成品の破損品	6.32	1.01	0.03	1.71
53	154-3	S106-3	SP66	成品の破損品	4.54	0.98	0.01	1.19

7.SI07(第155図)

規模・形態 SI07はD7区に位置し、標高27.9mの地山面で検出した建物跡である。弧状を呈する溝とその東側から10基以上の柱穴、焼土、白色粘土が検出された。壁体は確認されなかったが、西側の溝の北側がややL字状に残存していることから方形の竪穴建物跡と考えられる。

溝は壁際溝と考えられ、西側以外では検出されなかった。また壁際溝の南端はSI06-1に切られており、SI06-1より古い建物跡と考えられる。

検出した柱穴のうち土層や位置から主柱穴はSP67～70の4基で、それ以外のSP71・72も埋土が同じであるため建物に伴う柱穴と思われる。柱穴の平面形は楕円形を呈し、径31～43cm、深さ24～55cmを測り、SP68の半截断面には径20cmの柱痕の痕跡が確認された。主柱穴の心々距離は1.78



第155図 SI07実測図

～2.85mで、南北方向が広い構造である。SP72は西側壁際溝から延びる溝と繋がり、その南側や東側での3箇所の白色の粘土が検出された。白色粘土の範囲は大きいもので径40～50cm、厚さ5cmを測り、白色粘土の性格はわからないが、ひとつの可能性として何らかの作業のために道具等を固定するような用途が考えられる。焼土は床面中央より南側で検出している。

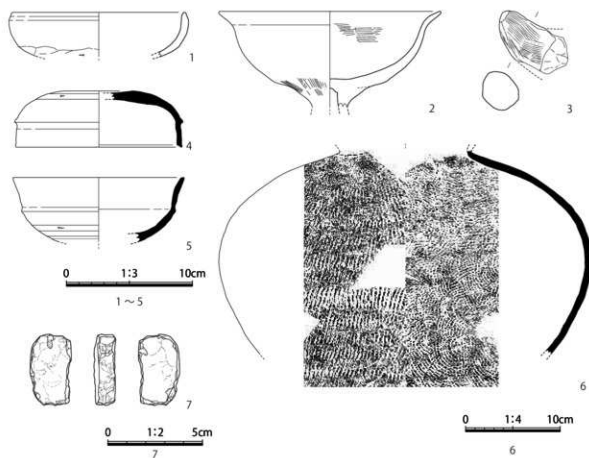
壁際溝の規模は幅12～17cm、深さ2～3cmを測り、方位はN-12°-Eである。

床面の規模は柱穴の位置から南北4.9m以上、東西3.0m以上と思われる。

遺物出土状況 遺物は床面の中央付近、東側の白色粘土と焼土の間から須恵器の甕(156-6)と高坏(156-5)、土師器の坏(156-1)がまとめて出土している。それ以外の遺物は床面上にわずかに残存していた土層、灰褐色土(第155図土層断面1層)からの出土である。

出土遺物(第156図) 第156図の1～3は土師器である。156-1は碗状を呈する土師器の坏である。橙色を呈し、内面にヨコナデ、外面にヨコナデと手持ちのヘラケズリを施す。156-2は高坏の坏部である。底部と口縁部の境に若干の屈曲があり、口縁端部は外反する。内外面共に風化しているが、一部にハケメが認められる。156-1・2は古墳時代中期末から後期前半頃と思われる。156-3は甕の把手で、外面にハケメを施す。

156-4～6は須恵器である。156-4は口径13.1cm、器高4.5cmを測る坏蓋である。天井部はやや平坦な形状を呈し、幅広のヘラケズリを施している。口縁端部はわずかに外面に反り、内側に沈線をい



第156図 S107出土遺物実測図

れることによって段状に仕上げている。出雲 1 期中相と思われる。156-5 は高坏の坏部である。口縁部は外反し、口縁部と体部の境に段をもつ。出雲 1 期新相である。156-6 は胴部最大径 39.5cm を測る甕である。内面に当て具痕、外面に叩き痕がみられる。

156-7 は瑪瑙製の板状の素材剥片である。勾玉を作るために背面や腹部に調整剥離を施し、背面は研磨している。上端と下端は分割されたままの状態では剥離の痕跡はみられない。

8.S108(第157～159図)

規模・形態 S108 は調査区中央よりやや東側、B7・B8 区に位置し、標高 27.85m の地山面で検出した竪穴建物跡である。建物の東側床面の一部は遺構確認の際のトレンチ掘削により失われている。平面形は方形を呈し、規模は掘り方で南北 5.5m、東西 5.8m、床面の壁際溝の内側で南北 5.0m、東西 5.35m を測り、本遺跡では比較的大型の建物跡である。壁体はほぼ垂直に立ち上がり、高さは最大で 45cm を測る。また、床面標高は 26.5m、建物西壁の方位は $N - 17^{\circ} - W$ を示す。壁沿いには幅 5 ～ 12cm、深さ 2 ～ 3cm の浅い壁際溝が全周していたと思われる。

床面から 10 基以上の柱穴が検出され、埋土から SP73 ～ 79 の 7 基が建物に伴うと思われる。主柱穴はそのなかの SP73 ～ 76 の 4 基で、径 30 ～ 41cm、深さ 58 ～ 71cm を測り、各柱穴の半截断面で径 13 ～ 15cm の柱痕が確認された。また、床面南側で壁際溝に接するように径 60cm、深さ 40cm の柱穴 SP77 が検出され壁際ピットと考えられる。

焼土や炭は床面中央で検出された。焼土は焼きしまった感じではなく、薄く赤くなった程度で火処として長期にわたり利用されていたとは思われない。

遺構内には褐灰色土や黄褐色土などの土層がレンズ状に堆積している。壁体から床面中央に向かって、褐灰色土と明黄褐色土の混合土（7 層）が堆積し、その上に硬くしまった土層である黄褐色土と褐灰色土の混合土（6 層）が 10 ～ 20cm の厚さで認められた。その上層には褐灰色土や灰黄褐色土が 10cm 程の厚さで堆積していた。

遺物出土状況 遺物は床面から出土したものは少なく、多くは土層内から土師器や須恵器が出土している。床面から出土した土器は土師器の甕（158-3）や須恵器の坏蓋（158-12）である。建物の南東側の 6 層上面から水晶の未成品や素材剥片、瑪瑙の素材剥片が出土しているが、流れ込みによるものと思われる。ほかに 3 層（褐灰色土に明黄褐色土が混じる）から金属製品が 1 点出土している。

出土遺物(第 158・159図) 第 158 図の 1～6 は土師器の甕である。いずれも単純口縁の甕で、158-1 は口縁部が短く、くの字状を呈する。古墳時代中期後半以降と思われる。158-2～6 は口縁部が外反するものである。158-6 は口径 23.4cm を測り、口縁部が外反している。いずれの甕も内面にヘラケズリやハケメを、外面にハケメやヨコナデを施している。時期は古墳時代後期以降と思われる。158-7 は口径 19.7cm を測る土師器の鉢である。器壁は厚く、内湾しながら立ち上がる。内面に横方向のハケメを、外面に縦・横方向に細かいハケメを施す。158-8 は土師器の鉢で、底部から口縁部にむかってハの字状に開くものである。器壁は厚く、黄褐色を呈する。調整は外面にハケメを、内面にハケメとヘラケズリを施している。口径 20.0cm、底径 7.9cm、器高 10.0cm を測る。

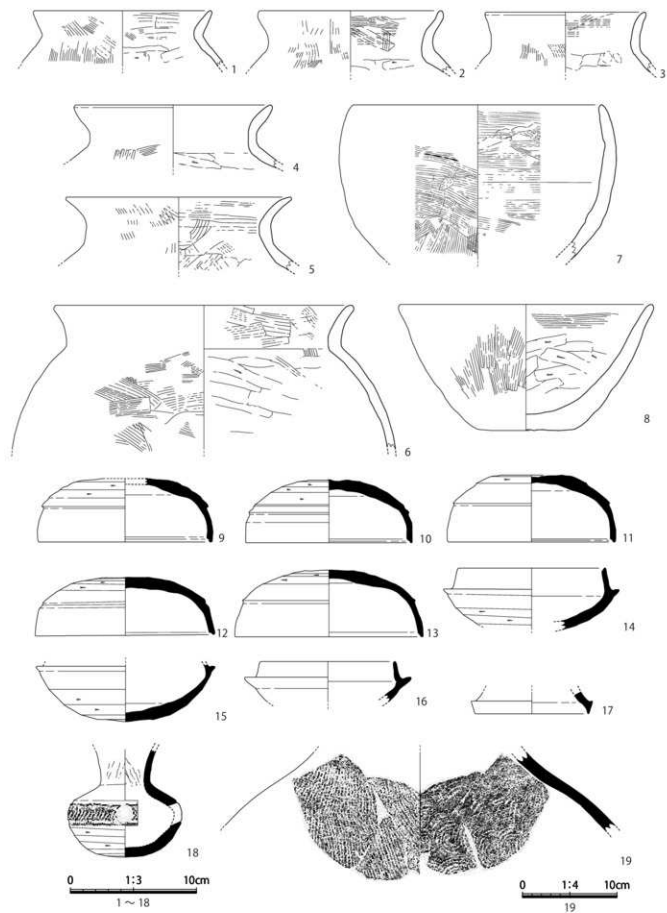
158-9～19は須恵器で、158-9～13は坯蓋、158-14～16は坯身である。158-9は口径13.6cm、器高5.0cmを測る。口縁端部内面に沈線を入れ、段状に仕上げ、外面肩部に稜を施す。158-10は口径13.0cm、器高5.0cmを測り、やや厚手である。口縁端部内面は段状で、肩部はナデにより稜を作り出している。158-11は口径13.2cm、器高5.3cmを測る。前出の2点と口縁端部は同じ形を呈するが、肩部の稜が低い。158-12は口径14.2cm、器高4.7cmを測る。肩部から口縁端部にかけてやや開くもので、口縁端部内面は沈線を入れて段状に上げている。肩部の稜は低く段状である。158-13は口径14.8cm、器高5.3cmを測る。口縁端部内面は緩い段状を呈し、丸くおさめている。肩部の稜は低い。158-14は口径11.6cm、受部径14.0cmを測る。口縁端部は緩い段状を呈する。158-15は受部径14.2cmを測る。外面のヘラケズリの単位は幅が広い。158-16は口径10.7cm、受部径13.2cmを測る。口縁部の立ち上がりは低く、端部を丸くおさめている。158-9～15の時期は出雲2期、158-16は出雲4期と思われる。

158-17は高坯の脚端部で、底径9.0cmを測る。脚端部は外面に面をもち、上下に拡張する。出雲1期新相と思われる。158-18は甕で頸部下半から体部である。体部は楕円形を呈し、二条の沈線で区画したなかに刺突文を施している。底部外面に丁寧なヘラケズリを施し、頸部内面には絞り痕が認められる。出雲4期である。158-19は甕である。胴部片のみで、外面に叩き痕、内面に当て具痕が認められる。

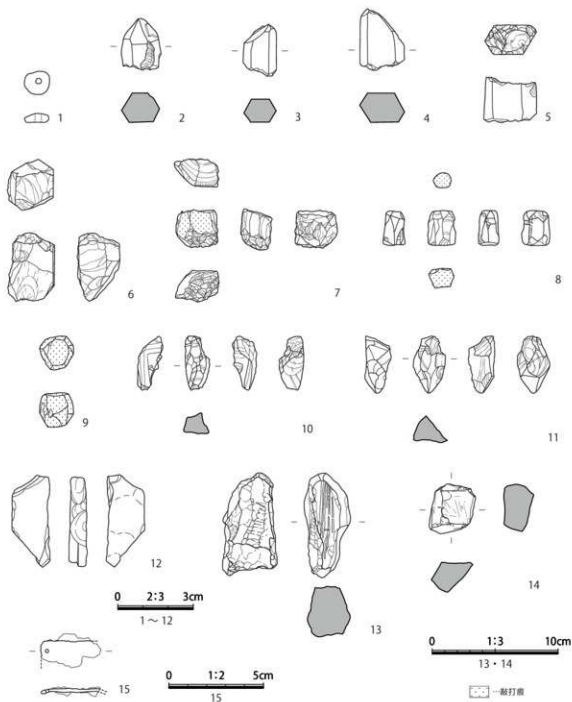
159-1～14は玉作関連遺物で流れ込みによるものである。159-1は滑石製の白玉で、最大径6.42mm、厚さ2.30mmを測る。159-2～11は水晶である。159-2は原石の下端面を打ち欠いている。側面にみられる剥離痕は荒削りの際に生じたものと思われる。159-3・4も原石で、同じく下端面のみを打ち欠いている。159-5は原石の上下端面を打ち欠いて、六角柱状に作出した素材剥片である。上下の面は調整剥離により平らにしている。上下の平坦面を意識すると切子玉、これから角を敲打していくなら丸玉になると思われる。159-6は上下端面を打ち欠いた後、上下端面や側面に押圧剥離を施している。159-7は丸玉の素材である。上下端面を打ち欠いた後に縦割りし、剥離を施して敲打をし始めている。159-8は丸玉の未完成品である。上下端面に敲打を行い、側面に剥離による整形を施している。原石が細いため一部に礫面が認められる。159-9は、現状からは切子玉の未完成品と思われるが、算盤玉、丸玉の可能性も考えられる。外面全体に敲打を行っている。159-10は調整剥離と敲打の痕跡がみられ、製作途中に破損したものと思われる。159-11は丸玉の調整剥離の途中で壊れた失敗品である。159-12は瑪瑙の板状を呈する素材剥片である。両面は礫面で、側面の一面に剥離の痕跡が確認される。勾玉を作ろうとしたものと思われる。

159-13は砥石で最大長8.2cm、最大幅4.3cm、最大厚3.5cmを測る。幅1.5mm程の溝状の窪みが1面に4条確認され、ほかの面は礫面である。手のひらにおさまる大きさのため、片手で持ちながら使用していたように思われる。159-14は凝灰岩製の砥石の破損品である。一部に擦痕がみられる。

159-15は最大長3.2cm、最大幅1.1cm、最大厚0.2cmを測る板状の金属製品である。一部は破損し、片側に径1.5mmの円孔が認められる。形状から小札の可能性が考えられる。



第158図 SI08出土遺物実測図1



第159図 S108出土遺物実測図2

9.S109(第160～163図)

S109は調査区中央より東側、A7区に位置し、標高27.94mの地山面で検出した竪穴建物跡である。建物の南東側はS108に切れ、東側は後世の水田造成の際に削平されているが、残存する西側の壁体の形から方形の竪穴建物跡である。床面の精査を行うとコの字状の壁際溝と16基の柱穴、そして北側壁際溝の南側に幅15cm、長さ93cmの東西方向の溝が検出された。検出した柱穴の位置や埋土から2棟の建物跡が想定され、1棟は壁体に伴う建物跡、もう1棟はその建物跡よりやや東側に位置する建物跡である。いずれも主柱穴は4基と考えられ、前者をS109-1、後者をS109-2として各建物

跡について述べる。

遺構内には褐灰色土(第160図土層断面1層)や灰黄褐色土(第160図土層断面2層)が堆積してる。土層断面に切り合いがみられないことから、想定した建物跡の新旧は、SI09-1が新、SI09-2が古と考えられる。

SI09-1(第160図)

規模・形態 SI09-1はコの字状の壁体を伴う竪穴建物跡である。西側壁体の高さは20cm、方位は真北を示している。壁際溝は壁体に沿うように確認され、幅7cm、深さ2cmを測る。

SI09-1に伴う柱穴はSP80～84の5基と考えられ、主柱穴はそのなかのSP80～83の4基である。柱穴の平面形は楕円形を呈し、規模は径29～46cm、深さ33～47cmを測り、土層断面から柱痕は確認されなかった。柱穴間の心々距離は1.7m～1.96mを測る。床面東側のSP84は、主柱穴よりやや大きく、南北53cm、東西47cm、深さ30cmを測る。

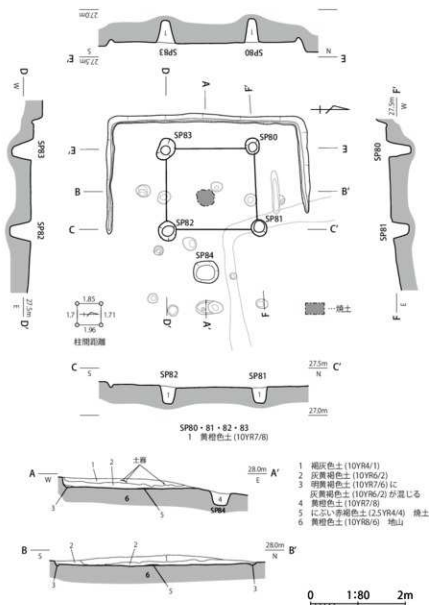
床面の規模は、南北3.95m、東西はSP84を含めると東西3.5m以上と考えられ、床面積は13.83㎡以上と想定される。

焼土は床面のほぼ中央から検出された。範囲は狭いが、良く焼けて硬くなっていた。

遺物出土状況 遺物は床面から須恵器の坏蓋(161-9)と土師器の甕(161-6)、石製品(161-13)が出土している。堆積土からも土師器の甕や蓋、須恵器の坏蓋や高坏が出土している。

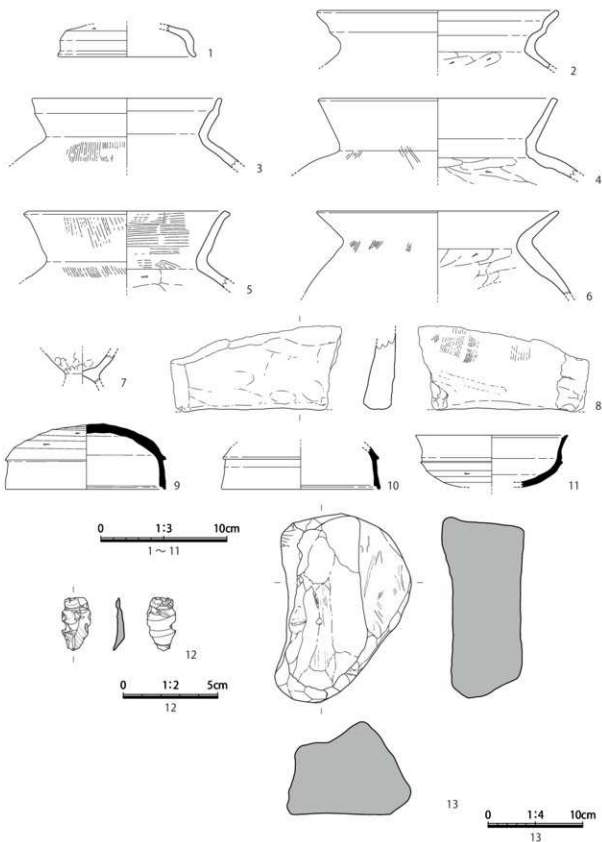
出土遺物(第161図)

161-1～8は土師器である。161-1は口縁端部が外反する蓋で、蓋と



第160図 SI09-1実測図

して図化したが環の可能性も考えられる。口径 10.7cm を測り、外面にヘラケズリとナデ、内面にナデを施す。161-2 は複合口縁が退化した甕で、口縁部が大きく外反する。全体に風化しており、内面



第 161 図 SI09-1 出土遺物実測図

にヘラケズリの痕跡がみられる。161-3 も複合口縁が退化したもので、口縁部が短い。161-4~6 は単純口縁の甕である。161-4 は口縁が外傾し、端部に面を持つ。胴部は肩部が張るものと思われる。161-5 は口縁部の形は 161-4 と同じであるが、肩部があまり張らないタイプである。外面と口縁部内面にハケメを、胴部内面にヘラケズリを施している。161-6 は床面近くから 161-13 と一緒に出土した甕である。口縁部は大きく、くの字状に開いている。161-2~6 は古墳時代中期の範疇におさまるものと思われる。

161-7 は製塩土器と思われる。内外面に指頭圧痕が認められる。161-8 は甕の底部である。

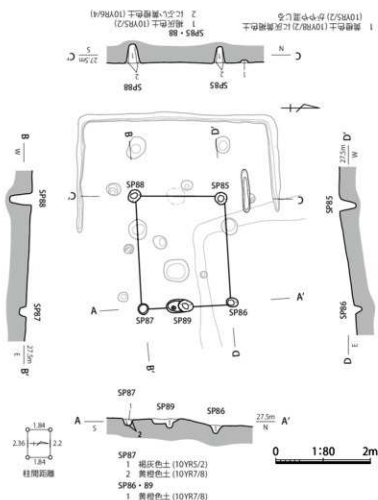
161-9~11 は須恵器である。161-9 は床面から出土した环蓋で口径 12.6cm、器高 5.2cm を測り、口縁端部は沈線を入れることによって段状にしている。また、肩部には明瞭な稜が確認される。161-10 も环蓋で口径 12.4cm を測る。器壁は薄く、口縁端部は段状で肩部に稜がみられる。161-11 は口径 12.0cm を測る無蓋环蓋である。口縁部と体部の境に段をもち、口縁は外反する。これらの須恵器は出雲 1 期新相に該当する。

161-12 は黒曜石の剥片である。161-13 は長さ 19.5cm、幅 13.2cm、厚さ 9.8cm を測る台石である。上面に凹面状の窪みがあり、擦痕が認められる。また、側面の片側は火を受けて変色している。

SI09-2(第162図)

規模・形態 SI09-2 は検出した柱穴から想定した建物跡である。埋土から SI09-2 に伴う柱穴は SP85~89 の 5 基と考えられ、主柱穴はそのなかの SP85~88 の 4 基である。主柱穴の規模は径 25~28cm、深さ 10~45cm を測り、半截断面において SP85・SP87・SP88 で径 13cm の柱痕が確認された。また、SP86 と SP87 の柱間には SP89 があり、埋土が SP86 と同じであることから SI09-2 に伴うとしたが、性格は不明である。

柱穴間の心々距離は 1.84~2.36m を測り、やや南側が広く、主柱穴の平面形は平行四辺形を呈している。主柱穴 SP86 の北側にみられる溝は SI09-2 に伴う壁際溝の一部が残存したものかもしれない。



第 162 図 SI09-2 実測図

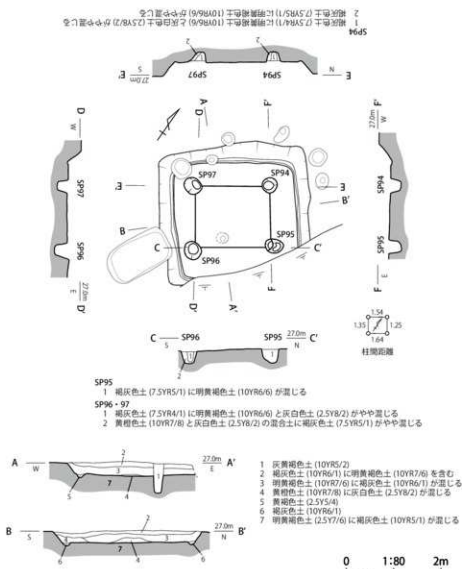
出土遺物 (第165図) 165-1は土師器の甕の胴部片で、外面にハケメがみられる。165-2は口径13.2cmを測る須恵器の坏蓋である。口縁端部内面は緩い段状を呈し、肩部の段も緩やかである。出雲3期と思われる。

11.SI11(第166図)

規模・形態 SI11は調査区東側、C9区に位置し、標高27.05mの地山面で検出した竪穴建物跡である。建物の南東側は流失し、建物の壁体や床面には上方から掘られた土坑や柱穴が確認される。建物跡は方形を呈し、壁体の高さは25～30cm、方位はN-35°-Eである。

床面の規模は現状で南北2.5m、東西2.35mを測り、床面積は5.88㎡と思われる。壁際溝は幅7～10cm、深さ2～3cmを測る。

主柱穴はSP94～97の4基で、規模は径34～40cm、深さ18～25cmを測り、SP94の半截断面で径13cmの柱痕を確認された。主柱穴間の心々距離は1.25～1.64mを測る。焼土は検出していない。



第166図 SI11実測図

遺物出土状況 床面から出土した遺物はなく、土層断面2層(褐灰色土)から土師器の裏片(167-1・2)が出土している。

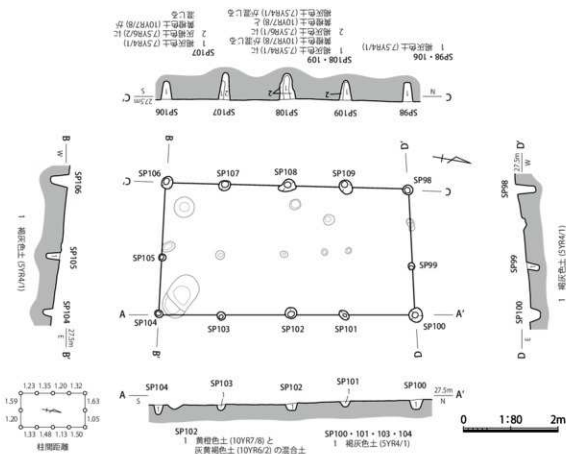
出土遺物(第167図) 167-1は裏の口縁部で、外傾して開くものである。古墳時代中期後半以降と思われる。167-2は裏の胴部である。外面にハケメを、内面にヘラケズリを施している。



第167図 SI11出土遺物実測図

12.SB01(第168図)

規模・形態 SB01はC7・8区、D7区に位置し、標高27.2～27.6mの地山面で検出した掘立柱建物跡である。規模は桁行4間、梁行2間の構造で、桁行は東側5.44m、西側5.1m、梁行は北側で2.68m、南側で2.79mを測る。柱間の心々距離は桁行1.13～1.5m、梁行は1.05～1.63mを測り、西側の梁行が広くなっている。建物の主軸方位はN-8°-Wを示す。



第168図 SB01実測図

柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、径は16～38cm、深さ12～57cmを測る。東側桁行の柱穴は斜面下方に位置しているため、削平されて浅くなっている。SP107、SP108、SP109の半截断面で径12～15cmの柱痕が確認された。

遺物はSP106の埋土から土師器の裏片(169-1)が出土している。**出土遺物(第169図)** 169-1は裏の胴部片である。内外面にハケメがみられる。時期は不明である。



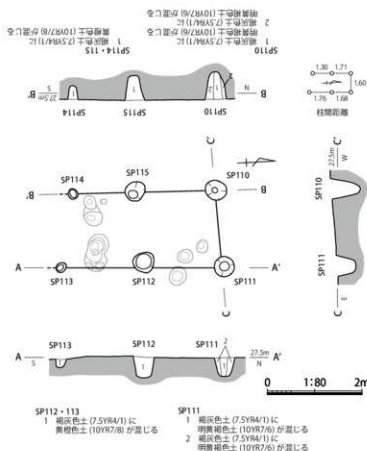
第169図 SB01 出土遺物実測図

13.SB02(第170図)

規模・形態 SB02はD7・8区、E7・8区、SB01の南西側に位置し、標高27.5～27.62mの地山面で検出した掘立柱建物跡である。建物の北東側はSB01と重複しているが、いずれも地山面での検出のため新旧関係は不明である。

建物の規模は桁行2間以上、梁行1間の構造で、桁行は東側で3.44m、西側で3.01m、梁行1.6mを測る。柱穴間の心々距離は桁行1.3～1.76mを測り、建物の主軸方位はN-2°-Eを示す。

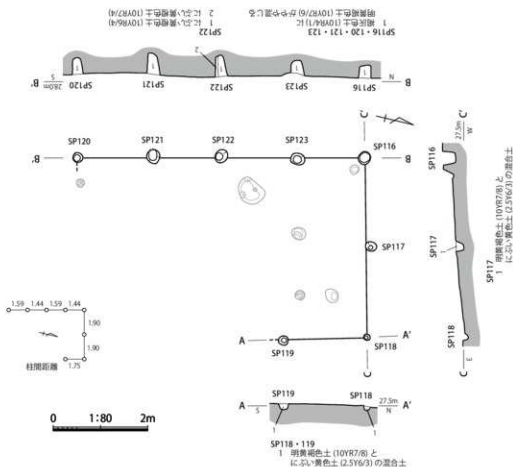
柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、径20～46cm、深さ17～58cmを測る。SP110とSP111の半截断面で径15cmの柱痕を確認している。桁行の南側2基の柱穴(SP113・114)は地山面が南側に向かって傾斜しているため、上面が削平されたことにより底面に近いところしか残存していない。遺物は出土していない。



第170図 SB02 実測図

14.SB03(第171図)

規模・形態 SI08・09周辺からは多数の柱穴が検出され、SI08・09の西側では直線状に並ぶ柱穴が確認された。そのため掘立柱建物跡や柱穴列が想定されたため、柱穴の位置や埋土から復元した建物跡がSB03である。建物に伴う柱穴は8基で、北東側の柱穴はSI09床面から検出され、南東側



第171図 SB03実測図

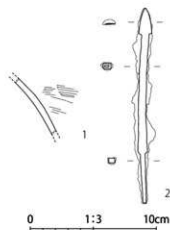
の柱穴はSI08を建てる際に削平されており検出できなかった。西側梁行のSP123はSI09の西側壁体に切られていることからSI08、SI09、SB03の新旧関係は古い方からSB03⇒SI09⇒SI08と考えられる。

SB03は現状から桁行4間、梁行2間の構造で、桁行6.06m、梁行3.80mを測る。柱間の心々距離は桁行1.44mと1.59m、梁行1.90mを測り、建物の主軸方位はN-13°-Wを示す。

柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、径15～30cm、深さ10～45cmを測る。SP122の半截断面で径15cmの柱痕を確認している。

遺物はSP116から土師器の甕片(172-1)が、SP123から鉄族(172-2)が出土している。

出土遺物(第172図) 172-1は土師器の甕片である。器壁は薄手で、外面にハケメがみられる。172-2は全長15.6cmを測る長頸鉄である。鉄身部は三角形を呈し、長さ2.0cm、頸部長は9.6cmを測る。茎部は長さ4.0cmで木質等とはみられない。形状が長砂8号墳出土の鉄族と同じであることから、古墳時代中期後半頃のものとされる。



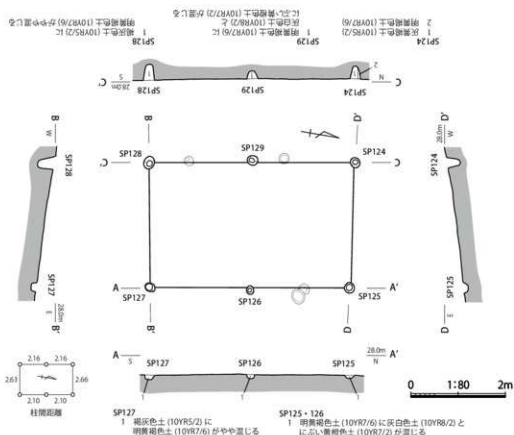
第172図 SB03出土遺物実測図

15.SB04(第173図)

規模・形態 SB04はSIO9の北側、SIO10の西側に位置し、標高27.6～27.95mの地山面で検出した掘立柱建物跡である。規模は桁行2間、梁行1間の構造で、桁行は東側4.20m、西側4.32m、梁行は北側で2.66m、南側で2.60mを測る。柱間の心々距離は桁行2.13～2.16mを測り、建物の主軸方位はN-8°-Wを示す。

柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、径20～28cm、深さ10～34cmを測る。東側桁行の柱穴は斜面下方に位置しているため、削平されて浅くなっている。SP124で径15cmの柱痕を確認している。

遺物は出土していない。



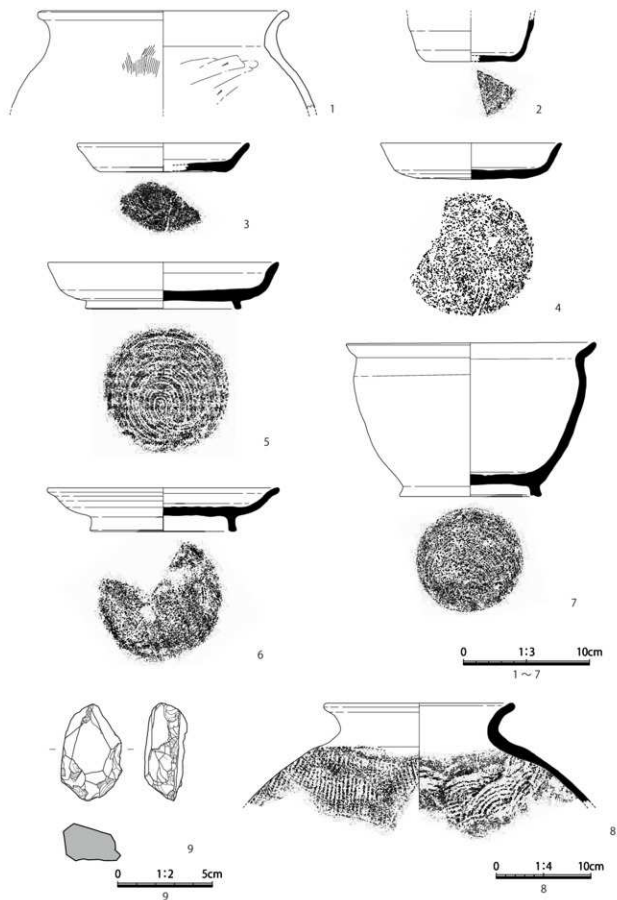
第173図 SB04実測図

16.SA01(第174図)

規模・形態 SA01はSIO7の北側、SB03の西側に位置する。標高27.95mの地山面で検出し、南北方向に柱穴が4基(SP130～133)並んでいる。主軸方位はN-5°-Wを示す。柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、径20～30cm、深さ20～37cmを測り、SP131で径12cmの柱痕が確認された。柱穴間の心々距離は2.30～2.35mである。遺物は出土していない。

17.SA02(第175図)

規模・形態 SA02は調査区中央付近、B5区に位置する。標高28.55～28.7mの地山面で検出し、柱穴3基(SP134～136)からなる。柱穴の平面形は楕円形を呈し、径20～32cm、深さ8～31cm



第178図 加工段01出土遺物実測図

出土遺物(第178図) 178-1は土師器の甕である。口縁は外反し、端部外面は肥厚している。口径19.0cmを測り、外面にハケメを、内面にヘラケズリを施している。古墳時代後期以降である。

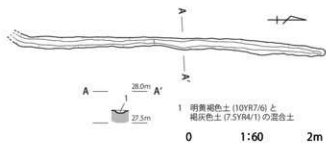
178-2～8は須恵器である。178-2は底径7.0cmを測る無高台の坏である。器壁は薄く、底部外面に回転糸切り痕がみられる。178-3・4は無高台の皿で、178-3は床面直上から出土している。いずれも底部から口縁にかけて外傾するものである。178-5・6は高台付の皿である。178-5は底部から口縁にかけて内湾して立ち上がり、端部は外反する。高台は低く、底部外面は回転糸切り後未調整である。178-6は178-5より高台がやや高く、底部周縁のやや外側に付く。底部から口縁にかけて外反しながら立ち上がる。178-7は短頸壺である。口径19.6cm、底径11.3cm、器高12.2cmを測る。178-8は甕で、口縁は外反する。内面に当て具痕が、外面に叩き痕が明瞭に認められる。178-2～5は出雲国府編年表第4型式、8世紀第3四半期～第4四半期、178-6・7は同編年の第5型式、8世紀末葉～9世紀前葉に相当する。

178-9は全長5.1cm、幅3.2cm、厚さ1.9cmを測る水晶の原石である。

19.SD01(第179図)

規模・形態 SD01はSI06の東側に位置し、標高27.75mの地山面で検出した全長5.0m、幅15～17cm、深さ3～4cmの溝である。溝の南端はやや西側に向き、SI06南東端に位置するSK03に切られている。埋土は明黄褐色土と褐灰色土の混合土で、遺物は出土していないため時期は不明である。

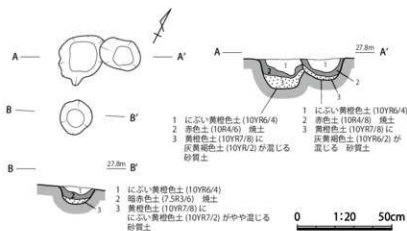
この溝は底面が北側に向かって傾斜していることから排水のための溝と考えられるが、SI06の東側に位置していることやSI06-1・2・3において主柱穴以外の柱穴が検出されていることから、SD01の西側に主柱穴をもつ竪穴建物跡の東側壁際溝の可能性もあるのではないだろうか。



第179図 SD01実測図

20.炉跡(第180図)

規模・形態 調査区南端、E7区で検出した遺構である。SD01南端の東側、SI06からは約1.0mの距離である。炉跡は3基検出され、径20～25cm、深さ10～15cmを測る。2基は東西に並んで新旧があり、東側が新しい。また、その2基から南側7cmにもう



第180図 炉跡実測図

1 基がみられる。この炉跡は坑を掘った後に黄橙色土に灰黄褐色土が混じる砂質土を2～5cm程度埋めた後に使用している。炉跡内や周辺は良く焼けてしまっていた。遺物は出土していない。土層断面の1・2層を持ち帰り顕微鏡がなかったか精査を行ったが確認されなかった。この炉跡の時期はわからないが、SK06に近いことから玉作工房跡に関連する遺構の可能性があるのではないだろうか。

21.SK01～24(第181～184図・表17)

土坑は調査区内で24基検出された。そのうちの14基は縄文時代の落とし穴と思われる。落とし穴は調査区中央から南側に多く、調査区の西側と北東側に少ない。底面ビットが1穴のものがほとんどであるが、SK13のように小さな穴が4穴あるものもみられた。埋土は黒褐色土のものにぶい黄橙色土のものに二別され、遺物はなないのだが時期が違うのかもしれない。

その他の10基の土坑は円形や楕円形、不整形な形を呈し、規模も様々である。遺物は土師器の高坏(184-1・2)・甕(184-4～6)・鉢(184-3)、須恵器の坏蓋(184-7・8)、砥石(184-9)が出土している。

個別の平面図と断面図は第182・183図に掲載し、詳細は表17に記載している。

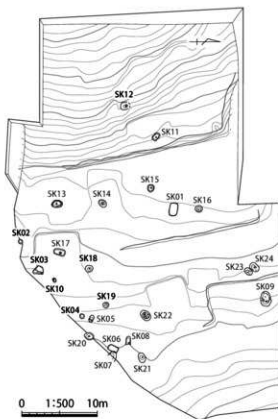
出土遺物(第184図) 184-1はSK02から出土した土師器の高坏である。口径13.8cm、器高12.1cmを測り、坏部は椀状を呈する。内外面にハケメが認められる。古墳時代中期後半以降である。

SK03から184-5、SK10から184-6の甕片が出土している。いずれも甕の肩部付近と思われる。

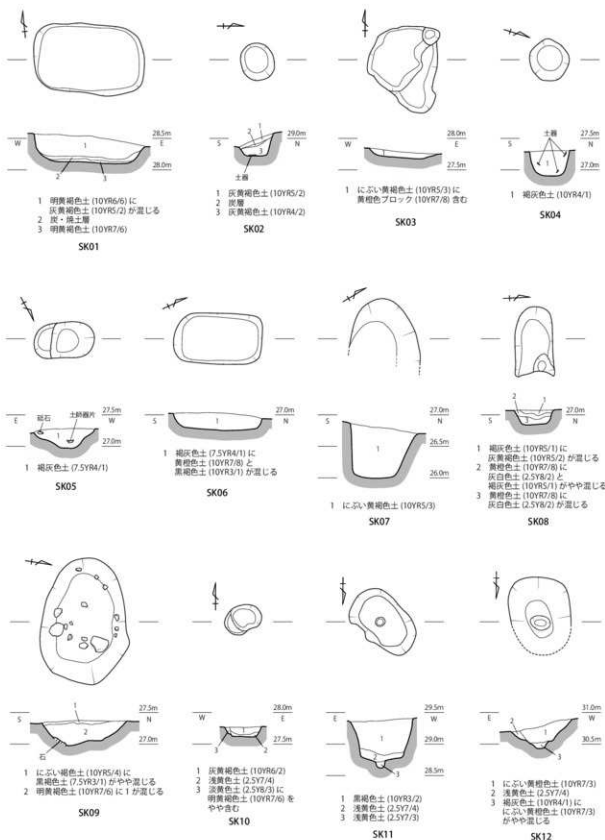
SK05からは184-2・7・9が出土している。184-2は脚が付く坏の底部である。橙褐色を呈し、低脚部がやや大型化したような形で、脚部は外反し、坏部は椀状を呈する。底径6.6cmを測る。184-7は須恵器の坏蓋天井部の破片である。外面にヘラケズリ、内面に回転ナデを施す。184-9は砥石で、擦痕が2面に確認される。

SK04からは184-3・4が出土している。いずれも土師器で、184-3は口径12.6cm、器高6.8cmを測る鉢である。器壁は厚く黄橙色を呈し、内外面に細かいハケメを施している。184-4は甕である。器壁は厚く、黄橙色を呈する。口縁部はハの字状に開き、外面にハケメとヨコナデを、内面にヘラケズリを施す。口径13.0cmを測る。古墳時代中期後半頃のものと思われる。

SK06から184-8の須恵器片が出土している。坏蓋の一部と考えて図化したが、小片のため器種ははっきりしない。これらの遺物は小片のものもあるため判断としないが、概ね古墳時代中期後半以降のものと思われる。

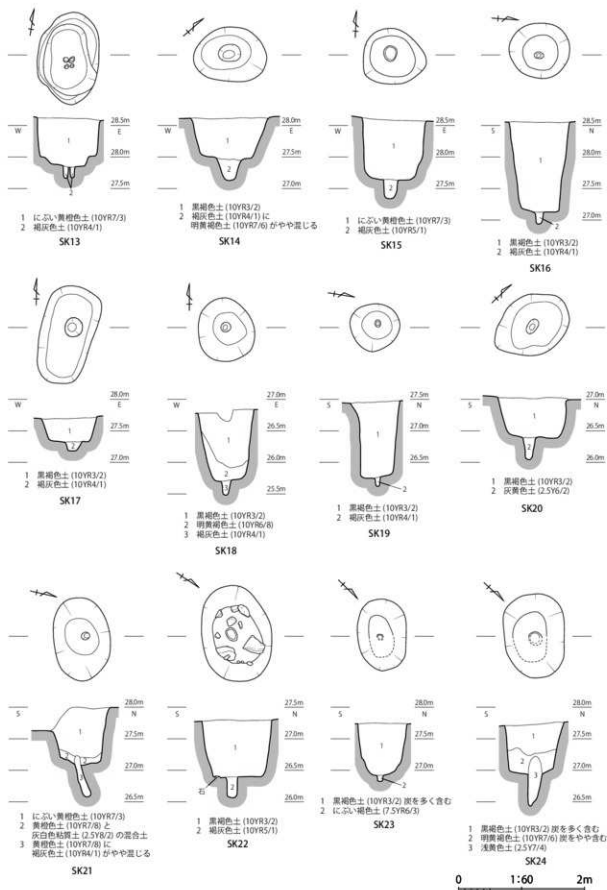


第181図 SK01～24位置図

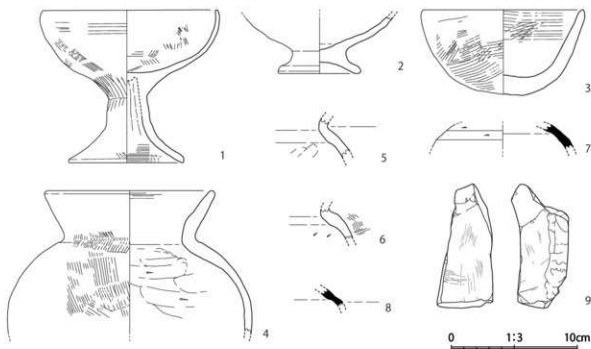


0 1:60 2m

第182図 SK01～24 実測図1



第183図 SK01～24実測図2



第 184 図 SK01 ～ 24 出土遺物実測図

表 17 SK01 ～ 24 計測表

遺構名	規模 (m)			出土遺物
	長径	短径	深さ	
SK01	1.75	1.10	0.42	
SK02	0.60	0.52	0.35	土師器：高坏
SK03	1.45	1.15	0.10	土師器：甕片
SK04	0.70	0.65	0.40	土師器：甕・鉢
SK05	1.00	0.55	0.30	土師器：高坏、須恵器：坏蓋、磁石
SK06	1.40	0.80	0.28	須恵器：坏蓋片
SK07	—	1.19	0.80	
SK08	1.10	0.65	0.25	
SK09	2.00	1.45	0.40	
SK10	0.60	0.40	0.16	土師器：甕片
SK11	1.16	0.72	0.62	
SK12	1.30	0.97	0.25	
SK13	1.50	1.00	0.78	
SK14	1.20	0.85	1.10	
SK15	1.00	0.90	0.95	
SK16	0.95	0.87	1.45	
SK17	1.60	0.85	0.40	
SK18	1.00	0.90	1.10	
SK19	0.80	0.80	1.15	
SK20	1.30	0.95	0.65	
SK21	1.35	0.90	1.25	
SK22	1.55	1.10	0.90	
SK23	1.15	0.80	0.85	
SK24	1.35	0.95	0.75	

第4項 その他の出土遺物(第185・186図)

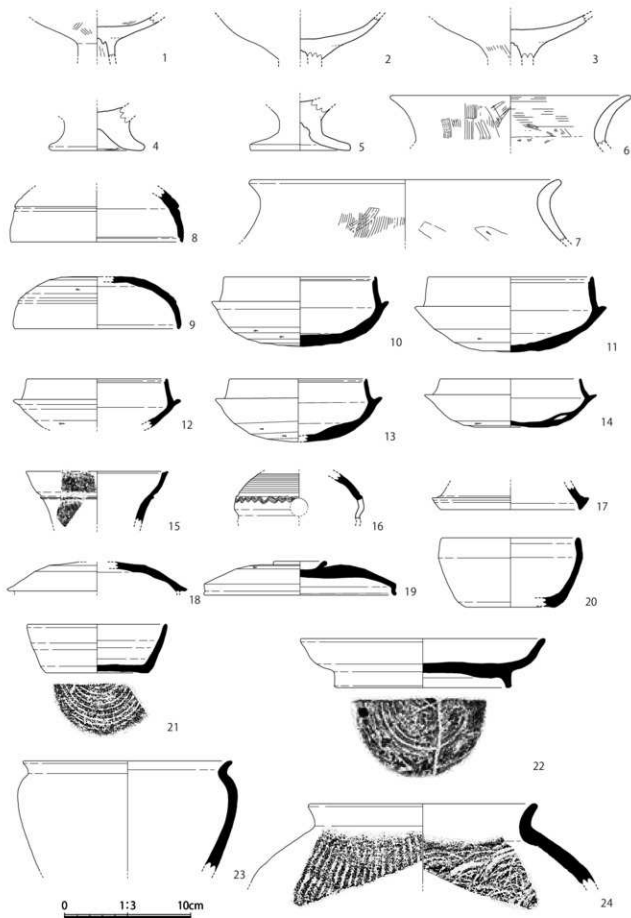
第185・186図に堆積土や柱穴から出土した遺物を掲載した。土師器・須恵器・石製品が調査区全体から出土しており、特に調査区中央付近から南側で多い。遺物の出土地点及び出土土層は遺物観察表に記載している。

185-1～7は土師器である。185-1～3は高坏で、いずれも坏底部は碗状を呈する。185-1は内外面にハケメがみられ、一部残存する脚部内面に絞り痕が確認される。185-3も外面にハケメがみられる。185-4・5は低い脚が付く坏の脚部と思われる。いずれも橙褐色を呈する。185-4は底径7.6cmを測り、低脚坏が大型化したような形態である。185-5は底径8.0cm、高さ4.0cmを測り、高坏の脚部が低くなったような形態をしている。185-1～5は古墳時代中期後半以降に属するものと思われる。185-6・7はいずれも口縁部が外反するもので、古墳時代後期以降の甕である。185-6は内外面にハケメを施している。185-7は胴部の最大径が胴部下半部にくるタイプと思われる。

185-8～24は須恵器である。185-8は口径13.6cmを測る坏蓋である。口縁端部内面は沈線により段状に仕上げ、肩部に沈線による段がみられる。185-9も坏蓋で口縁端部に段をもたず、肩部の段は痕跡程度にしかみられない。口径13.0cm、器高4.1cmを測る。185-10～14は坏身である。185-10は口径13.0cm、受部径15.2cm、器高6.0cmを測る。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部に段をもつ。185-11は185-10と同じ形を呈し、口径12.0cm、受部径14.0cm、器高5.5cmを測る。185-12はやや薄手の坏身である。口径11.1cm、受部径13.2cmを測り、口縁端部は段状である。185-13は口径10.8cm、受部径13.2cm、器高5.0cmを測り、185-10・11と比べるとやや小ぶりである。口縁端部は段状を呈している。185-14は口径11.2cm、受部径13.6cm、器高3.8cmを測る。口縁端部に段はなく、高さは低い。底部に火ぶくれがみられる。これらの蓋坏の時期は、185-10～12が出雲1期新相、185-8・13・14が2期、185-9が3期である。

185-15は甕の口縁部で、口径11.3cmを測る。外面の口縁と頸部の間に稜があり、細かい波状文が頸部と口縁に施されている。185-16は甕の体部である。185-15・16は出土位置が近いこと、胎土や焼成が酷似していることから同一個体と考えられる。体部外面に波状文とカキメを施している。また、外面に自然軸が掛かる。185-15・16は出雲編年2期である。185-17は高坏の脚端部で、外面に内傾する面をもつ。古墳時代後期以降と思われる。

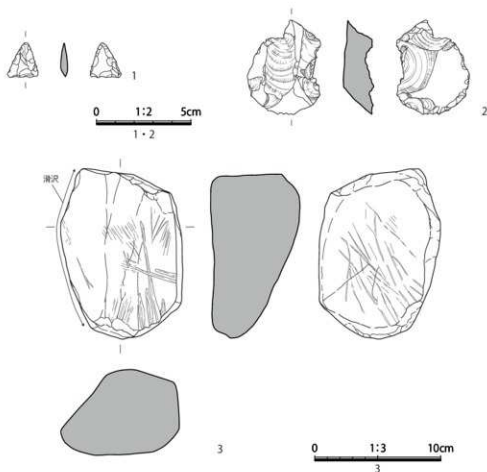
185-18は口縁端部にかえりが付く蓋で、かえりの部分と天井部は破損している。国府第1型式、7世紀後葉と思われる。185-19は口縁端部が屈曲口縁を呈し、輪状つまみが付く蓋である。口径15.1cm、器高2.7cmを測る。国府第2型式、7世紀末葉～8世紀第1四半期に相当する。185-20は口径10.8cm、器高7.0cmを測る無高台の坏である。底部から口縁にかけてやや内湾して立ち上がるものである。185-21も無高台の坏で、底部から口縁部にかけて直線的に立ち上がり、底部外面に回転糸切り痕が明瞭にみられる。口径11.0cm、器高3.9cmである。185-22は高台付きの皿で、口径19.4cm、器高3.9cmを測る。底部から口縁部にかけて内湾して立ち上がり、端部は外反する。185-23は口径16.6cmを測る短頸壺である。口縁部は短く外反し、底部から緩く内湾しながら立ち上がる。185-20～23は国府第4型式に相当すると思われるが、185-20は第5型式まで下るのかもしれない。185-



第185図 その他の出土遺物実測図1

24は鏝である。口縁部は短く外反している。外面の叩き痕や内面の当て具痕が明瞭にみられる。古墳時代後期以降と思われる。

第186図は石製品である。186-1はサヌカイト製の石鏃である。長さ1.8cm、最大幅1.65cmを測る。186-2は長さ5.0cm、最大幅3.7cmの黒曜石の剥片である。辺縁部に剥離痕が確認され、一部に礫面がみられる。186-3は調査区中央付近、C7区で検出した柱穴SP137(第120図遺構配置図参照)から出土した砥石である。長さ13.0cm、幅9.6cm、厚さ7.0cmを測る。表面の片側は滑沢で、擦痕や幅1mmの浅い溝が2箇所みられる。もう一方の面は幅3～4mmの溝6条と幅1mmの溝が多数確認され、擦痕も認められる。裏面は幅1mmの溝が多数確認される。ひとつの石でいろいろな用途に応じて使用していたようである。



第186図 その他の出土遺物実測図2

第3節 小結

奥宇田瀬遺跡は谷部の西側斜面に位置する遺跡である。調査の結果、竪穴建物跡 11 棟、掘立柱建物跡 4 棟、加工段 1 基、柱穴列 2 条、溝 1 条、炉跡 1 基、土坑 24 基、多数の柱穴が検出された。竪穴建物跡 11 棟のうち 6 棟では 1 回ないし 2 回の建て替えが行われ、のべの棟数は 18 棟である。竪穴建物跡のなかに古墳時代後期前半と考えられる水晶を主体とする玉作工房跡 (SI06-1) が確認され、これが本遺跡の特徴といえる。

以下では、調査成果に基づいて奥宇田瀬遺跡の遺構と玉作工房跡の様相を整理する。

第1項 遺跡の様相

今回の調査では、縄文時代・古墳時代中期後半から後期前半・古代の 3 時期の遺構を検出した。

縄文時代の遺構は落とし穴で調査区全体で 14 基が検出された。調査区中央から南側で多く検出され、底面ビットが 1 穴のもの 13 基、4 穴のもの 1 基を確認している。周辺の遺跡では、奥宇田瀬遺跡の北側に位置する勝負遺跡や西側に位置する岩井手谷遺跡と同様な落とし穴が検出されている。本遺跡は谷に面した緩斜面に位置しており狩猟に適した場所であったと思われる。

次に古墳時代中期後半から後期前半 (出雲 1 期新相～2 期) の遺構では、竪穴建物跡 11 棟、掘立柱 4 棟を検出している。縄文の落とし穴状遺構以外の土坑や柱穴列もこの時期に含まれると思われる。

竪穴建物跡のなかには床面出土遺物がないため詳細な時期が判明していないものはあるが、床面近くの埋土の出土遺物の時期から建物跡は概ね古墳時代中期後半から後期前半 (出雲 1 期新相～2 期)

表 18 竪穴建物跡一覧表

遺構名	検出面標高	規模		西側壁体の方位	柱穴 (cm)		壁厚溝 (cm)		時期	
		床面 (m)	床面積 (㎡)		径	深さ	幅	深さ		
SI01	-1	30.1	4.35 × 3.5 以上	15.23 以上	N-19°-W	35~48	40~86	10~12	2~4	出雲 1 期新相
	-2	—	3.8 × 2.8 以上	10.64 以上	—	40・44	68・73	8	2	—
SI02	—	28.6	3.80 × 3.68	14.0	N-22°-W	28~50	46~60	7~18	2~3	出雲 2 期
SI03	-1	28.67	4.35 × 3.5 以上	15.23 以上	N-7°-E	20~47	6~64	15~20	2~3	古墳時代中期後半以降
	-2	28.69	5.17 × 2.7 以上	14.0 以上	N-3°-W	28~40	10~49	12~15	2~3	出雲 1 期新相
SI04	-1	28.93	2.2 × 2.2 以上	4.84 以上	N-2°-W	26~35	19~35	—	—	—
	-2	29.4	3.7 × 3.3 以上	12.28 以上	N-4°-E	25~36	33~67	5~18	2~4	出雲 1 期新相
SI05	-1	27.55	3.5 × 3.1 以上	10.85 以上	N-7°-W	36~42	4~64	5~8	2~4	古墳時代中期後半以降
	-2	—	3.13 × 3.0 以上	9.39 以上	N-7°-W	27~47	32~48	7~10	2~3	—
SI06	-1	28.25	5.78 × 4.68	27.05	N-5°-W	33~42	50~63	10~15	3~7	出雲 2 期
	-2	—	5.05 × 4.2	21.21	—	30~44	48~52	12~17	6~7	出雲 2 期
	-3	—	4.68 × 3.78	17.69	—	32~40	51~60	10~15	3~5	出雲 2 期
SI07	—	27.9	4.9 × 3.0 以上	14.7 以上	N-12°-E	31~43	24~55	12~17	2~3	出雲 1 期新相
SI08	—	27.85	5.0 × 5.35	26.75	N-17°-W	30~41	58~71	5~12	2~3	出雲 2 期
SI09	-1	27.94	3.95 × 3.5 以上	13.83 以上	東北	29~46	33~47	7	2	出雲 1 期新相
	-2	—	1.75 × 1.5 以上	2.63 以上	—	25~28	10~45	15	2~3	古墳時代中期後半以降 (出雲 3 期)
SI10	—	27.2	3.1 × 2.5 以上	7.75 以上	N-3°-E	20~36	6~36	7~15	2	—
SI11	—	27.05	2.5 × 2.35 以上	5.88 以上	N-35°-W	34~40	18~25	7~10	2~3	古墳時代中期後半以降

※ 建物跡の時期は床面から出土した土器の時期を記載している。() のなかは床面から出土した遺物がなく、床面近くの埋土から出土した土器の時期である。

の範疇におさまるものである。また、掘立柱建物跡についても SB03 以外は時期が判明していないが、遺構面上の堆積土の出土遺物をみると弥生時代や古墳時代中期後半以前の遺物がみられないことや古墳時代後期後半以降の遺物は数点のみであることから、竪穴建物跡と大差ない時期の建物跡と思われる。

古墳時代以降の古代の遺構は、調査区西側斜面に位置する加工段01のみである。遺構の残りが悪く、柱穴はあるものの建物の復元には至っていない。出土遺物から時期は8世紀代と考えられる。奥宇田瀬遺跡の西側谷部に位置する岩井手谷遺跡では古代から中世前半の遺構が確認されており、関連があるのかもしれない。

第2項 竪穴建物跡・掘立柱建物跡の様相

竪穴建物跡は11棟検出された。竪穴建物跡の平面形はいずれも方形を呈し、一辺3m～6.3mを測る。そのなかの SI06-1(玉作工房跡)が一番大きく、掘り方で南北6.3m、東西5.1mを測る。SI06-1については、第3項で整理して、若干の所見をのべる。

本遺跡の竪穴建物跡の特徴として挙げられるのは建て替えが多い点と仕切り溝が多い点が挙げられる。建て替えは11棟のうちの6棟で1回ないし2回の建て替えが確認されており、SI01・05・06・09では拡張されていることがわかる。

仕切り溝は、建て替えを含める18棟のうち8棟で検出している。壁際ビットを挟むもの(SI04-2・SI05-1)、壁際溝と主柱穴を繋いで存在するもの(SI06-1・SI02・SI03-1)、壁際溝と主柱穴以外の柱穴と繋がるもの(SI05-2・SI07)に分けられる。このような仕切り溝は、松江市東津田町の勝負遺跡や同市東出雲町の勝負遺跡で確認されているが、本遺跡のように多くみられる建物跡は少ないように思われる。

掘立柱建物跡は調査区中央より東側で4棟検出された。SB03はSI08・SI09と切り合い、SB03⇨SI09⇨SI08の新旧関係が認められたが、それ以外の掘立柱建物跡の新旧関係、竪穴建物跡との新旧関係はわからなかった。建物の主軸方位をみるとSB01とSB04は同じ方位を示しているため同時期に存在していた可能性は考えられる。

表19 掘立柱建物跡一覧表

遺構名	検出基準高(m)	規模				柱穴		時期
		桁行・梁行	桁行(m)	梁行(m)	主軸方位	径(cm)	深さ(cm)	
SB01	27.2～27.6	4間・2間	5.1・5.44	2.68・2.79	N-8°-W	16～30	12～57	—
SB02	27.5～27.62	2間以上・1間	3.01・3.44	1.60	N-2°-W	20～46	17～58	—
SB03	27.7～27.85	4間・2間	6.06	3.80	N-13°-W	15～30	10～45	古墳時代中期後半以降
SB04	27.6～27.95	2間・1間	4.2・4.32	2.60・2.66	N-6°-W	20～28	10～34	—

第3項 玉作工房跡(SI06-1)について

本項では、検出した玉作工房跡(SI06-1)について整理してみたい。SI06-1は調査の結果、水晶主体の工房跡と考えられる。SI06-2・3からも石材や滑石の白玉は出土しているものの量は少ないため、SI06-1が埋まる過程で混入したものと考えられる。また、SI07やSI08からも素材剥片や未成品が出土しているがこれは流れ込みによると考えられ、したがって玉作工房跡として機能していたのはSI06-1のみである。SI06-1の時期は出土した須恵器や高さの低い切子玉の時期から出雲2期、古墳時代後期前半と考えられる。

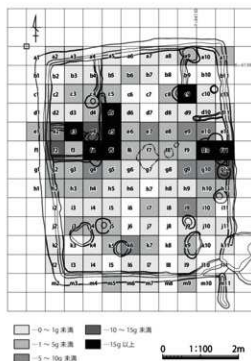
(1)工房跡の様相(第187図)

SI06-1は調査区中央の南側に位置している。玉作りが行われたのはSI06-1のみと考えられ、集落内の特定の場所に工房を設けている。SI06-2とSI06-3は普通の住居であり、玉作りを行うために一時的に建物を拡張している。床面の規模は南北5.78m、東西4.68m、床面積27.05㎡を測り、本遺跡の建物跡のなかでは最大である。建物の平面をみると北側の壁際溝や支柱穴の位置はあまり変わらずに南側に建物を拡張している。また、SI06-3からSI06-2への拡張はわずかであるのに対して、SI06-2からSI06-1へは南側に幅広く拡張しているため、工房としての作業スペースや機能面、そして工人の数などを考慮したものと思われる。

玉作関連遺物の出土状況を見ると床面中央付近に遺物が多いことがわかる。特に床面中央付近の東西端に多く、なかでも西側で多く出土している。西側では多くの剥片や円錐形剥片、接合資料が出土しており本工房における主たる作業場所と考えられる。円錐形剥片が多いことから最終工程である穿孔はこの場所で行っていたと思われる。東端は西側ほどではないが出土量は多く、未成品も出土しているため穿孔以前の工程を中心的に行う場所と考えられる。南側と北側は東西側に比べると出土量は希薄な傾向を示している。北側中央付近では特に少なく、南側では玉の作製途中のもののみみられるが素材や石核が出土している。このような遺物の出土量や出土状況からみると、工房の空間利用がある程度想定され、南側は玉作りの最初の段階の素材を作る場所、東側は穿孔までの段階、西側は調整から穿孔まで行う場所と考えられる。また、床面北側中央は出土量が少ないことや両側に仕切り溝があることから入り口が想定され、床面南側中央も希薄であるため床面中央は建物の入り口から奥へ向かう通路のような移動スペースと推測される。

(2)玉作関連遺物について

SI06-1から出土した石材の総重量は411.13gを量り、その75%を水晶が占めている。水晶の原石や素材剥片、切子玉や小玉の未成品や破損品、そして片面穿孔した際に生じる円錐形剥片が出土している。



第187図 SI06-1 石材出土状況図

水晶の未成品や破損品をみると平所技法により作られている。原石の上下端面を切除した後、必要に応じて縦分割をおこなって素材を作出し、調整剥離や敲打による整形をへて、鉄針で片面から孔を穿っている。出土したものをみると、原石の大きさにより最初から製作するものを決めているように思われ、小さい原石は調整剥離を最小限にとどめて敲打により整形を行っている。切子玉の未成品や小玉の破損品をみると丁寧に敲打を行っていることがわかり、失敗をしないように作っている様子が窺われる。切子玉は高さが低いもので、小さい切子玉はTK10 型式期から出現することがわかっており⁽⁷⁾、出土した須恵器の時期とも整合している。

SI06-1 で注目されるのは、円錐形剥片が26点出土していることである。うち25個が水晶である。水晶の円錐形剥片の径には大小があり、径が7～8mmを測る大きいものが4点、それ以外のやや小さいものが21点みられる。この計測した径によりある程度の製品の種類や個数が想定されるかもしれない。愛媛県の四ツ手山古墳から出土した連のように水晶のみで構成されるものもあり、SI06-1 が水晶のみに特化した工房跡と考えられるためそのような連を作っていた可能性は考えられる。

円錐形剥片のなかに1点、碧玉のものがみられる⁽⁴⁾。この1点が検出されたことにより、工房で碧玉の製品が作られたことは確かであるが、1点のみであることや碧玉の出土量が3g程度しかないことからすると、碧玉製品は水晶製品を製作する以前に1回ないし短期間しか作られていないように思われる。

滑石は、原石を施溝分割して素材を作出し、穿孔を行った後に研磨する方法で製作している。施溝途中のものから白玉や小玉の製品までが出土しており、水晶と同様に一連の製作工程がわかる。

一方、瑪瑙は総重量でみると水晶に次いで多くみられるが、原石・未成品・破損品はなく、剥片やチップが数点出土ただけであり現状で瑪瑙製品の製作を行っていたとは言い難い。

このような状況を整理すると、SI06-1 では碧玉製品を工房の前段階で作製して、その後、水晶を主体として滑石も同時に作製していると思われる。出土量が少ないことは、水晶が敲打による調整が主体であることは考えられるが、総重量からすると1回の発注や一時期の生産で終えているようなあり方で短期間の工房跡といえる。松江市乃木福富町に所在する福富1遺跡⁽⁵⁾や安来市の大原遺跡⁽⁶⁾のようにひとつの工房跡から10kg以上の石材が出土するとフルタイムで長期間生産が行われていたといえるが、10kg以下では一時期、特定の発注に伴う生産といえる⁽⁷⁾。SI06-1 の場合、出土量が少ないことや2つの石材のみの生産を行っている可能性が高く、ひとつの工房で生産から流通まで完結していると考えられる。

第4項 結語

奥宇田瀬遺跡では古墳時代中期後半から後期前半の集落跡が検出された。本遺跡周辺の集落跡をみると、本遺跡の北側、東津田町に石台遺跡と勝負遺跡が所在している。石台遺跡では弥生時代前期以降、中期～後期初頭を中心として建物が造られ、勝負遺跡ではそれ以降に弥生時代後期前半から古墳時代中期までの建物跡が確認されている。また、東出雲町の勝負遺跡では古墳時代前期から奈良・平安時代までの建物跡が検出されているが、古墳時代後期前葉の遺構は竪穴建物跡1棟、掘立柱建

物跡1棟だけで、遺存状態が悪いため詳細は不明である。このように周辺の集落遺跡の状況をみると、弥生時代や古墳時代前期から中期、古墳時代後期後半の建物跡はみられるものの、古墳時代後期前半の集落跡の調査例は少ないように思われる。奥宇田瀬遺跡は、斜面に位置する小さな集落であるが、今回の調査成果は集落跡が希薄な古墳時代後期前半の時期に一例を加えることができたと思われる。

また、意宇平野周辺において水晶主体の工房跡が検出されたことは、平所遺跡以来の発見であり注目される。SIO6-1は⁽⁸⁾時期的には古墳時代後期の範疇に属するが、古墳時代後期の玉作遺跡として代表される⁽⁹⁾堂床遺跡や面白谷遺跡のような複数の工房跡を配置して作業するような大規模の工房ではなく、集落内の特定の建物に設置された工房跡である。工房のあり方としては古墳時代中期前半の工房跡である東出雲町の勝負遺跡 SIO7 とよく似ているように思われる。SIO6-1は花仙山周辺に玉作りの工房が集約されるまでの工房なのかもしれない。

今回の調査成果は、意宇平野周辺における集落跡や出雲地方の玉作りの様相を知る一例になり得たと思われる。今後の調査事例の増加により、当該地周辺の動向がより一層明らかになることを期待したい。

註

- (1) 長砂8号墳から出土した鉄鏝は、鏝身部が三角形を呈する尖根式両刃である。刃長2.4cm、莖長13.7cmを測る。
- (2) 岡山県古代古墳文化財センター 米田克彦氏のご教示による。
- (3) 愛媛県の四ツ手山古墳から出土した連は、1点の瑪瑙製丸玉をのぞき、他はすべて水晶製の玉で構成されている。
- (4) SIO6-1から出土した碧玉の内輪形彫片が、同じ丘陵に位置し、同時期と思われる南外5号墳から出土した碧玉の勾玉に伴う可能性が考えられた。そのため、この2点をデジタルスコープで計測して形状の観察を行ったところ、別の個体であることが判明した。よって、奥宇田瀬遺跡で製作された碧玉の製品は他のところへ供給されたものと思われる。
- (5) 福富1遺跡は松江市乃木福富町に所在する。加工段01～05において、5世紀末～6世紀初頭に玉作りが行われている。出土した碧玉・瑪瑙・水晶・滑石の総重量は30kgを超える。
- (6) 大原遺跡は島根県安来市に所在する。遺跡からは2棟の玉作工房跡が検出された。1棟(SIO1)は古墳時代中期前半、もう1棟(SIO2)は古墳時代中期後半である。SIO2では碧玉や瑪瑙が約11.8kg出土している。
- (7) 岡山県古代古墳文化財センター 米田克彦氏のご教示による。
- (8) 堂床遺跡は花仙山周辺における大規模な玉生産遺跡である。古墳時代中期後半から後期末の工房跡が、のべ20軒確認され、水晶・瑪瑙・碧玉・滑石の石材を使用して生産を行っている。
- (9) 面白谷遺跡は花仙山周辺における集落跡である。古墳時代中期と後期の玉作工房跡が各1棟確認されている。工房跡の件数は少ないが、遺跡全体から出土した石材の総重量は240kgにもおよび、周辺に多くの工房跡の存在が窺われている。

参考文献

- 建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会 1997 『福富1遺跡・屋形1号墳』
 建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会 1994 『白コクリ遺跡・大原遺跡』
 建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会 1998 『勝負遺跡・堂床古墳』
 建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会 1992 『一般国道9号松江道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ(勝負遺跡)』
 建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会 1989 『国道9号線バイパス建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ(石台遺跡)』
 公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センター 1984 『四ツ手山古墳』『四国縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』
 島根県教育委員会 2006 『面白谷遺跡』『県道浜乃木湯町線(湯町区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 島根県立古代出雲歴史博物館 2009 『輝く出雲ブランド 古代出雲の玉作り』
 島根県教育委員会 2007 『南外古墳群・勝負遺跡』
 日本道路公団中国支社 島根県教育委員会 2001 『堂床遺跡』
 松江市教育委員会 1983 『長砂古墳群』
 『松江圏都市計画事業乃木土地画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』

土器観察表(1)

通物 番号	通物名	種類	器種・部位	寸法 (cm)			調整・文様の特徴			色調	備考
				口徑 受部径	底径	器高	調整・手法	焼成			
117-1	試掘	土師器	高杯	(16.3)	—	(4.0)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ハケメ、ヨコナデ	普通	褐色	古墳時代中期後半	
117-2	試掘	土師器	甗	(26.5)	—	(8.0)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	普通	暗褐色		
117-3	試掘	須恵器	甗	(18.7)	—	(5.1)	外 内 タタキ形、回転ナデ コテ具、回転ナデ	良好	灰色		
117-4	試掘	須恵器	蓋	—	—	(1.1)	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	やや不良	灰色	出雲国府編第2型式、7世紀末葉～8世紀第1期(新相)	
123-1	SI01-1	土師器	直口甗	(8.4)	—	(15.2)	外 内 ナデ、ハケメ ナデ、ヘラケズリ	普通	褐色	古墳時代中期後半	
123-2	SI01-1	土師器	甗	—	—	(6.0)	外 内 ナデ ヘラケズリ、ハケメ	普通	黄褐色	外面に線刻あり	
123-3	SI01-1	土師器	甗	(16.3)	—	(4.0)	外 内 ナデ ハケメ、ナデ	良好	黄褐色	古墳時代中期後半以降 卑続口縁	
123-4	SI01-1	土師器	甗	(17.0)	—	(5.7)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	良好	黄褐色	古墳時代中期後半以降 卑続口縁	
123-5	SI01-1	土師器	甗	(17.6)	—	(5.8)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ、ハケメ	普通	黄褐色	古墳時代中期後半以降 卑続口縁	
123-6	SI01-1	須恵器	無蓋高杯	(12.6)	—	(3.3)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	不良	灰白色	出雲1期(新相)	
123-7	SI01-1	須恵器	小型の甗	—	4.6	(2.8)	外 内 ハケメ ナデ	不良	浅黄色	円孔あり	
126-1	SI02	土師器	脚付の杯	—	(7.8)	(3.1)	外 内 風化 風化	不良	褐色		
126-2	SI02	土師器	脚付の杯か高杯	—	—	(5.2)	外 内 ハケメ、ナデ ハケメ、ナデ	良好	褐色		
126-3	SI02	土師器	高杯	—	—	(8.0)	外 内 ヘラミガキ、井垣の痕跡 しぼり堀、ナデ	普通	橙褐色	外面の一部に井垣の痕跡	
126-4	SI02	土師器	甗	17.4	—	(6.8)	外 内 ハケメ ハケメ、ヘラケズリ	普通	にぶい褐色	古墳時代後期以降 卑続口縁	
126-5	SI02	土師器	甗	17.0	—	(6.1)	外 内 ハケメ ハケメ、ヘラケズリ、ナデ	普通	にぶい褐色	古墳時代後期以降 卑続口縁	
126-6	SI02	土師器	甗	16.0	—	(7.0)	外 内 ハケメ、ナデ ハケメ、ヘラケズリ、ナデ	普通	にぶい褐色	古墳時代後期以降 卑続口縁	
126-7	SI02	土師器	甗	—	—	(6.8)	外 内 ハケメ ハケメ、ヘラケズリ	普通	浅黄褐色	古墳時代後期以降	
126-8	SI02	土師器	甗	—	—	(10.8)	外 内 ハケメ ヘラケズリ 把手、面掘上縁	良好	褐色		
126-9	SI02	須恵器	环蓋	(13.6)	—	5.2	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	焼ききりこみ 出雲1期(新相)	
126-10	SI02	須恵器	环蓋	—	—	(2.3)	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 風化	不良	灰色	出雲1期(新相)	
126-11	SI02	須恵器	环蓋	(14.4)	—	(4.8)	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲2期	
126-12	SI02	須恵器	高杯	—	(10.4)	(4.5)	外 内 カキメ、回転ナデ 回転ナデ	普通	灰色	出雲1期(新相)	
128-1	SI03-1	土師器	甗	(15.8)	—	(4.0)	外 内 ハケメ ヘラケズリ	普通	にぶい黄褐色	古墳時代中期後半以降 卑続口縁	
128-2	SI03-1	土師器	甗	(15.8)	—	(4.4)	外 内 ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	普通	浅黄褐色	古墳時代中期後半以降 卑続口縁	
128-3	SI03-1	須恵器	环蓋	—	—	(1.5)	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	古墳時代中期後半以降	
130-1	SI03-2	須恵器	环蓋	(12.2)	—	(4.5)	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ	不良	灰色	出雲1期(新相)	
133-1	SI04-2	土師器	甗	—	—	(5.5)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ハケメ、ヘラケズリ	普通	褐色	古墳時代中期後半以降 卑続口縁	
133-2	SI04-2	土師器	甗	—	—	(6.4)	外 内 ハケメ ヘラケズリ	普通	にぶい黄褐色	古墳時代中期後半以降	
133-3	SI04-2	須恵器	环身	—	—	(1.7)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲1期(新相)	
133-4	SI04-2	須恵器	环身	12.0 [13.6]	—	(4.9)	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ	普通	灰色	出雲1期(新相)	
133-5	SI04-2	須恵器	無蓋高杯	(14.4)	—	(3.5)	外 内 回転ナデ、波状文 回転ナデ	良好	灰～黒色	出雲1期(新相)	
135-1	SI05-1	土師器	高杯	—	—	(2.5)	外 内 ハケメ ハケメ	普通	褐色	古墳時代中期後半以降	
135-2	SI05-1	土師器	甗	(19.0)	—	(4.7)	外 内 ハケメ、ナデ ハケメ、ヘラケズリ、ナデ	良好	褐色	古墳時代中期後半以降 卑続口縁	
135-3	SI05-1	土師器	甗	(17.0)	—	(3.7)	外 内 ヨコナデ ハケメ	良好	にぶい褐色	古墳時代中期後半以降 卑続口縁	
135-4	SI05-1	土師器	甗	—	—	(8.3)	外 内 ハケメ、ナデ ヘラケズリ、ナデ	良好	明黄褐色	古墳時代中期後半以降	
140-1	SI06-1	土師器	高杯	—	—	(3.5)	外 内 ハケメ ハケメ	普通	褐色	古墳時代後期以降	
140-2	SI06-1	土師器	高杯	—	—	(5.0)	外 内 ヘラミガキ	普通	橙褐色	古墳時代後期以降	

土器観察表 (2)

遺物番号	遺物名	種類	器種・部位	寸法 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口径 受口径	底径	器高	調整・手法	焼成		
140-3	S106-1	土師器	甕	(15.6)	—	(4.4)	外内 ココナデ ハケメ、ヘラケズリ	普通	淡黄色	古墳時代後期以降 卑純口縁
140-4	S106-1	土師器	甕	—	—	(4.4)	外内 ハケメ、ココナデ ヘラケズリ	普通	淡黄色	古墳時代後期以降 卑純口縁
140-5	S106-1	土師器	甕	(16.4)	—	(6.4)	外内 ハケメ、ココナデ ヘラケズリ、指通直痕	普通	浅黄褐色	古墳時代後期以降 卑純口縁
140-6	S106-1	土師器	甕	(17.4)	—	(4.5)	外内 ハケメ後ナデ ヘラケズリ、ハケメ	普通	褐色	古墳時代後期以降 卑純口縁
140-7	S106-1	土師器	甕	(17.6)	—	(5.4)	外内 ハケメ後ココナデ ヘラケズリ、ハケメ、ココナデ	普通	黄褐色	古墳時代後期以降 卑純口縁
140-8	S106-1	土師器	甕	(20.4)	—	(6.5)	外内 ハケメ ヘラケズリ、ハケメ	良好	にぶい褐色	古墳時代後期以降 卑純口縁
140-9	S106-1	土師器	甕	(15.6)	—	(3.6)	外内 ハケメ後ナデ ハケメ	良好	黄灰色	古墳時代後期以降 卑純口縁
140-10	S106-1	土師器	甕	—	—	(9.9)	外内 ハケメ ヘラケズリ	不良	褐色	
140-11	S106-1	土師器	鉢	—	(12.7)	(5.7)	外内 ハケメ ハケメ	普通	黄灰色	
140-12	S106-1	土師器	甕	—	—	(4.6)	外内 ハケメ ハケメ、指通直痕	普通	灰黄褐色	
140-13	S106-1	土師器	甕の把手	長さ 3.0 / 幅 5.2 / 厚さ 3.0	—	—	外 指通直痕	普通	黄褐色	
141-1	S106-1	甕蓋器	環蓋	(13.4)	—	(4.1)	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ	やや不良	灰色	出雲 1 期 (新組) ~ 2 期
141-2	S106-1	甕蓋器	環蓋	(12.2)	—	(4.3)	外内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲 2 期
141-3	S106-1	甕蓋器	環蓋	—	—	(4.0)	外内 風化 風化 回転ナデ	不良	黄褐色	出雲 1 期 (新組) ~ 2 期
141-4	S106-1	甕蓋器	環蓋	(15.6)	—	(3.6)	外内 回転ナデ 回転ナデ	不良	灰色	出雲 2 期
141-5	S106-1	甕蓋器	環蓋	—	—	(4.0)	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	不良	淡灰色	出雲 1 期 (新組) ~ 2 期
141-6	S106-1	甕蓋器	環蓋	—	—	(3.2)	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲 1 期 (新組) ~ 2 期
141-7	S106-1	甕蓋器	環身	11.2 ~ 11.6 [13.4 ~ 13.8]	—	5.7	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	焼きあてで変形している 出雲 1 期 (新組) ~ 2 期
141-8	S106-1	甕蓋器	環身	11.0 [13.4]	—	(3.5)	外内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲 1 期 (新組) ~ 2 期
141-9	S106-1	甕蓋器	環身	11.2 [13.2]	—	(3.0)	外内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲 1 期 (新組)
141-10	S106-1	甕蓋器	環身	12.1 [14.2]	—	5.2	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色~黒褐色	出雲 1 期 (新組) ~ 2 期
141-11	S106-1	甕蓋器	環身	— [14.0]	—	(3.9)	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	焼きあて、底部外面に粘土が 焼きあがった痕跡 出雲 2 期
141-12	S106-1	甕蓋器	環身	— [14.9]	—	(3.9)	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ	不良	灰色	出雲 2 期か
141-13	S106-1	甕蓋器	高環	—	—	(2.6)	外内 風化 風化 回転ナデ	不良	淡黄灰色	
141-14	S106-1	甕蓋器	高環	—	(8.8)	(2.7)	外内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲 1 期 (新組)
141-15	S106-1	甕蓋器	把手付の甕	—	6.6	(6.9)	外内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 皮文 回転ナデ	良好	灰~褐色	把手は破損している 底部外面に粘土が 焼きあがった痕跡あり 底部に打ちこんだ孔あり
152-1	S106-2	土師器	甕	—	—	(2.6)	外 ハケメ	普通	褐色	
152-2	S106-2	甕蓋器	環身	—	—	(1.4)	外内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	古墳時代中期後半以降
154-1	S106-3	土師器	甕	—	—	(4.2)	外内 ハケメ ヘラケズリ	普通	浅黄褐色	
154-2	S106-3	甕蓋器	環蓋	(12.5)	—	(3.9)	外内 回転ナデ 回転ナデ、回転ヘラケズリ	普通	灰色	出雲 2 期
156-1	S107	土師器	杯	(13.6)	—	(3.5)	外内 ココナデ、手持ちのヘラケズリ ココナデ	普通	褐色	古墳時代中期末~後期前半
156-2	S107	土師器	高環	(17.5)	—	(7.5)	外内 ハケメ、ナデ ハケメ、ナデ	良好	褐色	古墳時代中期末~後期前半
156-3	S107	土師器	甕の把手	長さ 5.4 / 幅 4.9 / 厚さ 3.6	—	—	外 ハケメ	良好	黄褐色	
156-4	S107	甕蓋器	環蓋	(13.1)	—	4.5	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲 1 期 (中組)
156-5	S107	甕蓋器	高環	(13.5)	—	(5.1)	外内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ	普通	灰色	出雲 1 期 (新組)
156-6	S107	甕蓋器	甕	—	—	(23.8)	外内 タタキ痕 三つ耳痕	良好	灰色	
158-1	S108	土師器	甕	(14.0)	—	(4.4)	外内 ハケメ、ヘラケズリ ココナデ、ハケメ	良好	褐色	古墳時代中期後半以降 卑純口縁

土器観察表(3)

通物 番号	通物名	種類	形状・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
				口徑 受部径	底径	器高	調整・手法	焼成		
158-2	S108	土師器	甕	(14.3)	—	(4.8)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ハケメ、ヘラケズリ	良好	褐色	古墳時代後期以降 卑続口縁
158-3	S108	土師器	甕	(12.6)	—	(4.8)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ハケメ、ヘラケズリ、微細注道	良好	灰褐色	古墳時代後期以降 卑続口縁
158-4	S108	土師器	甕	(15.5)	—	(5.0)	外 内 ハケメ、ナデ ナデ、ヘラケズリ	普通	明黄褐色	古墳時代後期以降 卑続口縁
158-5	S108	土師器	甕	(17.8)	—	(5.4)	外 内 ハケメ ハケメ	良好	灰黄褐色	古墳時代後期以降 卑続口縁
158-6	S108	土師器	甕	(23.4)	—	(11.4)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ハケメ、ヘラケズリ	普通	淡黄色	古墳時代後期以降 卑続口縁
158-7	S108	土師器	鉢	(19.7)	—	(12.3)	外 内 ハケメ ハケメ	普通	淡黄色	
158-8	S108	土師器	鉢	(20.0)	(7.9)	10.0	外 内 ハケメ、ナデ ハケメ、ヘラケズリ、ナデ	普通	淡黄色	
158-9	S108	須恵器	坏蓋	(13.6)	—	5.0	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	出雲2期
158-10	S108	須恵器	坏蓋	(13.0)	—	5.0	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲2期
158-11	S108	須恵器	坏蓋	(13.2)	—	5.3	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	不良	浅黄色	出雲2期
158-12	S108	須恵器	坏蓋	14.2	—	4.7	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	出雲2期
158-13	S108	須恵器	坏蓋	(14.8)	—	5.3	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲2期
158-14	S108	須恵器	坏身	(11.6) (14.0)	—	4.9	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲2期
158-15	S108	須恵器	坏身	— (14.2)	—	(4.6)	外 内 回転ヘラケズリ、回転ナデ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲2期
158-16	S108	須恵器	坏身	(10.7) (13.2)	—	(3.2)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	普通	灰色	出雲4期
158-17	S108	須恵器	高坏	—	(9.0)	(1.7)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲1期(新相)
158-18	S108	須恵器	甕	—	3.0	(8.5)	外 内 回転ヘラケズリ、しぼり瓶、 回転ナデ、凹線、刺突文 回転ナデ、しぼり瓶	良好	灰色	出雲4期(A5型)
158-19	S108	須恵器	甕	—	—	(6.3)	外 内 タタキ瓶 当て具類	不良	灰色	
161-1	S109-1	土師器	蓋か坏	10.7	—	(2.5)	外 内 ヘラケズリ ナデ	普通	明赤褐色	
161-2	S109-1	土師器	甕	(18.8)	—	(4.6)	外 内 風化 ヘラケズリ、風化	普通	淡黄褐色	古墳時代中期 複合口縁が退化
161-3	S109-1	土師器	甕	(14.8)	—	(5.5)	外 内 ヨコナデ、ハケメ 風化	不良	淡黄色	古墳時代中期 複合口縁が退化
161-4	S109-1	土師器	甕	(18.4)	—	(6.3)	外 内 ヨコナデ、風化 ヨコナデ、ヘラケズリ	普通	黄褐色	古墳時代中期後半 卑続口縁
161-5	S109-1	土師器	甕	(15.5)	—	(6.1)	外 内 ヨコナデ、ハケメ ハケメ、ヘラケズリ、ヨコナデ	良好	黒～浅黄褐色	古墳時代中期後半 卑続口縁
161-6	S109-1	土師器	甕	(19.0)	—	(6.6)	外 内 ヨコナデ、ハケメ、風化 ヘラケズリ、風化	普通	浅黄褐色	古墳時代中期後半 卑続口縁
161-7	S109-1	土師器	製塩土器	—	—	(2.3)	外 内 垂直注道 垂直注道	普通	褐色	
161-8	S109-1	土師器	甕	—	—	(6.0)	外 内 ハケメ 垂直注道	普通	浅黄褐色	
161-9	S109-1	須恵器	坏蓋	(12.6)	—	5.2	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	出雲1期(新相)
161-10	S109-1	須恵器	坏蓋	(12.4)	—	(3.4)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲1期(新相)
161-11	S109-1	須恵器	無蓋高坏	(12.0)	—	(4.1)	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲1期(新相)
163-1	S109-2	土師器	甕	—	—	(3.8)	外 内 風化 風化	普通	にぶい黄褐色	古墳時代中期後半以降
163-2	S109-2	土師器	甕	—	—	(2.1)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ハケメ	普通	褐色	古墳時代中期後半以降
165-1	S110	土師器	甕	—	—	(3.7)	外 内 ハケメ 風化	普通	褐色	
165-2	S110	須恵器	坏蓋	(13.2)	—	4.4	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲3期
167-1	S111	土師器	甕	(16.8)	—	(3.3)	外 内 ヨコナデ ヨコナデ	普通	淡黄色	古墳時代中期後半以降
167-2	S111	土師器	甕	—	—	(4.2)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ	良好	にぶい黄褐色	
169-1	S101	土師器	甕	—	—	(3.7)	外 内 ハケメ ハケメ	良好	淡黄褐色	
172-1	S103	土師器	甕	—	—	(4.6)	外 内 ハケメ 風化	良好	暗褐色	
176-1	SA02	土師器	甕	—	—	(3.6)	外 内 ハケメ ヘラケズリ	良好	暗褐色	

土器観察表 (4)

遺物番号	遺物名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴			色調	備考
				口径 実径	底径	器高	調整・手法	焼成			
178-1	加工段 01	土師器	甕	(19.0)	—	(7.8)	外 内 ハケメ ヘラケズリ	良好	黒褐色	古墳時代後期	
178-2	加工段 01	須臾器	無高台杯	—	(7.0)	(3.5)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰褐色	出雲国府編年第 4 型式 8 世紀第 3 四半期内面～ 第 4 四半期	
178-3	加工段 01	須臾器	無高台皿	(13.6)	(9.9)	2.3	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲国府編年第 4 型式 8 世紀第 3 四半期内面～ 第 4 四半期	
178-4	加工段 01	須臾器	無高台皿	(14.2)	8.6	2.9	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	出雲国府編年第 4 型式 8 世紀第 3 四半期内面～ 第 4 四半期	
178-5	加工段 01	須臾器	高台付皿	(18.2)	12.4	3.7	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲国府編年第 4 型式 8 世紀第 3 四半期内面 第 4 四半期	
178-6	加工段 01	須臾器	高台付皿	(18.2)	11.6	3.4	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰褐色	出雲国府編年第 5 型式 8 世紀末～9 世紀前期	
178-7	加工段 01	須臾器	短頸壺	19.6	11.3	12.2	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	普通	暗赤灰色	出雲国府編年第 5 型式 8 世紀末～9 世紀前期	
178-8	加工段 01	須臾器	甕	(14.8)	—	(8.9)	外 内 タタキ痕 当て具痕	良好	灰色		
184-1	SK02	土師器	高杯	13.8	9.1	12.1	外 内 ハケメ、ヨコナデ、しぼり痕 ハケメ、ヨコナデ、しぼり痕	良好	褐色	古墳時代中期後半	
184-2	SK05	土師器	脚付の杯	—	6.6	(4.5)	外 内 風化 風化	良好	褐色		
184-3	SK04	土師器	鉢	12.6	—	6.8	外 内 ハケメ ハケメ、ナデ	普通	黄褐色	古墳時代中期後半	
184-4	SK04	土師器	甕	(13.0)	—	(11.4)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ハケメ、ヘラケズリ、ナデ	普通	黄褐色	古墳時代中期後半	
184-5	SK03	土師器	甕	—	—	(3.2)	外 内 ヨコナデ、風化 ヘラケズリ、ヨコナデ	良好	黄褐色	古墳時代	
184-6	SK10	土師器	甕	—	—	(2.5)	外 内 ヨコナデ、ハケメ ヘラケズリ、ヨコナデ	良好	淡灰色	古墳時代	
184-7	SK05	須臾器	環蓋	—	—	(2.0)	外 内 回転ヘラケズリ 回転ナデ	良好	暗灰色	古墳時代中期後半以降	
184-8	SK06	須臾器	環蓋	—	—	(1.4)	外 内 回転ナデ、沈線 回転ナデ	良好	灰色	古墳時代中期後半以降	
185-1	E7 区 地山直上	土師器	高杯	—	—	(3.2)	外 内 ハケメ しぼり痕、ハケメ	良好	褐色	古墳時代中期後半以降	
185-2	D6 区 地山直上	土師器	高杯	—	—	(3.4)	外 内 風化 風化	普通	褐色	古墳時代中期後半以降	
185-3	D6 区 地山直上	土師器	高杯	—	—	(3.4)	外 内 ハケメ 風化	普通	褐色	古墳時代中期後半以降	
185-4	B6 区 B-B4 層 灰褐色土	土師器	杯	—	7.6	(3.4)	外 内 ナデ、ヨコナデ ナデ、ハケメ	良好	褐色	古墳時代中期後半以降	
185-5	D4 区 A-A4 層	土師器	杯	—	8.0	(4.0)	外 内 風化 風化	良好	褐色	古墳時代中期後半以降	
185-6	C3 区 A-A12 層 暗灰色土	土師器	甕	(18.7)	—	(4.0)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ハケメ、ヨコナデ	良好	褐色	古墳時代後期以降	
185-7	C3 区 A-A12 層 暗灰色土	土師器	甕	(24.3)	—	(4.0)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ	普通	褐色	古墳時代後期以降	
185-8	D4 区 地山直上	須臾器	環蓋	(13.6)	—	(4.2)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	灰色	出雲 2 期	
185-9	B3 区 B-B4 層 灰色粘質土	須臾器	環蓋	(13.0)	—	4.1	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲 3 期	
185-10	E7 区 地山直上	須臾器	杯身	(13.0)	(4.5)	6.0	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲 1 期 (新相)	
185-11	A9 区 B-B20 層 にぶい黄灰色土	須臾器	杯身	(12.0)	(14.0)	—	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲 1 期 (新相)	
185-12	D8 区 地山直上	須臾器	杯身	(11.1)	(13.2)	—	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲 1 期 (新相)	
185-13	F7 区 地山直上	須臾器	杯身	(10.8)	(13.2)	—	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲 2 期	
185-14	B7 区 B-B4 層 (S307 検出地)	須臾器	杯身	(11.2)	(13.6)	(5.6)	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	底部に火ぶくれあり 出雲 2 期	
185-15	C3 区 A-A12 層 暗灰色土	須臾器	甕	(11.3)	—	(4.3)	外 内 回転ナデ、波状文 回転ナデ	良好	黒褐色	出雲 2 期	
185-16	C3 区 A-A12 層 暗灰色土	須臾器	甕	—	—	(3.9)	外 内 回転ナデ、波状文、カキメ 径 1cm 程度の孔	良好	灰色	出雲 2 期	
185-17	E4 区 地山直上	須臾器	高杯	—	(11.0)	(1.8)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	やや不良	灰色	古墳時代後期以降	
185-18	B7 区 B-B4 層 直上	須臾器	蓋	—	—	(2.4)	外 内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第 1 型式 7 世紀後葉	

土器観察表(5)

通物 番号	通物名	種類	器種・部位	寸法 (cm)			調整・文様の特徴			色調	備考
				口徑 受口径	底径	器高	調整・手法		焼成		
185-19	B2区 A-A8 割 黒褐色土	須臾器	蓋	(15.1)	—	2.7	外内 回転ナデ、回転ヘラケズリ 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	出雲国府編年第2型式 7c末葉～8c第1四半期	
185-20	C3区 A-A12 割 灰褐色土	須臾器	無蓋台杯	(10.8)	(7.0)	5.5	外内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	不良	灰色	出雲国府編年第4～5型式 8c第3四半期～第4四半期 ～8世紀末～9世紀初葉	
185-21	C3区 A-A10 割 灰褐色土	須臾器	無蓋台杯	(11.0)	(8.0)	3.9	外内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第4型式 8c第3四半期～第4四半期	
185-22	C3区 A-A12 割 灰褐色土	須臾器	高台付盥	(19.4)	(14.0)	3.9	外内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	不良好	灰色	出雲国府編年第4型式 8c第3四半期～第4四半期	
185-23	C3区 A-A10 割 灰褐色土	須臾器	短頸甕	(16.6)	—	(8.7)	内 回転ナデ	不良	灰色	出雲国府編年第4型式 8c第3四半期～第4四半期	
185-24	C3区 A-A12 割 灰褐色土	須臾器	甕	(18.2)	—	(6.4)	外内 回転ナデ、タタキ紐 回転ナデ、当て具痕	良好	灰色	古墳時代後期以降	

石製品観察表(1)

通物番号	通物名	種類	石材	寸法 (mm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
123-8	SI01-1	台石の破損品	—	(143)	210	110	2900	平分以上が欠損している。中央付近に縦打痕あり
126-13	SI02	砥石の破損品	凝灰岩	(50)	40	18	41.7	擦痕あり
126-14	SI02	砥石の破損品	凝灰岩	(68)	68	54	305	各面に擦痕あり
126-15	SI02	削片	碧玉	28	23	10	6.79	素材削片
126-16	SI02	台石	—	166	215	70	3830	中央部凹面状窪み。放射状に多数の擦痕
140-14	SI06-1	石鏝	黒曜石	(22.5)	(11.5)	4.0	0.72	凹面無蓋式、一部欠損
145-1	SI06-1	磨石	水晶	27.02	10.68	8.78	3.89	丸玉の素材
145-2	SI06-1	磨石	水晶	18.82	9.88	8.27	2.66	丸玉の素材
145-3	SI06-1	石核	水晶	31.08	22.81	16.65	14.82	素材が2個取れる大きさ
145-4	SI06-1	素材	水晶	39.35	18.08	9.99	10.78	上下端面を打ち欠き、上面に調整刻線を、下面に縦打を施す
145-5	SI06-1	素材	水晶	23.88	13.14	6.11	2.8	石核を縦割りにした素材
145-6	SI06-1	素材	水晶	24.36	12.37	11.90	4.27	縦割りにした素材で、縦打や調整刻線を始めている
145-7	SI06-1	素材または石核	水晶	34.07	22.8	15.57	13.85	切子玉の調整刻線の段階だが、丸玉なら2個取れる大きさがあるためその場合は石核となる
145-8	SI06-1	素材	水晶	22.24	16.10	9.81	4.37	丸玉の素材
145-9	SI06-1	丸玉の素材	水晶	21.07	12.28	9.90	4.23	下端面を打ち欠き、上端は切端せずに縦打を始めている
145-10	SI06-1	丸玉の素材	水晶	15.32	11.53	9.06	2.15	原石が小さいため、上下端面を打ち欠いた後、調整刻線を始めている 縦打はしていない
145-11	SI06-1	丸玉の破損品	水晶	15.64	11.81	9.87	2.37	調整刻線の段階で縦打し始めたが壊れたもの
145-12	SI06-1	丸玉の破損品	水晶 孔径2.99	10.03	11.94	8.61	1.36	縦打後、穿孔途中で破損したもの 片面穿孔
145-13	SI06-1	切子玉の未成品	水晶	13.02	14.53	16.49	3.93	全面に縦打をしている
145-14	SI06-1	丸玉または 磨石玉の破損品	水晶 孔径2.66	13.42	14.07	9.12	2.44	全面を縦打している 穿孔後に破損している
145-15	SI06-1	調整削片	水晶	18.62	9.91	6.92	1.16	
145-16	SI06-1	調整削片	水晶	18.82	12.19	6.77	1.26	
145-17	SI06-1	調整削片	水晶	18.48	11.86	4.73	1.08	
145-18	SI06-1	調整削片	水晶	12.66	9.01	4.89	0.7	
145-19	SI06-1	丸玉の破損品	水晶	12.27	17.73	9.14	2.15	145-20と結合 側面に調整刻線を施し、上端面に縦打を行っている
145-20	SI06-1	丸玉の破損品	水晶	17.95	13.02	7.85	2.27	145-19と結合 側面に調整刻線を施し、上端面に縦打を行っている

石製品観察表(2)

遺物番号	遺物名	種類	石材	寸法(mm)			重量(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
146-1	S106-1	円盤形割片	水晶	径 4.83 × 3.65/厚さ 0.93/孔径 1.48 × 1.42			0.01	背面に敲打痕
146-2	S106-1	円盤形割片	水晶	径 6.86 × 5.23/厚さ 1.42/孔径 2.29 × 2.14			0.03	背面に敲打痕、擦痕あり
146-3	S106-1	円盤形割片	水晶	径 7.28 × 7.47/厚さ 2.41/孔径 1.87 × 1.71			0.03	背面に敲打痕
146-4	S106-1	円盤形割片	水晶	径 8.14 × 6.14/厚さ 2.58/孔径 0.65 × 0.58			0.08	背面に敲打痕
146-5	S106-1	円盤形割片	水晶	径 7.94 × 7.33/厚さ 2.05/孔径 2.00 × 2.31			0.08	鉄心の先がふれている、背面に敲打痕
146-6	S106-1	円盤形割片	水晶	径 7.17 × 7.25/厚さ 1.49/孔径 2.35 × 2.09			0.05	背面に敲打痕
146-7	S106-1	円盤形割片	碧玉	径 6.62 × 6.59/厚さ 1.54/孔径 1.20			0.05	擦痕あり
147-1	S106-1	小玉	滑石	φ 4.85/厚さ 4.05/孔径 1.88			0.11	一部欠損
147-2	S106-1	小玉	滑石	φ 4.25/厚さ 2.98/孔径 1.64			0.08	
147-3	S106-1	白玉	滑石	φ 4.00/厚さ 2.38/孔径 1.62			0.06	
147-4	S106-1	白玉	滑石	φ 4.25/厚さ 2.19/孔径 1.54			0.07	
147-5	S106-1	白玉	滑石	φ 6.46/厚さ 1.03/孔径 2.59			0.05	
147-6	S106-1	白玉	滑石	φ 6.79/厚さ 2.60/孔径 1.80			0.16	
147-7	S106-1	白玉の破損品	滑石	φ 6.63/厚さ 3.50/孔径 1.76			0.17	一部欠損、研磨痕あり
147-8	S106-1	白玉	滑石	φ 6.51/厚さ 3.32/孔径 1.62			0.18	研磨痕あり
147-9	S106-1	小玉の破損品	滑石	φ 6.31/厚さ 4.64/孔径 1.97			0.23	上端が破損している
147-10	S106-1	割片	滑石	径 27.81 × 17.19/厚さ 6.95			4.51	原石を施満分割して素材を収めようとしている
147-11	S106-1	白玉の素材割片	滑石	径 9.24 × 8.43/厚さ 3.62			0.38	方形板状、表裏両面に研磨痕、側面に施満の痕跡
147-12	S106-1	白玉の未成品	滑石	径 9.25 × 8.18/厚さ 3.0/孔径 1.80			0.31	方形板状、表裏両面に研磨痕、側面に施満の痕跡
147-13	S106-1	白玉の未成品	滑石	径 7.60 × 8.45/厚さ 2.70/孔径 2.15			0.25	方形板状、表裏両面に研磨痕、穿孔あり
147-14	S106-1	板状未成品の破損品	滑石	径 4.90 × 6.35/厚さ 2.52/孔径 1.85			0.11	板状、穿孔あり、製作途中で破損したもの
149-1	S106-1	調整割片	碧玉	径 13.4 × 9.94/厚さ 5.54			0.6	
149-2	S106-1	調整割片	瑪瑙	16	11	3	0.46	
149-3	S106-1	調整割片	瑪瑙	26	16	9	3.26	上端に敲打痕
149-4	S106-1	素材割片か	瑪瑙	45	18	16	12.07	断面が三角形状
149-5	S106-1	割片	石英	30	21	13	6.38	
149-6	S106-1	原石	石英	67	27	23	58.12	
150-1	S106-1	敲石	瑪瑙	65	43	18	65.54	下側周辺部に敲打痕
150-2	S106-1	川原石	—	80	60	60	370	敲打痕、擦痕あり
150-3	S106-1	平敲石	砂岩	(105)	49	44	286	破損品、一面に擦痕あり
150-4	S106-1	磨研石の破損品	—	(84)	(105)	46	414	表裏両面に縦 3 ～ 5mm 程度の斜め方向の溝、裏面の一部に擦痕あり
152-3	S106-2	白玉	滑石	φ 4.02/厚さ 2.09/孔径 1.45			0.05	
152-4	S106-2	白玉	滑石	φ 6.37/厚さ 1.69/孔径 2.08			0.07	研磨痕あり
154-3	S106-3	白玉の破損品	滑石	φ 4.54/厚さ 0.98/孔径 1.19			0.01	3 分の 1 程度の残存
156-7	S107	勾玉の未成品	瑪瑙	37	21.5	10	15.66	板状素材割片、背面や側面に調整刻線、背面は研磨している
159-1	S108	白玉	滑石	径 5.99 × 6.42/厚さ 2.30/孔径 1.20			0.09	
159-2	S108	原石	水晶	20	15	12	4.75	複製段階 片方の先端部を打ち欠き敲打している 側面の一部が縦方向に割離している
159-3	S108	原石	水晶	20	13	9	3.41	複製段階 片方の先端部を打ち欠いている

石製品観察表 (3)

遺物番号	遺構名	種類	石材	法量 (mm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
159-4	SI08	原石	水晶	23	17	12	6.86	荒削後の形跡段階
159-5	SI08	素材削片	水晶	17	21	12	7.2	荒削段階 上下先端部を打ち欠き六角柱を作出している
159-6	SI08	素材削片	水晶	27	18	17	11.33	形跡の段階
159-7	SI08	丸玉の素材削片	水晶	14	16.5	11	3.93	丸玉の素材で荒削りした後、最打をし始めている
159-8	SI08	丸玉の未成品	水晶	14	11	8	2.38	上下端面に最打を行い、側面調整し始めている
159-9	SI08	切子玉の未成品	水晶	13	13.5	13.5	3.40	群登玉。丸玉の可能性あり、外面に最打を行っている
159-10	SI08	矢翹品	水晶	21.5	9.5	8	1.79	調整段階と最打の痕跡あり 整形段階でこわれたもの
159-11	SI08	丸玉の矢翹品	水晶	23	13	9	2.46	調整段階を行っている
159-12	SI08	素材削片	瑪瑙	49	20	10	14.07	板状。丸玉の素材
159-13	SI08	砥石	瑪瑙	82	43	35	140	1面に幅1.5mm程度の溝状の窪みが4条あり、ほかは磨面
159-14	SI08	砥石の破損品	瑪瑙岩	38	26	24	20	一部磨面あり
161-12	SI09-1	削片	黒曜石	28	15	55	1.86	
161-13	SI09-1	台石	—	195	132	98	3580	上面に割面状の窪み、磨面あり、側面の一方は火を受けて変色している
178-9	加工段01	原石	水晶	51	32	19	42.13	
184-9	SK05	砥石	—	97	44	40	189.5	2面に磨面あり
186-1	C1区 AA8層 黒褐色土	石鏝	サヌカイト	18	16.5	35	0.96	
186-2	C2区 AA8層 黒褐色土	削片	黒曜石	50	37	16	22.52	辺縁部に割面痕、一部磨面あり
186-3	SP127-1	砥石	—	130	96	70	1080	a面に磨面、幅1mmの深い溝が2か所、b面に幅3～4mmの溝が条と幅1mmの溝多数と擦痕、c面は幅1mmの溝が多数確認される

ガラス製品観察表

遺物番号	遺構名	種類	法量 (mm)			重量 (g)	備考
			最大長	最大厚	孔径		
148-1	SI06-1	小玉	(3.28)	2.41	(0.84)	0.01	緑色 破損品

土製品観察表

遺物番号	遺構名	種類	法量 (mm)			重量 (g)	備考
			最大長	最大厚	孔径		
148-2	SI06-1	小玉	5.04 × 5.00	2.76	1.22	0.08	
148-3	SI06-1	小玉	6.87	3.97	1.58	0.19	一部欠損
148-4	SI06-1	小玉	6.86 × 6.22	6.09	1.57	0.25	
148-5	SI06-1	小玉	7.14 × 6.49	6.45	2.15 × 1.53	0.31	
148-6	SI06-1	上玉	13.38	12.0	2.37	1.96	

金属製品観察表

遺物番号	遺構名	種類	法量 (cm)			重量 (g)	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
159-15	SI08	小札か	(3.2)	(1.1)	0.2	2.45	片側に径1.5mm程度の円孔あり
172-2	SB03	片断式器 15.6 断面部長2.0	1.0	0.4		21.97	断面部は三角形 断面部長4.0cm 古墳時代中前後半頃

第6章 岩井手谷遺跡

第1節 遺跡の位置と調査の経過

第1項 遺跡の位置(第188・189図)

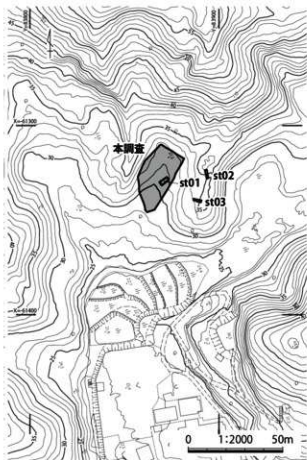
岩井手谷遺跡は松江市山代町字岩井手谷に所在する。北側から南側に向かって派生する丘陵から伸びる尾根と尾根に挟まれた谷部に位置している。谷を中心とする東西の緩斜面からなり、谷は北側から南側に向かって傾斜している。本遺跡の周辺には今回調査を行った樋岡古墳群や南外古墳群が北側に、奥宇田瀬遺跡が東側に位置し、国の史跡である山代郷北新造院(来美庵寺)が南東側斜面下方に所在している。また、近くには来美墳墓・来美遺跡・来美東古墳群など多くの遺跡が確認される。

第2項 試掘調査の概要と経過(第189・190図)

当地の現況は山林で、谷部の緩斜面と東側丘陵部に試掘トレンチ(st01～03)を入れ調査を行った。その結果、谷部東側斜面に設定したトレンチ(st01)の遺物包含層から土師器や須恵器が出土した。東側丘陵部に設定したトレンチ(st02・03)では遺構、遺物は検出されなかった。以下、st01トレンチの概要を述べる。



第188図 岩井手谷遺跡周辺の遺跡分布図



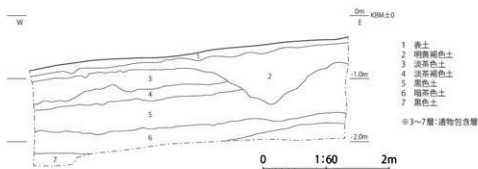
第189図 岩井手谷遺跡位置図

1. 試掘トレンチ(st01)(第190図・表19)

谷部の東側緩斜面に設定した長さ 5.0m × 幅 1.5m のトレンチである。調査の結果、地表面下 0.6m 以下で密度の濃い遺物包含層を検出し、土師器や須恵器が出土した。その後、さらに地表面下 1.6m の深さまで掘削を行ったが、地山は確認できず遺構も検出されなかった。なお、表土を取り除いた段階で不整形な土坑状の落ち込み(2層)を検出したが、埋土は表土直下から続く明黄褐色土で遺物も含まれないことから、古い時代の遺構ではないと判断した。

表 19 試掘トレンチ (st01)

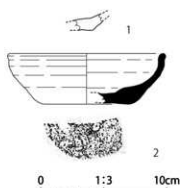
トレンチ	トレンチ設定方向	設定範囲 (長軸×短軸)	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
st01	東—西	5.0m × 1.5m	7.5㎡	1.6m	遺物包含層 土坑状遺構	須恵器(環) 土師器(底部)



第 190 図 試掘トレンチ (st01) 断面図

2. 試掘トレンチ(st01)出土遺物(第191図)

第 191 図は試掘トレンチ (st01) の第 5 層黒色土から出土した遺物である。191-1 は土師器の皿の底部と思われる破片である。内外面ともに風化しており、底部外面にわずかに回転系切り痕が残る。191-2 は須恵器の無高台の環である。口縁端部が短く外反し、口径に対して底径が小さい。調整は内外面に回転ナデと静止ナデを施している。底部外面の切り離しは回転系切りである。遺物の時期は、191-1 が古代～中世に属するもの、191-2 が国府第 2 型式、7 世紀末葉～8 世紀第 1 四半期である。

第 191 図 試掘トレンチ (st01)
出土遺物実測図

第3項 本調査の方法と経過(第192・193図)

松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査を行った結果、遺物包含層が確認されたことから当該調査区周辺の谷部と緩斜面部分を「岩井手谷遺跡」として文化財保護法上の手続きを実施した。

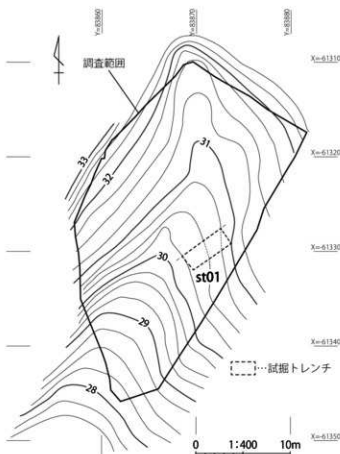
調査範囲は東西の緩斜面から谷部にかけての 493㎡を対象としている。

調査地の現況は山林である。立木の伐採後、調査前コンタ測量を行い、次に調査区に世界測地系平面直角座標系第Ⅲ系に基づいた 5m 四方のグリッド設定を行った。グリッドは北東角 (X = -61310

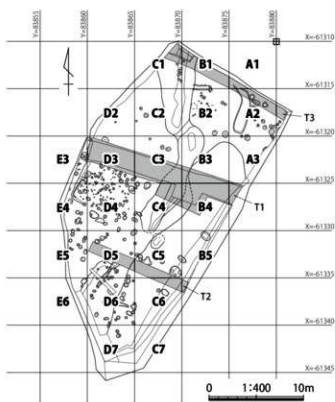
と $Y = 83880$ の交点) を基点とし、縦軸は X 座標軸、横軸は Y 座標軸に平行とした。列番号は基点から西側に向けてアルファベット順、行番号は南に向けてアラビア数字順に付し、各区画は行・列の順に番号を繋いで呼称した。それぞれの区画は各交点の北東隅をもってグリッドの名称としている。

その後、重機を搬入して、最初に調査区中央に東西方向のトレンチ (T1) を掘削した。土層観察を行うと表土の下に流失した山土が堆積したものと思われる明黄褐色土 (シルト層) の堆積がみられ、その下方に遺構が存在することが確認された。そのため表土とシルト層を重機で除去しながら人力による掘削と精査を行った結果、溝状の落ち込みや多数のビット等の遺構が検出された。さらに、土層の堆積状況を確認するために、調査区北壁際 (T3) と T1 の南側にトレンチ (T2) を入れて土層観察を行いながら調査を進めていった。

堆積土や遺構埋土から多くの遺物が出土し、遺物の取上げについてはトータルステーションとレベルを併用して行っている。また、調査区及び遺構の平面実測もトータルステーションを用い、そのデータと遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。遺構の記録写真は、デジタル一眼レフカメラによる撮影を行っている。



第192図 調査前地形測量図



第193図 調査グリッド配置図

第2節 本調査の成果

第1項 本調査の概要(第194・195図)

本調査区は北から南に向かって傾斜する谷と東西の緩斜面からなる。調査範囲は東西約18m、南北は西側が約21m、東側が約34mを測り、調査面積は493㎡である。現地表面の標高は北側で32.4m、南側で約28.2mを測り、比高差は4.2mである。

T1トレンチの土層観察後、重機で表土と明黄褐色土(シルト層)の掘削を行った。その後、遺物を含む堆積土の掘り下げを人力で行っていくと、調査区全体で掘立柱建物跡(SB01～04)・柱穴列(SA01)・溝(SD01)・土坑(SK01・02)・自然流路(NR01)と一部の土坑や柱穴と切り合いをもつ自然流路(NR02)が検出された。建物跡や柱穴は調査区西側から南側にかけての緩斜面に多く、東側や北側では少ない状況であった。遺物は土師器・須恵器・中世土師器・金属製品・石製品が出土し、検出した遺構の主たる時期は古代～中世前半である。

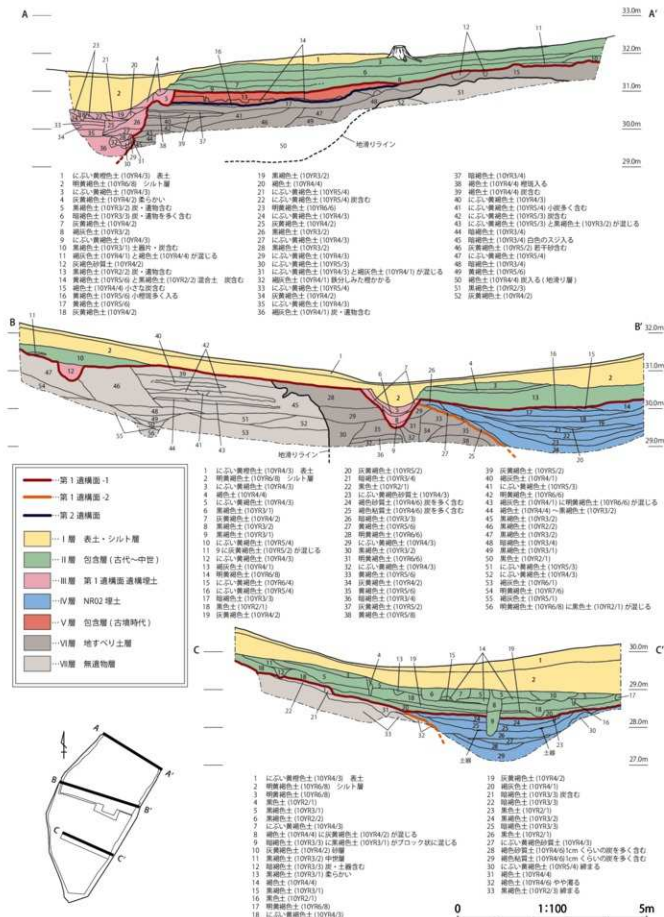
なお、NR02については、埋没後に土坑や柱穴が掘られ、これらとは明確な新旧関係があるものの遺構としては全体を同一面で検出しており、切り合い関係にない周囲の遺構とは出土する遺物の時期からも同時併存する可能性があるものであることから、ここではNR02埋没後を第1遺構面-1、埋没前を第1遺構面-2として報告する。縄文時代の落とし穴と考えられるSK01も同一面で検出しているため、本来の掘り込み面が流失した状態で多時期の遺構が検出されたものと推察する。

第1遺構面-2の調査後さらに掘り下げを行うと、調査区北側の緩斜面から溝・柱穴・焼土が検出された。この面からは古墳時代中期後半の土師器が出土しており、第1遺構面より古い時期の遺構と考えられた。ほかに調査区内で同時期の遺構面は確認できず、限定された範囲ではあるが谷の緩斜面に古墳時代の遺構が一部存在していた状況であり、この面を第2遺構面として調査を行った。

第2項 基本層序(第194図)

本調査区は北側から南側に向かって傾斜する谷と東西の緩斜面からなる。土層観察は調査区北壁(第194図A-A')、調査区中央のT1(第194図B-B')、調査区中央よりやや南側のT2(第194図C-C')で行っている。土層断面図は各断面土層の整合性を考え、画面ごとの土層を便宜的にⅠ～Ⅶ層として土層ごとに色分けしている。以下、土層について述べる。

Ⅰ層は表土や明黄褐色土(シルト層)である。Ⅱ層は第1遺構面-1・2面より上層の堆積土である。調査区中央付近以外で確認され、黒褐色土・褐灰色土・にぶい黄褐色土などで土師器・須恵器・中世土師器・瓦・金属製品・石製品が出土している。Ⅲ層は第1遺構面-1の遺構埋土である。NR01の黒褐色土から須恵器・中世土師器・石製品が出土している。Ⅳ層は第1遺構面-2、NR02の埋土である。黒褐色土・褐色砂質土・褐色粘質土などの土層がレンズ状に堆積し、古墳時代～中世前半までの土師器・須恵器・中世土師器が混在して出土している。Ⅴ層は第2遺構面上の堆積土である。調査区北側で確認され、古墳時代の土師器や石製品が出土している。Ⅵ層・Ⅶ層は遺構の基盤層である。Ⅵ層は調査区北側から中央付近にかけて確認された土層で、炭がやや混入しており黒曜石1点が出土している。土層観察や炭が混入していたこと、遺物の出土状況からⅥ層は調査区の東西斜面から地滑り



第194図 岩井手谷遺跡 土層断面図A-A'・B-B'・C-C'

した土層と考えられる。⁽¹⁾Ⅶ層は調査区東西斜面の堆積土である。一見、地山のようにみえたが炭がやや混じることから古い谷部の堆積土層と考えられた。⁽²⁾地表面から2m以上掘削を行ったが地山は確認できなかった。

第3項 第1遺構面-1(第195図)

第1遺構面-1では建て替えを含めた掘立柱建物跡5棟(SB01～04)、柱穴列1条(SA01)、土坑2基(SK01・02)、溝1条(SD01)、自然流路1条(NR01)のほか多数のピットを検出した。掘立柱建物や柱穴は調査区西側から南側の緩斜面に多く、調査区北端から中央にかけては自然流路(NR01)が確認される。

第1遺構面-1の掘立柱建物跡については現地及び図面上で推定復元できる建物を図化している。そのため復元した建物のなかには建物を構成する柱穴に一部重複するものが含まれ、これに伴う遺物がどの復元建物に属するのか判断できなかった。このため各遺構ごとに重複する柱穴、遺物については説明することとした。

以下、遺構について種別ごとに概要を述べ、各遺構から出土した遺物と併せて報告する。

1.SB01-1・SB01-2

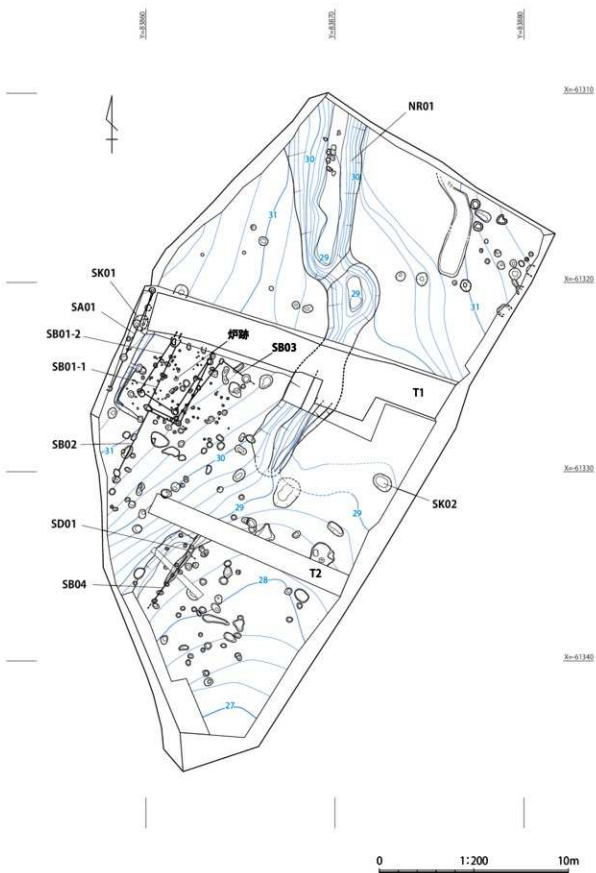
SB01は調査区西側のD3・D4区に位置する。標高30.8～31.0mの緩斜面で検出した加工段を伴う掘立柱建物跡で、主軸方位がやや違う2棟の建物が想定された。新旧関係は不明であるが建て替えと考え、SB01-1・SB01-2として扱う。この建物跡はT1トレンチより北側で検出されなかったためT1トレンチ内でおさまるものと思われる。

覆土は黒色や褐色の土層が堆積し、畦の土層断面や柱穴埋土から切り合い関係は確認できなかった。この2棟の建物の主軸方位は異なるが、建物のほぼ中央に跡跡がみられることや北側の柱穴(SP03・04)を共有していることから建て替えと捉えて復元している。以下では、先にSB01-1・SB01-2の覆土出土遺物を掲載して、次にSB01-1、SB01-2の建物跡について述べる。

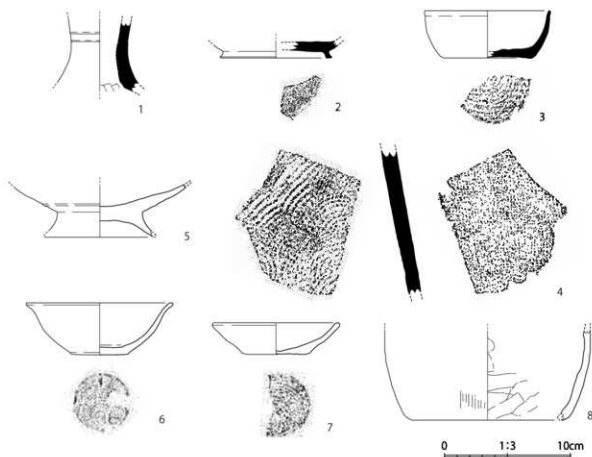
SB01-1・SB01-2覆土出土遺物(第196・197図)

SB01-1・SB01-2の覆土は黒色や褐色の土層である。遺物は土師器・須恵器・中世土師器が第197図(H-H)8・9層から出土している。

196-1～4は須恵器である。196-1は長頸壺の頸部で2本の沈線がみられる。国府第2～3型式、7世紀末葉～8世紀第2四半期と思われる。196-2は高台付円で低い高台が底部周縁のやや内側につくものである。底部の切り離しは回転糸切り後ナデを施している。196-3は無高台の円で、体部は内湾しながら立ち上がり口縁端部はやや外反する。196-2・3は国府第3型式、8世紀第2四半期に該当する。196-4の裏片は外面に叩き痕、内面に当て具痕が認められる。破片の内側や側面が滑らかであることから別のものに転用された可能性がある。196-5～7は古代末～中世前半の土師器である。196-5は無高台付の環である。高台がハの字状に開き、体部は丸みをもって立ち上がるもので国府第8型式、10世紀後半～11世紀前半と思われる。196-6は無高台の環で、体部は内湾しながら立ち上がり口縁端部は緩やかに外反する。196-7は無高台の皿である。体部はやや内湾し、底部中央の器壁は



第195図 第1遺構面-1 遺構配置図



第196図 SB01-1・SB01-2 覆土出土遺物実測図

薄い。196-6・7は国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半に相当する。196-8は甕の底部である。外面にハケメ後ナデを、内面に斜めや縦方向のヘラケズリを施している。

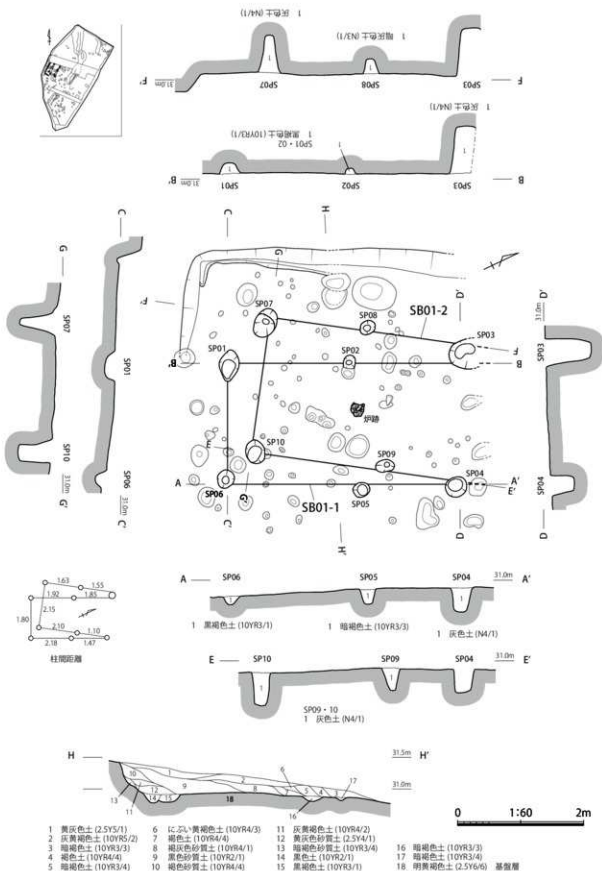
SB01-1(第197図)

規模と形態

SB01-1は加工段を伴う掘立柱建物2棟のうちの1棟である。規模は桁行2間以上、梁行1間の構造で、桁行3.65～3.77m以上、梁行1.80mを測る。東側桁行柱間の心々距離は南から2.18m、1.47m、西側梁行柱間の心々距離は南から1.92m、1.85mを測る。建物の主軸方位はN-24°-Eである。建物の西側には加工された段があり、斜面を平坦に成形して建物を構築している。加工段の北側はトレンチ掘削により存在していないが、現状での規模は南北4.0m、東西1.6m、深さ20～53cmを測る。また、加工段の下端には幅7～12cm、深さ3cmを測る浅い雨落ち溝がL字状に検出された。柱穴の平面プランは円形や楕円形を呈し、長径20～50cm、短径18～47cm、深さ10～74cmを測る。柱穴内には黒褐色土・暗褐色土・灰色土が堆積し、柱痕は確認されなかった。

建物の中央付近、SP02の東側の床面で楕円形の炉跡が検出された。粘土をU字状に10cm程度積み上げて使用していたもので赤褐色に焼けていた。炉内及び周辺から鍛造剥片や鍛冶炉に伴う遺物は検出されなかったため、建物の灯りや暖房等に使用されたと考えられる。

遺物は建物を構成するSP01から土師器の環・皿が重なった状態で出土している。これらの土器は



第197図 SB01-1・2実測図

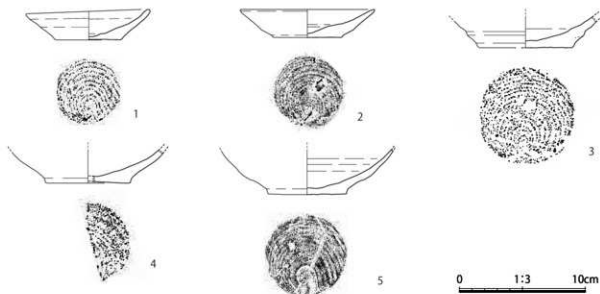
出土状況から意図的に入れたもので、建物の廃絶に伴う祭祀に使用された可能性が考えられる。

SB01-1出土遺物(第198図)

198-1・2は土師器の皿である。198-1は底部から直線的に立ち上がり口縁はやや内湾するもの、198-2は底部から口縁にかけて直線的に立ち上がるものである。198-3～5は坏で、底部周縁を絞っている。これらの皿や坏は内面が口縁から底部中央にかけて下垂し、底部中央がやや薄いつくりとなっている。また、底部外面の調整は回転糸切り後未調整で明瞭である。遺物時期は国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半に相当する。

遺構の性格と時期

出土遺物の年代から11世紀後半～12世紀前半に属する建物跡と考えられる。



第198図 SB01-1 出土遺物実測図

SB01-2(第197図)

規模と形態

SB01-1と同様に加工段を伴う建物として復元した掘立柱建物跡である。規模は桁行2間以上、梁行1間の構造で、桁行3.18～3.25m、梁行2.15mを測り、北側の柱穴SP03とSP04はSB01-1と重複する。柱穴に切り合いは確認されなかったため建物の新旧関係は不明である。東側桁行柱間の心々距離は南から2.10m、1.10m、西側梁行柱間の心々距離は南から1.63m、1.55mを測る。建物の主軸方位はN-32°-Eである。

柱穴の平面プランは円形や楕円形を呈し、長径23～47cm、短径20～47cm、深さ23～74cmを測る。柱穴内には灰色土や暗灰色土が堆積し、柱痕は確認されなかった。遺物は出土していない。

遺構の性格と時期

SB01-2に限定できる遺構の時期を示す遺物は出土していないが、覆土から出土した遺物の下限の時期から11世紀後半～12世紀前半の建物と考えられ、SB01-1とSB01-2は時期差のない建物である。

2.SB02(第199図)

規模と形態

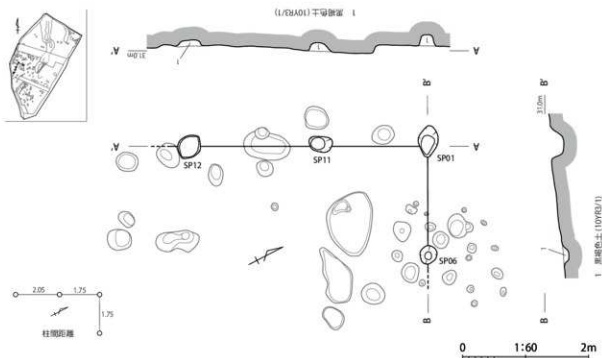
SB02は調査区中央の西側、E4・E5・D4区に位置する標高30.75～31.0mの緩斜面の掘立柱建物跡である。規模は桁行2間以上、梁行1間以上の構造で、桁行3.80m、梁行1.75m以上を測る。この建物を構成する桁行北側の柱穴SP01はSB01-1と重複している。桁行柱間の心々距離は南側から2.05m、1.75mを測り、建物の主軸方位はN-28°-Eである。

柱穴は楕円形を呈し、長径30～50cm、短径24～34cm、深さ10～18cmを測る。いずれも浅いもので、柱穴の上部は削平されていると思われる。柱穴には黒褐色土が堆積しており、柱痕は確認されなかった。

遺物はSB01-1と重複する柱穴SP01から出土した土師器の皿と坏のみでほかには出土していない。

遺構の性格と時期

SP01以外で遺物は出土していないため明確な時期は判断できないが、SP01の出土遺物から(第198図)11世紀後半～12世紀前半の建物と考えられる。

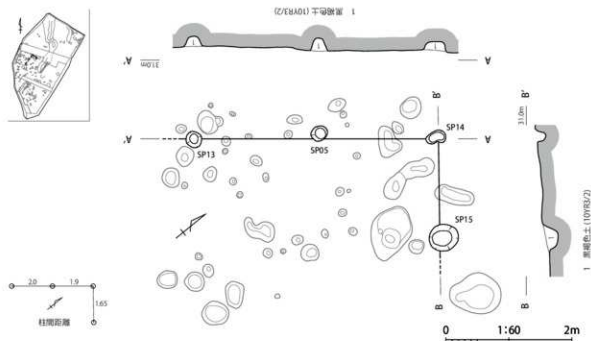


第199図 SB02実測図

3.SB03(第200図)

規模と形態

SB03は調査区中央の西側、D3・D4・C4区に位置する標高30.6～30.8mの緩斜面の掘立柱建物跡である。規模は桁行2間以上、梁行1間以上の構造で、桁行3.9m、梁行1.65mを測る。桁行柱間の心々距離は南側から2.0m、1.9mを測り、建物の主軸方位はN-38°-Eである。



第200図 SB03 実測図

柱穴は円形や楕円形を呈し、長径は25～46cm、短径20～42cmを測る。深さは13～24cmを測る浅いもので、柱穴の上部は削平されている。

遺物はSP15から土師器の小片が出土している。

SB03出土遺物(第201図)

201-1は土師器の小片で、無高台の皿の底部と思われる。回転糸切り痕がわずかに残り、古代から中世の範疇に属すると思われる。

第201図 SB03
出土遺物実測図

遺構の性格と時期

SB03の時期は出土遺物から古代から中世の建物が想定される。SB03の西側にはSB01-1・2が隣接し、なかでもSB01-2は主軸方位がほぼ同じである。廂の張り出しを考えると同時併存はできないため建て替えの可能性が考えられる。

4.SB04(第202図)

規模と形態

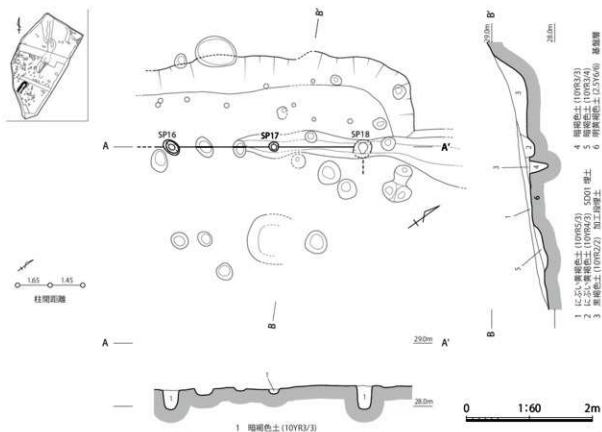
SB04は、調査区南西側のD5・D6・E6区に位置する標高約29mの緩斜面で検出した加工段を伴う掘立柱建物跡である。SB04を構成する東側の柱穴は確認できなかったため、桁行2間以上、梁行未検出の構造で、桁行3.1m以上を測る。桁行柱間の心々距離は南から1.65m、1.45mを測る。建物の主軸方位はN-35°-Eである。加工段はL字状を呈し、南側は削平により、東側は後述するSD01に切られている。加工段の規模は現状で南北4.2m、東西1.0m、高さ23～48cmを測る。柱穴は円形や楕円形を呈し、長径15～30m、短径14～27cm、深さ8～37cmを測り、暗褐色土が堆積する。遺物は3層(黒褐色土)から土師器が出土している。

SB04出土遺物(第203図)

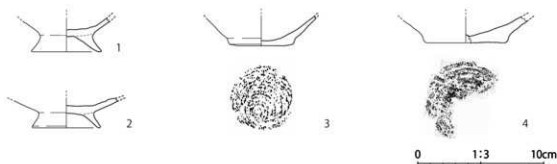
遺物は古代～中世前半の土師器の環が出土している。203-1・2の環は、高台がハの字状に付くもので、国府第6～7型式、9世紀中葉～10世紀前半に相当する。203-3・4の無高台の環は、底部から口縁にかけてハの字状に開くものと思われる。底部外縁に絞りの痕跡が認められ、外面はいずれも回転糸切り後未調整である。203-3・4は国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半である。

遺構の性格と時期

遺構の時期は出土した遺物から10世紀前半～12世紀前半頃の建物と考えられる。SB04の周辺には柱穴が多く存在することから、ほかにも建物が存在していた可能性が考えられる。



第202図 SB04実測図



第203図 SB04出土遺物実測図

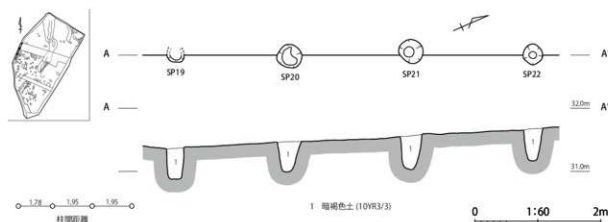
5.SA01(第204図)

規模と形態

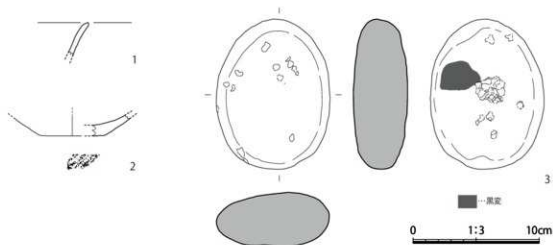
SA01は調査区中央の西端に位置し、標高31.25mで検出された南北方向の柱穴列である。検出した範囲での規模は長さ5.68mを測り、主軸方位はN-24°-Eである。柱穴の心々距離は南から1.78m、1.95m、1.95mを測る。柱穴の平面プランは円形や楕円形を呈し、長径32～39cm、短径30～37cm、深さ48～54cmを測る。埋土は暗褐色土で、柱痕は確認されなかった。柱穴列を構成するSP21は、後述するSK01の埋土を基盤としていることからSA01が新、SK01が古である。遺物はSP19から土師器と石製品が出土している。

SA01出土遺物(第205図)

205-1は土師器の坏の口縁端部である。器壁は薄く淡黄褐色を呈する。205-2は無高台の皿か坏の底部である。この2点は小片であることから詳細な時期は判断できないが、古代から中世に属するものと思われる。205-3は磨石・凹石である。端部は滑らかで、片面の中央に打撃による浅い凹みが認められる。一部が黒変している。



第204図 SA01実測図



第205図 SA01出土遺物実測図

遺構の性格と時期

SA01の時期は出土した遺物から古代～中世と考えられる。SB01-1・2に伴う加工段の西側、斜面上方に位置しており、主軸方位は加工段にほぼ併行である。遺構の位置や出土遺物から同時期に存在した可能性が考えられ、SB01-1・2に伴う柵のような遮蔽物、または西側調査区外に続く建物の一部が想定される。

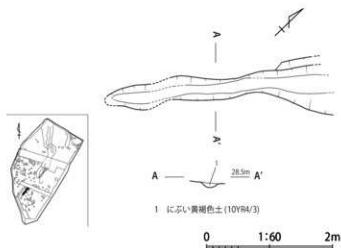
6.SD01(第206図)

規模と形態

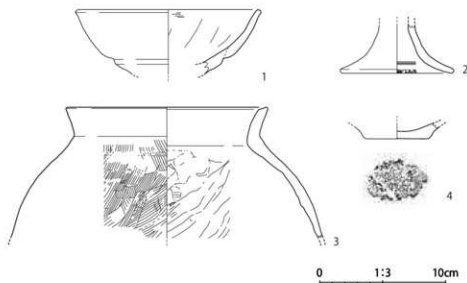
SD01はD5・D6区に位置する標高約28.8mの緩斜面で検出した溝である。溝は北東側に続くと思われるがT2トレンチにより切られている。現状での規模は長さ3.5m、幅30～60cm、深さ10cmを測る。底面標高は28.2m～28.4mを測り、北西方向から南東方向に向かって傾斜している。SD01はSB04覆土を基盤としていることからSB04より新しい遺構である。遺物は古墳時代と中世の土師器が出土している。

SD01出土遺物(第207図)

207-1は橙色を呈する高環の坏部である。口縁は内湾しながら立ち上がり、外面に段がみられる。器壁は厚く、内面に暗文を施す。207-2は高環の脚部で、内面にわずかにハケメがみられる。207-3は単純口縁の甕である。口縁は短く外反しながら立ち上がり、端部はやや内傾する平坦面をもつ。調整は、口縁部は内外面共にヨコナデ、胴部は外面にハケメ、内面にヘラケズリを施している。207-1・2は古墳時代中期、207-3は古墳時代中期～後期と思われる。207-4は中



第206図 SD01実測図



第207図 SD01出土遺物実測図

世土師器の皿の底部である。外面に回転系切り痕が認められるが風化によりはつきりしない。国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半に属するものと思われる。

遺構の性格と時期

SD01の時期は出土した遺物から11世紀後半～12世紀前半である。溝の幅や深さ、また、周辺にピットが存在することから建物に伴う可能性が考えられる。

7.SK01(第208図)

規模と形態

SK01は、調査区西側、T1トレンチの西端で検出した楕円形を呈する土坑である。検出面標高は31.6m、規模は径が0.8m、深さ1.08mを測り、底面中央に径15cm、深さ15cmの円形の穴が確認される。遺物は出土していない。

遺構の時期と性格

SK01は遺構の形態や深さ、底面に円形の穴をもつことから狩猟用の落とし穴と考えられる。遺物がないことから明らかな時期はわからないが、これまでの類似する検出例から縄文時代と思われる。

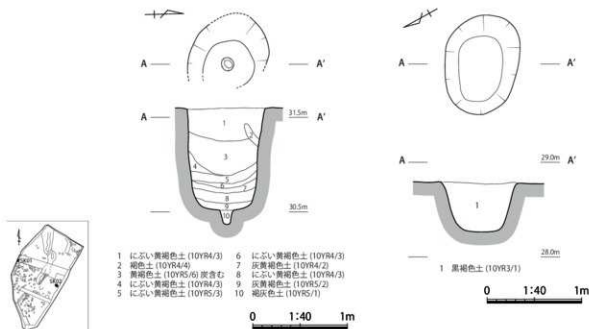
8.SK02(第209図)

規模と形態

SK02は調査区中央よりやや南東側、B5区に位置する。後述するNR02の埋土を基盤とする遺構で、検出標高は28.8m、平面形は楕円形を呈し、規模は南北1.08m、東西0.8m、深さは0.5mを測る。土坑内から土製支脚と須恵器が出土している。

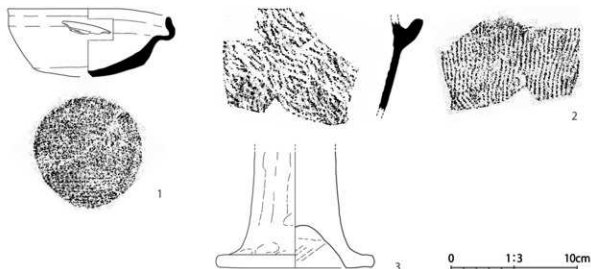
SK02出土遺物(第210図)

210-1・2は須恵器である。210-1は無高台の環で、口縁部は焼歪み、外面に重ね焼きした際に熔着した須恵器片がみられる。底部の切り離しは静止系切りである。国府第2型式、7世紀末葉～8世紀



第208図 SK01実測図

第209図 SK02実測図



第 210 図 SK02 出土遺物実測図

第 1 四半期に相当する。210-2 は壺・甕類の外面に把手が付くものである。外面に叩き痕、内面に当て具痕が認められる。210-3 は土製支脚の底部である。

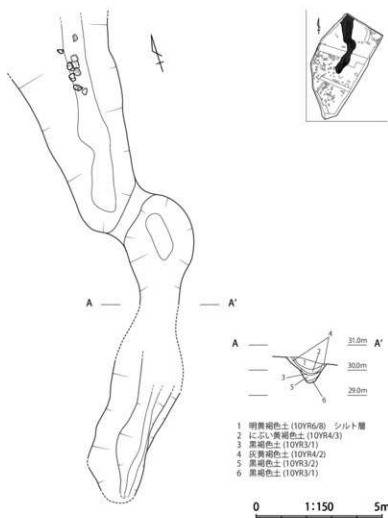
遺構の性格と時期

出土遺物の時期は 7 世紀末葉～8 世紀第 1 四半期と考えられるが、NR02 の埋土を基盤とすることから NR02 より新しい土坑であり、中世前半以降と考えられる。

9.NR01(第211図)

規模と形態

NR01 は調査区北西端から調査区中央付近にかけて検出した自然流路である。現状での規模は長さ 18.6m、上端径 1.4～4m、底面幅は 0.3～1.1m、深さ 0.5～1.2m を測る。北側の底面には流れ落ちたと思われる径 20cm 程の礫が認められる。遺構内には黒褐色土や灰褐色土、検出面にはシルト層の明黄褐色土が堆積し、須恵器や古

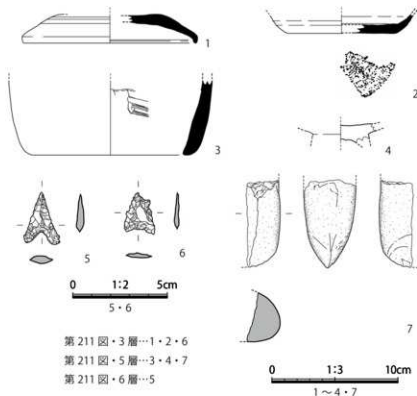


第 211 図 NR01 実測図

代の土師器、石製品が出土している。

NR01出土遺物(第212図)

212-1～3は須恵器である。212-1は口縁端部が屈曲口縁を呈する蓋である。212-2は無高台杯の底部で、外面に回転条切り痕が認められる。212-1・2は国府第3～4型式、8世紀第2四半期～第4四半期に相当する。212-3は甕の底部で、内面の一部に横方向の工具痕がみられる。212-4は土師器の杯で高台が付くものである。高台径が小さいことから皿と思わ



第212図 NR01出土遺物実測図

れる。国府第8型式、10世紀後半～11世紀前半に属すると思われる。212-5～7は石製品である。212-5・6は黒曜石の石鏃、212-7は塩基性岩の磨製石斧で、刃部に使用痕が認められる。

遺構の性格と時期

NR01は谷筋を流れる自然流路のひとつである。NR01の時期は出土した遺物の下限から11世紀前半を想定している。

10.柱穴(第213図)

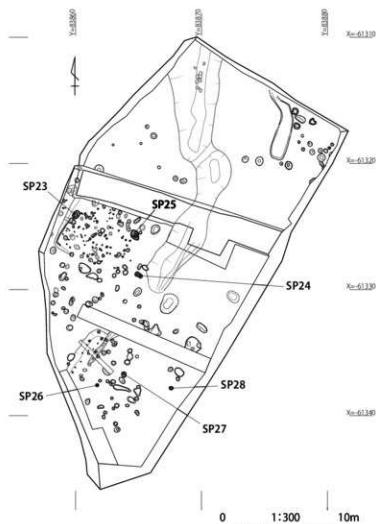
規模と形態

第1遺構面-1では多くの柱穴が検出され、調査区南側から西側斜面に集中している。柱穴の平面形は円形や楕円形を呈し、規模は径が10～60cm、深さ15～60cmを測る。遺物は前述した掘立柱建物を伴うもの以外では、第213図に示した6基で土師器や鉄製品が出土している。

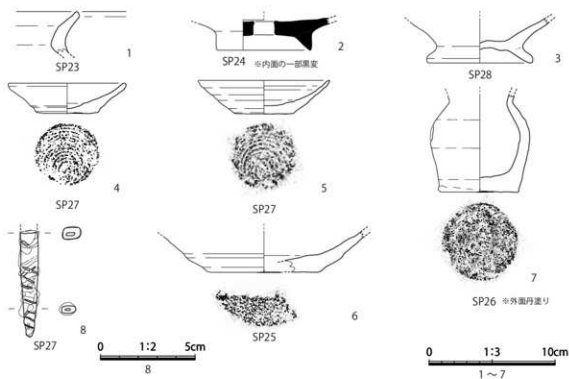
柱穴出土遺物(第214図)

第214図は第1遺構面-1の柱穴から出土した遺物である。214-1は土師器の単純口縁の裏である。口縁は短く外反し、古墳時代中期～後期と思われる。214-2は須恵器の高台付杯の底部である。橙色を呈し、底部に径16mmの焼成前穿孔が認められる。内面の一部が黒変している。古代に属するものと思われる。214-3～6は古代から中世の土師器である。214-3は高台の付く杯である。低い高台がハの字状に付き、体部は直線的に開くもので、国府第6型式、9世紀中葉～後葉に属する。214-4・5は無高台の皿である。214-4は底部から口縁にかけて直線的に立ち上がり、口縁は内湾する。内面が底部中央にむかって一気に垂下し、底部中央が薄い作りとなっている。214-5は体部から口縁にか

けてやや内湾する。214-6は無高台の坏である。214-4～6は国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半に相当する。214-7は土師器の小型の壺である。分厚い器壁で頸部がくびれ、胴部外面に円形上の剥離痕がみられる。底部は平底で、丹塗りの痕跡が一部に残っている。平安時代後期の壺が小型化したものと思われ、類例として安来市門生町の陽徳遺跡、陽徳寺遺跡、雲南市木次町の妙見山遺跡からよく似た形の壺が出土している。214-8は鉄製品で長頸鍬の茎である。残存長5.7cm、最大幅0.9cm、厚さ0.6cmを測り、外面に径が1mmの紐状のものが螺旋状に巻き付けられている。



第213図 柱穴全体図



第214図 柱穴出土遺物実測図

第4項 第1遺構面-2(第215図)

調査区東側から南側にかけて落ち込みが検出された。この落ち込みは谷部を流れる自然流路 (NR02) と考えられ、第1遺構面-1で検出した一部の遺構と同じ土層を基盤としている。そのため第1遺構面-1の南側から西側の遺構と併存していた可能性があることから、この落ち込みを便宜上第1遺構面-2として調査を行った。

1.NR02(第215・216図)

規模と形態

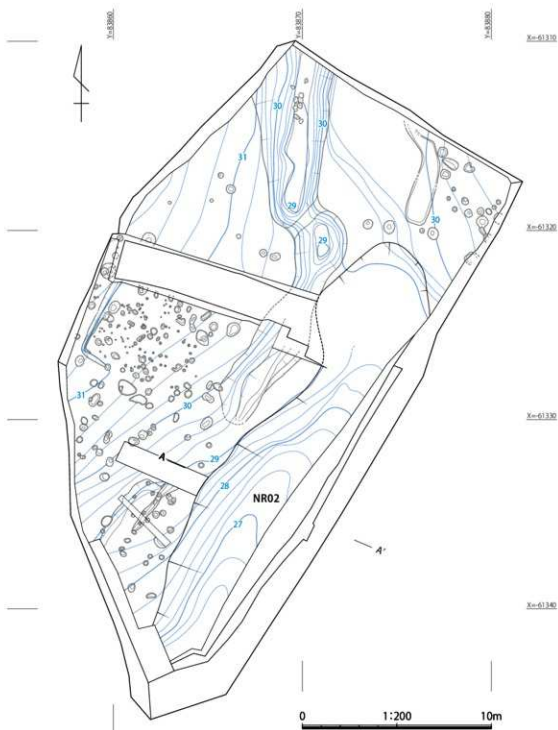
NR02は調査区の東側から南側で検出した自然流路である。掘削深度が2.0m以上となることから、底面までの掘削は行っていない。流路は西側斜面から緩やかに傾斜して落ち込み、黒色土や黄褐色土、褐色土等の土層がレンズ状に堆積していた。現状での規模は長さ25m、上端径4.0～6.0m、深さは2m以上を測り、底面は北側から南側に向かって傾斜している。遺物は古墳時代から中世前半の土師器や須恵器が出土している。

NR02出土遺物(第217図)

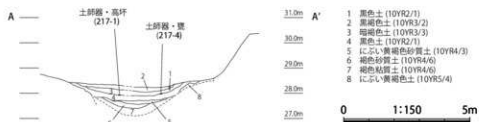
遺物は古墳時代から中世前半の土師器や須恵器である。時期の異なる遺物が同じ土層から出土しており、第216図4層から217-1・4・5～7・9・12が、5層から217-8・10が、7層から217-2・3・6・11が出土している。

217-1～6は土師器である。217-1は高杯の杯底部である。外面にハケメ、接続部に円盤充填と刺突痕が認められる。古墳時代前期～中期頃のものと思われる。217-2・3は高杯の脚部である。残存高は5cm前後と低く、調整は外面にハケメ、内面にしぼり痕がみられる。217-4～6は甕である。217-4は布留系の単純口縁の甕である。口縁は内湾しながら立ち上がり、端部は内傾する平坦面を呈する。胴部の調整は外面に縦方向のハケメを、内面にヘラケズリと指頭圧痕を施す。217-5は単純口縁の甕である。口縁は外傾しながら直線的に立ち上がり、胴部の調整は外面に縦方向のハケメ、内面にヘラケズリを施している。217-6は古墳時代中期前半、217-2・3・5は古墳時代中期に属する。217-6は口縁が短く外反するもので、胴部外面にハケメ、内面にヘラケズリが認められる。古墳時代後期以降と考えられる。

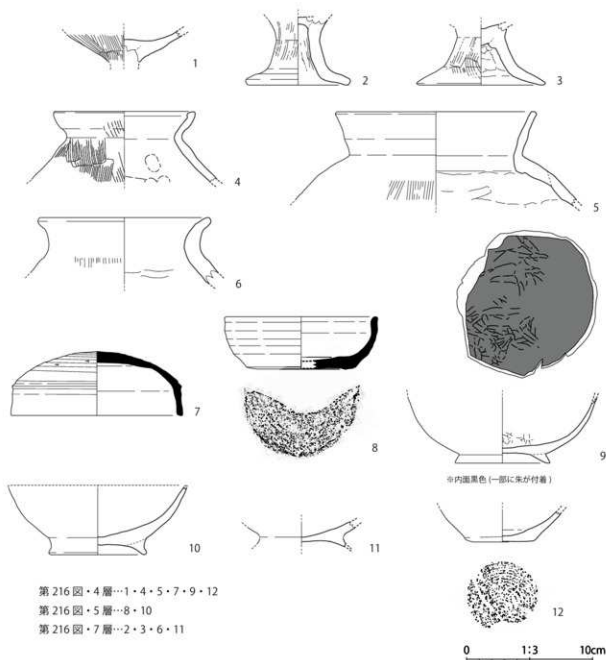
217-7・8は須恵器である。217-7は口径13.6cmを測る杯蓋である。口縁端部はやや外傾する面をもち、肩部に沈線と突帯が認められる。天井部は回転ヘラケズリを中心から丁寧に施し、ヘラケズリの単位は明瞭である。出雲2期に属する。217-8は無高台の杯で、口径12.0cmを測る。口縁端部の屈曲は弱く、体部の湾曲度も緩やかである。国府第5型式、8世紀末葉～9世紀前葉に相当する。217-9～12は古代から中世前半の土師器である。217-9は高台の付く杯である。体部は内湾して立ち上がり、高台は短くハの字状に開く。内面をヘラで丁寧に磨きあげた後、内面にのみ炭素を吸着させ黒色処理を施している。また、内側の一部に朱の痕跡がみられる。このような黒色土器は8世紀中頃に少なく、9世紀～10世紀にかけて多くみられることから、217-9も同時期と思われる。217-10は高台の付く杯で、高台は低く、体部は内湾する。217-9と同じような形を呈していることから古代に属するものと思われる。217-11は高台付の杯か皿の底部である。217-12は無高台の杯で、体部内面が底部中央にかけて垂下している。217-11は国府第8型式、10世紀後半～11世紀前半、217-12は国府第9型式、11世紀後半



第215図 第1遺構面-2遺構配置図



第216図 NR02土層断面図



第 217 図 NR02 出土遺物実測図

～ 12 世紀前半に相当する。

遺構の性格と時期

NR02 は調査区が位置している谷部を流れる自然流路である。出土した遺物から 11 世紀後半～ 12 世紀前半頃と想定される。調査区南西側や西側で検出した遺構のなかには同時期と考えられる建物跡や溝などがあり、これらの遺構と NR02 は併存していた可能性が高い。したがって、第 1 遺構面-1 の NR02 上面で検出した遺構については、SK02 のように古代の遺物が出土していても中世前半以降となる。

第5項 第1遺構面-1・2 遺構外出土遺物(第218・219・220図)

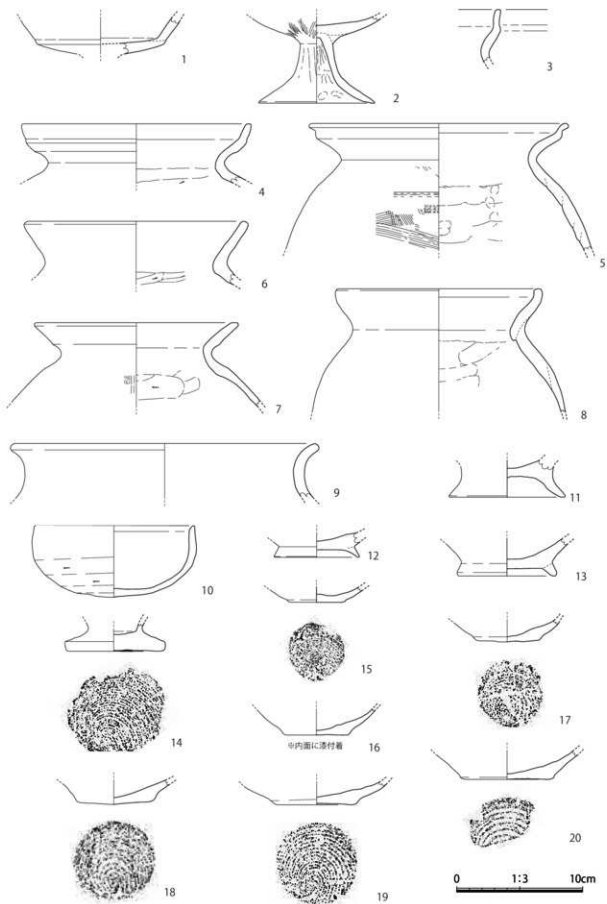
第218図～220図は第1遺構面-1・2より上層の堆積土(第194図Ⅱ層)から出土した遺物である。遺物は本調査区が谷部に位置していることから流れ込みによるものと考えられ、須恵器・土師器・中世土師器・瓦・石製品・金属製品が出土している。以下、出土した主な遺物について述べる。遺物の出土位置については遺物観察表を参照して頂きたい。

第218図は土師器である。218-1は高環の坏部で、内外面にヨコナデがみられる。218-2の高環は碗形を呈するもので、調整は外面にハケメとヘラミガキを、内面にナデと指押さえを施す。218-3～5は二重口縁の甕である。218-3は口縁部は短く、退化した二重口縁である。218-4は二重口縁段部の形骸化が進み痕跡だけとなっている。218-5も二重口縁を呈するもので、端部は短く屈曲し、胴部外面にハケメを、内面にヘラケズリを施している。一部に指頭圧痕も認められる。218-6～8は単純口縁の甕である。218-6・7は口縁部が逆「ハ」の字状に開くものである。外面にハケメを、内面にヘラケズリを施す。218-8は口縁部が内湾して立ち上がり、端部は内傾するものである。外面の調整は風化により不明で、内面にヘラケズリが認められる。218-9は口縁部が強く外反するものである。218-1～8は古墳時代中期、218-9は古墳時代後期以降に相当する。

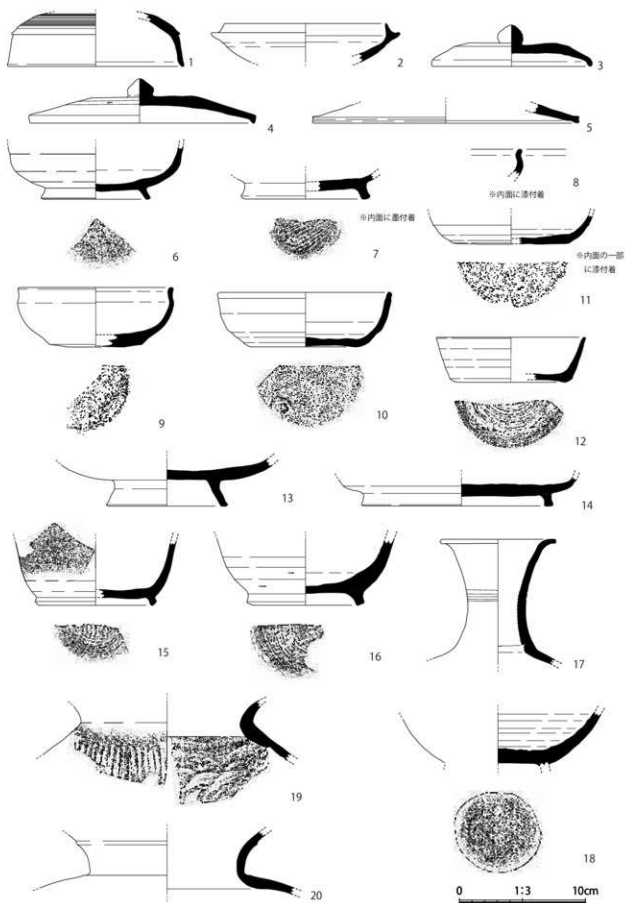
218-10は坏である。体部は丸く、外面にヘラケズリとヨコナデを、内面にナデを施す。古墳時代中期に該当する。

218-11～20は古代から中世前半の土師器である。218-11～13は高台の付く坏の底部である。218-11は高台がハの字状に開き、218-12・13は低い高台がつくものである。いずれも国府第6～7型式、9世紀中葉から10世紀前半に相当する。218-14は柱状高台の付く坏で、コップ状の坏部が付くと思われる。218-15～20は無高台の皿または坏の底部である。内面は底部中央に向かって垂下し、底部中央の作りが薄くなっている。218-16以外は底部外面に回転糸切り痕が明瞭に認められ、218-20は他のものと比べると糸切り痕の単位が太くなっている。218-16の内面には漆が付着している。218-14～20は国府第9型式、11世紀後半～12世紀前半頃に該当する。

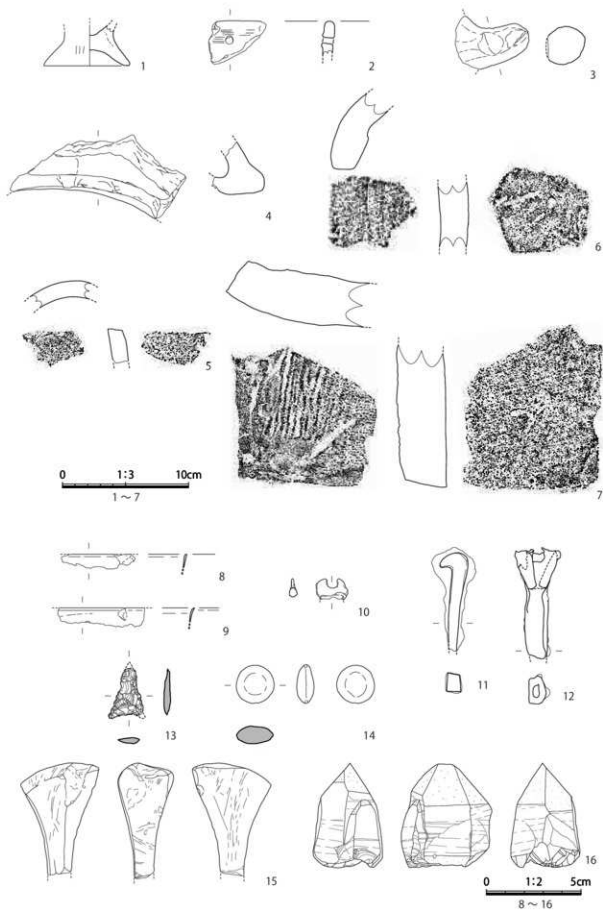
第219図の1～20は須恵器である。219-1は口径12.0cmを測る有蓋高環の蓋である。天井部は欠損しているがつまみが付くものと思われる。口縁端部はわずかに段状を呈し、肩部に稜と天井部にカキ目を施す。出雲1期である。219-2は口径12.8cmを測る坏身で、出雲4期頃と思われる。219-3・4は宝珠つまみの蓋である。口縁端部は屈曲口縁を呈し、天井部に回転ヘラケズリを施している。口径は219-3が12.8cm、219-4が17.7cmを測る。219-5は口縁端部がわずかに屈曲し、端部内面に凹線が認められる蓋で、口径21.0cmを測る。219-3～5は国府第4型式、8世紀第3四半期～第4四半期に相当する。219-6・7は低い高台がつく坏である。219-6は体部が内湾して立ち上がる。219-7は外面に静止糸切り痕が認められ、外面に墨が付着している。219-8～12は無高台の坏である。219-8は口縁端部が短く屈曲するもので、内面に漆が付着している。219-9は体部が内湾して立ち上がり、口縁端部が緩く屈曲している。219-6～9は国府第2型式、7世紀末葉～8世紀第1四半期である。219-10の無高台の坏は体部が緩やかに内湾するもので、219-11も同様な坏の底部と思われる。219-12は体部が直線的に立ち上がる無高台の坏である。219-10～12は国府第4型式、8世紀第3四半



第218図 第1遺構面・1・2遺構外出土遺物実測図1



第219図 第1遺構面・1・2遺構外出土遺物実測図2



第220図 第1遺構面・1・2遺構外出土遺物実測図3

期～第4 四半期と思われる。219-13 は高台付きの坏または皿である。高台の高さは2 cm、底径は9.3 cmを測り、坏か皿としては大型品と思われる。焼成がやや悪く淡灰色を呈している。体部内面が滑らかであることから硯に転用された可能性が考えられる。国府第1 型式、7 世紀後半頃と思われる。219-14 は低い高台の付く皿で、国府第4 型式、8 世紀第3 四半期～第4 四半期に相当する。219-15 ～20 は壺・甕類である。219-15 は低い高台が付く壺の底部で、胴部外面にヘラ記号が一箇所認められる。219-16 も壺の底部で、外面にヘラケズリを施している。219-17 は長頸壺の頸部から口縁部である。口縁は外反し、外面に2 本の沈線を施している。219-18 は壺の底部である。219-17 と219-18 は近い場所から出土しており、胎土や焼成が同じであることから同一個体と思われる。国府第3 型式、8 世紀第3 四半期に該当する。219-19・20 は甕である。219-19 は内面に当て具痕、外面に叩き痕がみられる。219-20 は淡灰色を呈し、外面に低い稜が認められる。

第220 図の1～4 は土師器である。220-1 は製塩土器の底部で、ハの字状に開き、外面にわずかにハケメがみられる。220-2 は甕の口縁端部、220-3 は甕の把手である。220-4 は移動式竈の焚き口で、端部は破損している。

220-5～7 は瓦である。220-5・6 は丸瓦で、220-5 は玉縁部である。いずれも凹面に布目圧痕が認められる。220-7 は平瓦である。凹面に布目痕と工具による叩き痕がみられ、凸面は縄叩き痕をナデ消している。この3 点は古代の瓦である。

220-8・9 は青銅製の容器と思われる破片である。厚さは1.5 mmと薄い。220-10 は青銅製品で器種は不明である。上部に円形の穴があり、飾り釘の一部の可能性が考えられる。

220-11・12 は鉄製品である。220-11 は断面は四角を呈する釘である。220-12 の鉄製品は、一方が錆ぶくため破裂している。断面は四角い筒状で、器種は不明である。

220-13 は黒曜石の石鏝で一部を欠いている。220-14 は、径2.0 cm、厚さ0.9 cmを測る水晶製の鉢石状石製品である。220-15 は砥石で、使用痕が顕著に認められる。220-16 は水晶の原石で、高さ5.4 cm、幅4.6 cmを測る。

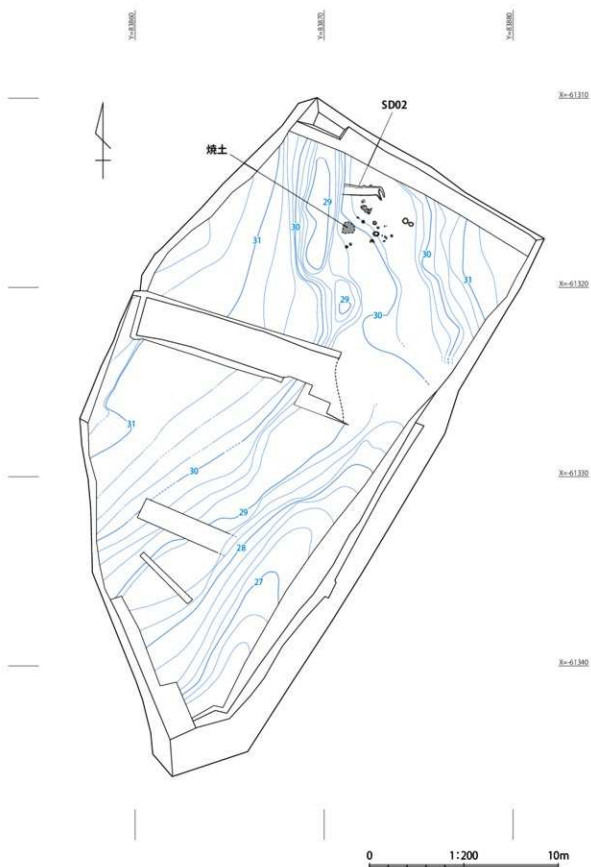
第6項 第2遺構面(第221図)

第2 遺構面は調査区北側中央付近で検出した遺構面である。調査区北壁際にトレンチ (T3) を入れて土層観察を行った結果、第1 遺構面下に古墳時代の遺物包含層 (第194 図V層) が確認され、その下に遺構面が検出された。包含層の掘削後に精査を行うと、溝やピット、焼土が検出され、遺構面直上から土師器の甕や甕が出土したことから、この面を第2 遺構面として調査を実施した。

1.SD02(第222図)

規模と形態

SD02 は調査区北側中央、B1 区で検出した溝である。長さ1.8 m、幅40 cm、深さ3 cmを測り、検出面標高は30.45 mである。溝は東西方向にみられ、東端はL 字状に曲がり、二つに分かれている。埋土は褐灰色土で、遺物は出土していない。



第 221 図 第 2 遺構面遺構配置図

2.柱穴(第222・223図)

規模と形態

調査区北側中央 B2 区で、5 個の柱穴が検出された。柱穴の平面形は円形を呈し、規模は径が 10 ～ 28cm、深さは 5 ～ 10cmを測り、深さが浅いことから削平されていると思われる。遺物は出土していない。

3.焼土(第222・224図)

規模と形態

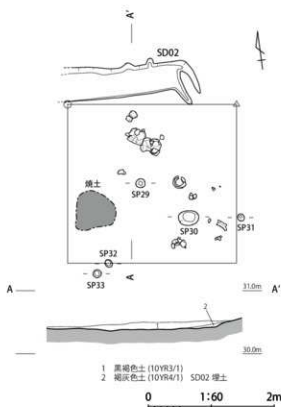
焼土は SD02 の南側で検出され、南北 48cm、東西 62cmを測り、平面形は楕円形を呈する。

4.第2遺構面遺物出土状況(第224図)

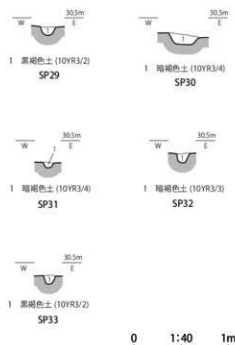
遺構面直上から土師器の甕と甔が出土している。これらの土器は焼土を中心として半径約 2.0m 以内に弧を描くように点在しており、口縁を下にして伏せたもの、横倒しになったものなどその場所で壊れたような状況を呈していた。

第2遺構面出土遺物(第225図)

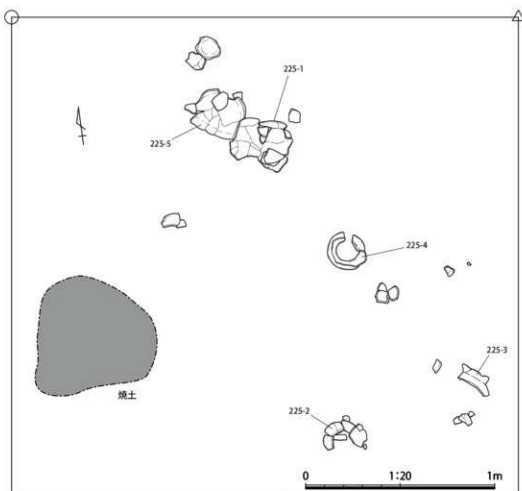
第 225 図は第 2 遺構面から出土した土師器である。225-1～4 は甕、225-5 は甔である。225-1 の器壁は厚く、口縁は緩く屈曲して二重口縁が退化した形態を示す。調整は外面にハケメ、内面にヘラケズリを施す。225-2～4 は単純口縁の甕で、いずれも口縁がくの字状に開くものである。225-2 は口縁端部に外傾する平坦部をもつ。225-3の口縁は内湾気味に開き、胴部外面にハケメを、内面にヘ



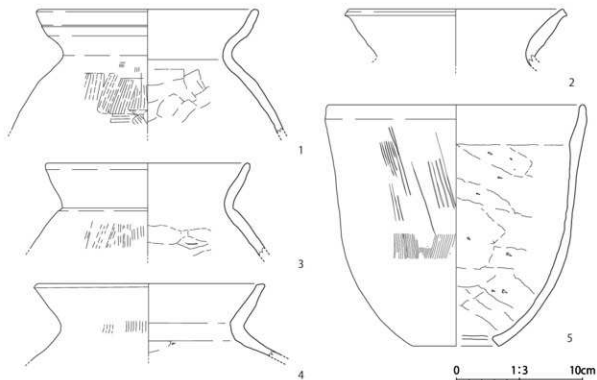
第 222 図 第 2 遺構面実測図



第 223 図 第 2 遺構面柱穴断面図



第 224 図 第 2 遺構面遺物出土状況図



第 225 図 第 2 遺構面出土遺物実測図

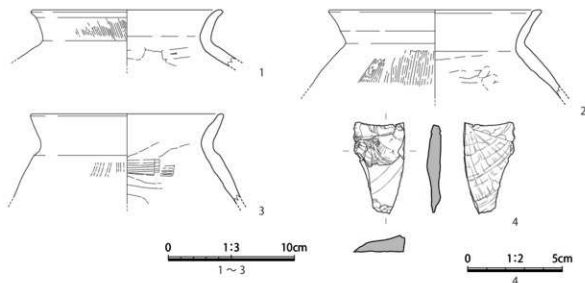
ラケズリを施している。225-4 の口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は平坦を呈する。頸部外面にハケメが、胴部内面にヘラケズリがみられる。225-5 は口径 20.5cm、器高 19.2cm を測る甗である。内面にヘラケズリ、外面にハケメを施している。225-1 は古墳時代中期後半、225-2～4 は中期に相当するものと思われ、第2遺構面の時期は古墳時代中期後半に相当する。

第2遺構面の性格と時期

第2遺構面ではSD02・柱穴・焼土・土師器を検出した。SD02や柱穴は建物に伴う可能性が高く、また、焼土を囲むように甕や甗の煮炊き具が出土していることから生活の痕跡が認められる。建物の復元はできなかったが遺構・遺物の検出状況からすると第2遺構面は古墳時代中期後半における機能面と考えられる。第2遺構面上の土層から古墳時代中期後半の遺物が多く出土していることから、本遺跡が位置する谷の緩斜面にはほかにも建物が存在した可能性は考えられ、それらの遺構は中世において削平されたのかもしれない。

第7項 第2遺構面 遺構外出土遺物(第226図)

第226図は第2遺構面上の堆積土(第194図V層)から出土した土師器(226-1～3)と基盤層(第194図VI層)から出土した黒曜石(226-4)である。226-1～3はいずれも単純口縁の甗である。226-1は短く外反する口縁で、端部は外傾する平坦面をもつ。口縁外面にハケメを、胴部内面にヘラケズリを施す。226-2は口縁がくの字状を呈し、端部は平坦を呈する。胴部外面にハケメを、内面にヘラケズリをしている。226-3は口縁が内湾気味に立ち上がり、端部は内傾する。肩部は張らず、なだらかに胴部へ移行するタイプのもので、226-1・2より後出するものと考えられる。胴部外面にハケメを、内面に横方向の工具によるナデとヘラケズリを施している。これらの甗は古墳時代中期から後期に属すると思われる。226-4はB2区の基盤層から出土した黒曜石の剥片である。長さ4.7cm、厚さ0.9cmを測り、一部に打撃痕が認められる。



第226図 第2遺構面遺構外出土遺物実測図

第3節 小結

調査の結果、縄文時代、古墳時代中期、古代から中世前半の遺構と遺物が検出された。本節ではこれらの調査成果に基づき、第1項で岩井手谷遺跡の変遷と様相を整理し、第2項で遺物の様相について述べてまとめた。以下、調査成果に基づき、各遺構を時期ごとに整理し、その様相をみていきたい。

第1項 岩井手谷遺跡の遺構の変遷と様相

岩井手谷遺跡は丘陵谷部と緩斜面に立地している。遺構面2面の調査を行い、縄文時代・古墳時代中期後半・古代～中世前半の遺構が検出された。今回の調査において検出した主な遺構を時期別に表20に示した。

縄文時代や古墳時代の遺構は少なく、検出した遺構の多くは古代から中期前半の掘立柱建物跡・柱穴・溝である。また、調査区北西側や東側においては谷底を流れていた自然流路が確認され、多数の遺物が出土している。以下、調査成果に基づき、各遺構を時期ごとに整理し、その様相をみていきたい。

1. 縄文時代(第227図)

岩井手谷遺跡における縄文時代の遺構としては、調査区中央の西端で検出したSK01のみである。土坑底面に円形のピットを伴うことから狩猟用の落とし穴と考えられ、これまでの調査例から縄文時代と推定される。また、直接遺構の時期を示すものではないが、調査区内から磨石や黒曜石の石鏃が出土しており、同時期の所産であろう。

このような落とし穴遺構は、周辺では同じ丘陵上に位置する奥宇田瀬遺跡や勝負遺跡で確認されている。また、本遺跡の北側にある馬橋川流域の石台遺跡では縄文土器や晩期の炭化米が検出されている。なかでも勝負遺跡は本遺跡が立地する丘陵の北側に位置し、縄文時代後期の竪穴住居跡や縄文土器、石器が出土している。農耕用の石器が多く出土していることから、勝負遺跡の縄文人は少なくとも一定期間当該地で生活や農耕を行っていたと考えられている。周辺遺跡の状況からすると、本遺跡や奥宇田瀬遺跡の落とし穴は勝負遺跡を活動拠点として生活する人々の狩猟対象地と推察される。

表20 岩井手谷遺跡主な遺構・出土遺物一覧

時期	検出遺構					出土遺物
	掘立柱建物 (SB)	溝 (SD)	柱穴列 (SA)	土坑 (SK)	自然流路 (NR)	
縄文時代				SK01		磨り石・石鏃
古墳時代中期		SD02				土師器
古代～中世前半	SB01～04	SD01	SA01	SK02	NR01・02	土師器・須恵器 金属製品・石製品 青銅製品

2.古墳時代中期(第227図)

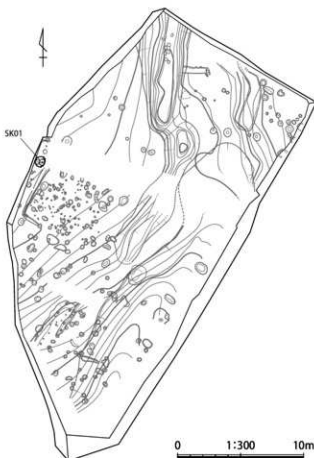
古墳時代の遺構としては、本調査区北側の第2遺構面で溝・柱穴・焼土・土師器が検出された。古墳時代中期後半の裏や甕の煮沸具が焼土を囲むように出土しており、この面が生活面として機能していたと考えられる。検出した柱穴から建物は復元できなかったが、斜面上方に溝を伴うことや焼土・遺物の出土状況からこの面に建物が存在した可能性が考えられる。第2遺構面の東側では同じ土層を基盤とするピットや溝を検出している。これらの遺構は遺物が出土していないため時期は不明で、本文中では第1遺構面-1としている。ただ、これらの遺構は基盤層からすると第2遺構面に伴う可能性が考えられることから古墳時代の遺構としても扱い掲載している。

今回の調査では他にも古墳時代中期や後期の遺物が出土している。出土量では中期が大半を占め、後期は数点である。弥生時代から古墳時代前期の遺構・遺物がないことも本遺跡の特徴のひとつかも知れない。

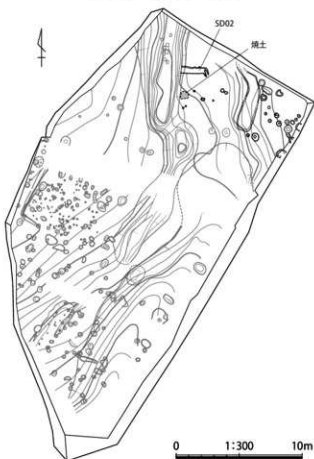
3.古代～中世前半(第228・229図)

第1遺構面-1、第1遺構面-2で検出した遺構である。第1遺構面-1では、建て替えを含めた掘立柱建物跡5棟(SB01～04)・柱穴列(SA01)・溝(SD01)・土坑(SK02)・自然流路(NR01)を、第1遺構面-2では自然流路(NR02)が検出された。

調査の結果、これらの遺構の時期は出土遺物から古代～中世前半であり、時期差が認められない。そのため、調査区南



第 227 図 縄文時代の様相



第 228 図 古墳時代中期の様相

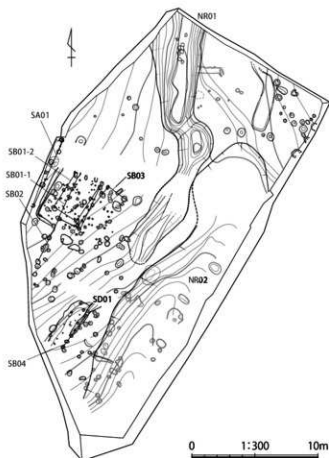
側から西側緩斜面の掘立柱建物・柱穴列・溝についてはNR02と併存していた可能性が想定され、その様相を第229図に示した。NR02とNR01は谷底を流れる自然流路で、出土遺物からすると若干の時期差はみられるが、いずれにしても谷底を自然流路が流れ、その周辺の緩斜面に建物が建ち、集落が形成されていたと考えられる。

掘立柱建物跡のうちSB01-1とSB01-2は同じ加工段に伴う建物跡で建て替えと考えられる。また、その西側に位置するSA01と加工段の主軸方位がほぼ同じであることから同時期に存在した可能性がある。建物の主軸方位をみると、SB01-1とSB02が、SB01-2、SB03、SB04がほぼ同じであるため併存していた可能性が考えられるが、SB01-2とSB03は隣接する位置関係にあり、同時併存はできないことから、建て替えと思われる。

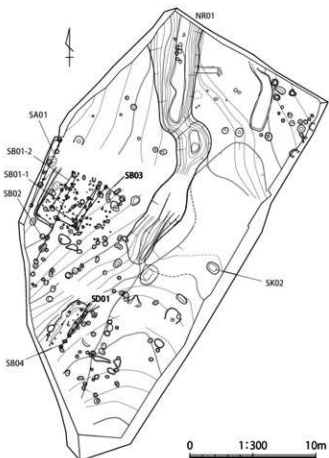
今回検出した柱穴のなかには他にも同時期の遺物が出土しているものがあり、復元した以外にも建物が存在した可能性が考えられることから調査区南側から西側緩斜面を中心に建物が展開していたと考えられる。

第230図にはNR02が埋没した後の様相を示した。NR02が埋没した後には柱穴や土坑が掘られ、これらの遺構は明らかにNR02とは新旧があるものの西側緩斜面の遺構と同一面で検出したものである。

このような状況から推察すると、古墳時代以降、古代に集落が形成され



第229図 古代～中世前半の様相 1



第230図 古代～中世前半の様相 2

NR01・02も存在した。その後、中世前半にかけて集落は継続し、NR01・02も徐々に埋没していった。そしてNR02埋没後に柱穴や土坑が掘られたとは考えられないだろうか。ただ、この面については今後どのように捉えるか検討が必要である。

第2項 出土遺物の様相

今回の調査では、須恵器・土師器・中世土師器・鉄製品・青銅製品・石製品・瓦が出土している。古墳時代の須恵器や土師器はあるものの圧倒的に古代から中世前半の土師器や須恵器が多い。

古墳時代の須恵器や土師器は、中期後半や後期の蓋環・高環・甕であるが数は少なく流れ込みによるものである。

遺物の多くは7世紀末から12世紀前半までの須恵器や土師器である。特に8世紀中頃の須恵器と11世紀後半～12世紀前半の土師器が多い傾向がみられ、そのなかには一般的な集落では見られないような遺物が散見される。須恵器では内面が滑らかで硯に転用された可能性がある環(219-13)や墨や漆、煤の付着した土器(218-16・219-7・8・11)、土師器では赤彩が施された小型の壺(214-7)や内面が黒い黒色土器(217-9)が出土している。黒色土器が出土している遺跡をみると、出雲東部では松江市の石台遺跡・名分塚田遺跡2、安来市の大坪3号墳(土城内)・陽徳寺遺跡が確認される。これらのうち、岩井手谷遺跡と同様の高台の付く環は陽徳寺遺跡(2区堤底部)と名分塚田遺跡より出土している。名分塚田遺跡のものは奈良時代後半から平安時代前半に相当し、本遺跡のものと同時期と思われる。また、赤彩が施された小型の壺は形態から判断すると生活用具とは考えにくく、別の用途、例えば祭祀用具が想定される。

他に瓦や青銅製の容器の破片が出土している。銅製の容器は仏教で用いる道具のひとつで、穴の開いた青銅製品も飾り釘の可能性が考えられる。

このように本遺跡から出土した遺物をみると、一般的な集落では出土しないような仏教や祭祀に関わる遺物がみられ、山代郷北新造院との関連性が窺われる。

第3項 結語

以上、岩井手谷遺跡の遺構と遺物の様相について述べた。本遺跡では縄文時代や古墳時代中期後半に人的活動が行われてはいるが、主となる時期は古代から中世前半である。特に8世紀中頃と古代末から中世前半において人々の活動が活発であったと推察される。

本遺跡の南東側には山代郷北新造院(来美廃寺)が所在しており、7世紀後半から建立され、11世紀～12世紀に火災により廃寺となっている。本遺跡から出土した遺物は山代郷北新造院の時期と重なり、そのなかの8世紀中頃と古代末から中世前半の遺物は新造院の全盛期と廃絶時期に相当している。⁽⁴⁾遺跡の位置や出土遺物、また12世紀前半以降の遺物がないことからすると、本遺跡は新造院に関連する仏教施設とは言いが、関係性のある遺構の可能性が考えられる。

今回の調査により、新造院周辺における様相の一端を垣間見ることができた。古墳が注目される当地域において古代から中世前半の遺構や遺物が確認されたことは有意義であり、今後の発掘調査事例

の増加によって当地域周辺における古代から中世の歴史がさらに明らかになることを期待したい。

註

- (1) 文化財調査コンサルタント株式会社 渡邊正巳氏のご教示による。
- (2) (1) に同じ
- (3) 田中琢 1967 『古代・中世における手工業の発達 (4) 畿内』『日本の考古学Ⅳ歴史時代(上)』
黒色土器は、土師器の表面特に内面を丁寧にみがきあげ、炭素を吸着させて漆黒色とした土器である。本遺跡から出土した土器は、田中琢氏の分類する黒色土器 A 類に相当する。A 類は 8 世紀中頃に少量あらわれ、9 世紀～10 世紀にかけて多くみられる。
- (4) 鳥根県教育庁 埋蔵文化財調査センター 林健亮氏のご教示による。

参考文献

- 建設省松江国道工事事務所 1995 『陽徳遺跡・平ラ1遺跡』
建設省松江国道工事事務所 鳥根県教育委員会 1996 『徳見津遺跡・日廻遺跡・陽徳寺遺跡』
木次町教育委員会 1995 『妙見山遺跡』
鳥根県教育委員会 2007 『南外2号墳・勝負遺跡』
鳥根県教育委員会 1986 『石台遺跡』
鳥根県鹿島町教育委員会 1987 『講武地区県営運動場整備事業発掘調査報告書3 名分塚田遺跡2』
鳥根県教育委員会 2006 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書17 史跡出雲国府跡 日岸田地区の発掘調査1-4-』
日本道路公団中国支社 鳥根県教育委員会 2002 『堤平遺跡』
鳥根県教育委員会 2009 『史跡山代郷北新造院整備事業報告書』

土器観察表 (1)

遺物 番号	グリッド	遺構名・ 出土土層	種類	器種・部位	法量 (cm)		調整・文様の特徴			色調	備考
					口徑	底徑	高さ	調整・文様の特徴	焼成		
191-1	—	試掘 s01	土師器	皿	—	—	(1.3)	外 内 施化、わずかに回転糸切り痕 施化	良好	褐色	古代・中世
191-2	—	試掘 s01	土師器	無高台付	(12.2)	(6.8)	4.0	外 内 回転ナデ、静止ナデ 回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第2型式 7c 末～8c 第1四半期
196-1	D4	SB01-1・ 之覆土	土師器	長頸瓶	—	—	(4.9)	外 内 回転ナデ、沈線2本 回転ナデ、指頭正瓶 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色～褐色	出雲国府編年第2～3型式 7c 末～8c 第2四半期
196-2	D3	SB01-1・ 之覆土	土師器	高台付皿	—	(8.8)	(1.4)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕ナデ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第3型式 8c 第2四半期
196-3	D3	SB01-1・ 之覆土	土師器	無高台付	(9.8)	(7.0)	4.7	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	良好	にぶい赤褐色 ～灰色	出雲国府編年第3型式 8c 第2四半期
196-4	D4	SB01-1・ 之覆土	土師器	甕	—	—	(11.5)	外 内 叩き痕 当て具痕	普通	灰色	内面・側面磨りか
196-5	D4	SB01-1・ 之覆土	土師器	高台付皿	—	(8.9)	(4.2)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	普通	黄褐色	出雲国府編年第8型式 10c 後半～11c 前半
196-6	D6	SB01-1・ 之覆土	土師器	無高台付	(11.0)	4.6	4.1	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	普通	褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
196-7	D4	SB01-1・ 之覆土	土師器	無高台付	(10.0)	(5.4)	2.5	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	普通	褐色～黄褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
196-8	D4	SB01-1・ 之覆土	土師器	瓶	—	(11.7)	(7.2)	外 内 ハケム後ナデ 斜め・縦方向へラケズリ	普通	にぶい黄褐色 ～褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
198-1	D4	SB01-1	土師器	無高台付	9.9	5.2	2.4	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	良好	黄褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
198-2	D4	SB01-1	土師器	無高台付	(10.0)	(5.5)	2.2	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	良好	黄褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
198-3	D4	SB01-1	土師器	無高台付	—	7.6	(2.5)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	良好	褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
198-4	D4	SB01-1	土師器	無高台付	—	(6.7)	(2.7)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	普通	褐色～黄褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
198-5	D4	SB01-1	土師器	無高台付	—	6.2	(3.6)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	良好	浅黄褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
201-1	D5	SB03	土師器	無高台付	—	—	(8.8)	外 内 回転糸切り痕 不明	普通	黄褐色	古代～中世
203-1	D5	SB04	土師器	高台付皿	—	(5.6)	(2.7)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	にぶい黄褐色	出雲国府編年第6～7型式 9c 中～10c 前半
203-2	D5	SB04	土師器	高台付皿	—	5.4	(2.3)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	不良	黄褐色	出雲国府編年第6～7型式 9c 中～10c 前半
203-3	D5	SB04	土師器	無高台付	—	5.0	(2.4)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	普通	黄褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
203-4	D5	SB04	土師器	無高台付	—	(6.3)	(2.1)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ	良好	褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
205-1	E3	SA01	土師器	瓶	—	—	(2.7)	外 内 回転ナデ 施化	普通	淡黄褐色	古代～中世
205-2	E3	SA01	土師器	無高台付皿	—	(5.2)	(1.7)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 施化	普通	浅黄褐色	古代～中世
207-1	D5	SD01	土師器	高台付	(14.3)	—	(5.1)	外 内 ココナデ ハケム、放射状の暗文	普通	褐色～黄褐色	古墳時代中期
207-2	D5	SD01	土師器	高台付	—	(9.0)	(4.0)	外 内 施化 ハケム	不良	褐色	古墳時代中期
207-3	D5	SD01	土師器	甕	(16.0)	—	(10.4)	外 内 ハケム、ココナデ へラケズリ、ココナデ	普通	にぶい褐色 ～黒色	古墳時代中期～後期
207-4	D5	SD01	土師器	無高台付	—	(5.2)	(1.3)	外 内 回転糸切り痕 回転ナデ	不良	褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半
210-1	B5	SK02	土師器	無高台付	12.6	9.1	5.4	外 内 回転ナデ、静止ナデ 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	瀬田川沿いに分布、横断面 出雲国府編年第2型式 7c 末～8c 第1四半期
210-2	B5	SK02	土師器	甕	—	—	(7.5)	外 内 叩き痕 当て具痕	良好	灰色	把手がつく
210-3	B5	SK02	土師器	土製支脚	—	(12.0)	(8.9)	外 内 縦方向へラケズリ、指頭正瓶 ハケム	普通	浅黄褐色～ 褐色	
212-1	C2	NR01	土師器	蓋	(13.0)	—	(2.3)	外 内 回転ナデ、静止ナデ 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	出雲国府編年第3～4型式 8c 第2四半期～第4四半期
212-2	C2	NR01	土師器	無高台付	—	(8.7)	(1.5)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	出雲国府編年第3～4型式 8c 第2四半期～第4四半期
212-3	C2	NR01	土師器	瓶	—	(12.4)	(5.9)	外 内 ナデ ココナデ、工具痕	不良	灰色～淡黄色	
212-4	C2	NR01	土師器	高台付皿	—	—	(1.5)	外 内 回転ナデ ココナデ	普通	褐色	出雲国府編年第8型式 10c 後半～11c 前半
214-1	E3	SP23	土師器	甕	—	—	(3.3)	外 内 ココナデ 回転ナデ	普通	褐色	古墳時代中期～後期
214-2	D4	SP24	土師器	高台付皿	—	(7.4)	(2.5)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	普通	褐色	古代 底中央に穴 (径1.6cm) 内面に篋付痕
214-3	C6	SP28	土師器	高台付皿	—	8.1	(3.6)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	普通	褐色	出雲国府編年第6型式 9c 中～10c 後半
214-4	D6	SP27	土師器	無高台付	(9.4)	5.0	2.4	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 施化	不良	黄褐色	出雲国府編年第9型式 11c 後半～12c 前半

土器観察表(2)

遺物番号	グリッド	遺構名・出土土層	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴			色調	備考
					口径	底径	高さ	調整・手法		焼成		
214-5	D6	SP27	土師器	無高台皿	10.2	4.8	2.6	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	良好	棕色に近い	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	
214-6	D4	SP25	土師器	無高台杯	—	(8.0)	(3.3)	外 内 回転ナデ、回転糸切り痕 回転ナデ、静止ナデ	良好	棕色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	
214-7	D6	SP26	土師器	小型の壺	—	6.2	(7.8)	外 内 回転ナデ、 回転糸切り痕 回転ナデ	良好	浅黄棕色	底部外面に丹塗り。古代	
217-1	C5	NR02	土師器	高杯	—	—	(2.5)	外 内 ハケメ 風化	良好	黄棕色	接合部に打撃痕・割裂痕 古墳時代前期～中期	
217-2	C5	NR02	土師器	高杯	—	(10.0)	(5.1)	外 内 ハケメ しぼり痕	普通	棕色	古墳時代中期	
217-3	A3	NR02	土師器	高杯	—	(10.2)	(4.8)	外 内 ハケメ ヘラケズリ後ナデ	普通	棕色	古墳時代中期	
217-4	C5	NR02	土師器	甕	(11.1)	—	(5.4)	外 内 ハケメ ヘラケズリ、指頭圧痕	良好	黄褐色	単純口縁・布留系腰 中座前半	
217-5	C5	NR02	土師器	甕	(16.0)	—	(7.5)	外 内 ヨコナデ、ハケメ ヘラケズリ	良好	浅黄色	単純口縁 古墳時代中期	
217-6	C5	NR02	土師器	甕	(13.5)	—	(5.2)	外 内 ヨコナデ、ハケメ ヨコナデ、ヘラケズリ	普通	棕色	古墳時代後期以降	
217-7	C6	NR02	黄赤器	坏蓋	13.6	—	5.1	外 内 回転ナデ、 回転ヘラケズリ 直線、変部 回転ナデ、静止ナデ	普通	灰色	大谷編年出雲2期	
217-8	C6	NR02	黄赤器	無高台杯	(12.0)	(8.6)	4.1	外 内 回転ナデ、 回転糸切り後ナデ 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第5型式 8c中葉～9c前半	
217-9	C5	NR02	土師器	高台付杯	—	(7.5)	(5.3)	外 内 回転ナデ 内底、ヘラミガキ	良好	外 浅黄棕色 内 灰色	黒色土、一部に朱付着 9c～10c	
217-10	C7	NR02	土師器	高台付杯	—	7.7	(5.3)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	普通	黄棕色	古代、9c～10cか	
217-11	C7	NR02	土師器	高台付杯か皿	—	—	(2.0)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	浅黄色	出雲国府編年第8型式 10c後半～11c前半	
217-12	D6	NR02	土師器	無高台杯	—	5.5	(2.4)	外 内 回転ナデ、 回転糸切り痕 風化	普通	棕色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	
218-1	A2	Ⅱ層	土師器	高杯	—	—	(3.1)	外 内 ヨコナデ ヨコナデ	普通	黄棕色	古墳時代中期	
218-2	C6	Ⅱ層	土師器	高杯	—	(9.2)	(6.9)	外 内 ハケメ、ヘラミガキ 工具痕、しぼり痕、指押さえ	普通	棕色	古墳時代中期	
218-3	C5	Ⅱ層	土師器	甕	—	—	(4.2)	外 内 ヨコナデ ヨコナデ	普通	にぶい黄棕色	古墳時代中期 二重口縁	
218-4	D7	Ⅱ層	土師器	甕	(18.1)	—	(4.7)	外 内 ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	普通	外 にぶい黄褐色 内 にぶい黄棕色	古墳時代中期 二重口縁	
218-5	A2	Ⅱ層	土師器	甕	(20.5)	—	(10.1)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	不良	黄棕色	古墳時代中期 二重口縁	
218-6	A2	Ⅱ層	土師器	甕	(17.8)	—	(5.1)	外 内 ヨコナデ ヨコナデ、ヘラケズリ	普通	黄棕色	古墳時代中期 単純口縁	
218-7	A2	Ⅱ層	土師器	甕	(16.0)	—	(5.7)	外 内 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	普通	黄棕色	古墳時代中期 単純口縁	
218-8	B3	Ⅱ層	土師器	甕	(16.2)	—	(9.9)	外 内 ヨコナデ ヘラケズリ、ヨコナデ	普通	外 棕色 内 にぶい黄褐色	古墳時代中期 単純口縁	
218-9	A3	Ⅱ層	土師器	甕	(22.9)	—	(4.4)	外 内 ヨコナデ ヨコナデ	普通	棕色	古墳時代後期以降	
218-10	A2	Ⅱ層	土師器	坏	12.7	—	5.7	外 内 ヨコナデ ヘラケズリ後ナデ ヨコナデ	普通	黄棕色	古墳時代中期	
218-11	C5	Ⅱ層	土師器	高台付杯	—	(9.2)	(3.0)	外 内 ナデ ナデ	普通	棕色	出雲国府編年第6～7型式 9c中葉～10c前半	
218-12	C5	Ⅱ層	土師器	高台付杯	—	(6.6)	(2.0)	外 内 回転ナデ 回転ナデ	良好	棕色	出雲国府編年第6～7型式 9c中葉～10c前半	
218-13	D7	Ⅱ層	土師器	高台付杯	—	(7.8)	(3.0)	外 内 回転ナデ 回転糸切り後ナデ消し 回転ナデ	普通	棕色	出雲国府編年第6～7型式 9c中葉～10c前半	
218-14	C5	Ⅱ層	土師器	柱状高台付杯	—	7.8	(1.8)	外 内 回転ナデ、 回転糸切り痕 回転ナデ	普通	淡黄色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	
218-15	D6	Ⅱ層	土師器	無高台皿	—	4.5	(1.3)	外 内 回転ナデ、 回転糸切り痕 回転ナデ	普通	黄棕色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	
218-16	C5	Ⅱ層	土師器	無高台杯	—	(5.0)	(2.1)	外 内 風化 回転ナデ	普通	にぶい黄棕色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半 内面に丹塗り	
218-17	D6	Ⅱ層	土師器	無高台杯	—	5.0	(1.8)	外 内 回転ナデ、 回転糸切り痕 回転ナデ	普通	棕色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	
218-18	C6	Ⅱ層	土師器	無高台杯	—	6.0	(2.0)	外 内 回転ナデ、 回転糸切り痕 回転ナデ	普通	棕色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	
218-19	C5	Ⅱ層	土師器	無高台杯	—	6.5	(1.9)	外 内 回転ナデ、 回転糸切り痕 回転ナデ	普通	淡黄色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	
218-20	C7	Ⅱ層	土師器	無高台杯	—	(7.5)	(2.3)	外 内 回転ナデ、 回転糸切り痕 回転ナデ	普通	黄棕色	出雲国府編年第9型式 11c後半～12c前半	

土器観察表 (3)

遺物 番号	グリッド	遺構名・ 出土土層	種類	器種・部位	法量 (cm)		調査・文様の特徴			色調	備考
					口徑	底徑	器高	調査・手法	焼成		
219-1	B3	Ⅱ層	須恵器	有蓋高坏	12.0	—	(4.2)	外 回転ナデ、カキ目 内 回転ナデ	不良	灰色	大谷編年出雲 1 期
219-2	C5	Ⅱ層	須恵器	坏身	(12.8)	—	(3.1)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	良好	灰色	大谷編年出雲 4 期、 愛宕山 14.0cm
219-3	B2	Ⅱ層	須恵器	蓋	(12.8)	—	3.3	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲国府編年第 4 型式 8c 第 3 四半期～第 4 四半期
219-4	D2	Ⅱ層	須恵器	蓋	(17.7)	—	3.5	外 回転ナデ、回転ヘラケズリ 内 回転ナデ、静止ナデ	普通	にふい・赤褐色	出雲国府編年第 2 型式 8c 第 3 四半期～第 4 四半期
219-5	B1	Ⅱ層	須恵器	蓋	(21.0)	—	(1.5)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	良好	灰褐色	出雲国府編年第 2 型式 8c 第 3 四半期～第 4 四半期
219-6	B1	Ⅱ層	須恵器	高台付坏	—	(8.0)	(4.2)	外 回転ナデ、静止糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰褐色	出雲国府編年第 2 型式 7c 末葉～8c 第 1 四半期 内面に準付着
219-7	C5	Ⅱ層	須恵器	高台付坏	—	(8.0)	(2.1)	外 回転ナデ、静止糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第 2 型式 7c 末葉～8c 第 1 四半期 内面に準付着
219-8	B4	Ⅱ層	須恵器	無高台坏	—	—	(2.1)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	やや不良	灰色	出雲国府編年第 2 型式 7c 末葉～8c 第 1 四半期 内面に準付着
219-9	B2	Ⅱ層	須恵器	無高台坏	(12.3)	(7.3)	4.7	外 回転糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第 2 型式 7c 末葉～8c 第 1 四半期 8c 第 2 四半期
219-10	B1	Ⅱ層	須恵器	無高台坏	(13.4)	(8.6)	4.3	外 回転ナデ、回転糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰褐色	出雲国府編年第 4 型式 8c 第 3 四半期～第 4 四半期
219-11	B1	Ⅱ層	須恵器	無高台坏	—	(9.2)	(2.3)	外 回転ナデ、回転糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	黄褐色に近い	出雲国府編年第 4 型式 8c 第 3 四半期～第 4 四半期 内面に準付着
219-12	B1	Ⅱ層	須恵器	無高台坏	(11.8)	(8.8)	3.6	外 回転ナデ、回転糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	不良	灰色	出雲国府編年第 4 型式 7c 後葉 面に配用か
219-13	B3	Ⅱ層	須恵器	高台付坏か蓋	—	(9.3)	(3.8)	外 回転ナデ、回転糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	不良	淡灰色	出雲国府編年第 1 型式 7c 後葉 面に配用か
219-14	C5	Ⅱ層	須恵器	高台付皿	—	15.0	(2.1)	外 風化 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	出雲国府編年第 4 型式 8c 第 3 四半期～第 4 四半期
219-15	B2	Ⅱ層	須恵器	小型の壺	—	(9.1)	(5.1)	外 回転ナデ、静止糸切り痕 内 回転ナデ、静止ナデ	良好	灰色	外面に弧状のヘラ記号
219-16	C5	Ⅱ層	須恵器	壺	—	(9.3)	(5.3)	外 ヘラケズリ、回転糸切り痕 内 回転ナデ	普通	灰色	
219-17	D6	Ⅱ層	須恵器	長頸瓶	9.2	—	(9.9)	外 回転ナデ、沈線 2 本 内 回転ナデ	良好	褐色	出雲国府編年第 3 型式 8c 第 3 四半期
219-18	B1	Ⅱ層	須恵器	壺	—	—	(4.2)	外 回転ナデ、ヘラケズリ 静止糸切り痕ナデ 内 回転ナデ	良好	灰色～褐色	出雲国府編年第 3 型式 8c 第 3 四半期
219-19	B1	Ⅱ層	須恵器	甕	—	—	(4.8)	外 引き割、ナデ 内 当て具風、ナデ	良好	灰色	
219-20	C5	Ⅱ層	須恵器	甕	—	—	(5.0)	外 回転ナデ 内 回転ナデ	普通	淡灰色	
220-1	C2	Ⅱ層	土師器	製塩土器	—	7.2	(3.2)	外 ハケメ ナデ	普通	にふい・黄色	
220-2	C5	Ⅱ層	土師器	甕	—	—	(2.8)	外 ハケメ ナデ	普通	淡黄色	径 0.5cm の孔あり
220-3	D6	Ⅱ層	土師器	甕の把手	長さ (5.0)/ 幅 3.3/ 厚さ 2.9	—	—	外 ヘラケズリ、指頭圧痕 内 ナデ	普通	棕色～黄棕色	
220-4	A3	Ⅱ層	土師器	甕の口縁	長さ (13.2)/ 幅 (5.0)/ 厚さ (4.1)	—	—	外 ナデ 内 ナデ	普通		
225-1	B2	SD02	土師器	甕	(17.2)	—	(9.9)	外 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ 内 風化	普通	外 黄褐色～黒褐色 内 にふい・黄褐色	二重口縁 古墳時代中期後半
225-2	B2	SD02	土師器	甕	(17.6)	—	(4.6)	外 ヨコナデ 内 風化	普通	淡灰色	単縁口縁 古墳時代中期
225-3	B2	SD02	土師器	甕	(16.0)	—	(7.4)	外 ハケメ、ヨコナデ 内 ヘラケズリ	普通	褐色	単縁口縁 古墳時代中期
225-4	B2	SD02	土師器	甕	18.3	—	(6.2)	外 ハケメナデ、ヨコナデ ヘラケズリ	普通	褐色	単縁口縁 古墳時代中期
225-5	B2	SD02	土師器	甕	(20.5)	(7.0)	19.2	外 ハケメ、ヨコナデ ヘラケズリ	良好	褐色	
226-1	B3	V層	土師器	甕	(14.8)	—	(4.5)	外 ハケメ ヘラケズリ	普通	にふい・黄褐色	単縁口縁 古墳時代中期
226-2	B2	V層	土師器	甕	(17.0)	—	(7.1)	外 ヨコナデ 縦方向のハケメ ヘラケズリ、ヨコナデ	普通	黄褐色～黒褐色	単縁口縁 古墳時代中期
226-3	B1	V層	土師器	甕	(15.0)	—	(7.2)	外 ヨコナデ ハケメ 内 工具によるヨコナデ ヘラケズリ	良好	褐色	単縁口縁 古墳時代後期以降

瓦観察表

遺物番号	グリッド	遺構名・出土土層	種類	法量 (cm)			重量 (g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
Z20-5	A2	Ⅱ層	丸瓦	(12.8)	(4.7)	1.25	24.12	玉縁部、凹面に布目圧痕 古代
Z20-6	A2	Ⅱ層	丸瓦	(6.5)	(6.4)	2.6	134.09	凹面に布目圧痕 古代
Z20-7	C2	Ⅱ層	平瓦	(11.0)	(12.5)	3.9	768.00	凹面は工具による成形痕、布目痕 凸面は縄文きねをナゲ削す 古代

石製品観察表

遺物番号	グリッド	遺構名・出土土層	種類	石材	法量 (cm)			重量 (g)	色調	備考
					最大長	最大幅	最大厚			
Z05-3	E3	SA01	磨石・凹石	—	11.9	9.0	4.3	617.00	灰白色	一部黒変
Z12-5	C2	NR01	石磨	黒曜石	2.7	1.8	0.4	1.04	黒色	
Z12-6	C2	NR01	石磨	黒曜石	1.95	1.55	0.25	0.74	黒色	
Z12-7	C2	NR01	磨製石斧	塩基性岩	(6.7)	(2.6)	3.9	93.34	灰白色	刃部に使用痕
Z20-13	B4	Ⅱ層	石磨	黒曜石	2.4	1.6	0.3	1.33	黒色	
Z20-14	C7	Ⅱ層	棒石状石製品	水晶	2.0	2.0	0.9	4.69	淡白色	古代
Z20-15	B2	Ⅱ層	礫石	凝灰岩	6.9	4.0	3.0	44.67	淡黄色	
Z20-16	D6	Ⅱ層	水晶の磨石	水晶	5.4	4.6	3.5	113.08	灰白色 (半透明)	
Z26-4	B2	Ⅵ層	剥片	黒曜石	4.7	2.7	0.9	9.88	黒色	未製品

金属製品観察表

遺物番号	グリッド	遺構名・出土土層	種類	材質	法量 (cm)			重量 (g)	備考
					最大長 (高)	最大幅	最大厚		
Z14-8	D6	SP27	長円磨(葉)	鉄	(5.7)	0.9	0.6	5.88	外面に径 1mm の融状のものが螺旋状に巻かれている。
Z20-8	D4	Ⅱ層	銅製の筒か	青銅	(0.75)	(3.0)	0.15	0.77	
Z20-9	D5	Ⅱ層	銅製の筒か	青銅	(0.8)	4.6	0.15	1.35	
Z20-10	D7	Ⅱ層	筒種不明	青銅	(1.1)	1.65	0.4	1.27	飾り釘か
Z20-11	D6	Ⅱ層	釘	鉄	(5.5)	2.2	1.5	18.30	
Z20-12	C5	Ⅱ層	筒種不明	鉄	(5.8)	1.1	1.3	24.07	

第7章 総括

これまで述べた通り、松江市東津田町工業団地造成事業地内において平成30(2018)年12月～令和2(2020)年10月に実施した樋岡古墳群・南外古墳群・奥宇田瀬遺跡・岩井手谷遺跡の4遺跡の調査を行った。各遺跡の時代をまとめると表21の通りとなる。

さて、今回調査を行った遺跡が所在する丘陵は、松江市を東西に流れる大橋川の南岸に位置する。当地の南側には『出雲国風土記』に「神名樋野」と称される茶白山や意宇川の下流に発達した沖積平野である意宇平野が所在している。当丘陵で人の痕跡が確認されるのは南外5号墳の旧表土下から出土した石器群における旧石器時代である。旧石器時代には遊動に伴う短期間の居留地として利用された可能性が高く、それ以後、縄文時代から中世前半まで人の痕跡を知ることができた。ただ、遺物のみの時期もあることから生活の様相が明らかでない時期もみられる。

当丘陵周辺には旧石器時代から各時期の遺跡が多く所在しており、以下では各時代においての当丘陵の利用状況について時代毎にみていきたい。

第1節 遺構と出土遺物の様相

1.旧石器時代

旧石器時代の遺構は確認されていないが、南外5号墳において旧石器時代の所産と推測される石器が出土している。この石器については第4章第4節第7項で検討を行った。ここではもう少し詳細に検討を行い、その性格について考えてみたい。なお、これより以下の石器番号は第105～107・110図の挿図番号を省略し、1～14の通し番号のみで記述する。

剥片剥離技術の特徴について(表22・23、第231～235図)

剥片剥離技術を考えるうえで、まずは剥片類の形状から見てみたい。表22は長幅比をドット分布

表21 各遺跡の遺構と遺物

遺跡名		旧石器	縄文	弥生	古墳	飛鳥～古代 (奈良・平安)	中世前半
樋岡古墳群			○	○	●	●	
南外古墳群	南外3号墳		○		●	○	
	南外4号墳			○	●		
	南外5号墳	○	○	○	●		
奥宇田瀬遺跡			●		●	●	
岩井手谷遺跡			●		●		●

●は遺構あり：○は遺物のみ

図にしたもので、補助線は長幅が2:1と1:1を表している。一見したところで、ほぼ補助線を前後する2群に分かれることがわかる。

まず前者は石刃に近い縦長の形態を示しており、グラフ上方の4点は接合資料で、それらより短い2点がやや小型の石刃状の剥片である。この縦長の一群は厚さを比べるとまた二の群に分かれる。

長厚比をドット分布にした表23を見ると、長さの割に薄いもの(7・8、12)と明らかに厚いもの(9・10、11)があることがわかる。9・10・11は接合資料で、厚い原因は打面の奥側に打撃点があることにある。接合資料の中で11が薄いのは、礫面をはがすことを目的としているために、打撃点が手前側にあるためと推測される。本来厚い剥片をとろうとした目的は、11が最終的に小口面全面を使って縦長の剥片を剥離していることから考えて、石刃状の縦長剥片を剥取する石核の素材を得ることにあると推測される。4点の資料からあえて剥片剥離工程を復元すると、「礫の分割」→「分割面の広く平坦な面から不要な礫面をとる」→「同じ平坦な面を打面に厚めの縦長剥片を剥離」→「厚めの剥片の小口面を作業面に同一打面から目的剥片をとる」、という流れになる。7・8の石刃状剥片がこの工程に沿ったものかどうかは確認できない。

次に長幅比が1:1前後の石器は、長さが60mm未満の小型の剥片で、厚さはいずれも15mm～20mm間にそろっている。1・5は13のような打面を転移して長幅比にあまり差が出ない剥片をとった石核が対応すると思われる。

一方2は上下とも礫面、3は湾曲したネガ面から割れ円錐が発生している不規則剥離の剥片、6は報文で記したように著しく風化したもので、13のような石核と対応するものではない。石材に応じて臨機的に剥離された、あるいは割れてしまった資料と考えられる。

まとめると、①分割礫の平坦な剥離面を打面にした分厚い縦長の素材(石核用)をとる技術、②剥片素材から石刃様の縦長剥片をとる技術、③打面を転

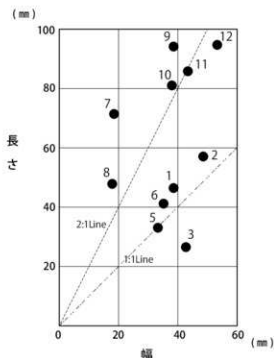


表22 出土剥片類長幅比

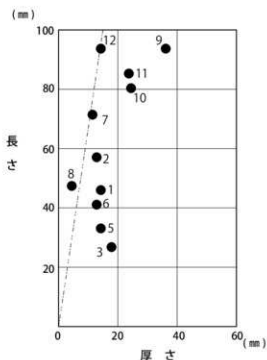
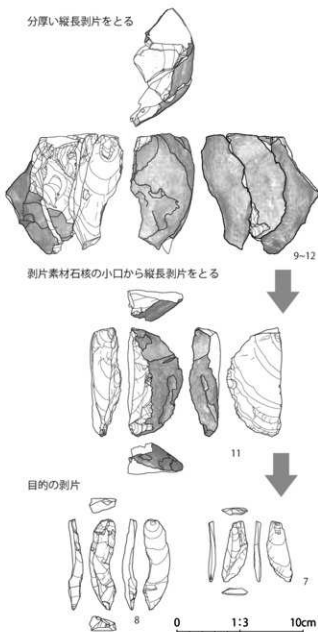


表23 出土剥片類長厚比

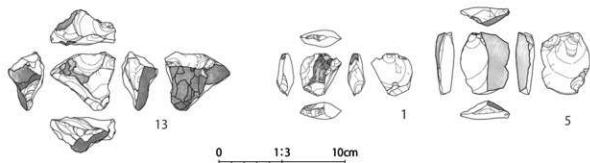
移しながら長幅比に大きな差のない剥片をとる技術、④システム化されない臨機的剥離、が存在したものと考えられる。層位的に年代が絞れないこと、典型的なツールが出土していないことなどから、位置づけが難しい資料である。ただ玉髓のみで構成されること、一定のシステムティックな剥片剥離技術を含むことから、後期旧石器時代の所産と考えてもよいだろう。

遺跡の性格について

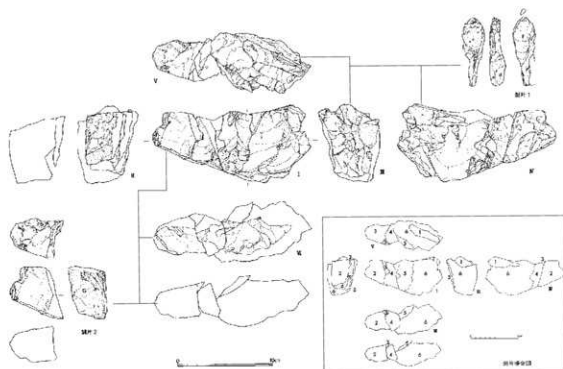
この地域では総体的に旧石器時代の資料が少ない中で、遺跡の性格を探ることは困難ではあるが、周辺の類例や地理的環境も含めて若干の検討をしてみたい。本遺跡の南約1.2kmの台地上にあたる下黒田遺跡では、表土下の黒褐色土下の茶褐色土から、接合資料3件を含み、玉髓のみを石材とする資料が出土している。そのうち6点の石器からなる接合資料は、不整六面体状に加工した玉髓石核の同一打面から、4点の剥片をとっている。そのうち2点は分厚い剥片で、剥片の小口面に小型縦長剥片が接合する。大雑把に見れば、南外5号墳下層の接合資料と類似した過程を経ている。礫面をはぐための剥片が出ていること、長幅比1:1程度や寸詰まりの不正剥片が伴う



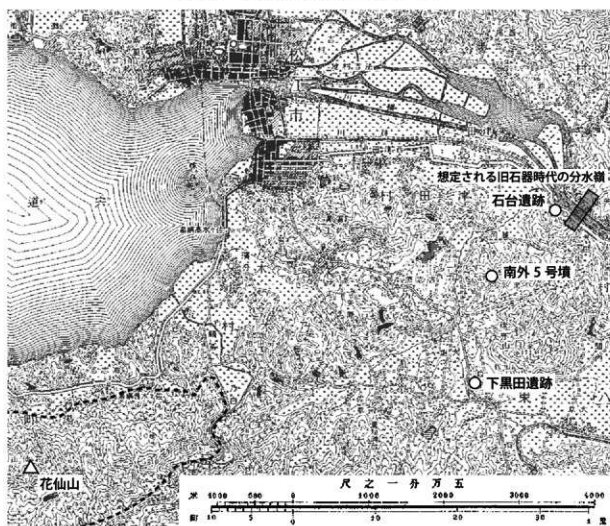
第231図 南外5号墳下層縦長剥片剥離過程想定図 (S=1:3)



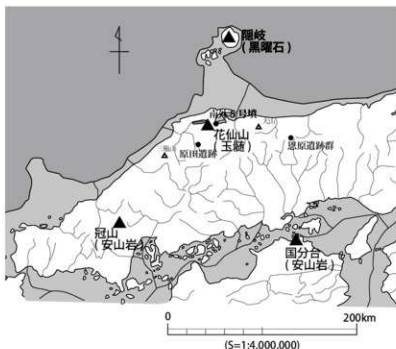
第232図 南外5号墳下層不定形剥片と対応すると想定される石核 (S=1:3)



第 233 図 下黒田遺跡出土石器接合資料 (S=1:3)



第 234 図 南外 5 号墳周辺の地形と周辺の遺跡 (明治 43 年地形図 国土地理院より)



第 235 図 中四国の主要な石材産地と主要な遺跡 (S=1:4,000,000)

号墳はまさにこの分水嶺につながる丘陵上にあり、その鞍部付近から 2km 弱の距離にあたる。鞍部(分水嶺)は中国山地方面から黒曜生産地の隠岐に向かう唯一のつながった尾根筋で、重要な遊動経路だった可能性が高い。一方で玉髓・瑪瑙類の大きな産地である花仙山は西に 5km という位置で、高低差も少なくアクセスのよい場所である。

分水嶺から川治いへ東西に向かう経路も、主要なルートだっただろう。玉髓や黒曜石が中国山地を越えて山陽の山間部の遺跡で出土しており、この 2 種の石材の広域流通が確認されている。特に西側の奥出雲町原田遺跡と東側の岡山県真庭市恩原遺跡群では、良好な火山灰堆積で複数の文化層や石器群のまとまりが検出されており、後期旧石器時代前半から終末期を通じて、玉髓や黒曜石が使われていることが明らかである。西側には中国山地の脊梁を越えた和知白鳥遺跡や段遺跡などでも玉髓が利用され、東側現海岸線にそう鳥取県大山町豊成叶林遺跡では接合資料を含む石器群の大部分が玉髓を用いている(1 点の黒曜石ナイフ形石器含む)。

黒曜石産地である隠岐へ向かう稜線上の主要ルートに位置し、東西の大河につながる谷頭(尾根鞍部)にあり、しかも玉髓という石材を補給できる松江市の矢田町周辺は、旧石器時代の遊動民にとって遊動経路の交差点であったと考えられる(稲田 1996、丹羽野 2018)。南外 5 号墳下層石器群や下黒田遺跡の石器群はツールを作わず、剥片剥離用の石核素材を生産する接合資料が主体であることを積極的に評価すると、遊動に伴う携帯用の石核素材を得るための短期間の居留地と評価できないだろうか。まだ根拠不十分ではあるが、玉髓を多用するこの地域の遺跡の在り方の一つとして考えてみたい。

2. 縄文時代

今回の調査で検出した縄文時代の遺構は奥宇田瀬遺跡と岩井手谷遺跡の落とし穴である。岩井手谷

ことも類似しており、同様にツールが含まれない。両遺跡を同時期とまでは言えないまでも、厚めの剥片素材の石核を生産している、という点では同様の性格を持っている可能性がある。

さて、至近距離にある二つの遺跡の立地環境を、広域的視点で眺めてみたい。当時、穴道湖・中海は存在せず、松江市の矢田渡し付近を分水嶺として、東西に大きな川が流れ、東は日野川、西は斐伊川につながっていた。南外 5

遺跡で1基、奥宇田瀬遺跡で14基、いずれも谷に面した斜面で検出している。また、南外3号墳や5号墳、樋岡古墳群で縄文時代後期や晩期の土器が少量出土している。

周辺における縄文時代の遺跡のなかで落とし穴についてみると、落とし穴の調査事例は乃木西廻遺跡・長廻遺跡・折原峠遺跡・折原上堤東遺跡・勝負遺跡で確認されている。乃木西廻遺跡は松江市上乃木の丘陵平坦面に位置する遺跡で24基の落とし穴が検出され、同じ丘陵上の長廻遺跡でも落とし穴が5基確認されている。折原遺跡・折原上堤東遺跡・勝負遺跡でも数基の落とし穴が確認されている。いずれの落とし穴も丘陵の尾根や緩斜面に位置しており、狩猟の場所は山側に位置しているようである。奥宇田瀬遺跡は緩斜面の下に湧水がある谷底があり、そこに集まる獣を狙ったものと思われる。

では、狩猟を行った人々はどこに住んでいたのか。当丘陵周辺の縄文時代の集落跡は勝負遺跡や石台遺跡で確認されている。勝負遺跡では縄文時代後期の建物跡1棟が検出され、遺物は土器のほか石製品も多く出土している。また、石台遺跡では後期や晩期を主体とする多量の土器のなかに靱痕土器があり、炭化米も出土している。遺物は他に石製品も多く、石鎌・石錐・石鏃・抉入石器などが出土していることから稲作農耕を行っていた可能性が示唆されている。勝負遺跡や石台遺跡は奥宇田瀬遺跡から直線距離にして500～700mの距離に位置しており十分活動域の範囲内に当たると考えられる。したがって、当丘陵の北側に居住域、南側に狩猟の場所といった利用状況が想定される。

また、大橋川北岸に目を転じると、近年の調査により縄文時代の遺構や遺物が確認され、若宮谷遺跡やシンコノ谷遺跡では谷底を埋める礫層中から縄文時代から弥生時代の遺物が出土している。また、松ノ前遺跡においては縄文時代晩期を中心とする時期の土器や石器、魚骨、獣骨が含まれており漁労や狩猟の様子が窺われる。朝酌菖蒲遺跡では縄文中期末～後期初頭の堅果物貯蔵穴1基が検出されている。これらの遺跡は山塊から大橋川に面した支谷の出口付近に位置しており調査成果から後ろの丘陵に集落が存在が窺われている。このような調査事例をみると、落とし穴が確認された遺跡は沿岸域から少し山手に入った丘陵上に位置しており、生活関連遺跡は沿岸域に近い丘陵に多いように思われる。縄文時代には大橋川両岸に集落が存在し、周辺の丘陵において狩猟・採集を行っている様子が窺われる。

3. 弥生時代

弥生時代では生活の痕跡を示す土器片は樋岡古墳群・南外4・5号墳で少量出土しているが、遺構は検出していない。遺物のなかで時期がわかるものは南外4号墳から出土した弥生時代中期後葉の甕だけである。

周辺で弥生時代の遺跡には、前述した石台遺跡や勝負遺跡がある。石台遺跡では弥生時代前期以降、中期から後期を中心として建物が造られ、勝負遺跡では弥生時代後期の竪穴建物跡が検出され、弥生時代後期以降集落が形成されている。南外4号墳から出土した甕片は人の痕跡を示すもので、時期的には石台遺跡と同時期であることから石台遺跡の人々の活動域が南側の南外4・5号墳あたりまで広がっていたと思われる。

集落以外では大橋川南岸の低丘陵に弥生時代後期から古墳時代へと変わる過渡期の四隅突出型墳丘

墓が確認される。奥宇田瀬遺跡の東側に位置する来美墳墓のほか大橋川南岸では間内越1号墓や東城ノ前遺跡があり、これらは約2.5kmの範囲にみられる。周辺の状況を見ると集落があったり墳墓を築造したり人々の活動が活発であったようであるが、当丘陵では顕著な利用の痕跡は認められなかった。

4.古墳時代

(1)古墳

当丘陵周辺には多くの古墳が存在している。同じ大橋川南岸の古墳では古墳時代前期前半に社日1号墳や観音寺1号墳の小規模な古墳が築造されている。その後、古墳時代前期後半になると、意宇地域に全長57mの前方後円墳の廻田1号墳が築かれ、古墳時代後期にかけて上竹矢7号墳、井ノ奥1号墳、石屋古墳、井ノ奥4号墳、竹矢岩船古墳などの多くの有力墳が造られている。意宇郡中央部に目を転じると後期に大庭鶏塚や山代二子塚、山代方墳などの有力墳が確認される。

このような古墳が多く存在する地域の丘陵に樋岡古墳群と南外古墳群は所在している。あらためて古墳の概要を述べると、樋岡古墳群は古墳時代前期末から中期前半の小規模な古墳群である。方墳2基、円墳4基からなり、埋葬施設は刳り抜き木棺や箱式木棺である。各古墳は尾根上の比較的狭い範囲に隣接するように築造され、方墳から円墳に変遷する。樋岡古墳群は古墳の規模や形態、出土遺物からすると在地の有力家長クラスの被葬者と考えられ、廻田1号墳や上竹矢7号墳に従属するものと考えられる。

次に樋岡古墳群の北側に位置する南外古墳群である。南外古墳群はこれまでに5基の古墳が確認されており、1号墳は前方後円墳（帆立貝形古墳）、2号墳は方墳である。今回3～5号墳の調査を行い、5号墳は全長20mの短小型前方後円墳、3号墳は円墳、4号墳は方墳で径、一辺ともに10m余りの古墳群である。古墳の時期は古墳時代中期末から後期前半と考えられる。南外古墳群の特徴を述べると以下の3点が挙げられる。

- ①一般的な群集墳とは異なり、各古墳が距離をとった独立的な在り方をしている。
- ②墳丘はいずれも旧表土の上に盛土を施す方法で共通している。4号墳は無墓壇主体部を小墳丘で覆った後に盛土を施して墳丘を築造している。5号墳は墳丘の端部に土塊を積んで土留めとし、その内側に盛土を施して墳丘を造っている。
- ③主体部は2号墳は掘り込み墓壇、4号墳は無墓壇主体部、5号墳は導入期の横穴式石室で、各古墳で主体部の形態が異なる。

特に注目されるのは5号墳の横穴式石室である。本文でも述べたが両袖式の横穴式石室で須恵器の坏蓋の時期から出雲2期と捉えられる。これまで導入期の横穴式石室とされていた林43号墳も同じ出雲2期であるが、大谷編年の蓋形の型式に当てはめると南外5号墳より新しいところに置かれるため、現状の導入期の横穴式石室のなかでは南外5号墳が一番古い段階と考えられる。

南外古墳群の調査では墳丘構築方法や時期について多くの成果が得られた。古墳の規模や形態、出土遺物からすると樋岡古墳群と同様に在地の有力家長クラスの被葬者と考えられ、時期的には首長墳が大橋川南岸から意宇郡中央部へ移行する過渡期の古墳といえるのではないだろうか。

(2)集落

南外5号墳で古墳時代の竪穴建物跡1棟と奥宇田瀬遺跡で集落跡が検出された。奥宇田瀬遺跡は谷部の斜面に位置する集落跡で、古墳時代後期前半の竪穴建物跡11棟、掘立柱建物跡4棟が検出された。これらの建物跡から出土した遺物は出雲2期(TK10)の範疇におさまることから集落は当該期に形成され短い期間で廃絶したと考えられる。

周辺の集落跡は、勝負遺跡で古墳時代中期の住居跡が16棟検出されているほか、奥宇田瀬遺跡から南東側に位置する矢田平所遺跡や寺山小田遺跡で中期の竪穴建物跡や掘立柱建物跡が確認されている。本丘陵周辺では古墳時代中期の集落は確認されるが、後期の調査例は確認されていないため古墳時代後期集落跡の様相を知る一例である。

(3)玉作工房跡

奥宇田瀬遺跡で玉作工房跡1棟(SIO6-1)を検出している。この工房跡は集落の一角に置かれた玉作工房跡で、竪穴建物の建て替えを行い玉作工房跡にしている。時期は古墳時代後期前半で石材の種類や総重量からすると水晶製品を主体とする工房跡で、古墳時代後期の花仙山周辺における玉作工房跡のような長期的、集約的な工房跡とは異なり短期間に玉生産を行っている。水晶が全体の70%を占めていることや、短期間であることを考えると最初から水晶の玉製品を作る目的のために造られた工房と考えられる。古墳時代の玉作工房跡をみると、奥宇田瀬遺跡東側の中海南岸や花仙山周辺で多く確認され本遺跡が所在する大橋側南岸は空白地域である。6世紀になると花仙山周辺に玉作工房跡が集中していく時期に意宇平野に近い場所に工房を作ったことは工人の手配なども含めて当該地の首長との関係を彷彿させる。また、同じように水晶主体の玉作工房跡として周知されている平所遺跡の存在から水晶が産出されるような場所が近くに存在した可能性も考えられる。奥宇田瀬遺跡の工人は短期間だけ玉作りを行い、穿孔具の鉄製品がないことから推測すれば、その後花仙山周辺の工房へと移動した可能性が考えられる。

5.飛鳥時代～中世前半

植岡古墳群で飛鳥時代(出雲国府第2型式)の土坑を、奥宇田瀬遺跡で奈良・平安時代の加工段01を検出している。岩井手谷遺跡では奈良・平安時代から中世前半の掘立柱建物跡・柱穴列・加工段・自然流路などが検出されている。岩井手谷遺跡は本丘陵の南側に位置し、谷部の緩斜面に所在する。南東側約180mには山代郷新造院(米美庵寺)があり、今回の調査により検出された遺構は山代郷新造院と同時期と考えられる。3棟の建物跡のうち建物規模が判明しているSB01は床面積が7㎡以下であり、小屋のような建物跡と考えられる。SB01では釘跡も確認されていることから住居または作業小屋のような建物と想定される。遺物のなかに硯に転用された可能性のある須恵器や銅碗の破片、瓦が出土していることや、山代郷新造院に近いことから推察すると新造院に関わりのある人々が所在していた可能性は考えられる。ただ、寺院に関連する遺物が少ないことから仏教関連施設とは言い難く、建物の規模からすれば山代郷新造院に関わる人々の住居または作業小屋のように思われる。

岩井手谷遺跡以外の本丘陵における飛鳥時代から中世前半の遺構は希薄である。周辺の集落遺跡をみると飛鳥時代では矢田平所遺跡、古代から中世では才ノ峠遺跡・中竹矢遺跡・出雲国府跡上層・天

満谷遺跡・大屋敷遺跡が確認され、茶白山周辺の丘陵や水田において点在している状況が窺われる。岩井手遺跡も遺跡の位置や出土遺物からすると寺院に関連すると思われるが、当該期における集落跡のひとつとして捉えておく。

第2節 結語

今回の調査で多時期の遺構や遺物が確認され、多くの成果が得られた。当丘陵は旧石器時代から中世前半まで利用されていたことが判明し、旧石器時代からの人の痕跡が示された。旧石器時代には遊動に伴う短期間の居留地が想定され、縄文時代に丘陵の一角は狩猟場所であった。弥生時代に活発に利用された様子はみられなかったが、古墳時代になると櫛岡古墳群や南外古墳群が築かれ、丘陵南側斜面に集落が形成され人の活動が活発であったことがわかる。中世前半には山代郷北新造院の北西側に建物が建てられ、新造院に関わりのある人々が活動していたと思われる。

当丘陵は意宇平野と大橋川の中間地点のような場所に位置しており、周辺には多くの遺跡が所在している。今回の調査成果は当地域の様相や変遷を知る一資料となり得たと考えられ、今後の調査事例の増加により、より一層大橋川両岸から意宇地域の様相や動向が明らかになることを期待したい。

註

- (1) 南外5号墳から東2km弱、大橋川が最も浅く旧石器時代に丘陵稜線だったと考えられる地点にほど近い石屋遺跡からは、限られた調査範囲での再堆積土からではあるが、多くの剥離産物もみられる玉髄が出土している。玉髄の集積地の可能性を想起させるが、原礫状のものも含まれており、この丘陵で玉髄が産出する可能性もある。このあたりの丘陵の基盤をなすのは粗面玄岩岩質安山岩（澤田順弘・高安克己・入月俊明2019）で、玉髄が生成しうるものと考えられる。

参考文献

- 池淵俊一 2015 『第5章 出雲における中・後期前方後方墳の成立と展開』『前方後方墳と東西出雲の成立に関する研究 鳥根県古代文化センター研究論集第14集』
- 稲田孝司編 1996 『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 稲田孝司 1996 『恩原に居住した旧石器時代の回帰遊動集団と植民集団』『恩原2遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 稲田孝司編 2009 『恩原1遺跡』恩原遺跡発掘調査団
- 稲田孝司 2010 『旧石器人の遊動と植民 恩原遺跡群—シリーズ「遺跡を学ぶ」065—』
- 稲田陽介 2015 『鳥根県原田遺跡における後期旧石器時代前半期石器群の再検討』『古代文化研究』NO.23 鳥根県古代文化センター
- 稲田陽介・伊藤徳広 2016 『鳥根県奥出雲町原田遺跡旧石器時代資料の再整理データ』『古代文化研究』NO.24 鳥根県古代文化センター
- 江川幸子・内田律夫 1988 『石台遺跡の試掘調査』『季刊考古学』第62号
- 勝部 昭 2012 『伝竹矢出土銅剣』松江市史 史料編2 考古資料 松江市
- 建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会 1992 『埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ（勝負遺跡）』
- 建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会 1998 『勝負遺跡・堂床遺跡』
- 鳥根県教育委員会 1986 『石台遺跡』
- 鳥根県教育委員会 1989 『埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ（石台遺跡）』
- 鳥根県教育委員会 1991 『一般国道9号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ（布田遺跡）』
- 鳥根県教育委員会 1993 『石台遺跡Ⅱ』
- 鳥根県教育委員会 2007 『南外2号墳・勝負遺跡』
- 鳥根県教育委員会 2008 『原田遺跡（4）—尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書12』
- 鳥根県教育委員会 2021 『岩宮谷遺跡・シコノ谷遺跡』
- 鳥根県古代文化センター 2009 『出雲国府周辺の復元研究—古代八雲立つ風土記の丘復元の研究—』

- (財) 広島県教育事業団 2011 『和知白鳥遺跡 1(旧石器時代の調査)―中国横断道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(15)―』
- (財) 広島県教育事業団 2012 『段遺跡(旧石器時代の調査)―中国横断道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(20)―』
- 鳥根県松江市教育委員会・公益財団法人松江市スポーツ振興財団 2015 『長廻遺跡』
- 鳥根県松江市・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 2020 『福富松ノ前遺跡』
- 鳥根県松江市・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 2021 『乃木西廻遺跡』
- 鳥根県松江市・公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 2022 『朝酌菰蒲谷遺跡(2区)』
- 鳥根県八雲村教育委員会 2003 『折原峠遺跡・折原中堤遺跡・古城遺跡』
- 澤田順弘・高安克己・入月俊明 2019 『第3節 松江市の地質』松江市史 史料編1 自然環境 松江市
- 白石(堀川)純 1985 『小林河原遺跡採集の台形様石器』岡山理科大学森山研究所研究報告 11
- 白石 純・小林博昭 1997 『森山原旧石器時代石器群の石器石材』自然科学研究所研究報告 第23号 岡山理科大学
- 白石 純 1999 『森山原旧石器時代石器群の石器石材』自然科学研究所研究報告 第25号 岡山理科大学
- 白石 純・小林博昭 2001 『森山東遺跡の発掘調査』岡山理科大学自然科学研究所研究報告 第27号
- 竹広文明 1999 『旧石器時代における隠岐産黒曜石の獲得と利用をめぐる』『田中義昭先生退官記念論文集 地域に根ざして』田中義昭先生退官記念事業会
- 竹広文明 2000 『山陰における石器利用をめぐる二、三の問題』鳥根考古学会誌 第17集
- 竹広文明 2009 『隠岐産黒曜石原産地をめぐる諸問題』『旧石器考古学』71
- 竹広文明編 2009 『瀬戸内―中国山地―日本海地帯のサヌカイトと隠岐産黒曜石利用からみた先史物流の形成』
- 竹広文明編 2010 『隠岐産黒曜石利用の展開』『黒曜石が関与する人類社会の交流Ⅱ』
- 竹広文明 2011 『旧石器考古学から見た隠岐海峡』『旧石器考古学』75
- 鳥取県埋蔵文化財センター編 2013 『倉谷西中田遺跡Ⅱ・倉谷荒田遺跡Ⅱ・豊成竹林遺跡・豊成上神原遺跡Ⅱ』
- 鳥谷芳雄 1989 『下黒田遺跡』『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書Ⅵ―権原遺跡・下黒田遺跡』鳥根県教育委員会
- 丹羽野裕 1991 『鳥根県における旧石器時代研究の現状と課題―穴道湖周辺地域を中心に―』『鳥根考古学会誌』第8集
- 丹羽野裕 2004 『山陰・中国山地における縄石刃文化の様相』『中・四国旧石器文化の地域性と集団関係―中・四国旧石器文化談話会20周年記念シンポジウム論集―』
- 丹羽野裕 1994 『松江市下黒田遺跡出土の石器群』『古代文化研究』第2号 鳥根県古代文化センター
- 丹羽野裕 2018 『旧石器時代の隠岐産黒曜石の利用と石材利用から見た遊動領域の検討』『隠岐産黒曜石の獲得と利用の研究 鳥根県古代文化センター研究論集第19集』
- 藤野次史 2006 『中・四国、近畿地方の地域編年』『旧石器時代の地域編年の研究』
- 藤野次史・多田仁 2010 『旧石器文化の編年と地域性 中国・四国地方』講座 日本の考古学Ⅰ 旧石器時代(上)
- 藤野次史 2014 『中国山地中部における後期旧石器時代前中期の編年をめぐる―鳥根県原田遺跡第Ⅲ文化層出土の石器群を中心に―』『広島県の考古学と文化財保護―松下正治先生追悼記念論集―』
- 松江市都市整備部計画課・松江市教育委員会 1989 『間内越1号墳・間内越遺跡』
- 松江市教育委員会 1993 『矢田平遺跡発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 1996 『寺山小田遺跡発掘調査報告書』
- 松江市教育委員会 2011 『松江市文化財調査報告書143:ニトリ松江店新築工事に伴う石屋遺跡発掘調査報告書』
- 八雲村教育委員会 1994 『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』
- 湯村 功 1992 『鳥根県内の旧石器・縄文時代草創期資料について』『旧石器考古学』44 旧石器文化談話会

写 真 図 版

※遺物掲載番号と遺物写真番号は対応している。(例：9-1は第9図-1を示す。)



樋岡古墳群 調査前近景(北から)



樋岡古墳群 調査後全景(北東側上空から)

図版2 樋岡古墳群



樋岡古墳群 調査後全景(北東から)



周溝検出状況(北東から)



土層断面A-A' 3号墳西側(南西から)



土層断面A-A' 3号墳東側(南東から)



土層断面A-A' 2号墳東側(南西から)



土層断面B-B' 3号墳南側(北東から)



土層断面B-B' 3号墳北側(北東から)



土層断面B-B' 1号墳北側①(南東から)



土層断面B-B' 1号墳北側②(北東から)



土層断面C-C' 2号墳西側(南西から)



1号墳 全景(北東から)



1号墳 主体部完掘状況(南東から)



1号墳 主体部土層断面(南東から)



1号墳 周溝遺物出土状況①(土師器・甕 第17図-6)



1号墳 周溝遺物出土状況②(土師器・壺 第17図-2)



1号墳 周溝遺物出土状況③(土師器・甕 第18図-1・2)



2号墳 全景(北西から)



2号墳 主体部完掘状況(南東から)



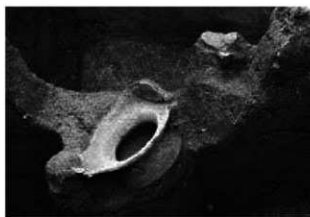
2号墳 主体部縦断土層断面(南西から)



2号墳 主体部縦断土層断面 南東側延長部分(南から)



2号墳 主体部横断土層断面(南東から)



2号墳 主体部遺物出土状況(土師器・甕 第23図-2)



3号墳 全景(南西から)



3号墳 主体部完掘状況(西から)



3号墳 主体部玉類出土状況①



3号墳 主体部玉類出土状況②

図版8 樋岡古墳群



3号墳 主体部縦断土層断面(南西から)



3号墳 主体部横断土層断面(西から)



3号墳 主体部土層断面C-C'(南東から)



3号墳 主体部棺底白砂検出状況(南西から)



4号墳 全景(北東から)



4号墳 主体部完掘状況(東から)



4号墳 主体部縦断土層断面(南から)



4号墳 主体部横断土層断面(東から)



5号墳 全景(南東から)



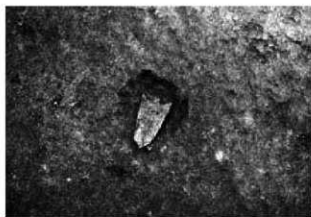
5号墳 主体部完掘状況(北西から)



5号墳 主体部縦断土層断面(南西から)



5号墳 主体部横断土層断面(南東から)



5号墳 主体部遺物出土状況



6号墳 全景(東から)



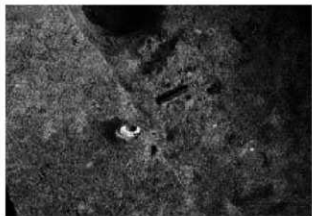
6号墳 主体部完掘状況(西から)



6号墳 主体部縦断土層断面(南東から)



6号墳 主体部横断土層断面(東から)



6号墳 主体部玉類遺物出土状況①



6号墳 主体部玉類遺物出土状況②



旧表土検出状況(北東から)



SK01 完掘状況(南東から)



SK01 土層断面(南東から)



ST01 完掘状況(北西から)



ST01 遺物出土状況(北東から)



ST01 縦断土層断面(北東から)

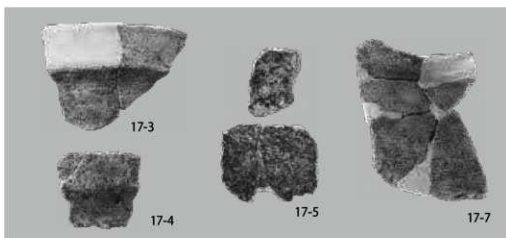


ST01 横断土層断面(北西から)



ビット群完掘状況(北東から)

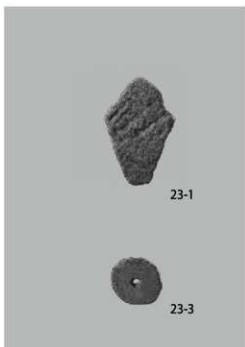




1号墳周溝出土遺物(2)



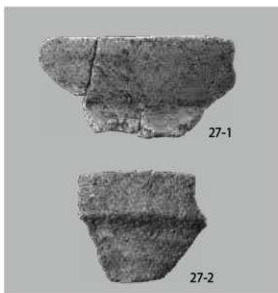
1号墳主体部出土遺物



2号墳出土遺物



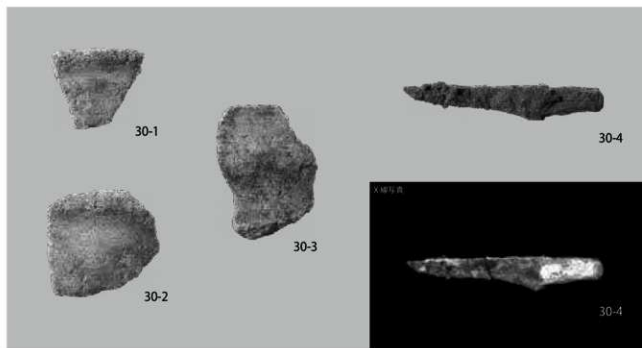
23-2



3号墳出土遺物



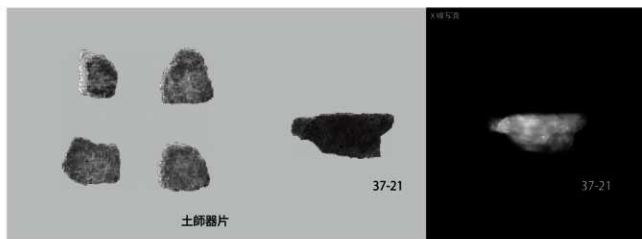
主体部検出面出土・自然石



4号墳出土遺物



5号墳出土遺物



6号墳出土遺物



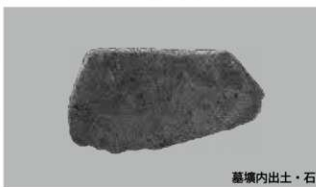
40-1



40-2

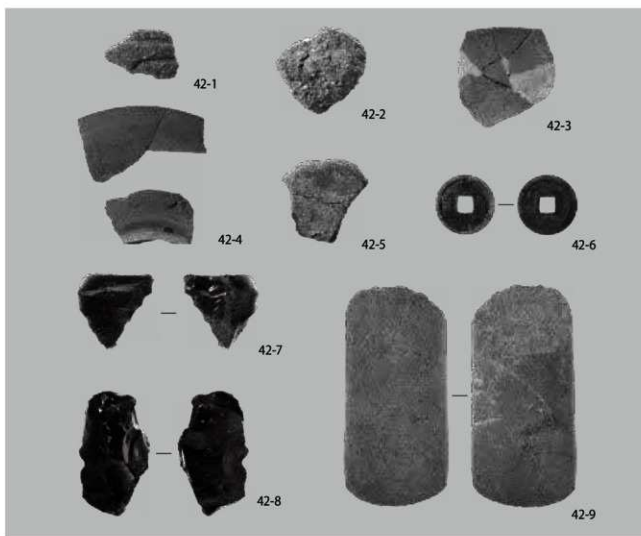


40-3



墓内出土・石

ST01 出土遺物



42-1

42-2

42-3

42-4

42-5

42-6

42-7

42-8

42-9

遺構外出土遺物



南外3号墳 調査前近景(西から)



南外3号墳 調査後全景(南東から)



周溝検出状況(南東から)



周溝完掘状況(南東から)



周溝北西側土層断面(西から)



周溝南東側土層断面(南西から)



周溝南西側土層断面(南東から)



周溝北西側土層断面(東から)



周溝南西側遺物出土状況①(南から)



周溝南西側遺物出土状況②(第58図-1・2)



北西側周溝遺物出土状況(第58図-3・5・10)



墳丘盛土土層断面 A-A'(南西から)



墳丘盛土土層断面 B-B'(南東から)



北西側緩斜面検出状況(東から)



SX301 完掘状況(北東から)



完掘状況(南東から)



作業風景(南東から)



南外4号墳 調査前近景(南西から)



南外4号墳 調査後全景(南東から)



周溝南東側検出状況(南から)



周溝完掘状況(南東から)



周溝西側遺物出土状況(第76図-6)



周溝北西側遺物出土状況(第76図-1~5・7・8)



主体部完掘状況①(南西から)



主体部完掘状況②(真上から)



主体部土層断面(南西から)



主体部遺物出土状況(北から)



墳頂部トレンチ土層断面 C-C'(南から)



墳頂部トレンチ土層断面 D-D'(西から)



墳丘盛土土層断面 A-A'(北東から)



墳丘盛土土層断面 B-B'(南東から)



旧表土検出状況(南東から)



完掘状況(南東から)



SX401 完掘状況(南東から)



調査区南西側ピット完掘状況(南西から)



南外5号墳 調査前近景(北東から)



南外5号墳 調査後全景(北から)※後円部の一次墳丘と畦を残した状態



土層断面北西側B-B'(東から)



周溝北東側遺物出土状況(南東から)

横穴式石室土層断面 A-A'(南東から)



横穴式石室土層断面 B-B'(北から)



玄室内遺物出土状況(第92図-7頭)





横穴式石室完掘状況(南東から)



玄室腰石検出状況(北西から)



右側壁腰石検出状況(北東から)



左側壁腰石検出状況(南から)

左袖石半截状況(北西から)



右袖石抜取り痕半截状況(西から)



玄室腰石掘り方完掘状況(北西から)





墳丘南東側断ち割り土層断面(南東から)



墳丘北東側断ち割り土層断面(北東から)



旧表土検出状況(北から)



完掘状況(北から)



S1501 完掘状況(北から)



SX501 完掘状況(北東から)



SX502・503 完掘状況(北東から)



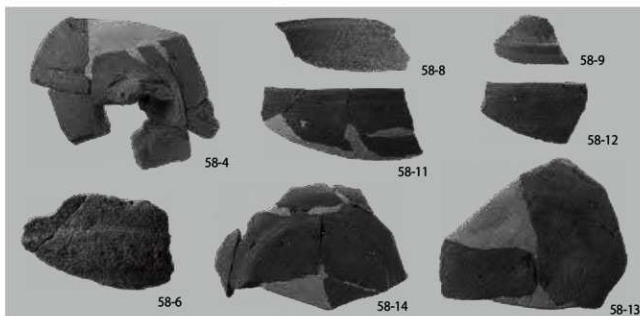
加工段501 完掘状況(北東から)



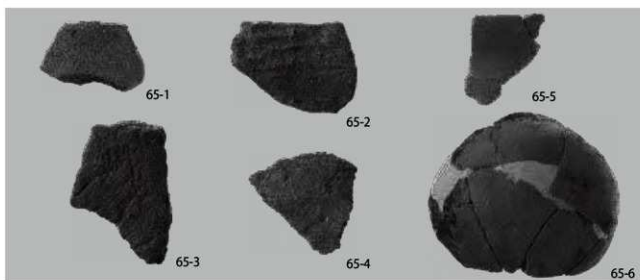
加工段502・503 完掘状況(北東から)



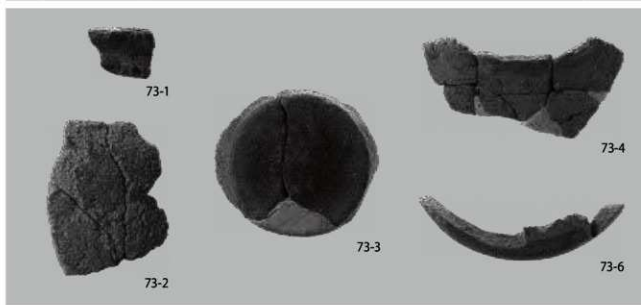
南外 3 号墳周溝出土遺物 (1)



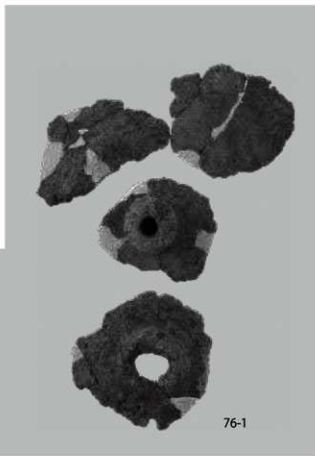
南外3号墳周溝出土遺物(2)



南外3号墳遺構外出土遺物



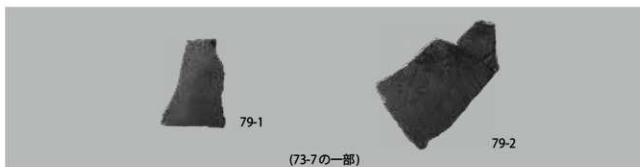
南外4号墳墳丘面(一部盛土)出土遺物



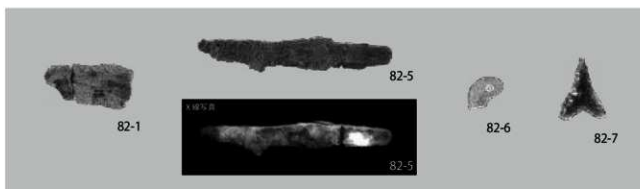
南外4号墳周溝出土遺物(1)



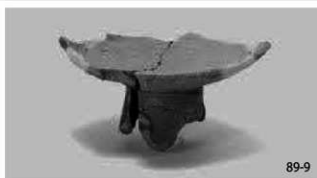
南外 4号墳周溝出土遺物(2)



南外4号墳主体部検出面出土遺物



南外4号墳遺構外出土遺物



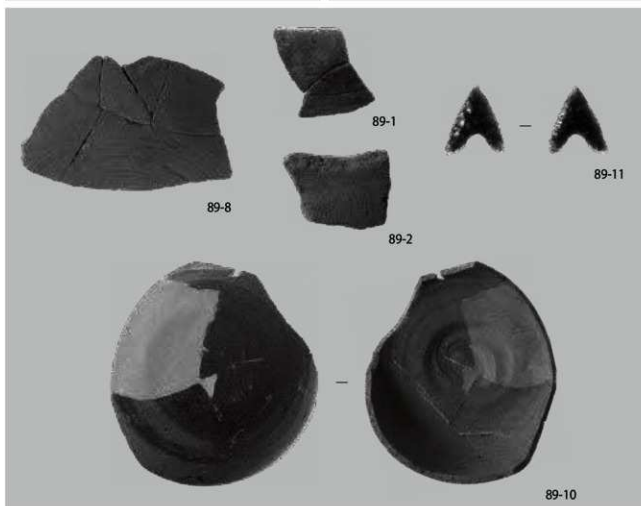
南外 5 号墳周溝出土遺物 (1)



89-6



89-7



89-8

89-1

89-2

89-11

89-10

南外5号墳周溝出土遺物(2)

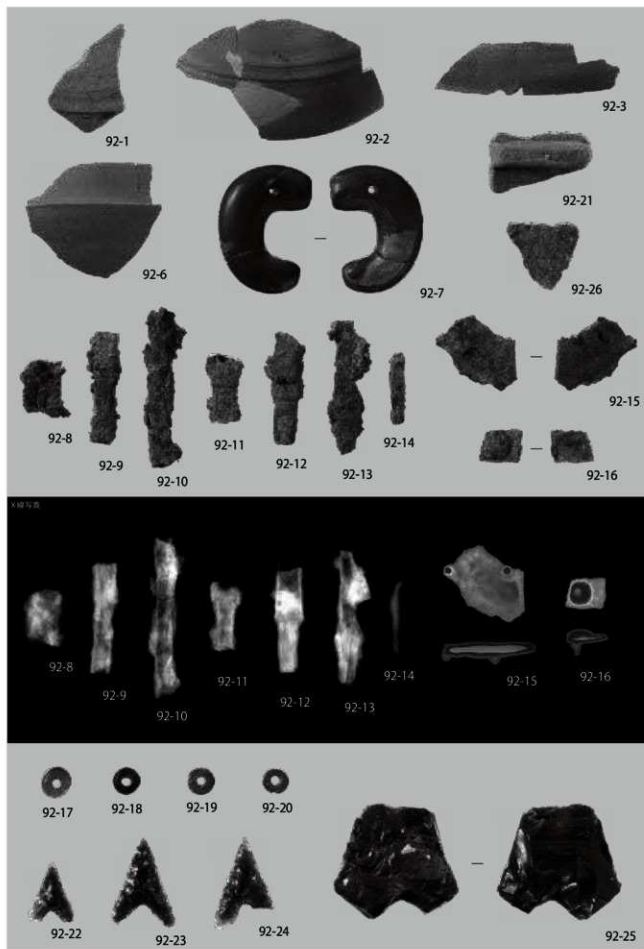


92-4

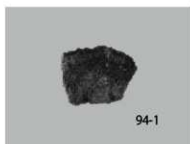


92-5

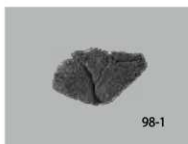
南外5号墳石室出土遺物



南外5号墳石室及び裏込め土出土遺物



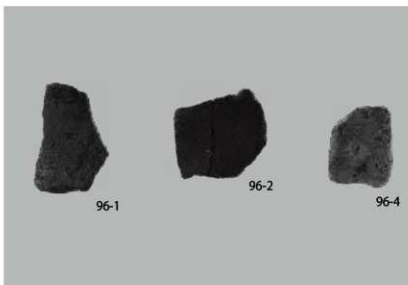
南外5号墳SI501出土遺物



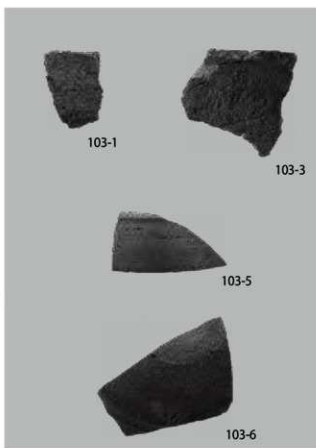
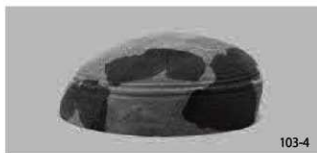
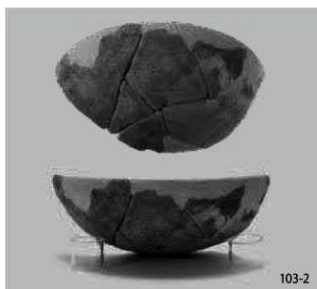
南外5号墳加工段502出土遺物



南外5号墳SX503出土遺物



南外5号墳加工段501出土遺物



南外5号墳遺構外出土遺物



奥宇田瀬遺跡 調査前遠景(南東から)



奥宇田瀬遺跡 調査後SI02～SI09(東から)



土層断面 A-A' (北西から)



土層断面 B-B' (南西から)



SI01-1・2完掘状況(東から)



SI02・SI03-1・2完掘状況(東から)



SI02土層断面A-A'(南から)



SI02土層断面B-B'(東から)



SI04-1・2完掘状況(東から)



SI04-1土層断面A-A'(北東から)



SI05-1・2完掘状況(東から)



SI05-1 土層断面 A-A'(南から)



SI05-1 土層断面 B-B'(東から)



SI06-1・2・3完掘状況(東から)



SI06-1土層断面A-A'(南西から)



SI06-1 土層断面B-B'(東から)



SI06-1 須恵器(坏身第141図-7)・土師器(裏片)・水晶(第145図-5)出土状況



SI07 完掘状況(東から)



SI07 白色粘土・遺物検出状況(南から)



SI08 完掘状況(東から)



SI08 土層断面 A-A'(南東から)



S108土層断面B-B'(東から)



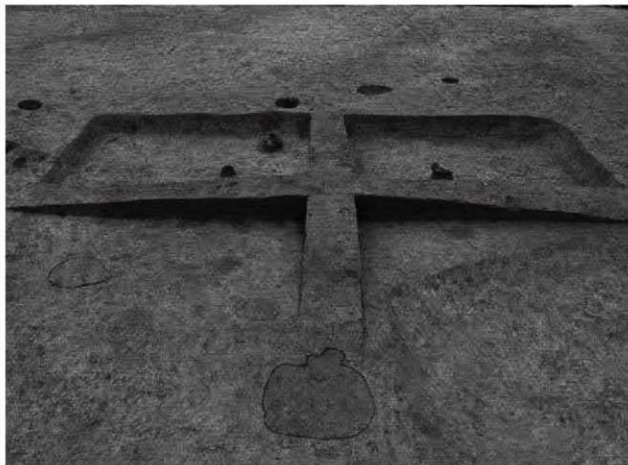
S108遺物出土状況



SI09-1・2完掘状況(南東から)



SI09-1土層断面A-A'(南から)



SI09-1 土層断面 B-B' (東から)



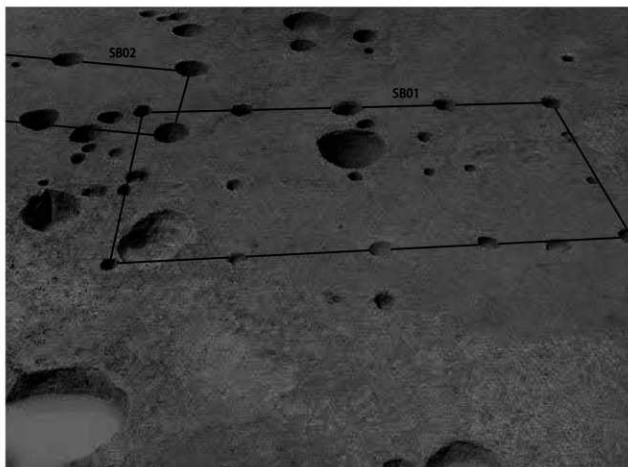
SI10 完掘状況 (南東から)



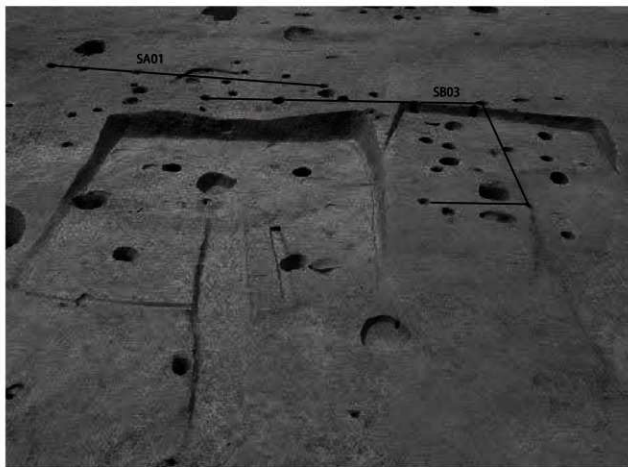
SI11 完掘状況(南東から)



加工段01土層断面A-A'(南から)



SB01・SB02完掘状況(東から)



SB03・SA01完掘状況(東から)



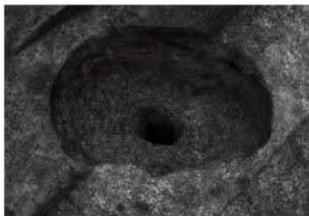
SB04完掘状況(南東から)



炉跡完掘状況(南東から)



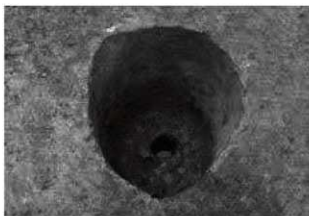
SK04(北東から)



SK11(北東から)



SK13(東から)



SK15(東から)



SK16(東から)



SK20(南東から)



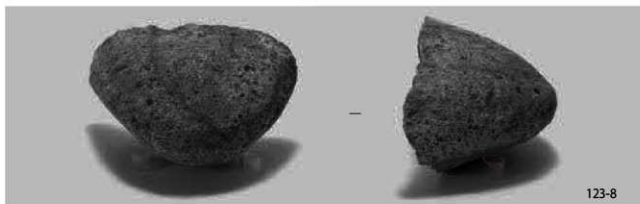
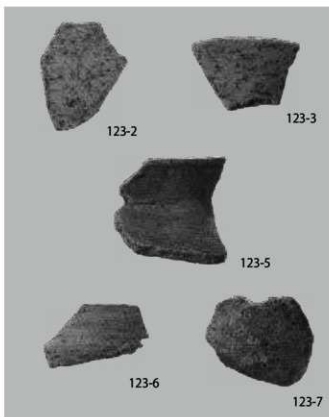
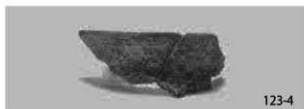
SK21(北東から)



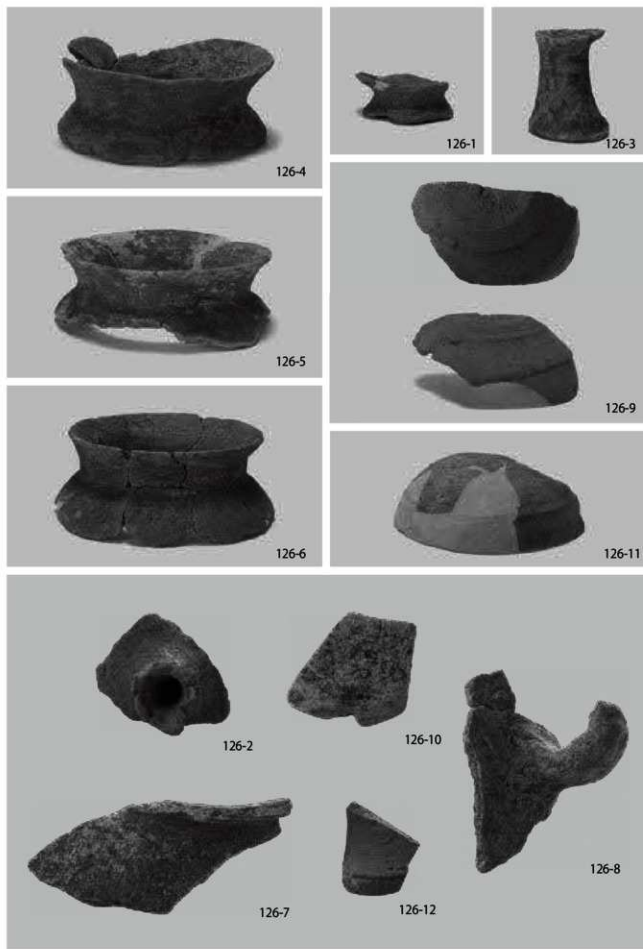
SK22(北東から)



試掘トレンチ出土遺物

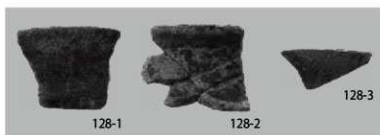


SI01-1 出土遺物

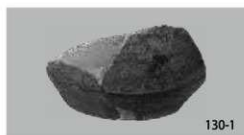




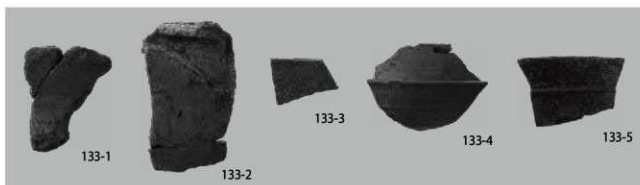
SI02 出土遺物 (2)



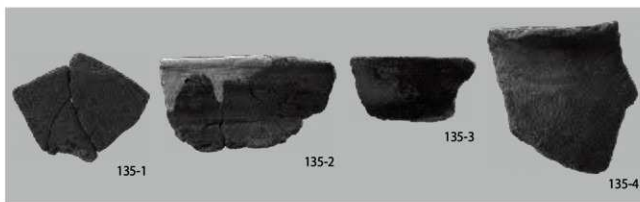
SI03-1 出土遺物



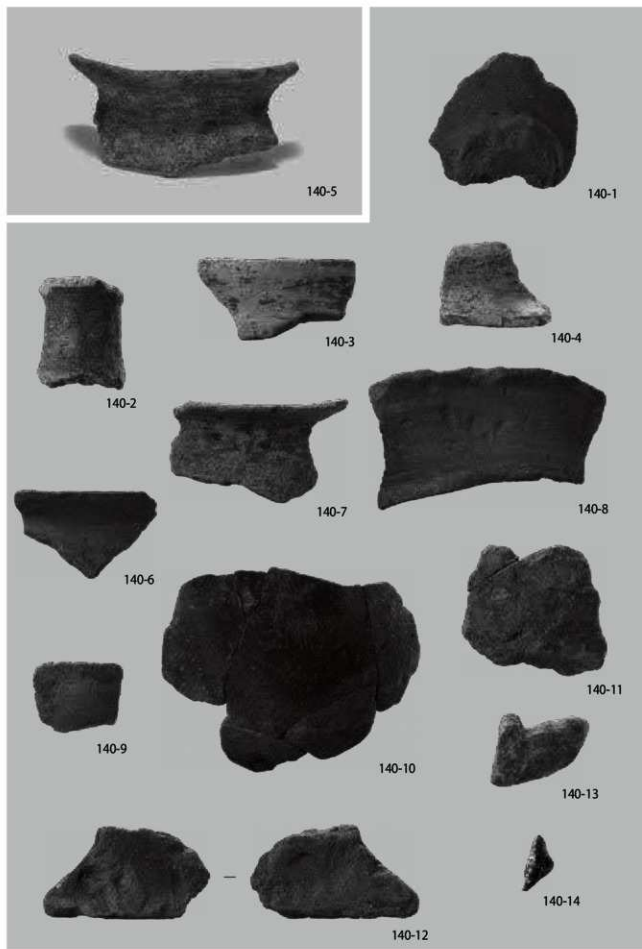
SI03-2 出土遺物



SI04-2 出土遺物



SI05-1 出土遺物





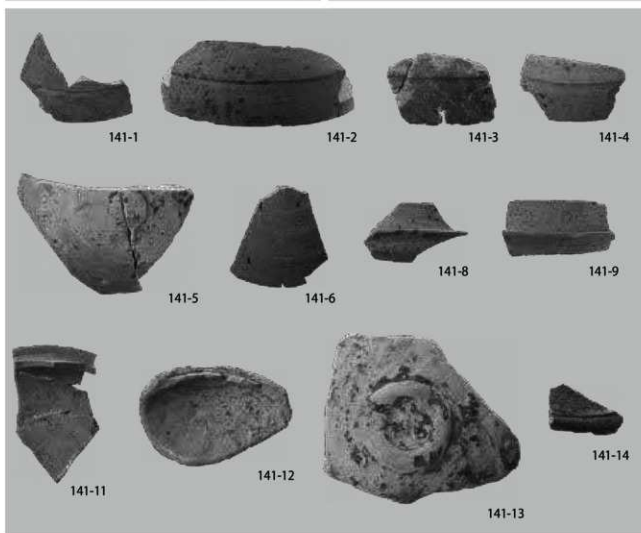
141-7



141-10



141-15



141-1

141-2

141-3

141-4

141-5

141-6

141-8

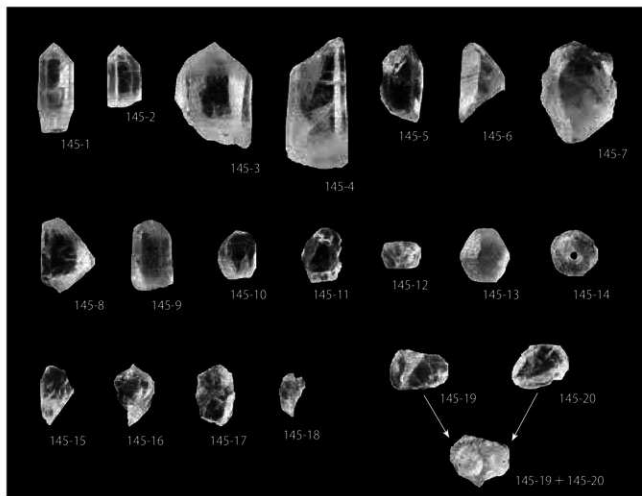
141-9

141-11

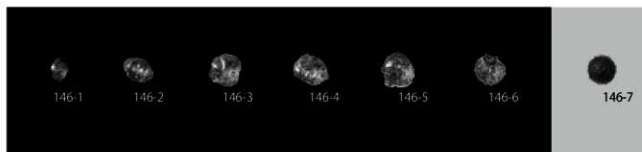
141-12

141-13

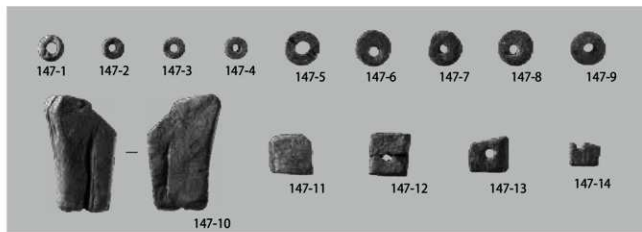
141-14



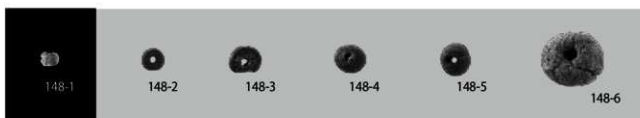
SI06-1出土遺物(水晶)



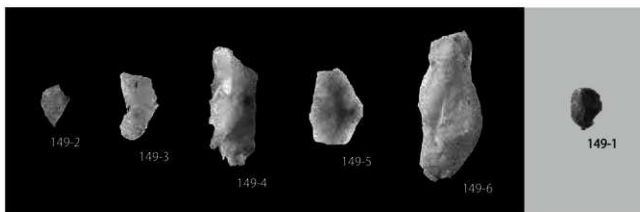
SI06-1出土遺物(円錐形剥片)



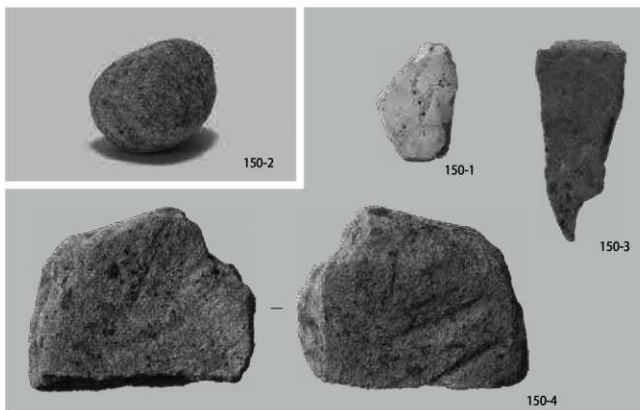
SI06-1出土遺物(滑石)



SI06-1 出土遺物(ガラス玉・土製小玉・土玉)



SI06-1 出土遺物(碧玉・瑪瑙・石英)



SI06-1 出土遺物(石製品・工具)



SI06-2 出土遺物



SI06-3 出土遺物



156-1



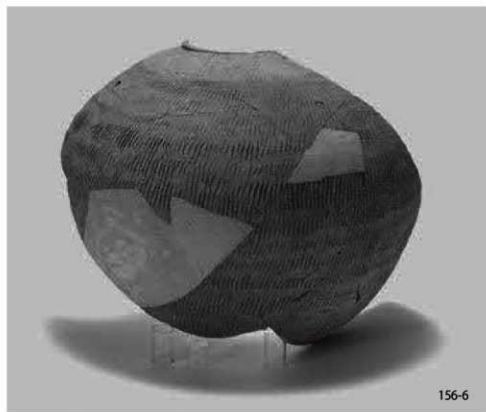
156-4



156-5



156-2



156-6

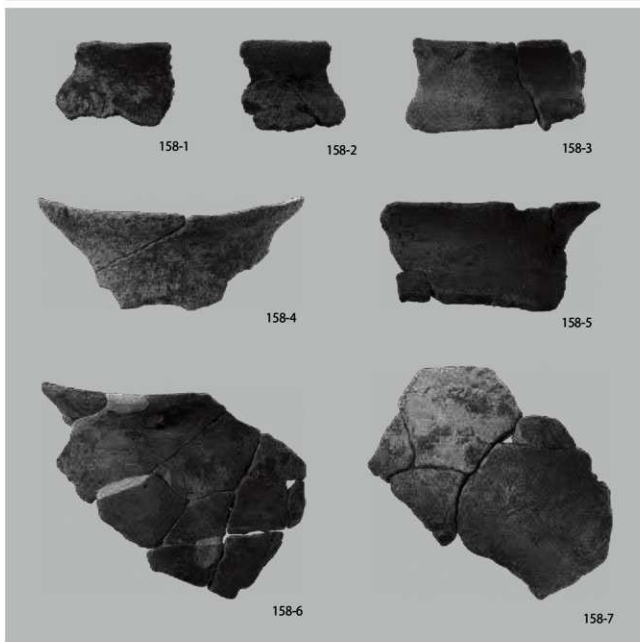


156-3

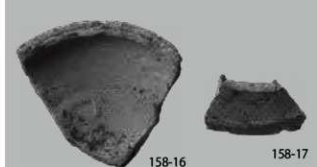


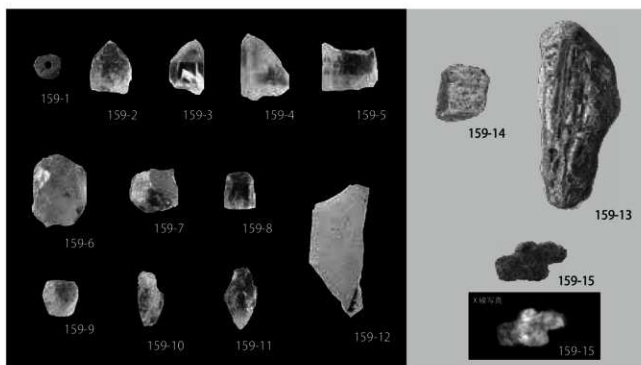
156-7

SI07 出土遺物

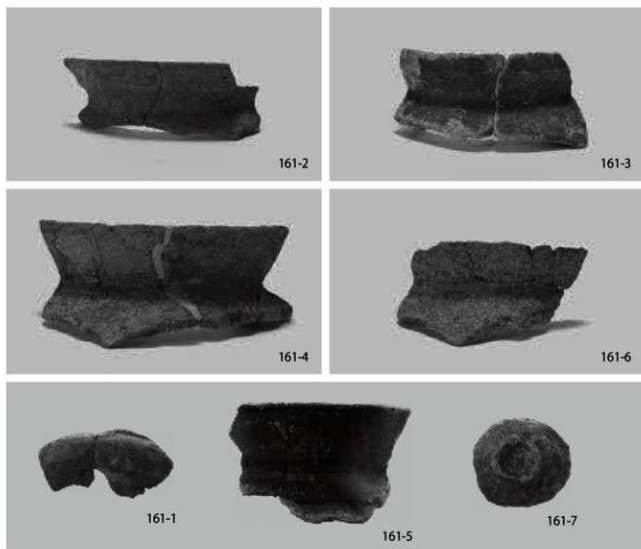


S108出土遺物(1)

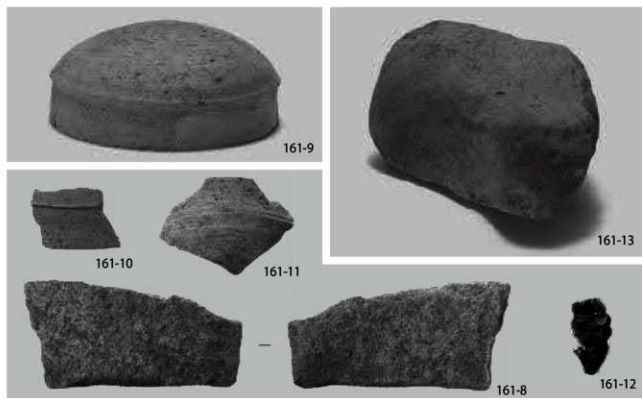




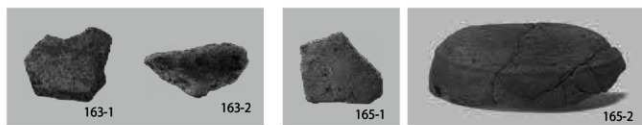
S108出土遺物(石)



S109-1出土遺物(1)



SI09-1 出土遺物 (2)

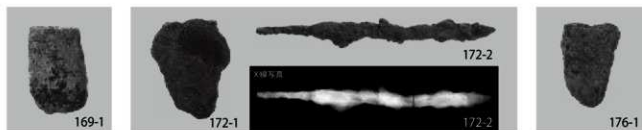


SI09-2 出土遺物

SI10 出土遺物



SI11 出土遺物



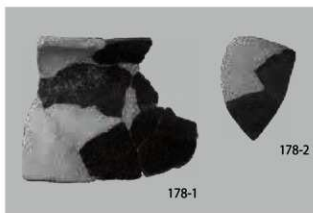
SB01 出土遺物

SB03 出土遺物

SA02 出土遺物



178-7



178-1

178-2



178-3



178-4



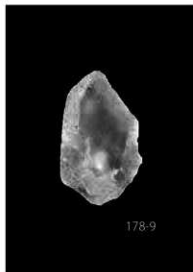
178-5



178-6



178-8



178-9

加工段01出土遺物(2)



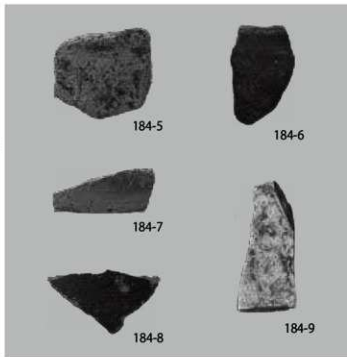
184-1



184-4



184-2



184-5

184-6

184-7

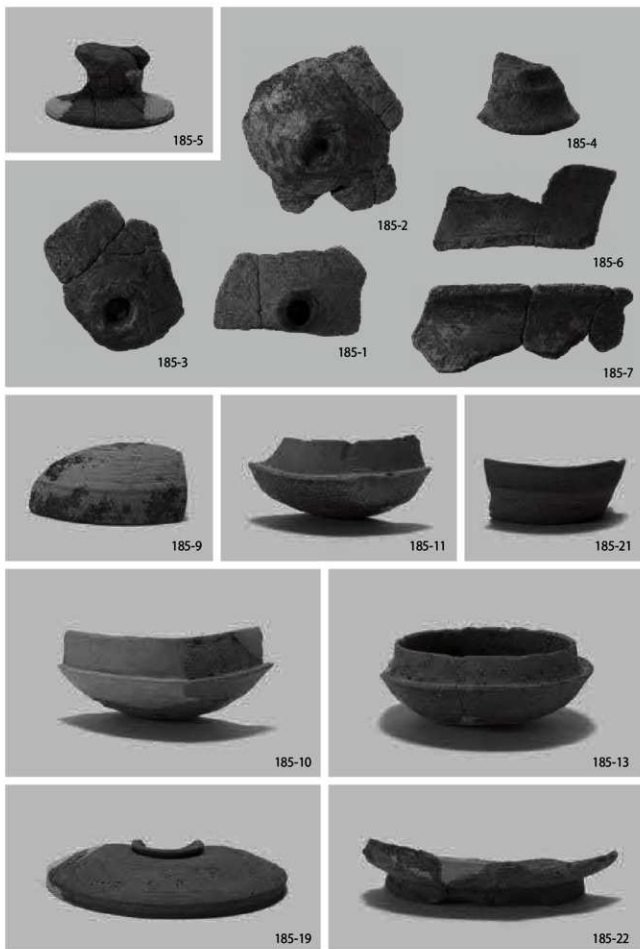
184-8

184-9

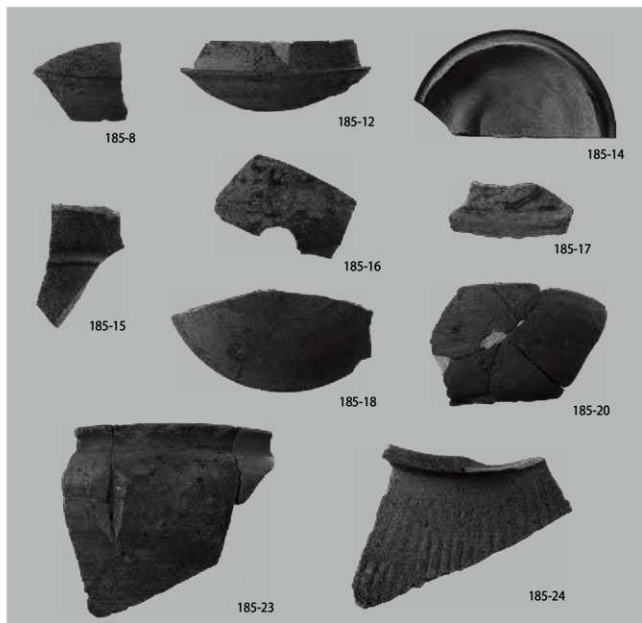


184-3

SK01～24出土遺物



その他の出土遺物1(1)



その他の出土遺物 1(2)



その他の出土遺物 2



岩井手谷遺跡 調査前近景(北東から)



岩井手谷遺跡 調査後全景(南から)



土層断面A-A'(南東から)



土層断面B-B'(南東から)



土層断面 B-B' 東側 (NR02) (南東から)



土層断面 C-C' (南東から)



第1遺構面-1 完掘状況(南から)



第1遺構面-1 完掘状況(北東から)



SB01-1・SB01-2・SA01完掘状況(南東から)



調査区中央西側斜面(SB02・03)完掘状況(南東から)



第1遺構面-1 南側完掘状況(北東から)



SB04・SD01 完掘状況(東から)



炉跡完掘状況(北から)



SB01-1(SP01)遺物出土状況(南から)



SB04 遺物出土状況(東から)



SD01 遺物出土状況(東から)



SK01 土層断面(東から)



SK01 完掘状況(南東から)



堆積土遺物出土状況(第219図-16)



NR02 遺物出土状況(第217図-9)



NR01・NR02完掘状況(北東から)



NR02完掘状況(南から)



第2遺構面(調査区北側中央)完掘状況(南西から)



第2遺構面遺構・遺物検出状況(南から)



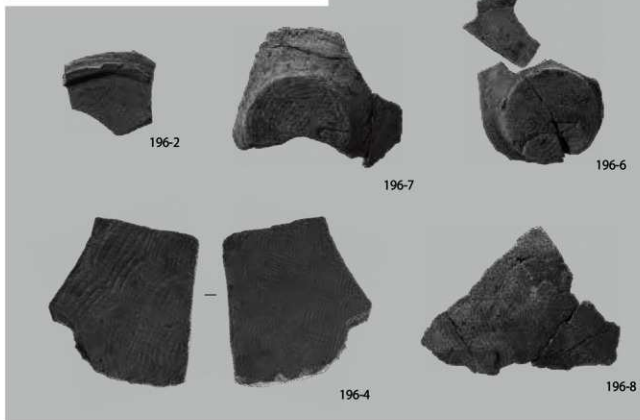
第2遺構面遺物出土状況①(北東から)



第2遺構面遺物出土状況②(北東から)



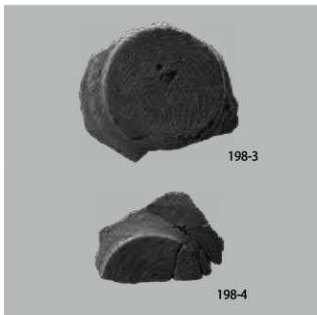
試掘トレンチ(st01)出土遺物



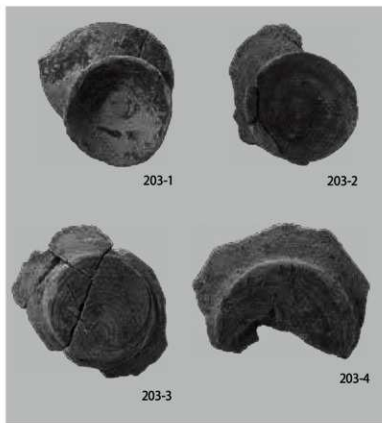
S801-1・2覆土出土遺物



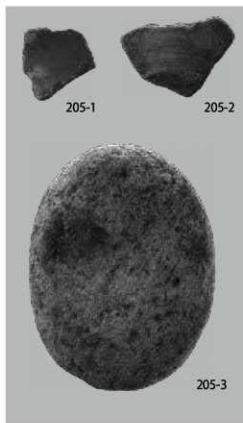
SB01-1 出土遺物



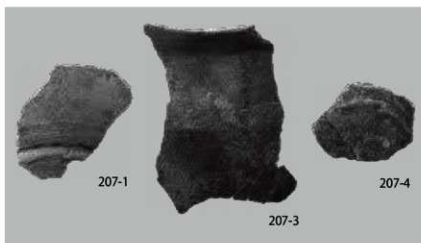
SB03 出土遺物



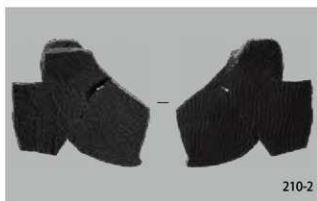
SB04 出土遺物



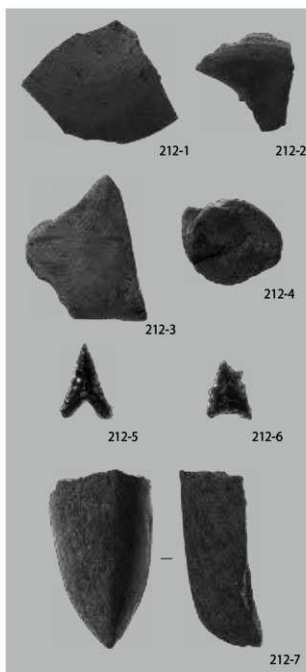
SA01 出土遺物



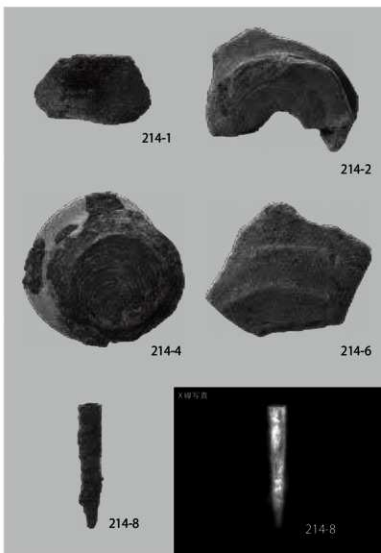
SD01 出土遺物



SK02 出土遺物



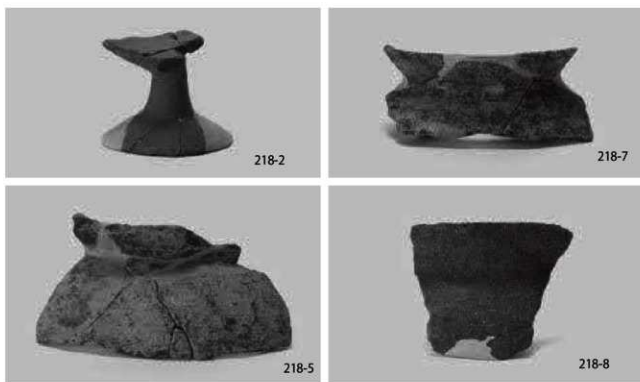
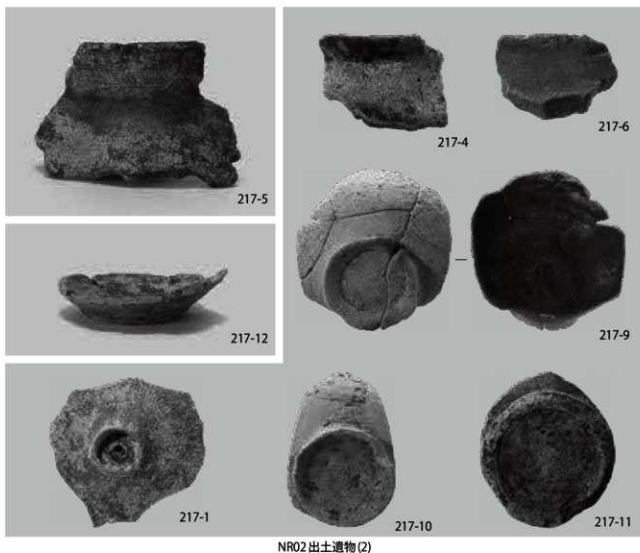
NR01 出土遺物



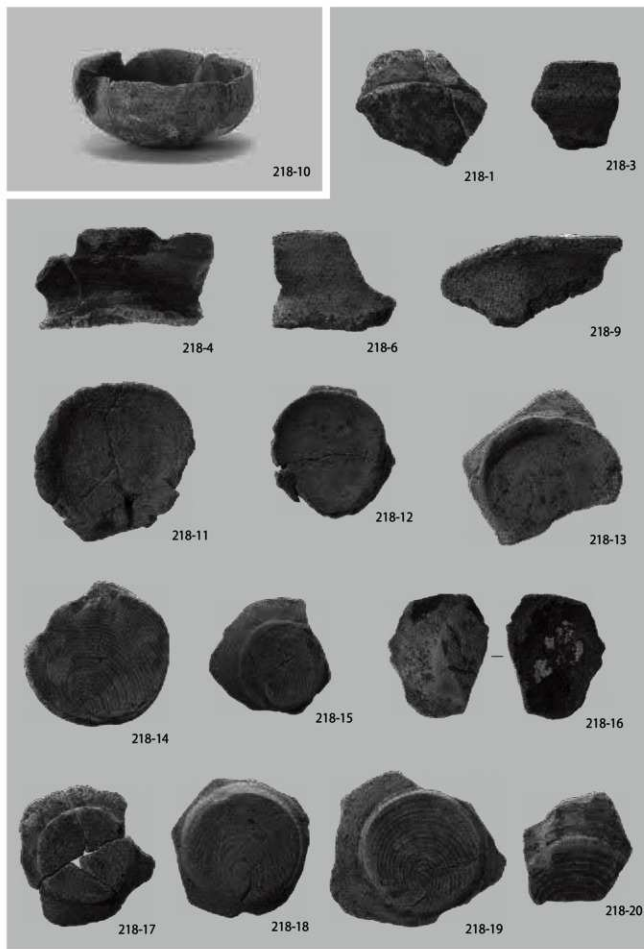
柱穴出土遺物



NR02 出土遺物(1)



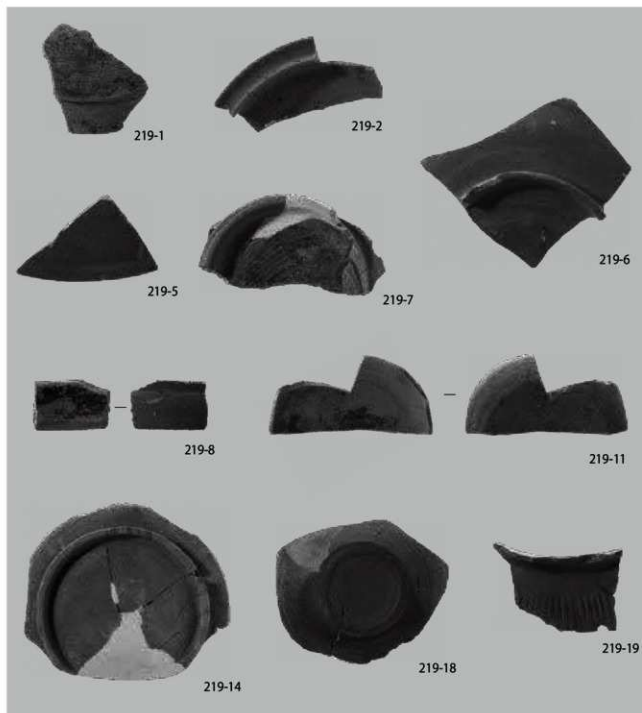
第1遺構面-1・2遺構外出土遺物1(1)



第1遺構面-1・2遺構外出土遺物1(2)



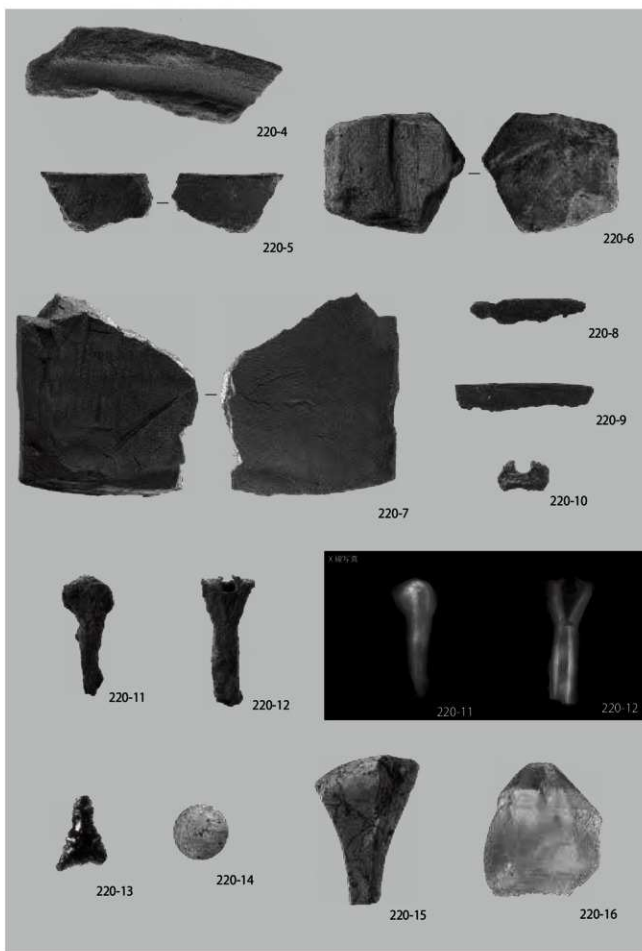
第1遺構面-1・2遺構外出土遺物2(1)



第1遺構面-1・2遺構外出土遺物2(2)



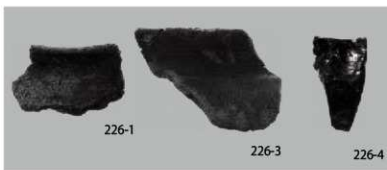
第1遺構面-1・2遺構外出土遺物3(1)



第1遺構面-1・2遺構外出土遺物3(2)



第2遺構面出土遺物



第2遺構面遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	はぜおかこふんぐん なんげこふんぐん おくうたせいせき いわいでにいせき						
書名	樋岡古墳群 南外古墳群 奥宇田瀬遺跡 岩井手谷遺跡						
副書名	松江市東津田町工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第210集						
編著者名	廣濱貴子(編)、田村朋美、徳永隆、丹羽野裕						
編集機関	松江市 (松江市文化スポーツ部 埋蔵文化財調査課)						
所在地	〒690-8540 島根県松江市末次町 86 番地 TEL:0852-55-5293 公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀 1263-1 TEL:0852-85-9210						
発行年月日	令和5(2023)年3月						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
はぜおかこふんぐん 樋岡古墳群	島根県松江市 東津田町字樋岡 2022 番外	322016	D-1200	35°26'40	20200401	1,157㎡	団地造成事業
				133°05'25	20201027		
なんげこふんぐん 南外古墳群	島根県松江市 東津田町字南外 2296-5 外	322016	D-494	35°26'44	20181203	1,492㎡	団地造成事業
				133°05'28	20190830		
おくうたせいせき 奥宇田瀬遺跡	島根県松江市 矢田町字奥宇田 瀬508番1外	322016	D-1196	35°26'38	20190902	1,487㎡	団地造成事業
				133°05'35	20200420		
いわいでにいせき 岩井手谷遺跡	島根県松江市 山代町字岩井手 谷929番5外	322016	D-1201	35°26'37	20190408	493㎡	団地造成事業
				133°05'25	20190830		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
樋岡古墳群	古墳群	古墳時代 古代	古墳6基 土坑 柱穴	土師器・須恵器 玉製品・鉄製品	小規模な6基からなる前期末から中期前半の古墳群である。2基の古墳から勾玉や宮玉、ガラス小玉が出土している。		
南外古墳群 (3～5号墳)	古墳群	古墳時代	古墳3基 加工段 柱穴	土師器・須恵器 玉製品・鉄製品 石器	古墳時代中期末から後期前半の古墳である。南外4号墳は無墓壇主体部、南外5号墳は横穴式石室導入期の石室と考えられる。		
奥宇田瀬遺跡	集落跡	縄文時代 古墳時代 古代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 加工段 落とし穴状遺構	土師器・須恵器 水晶の未成品 滑石・碧玉	古墳時代後期前半の集落跡である。そのなかに水晶を主体とする玉作工房跡が1棟確認された。		
岩井手谷遺跡	集落跡	縄文時代 古代	掘立柱建物跡 加工段 落とし穴状遺構	土師器・須恵器 石製品・金属製品 瓦	山代郷北新道院の北西側に位置する集落跡である。古代から中世前半の掘立柱建物跡や遺物が検出された。		

松江市文化財調査報告書 第210集

松江市東津田町工業団地造成事業に伴う発掘調査報告書

**樋岡古墳群・南外古墳群
奥宇田瀬遺跡・岩井手谷遺跡**

令和5（2023）年3月

編集・発行 島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印刷 株式会社 黒潮社
島根県松江市向島町182-3

